

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群

特別研究事業 成果報告書

令和5年（2023）

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群
特別研究事業 成果報告書

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会

序 文

世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群は平成29（2017）年世界遺産一覧表に記載される際に、世界遺産委員会から本遺産群に関する調査研究の継続・拡大について勧告されました。これを受け、本遺産群の保存管理・公開活用を担う「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会（福岡県、宗像市、福津市、宗像大社）では、平成30（2018）年から特別研究事業を開始し、世界遺産委員会から問題提起された「古代東アジアにおける航海・交流・祭祀」について、国内外の各分野における新進気鋭の専門家の皆さまとともに検討を進めてまいりました。

当初、3年間の予定でしたが、令和2（2020）年以降、新型コロナウイルス感染症の世界的な大流行により、一時中断を余儀なくされました。しかしながら、専門家を始めとした関係者の皆さまの多大なご協力のおかげで、5年間にわたる本事業を無事遂行することができました。

航海・交流・祭祀のそれぞれのテーマごとに検討を行った3回の国際検討会の開催や中国、朝鮮半島、能登半島、対馬への視察などを通じ、現時点での本遺産群の調査研究における到達点をお示しいただくと同時に、諸課題についても整理いただきました。本書により、その5年間の調査・研究成果について、皆さまと共有させていただきます。

東アジアにおける航海や交流、祭祀の視点から行われたこの特別研究事業の成果は、本遺産群の新たな価値を明らかにし、その価値を一層高めるとともに、今後の調査研究の拡大・継続にも寄与するものです。皆さまにおかれましても、本日の成果報告会を通じて、本遺産群の価値を改めてご認識いただき、次世代に継承すべく、今後の保存管理・公開活用の取組にご協力いただけますと幸いです。

令和5年3月31日

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会

例 言

- 1 本書は、平成30年（2019）から令和5年度（2023）にかけて行われた「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会が行った特別研究事業の成果をまとめたものである。
- 2 特別研究事業の内容は「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群専門家会議の意見に基づき決定した。
- 3 本書の執筆者については、各論考に示した。なお、第1章「特別研究事業の経緯と概要」を岡寺未幾（福岡県人づくり・県民生活部文化振興課九州国立博物館・世界遺産室）、「東アジアにおける関連資産の調査（視察概要）」を大高広和（九州国立博物館）が執筆した。
- 4 挿図および写真図版については、それぞれ出典を示した。
- 5 本書の執筆にあたり、宗像大社の協力を得た。
- 6 本文の編集は「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会事務局（福岡県人づくり・県民生活部文化振興課九州国立博物館・世界遺産室 岡寺）が行い、印刷・製本は合同会社オフィスビーワンが行った。
- 7 本事業は平成30年から令和4年度までの文化庁文化芸術振興費補助金（地域文化財総合活用推進事業）によるものである。

目次

第1章 序章

- 特別研究事業の経緯と概要…………… 1
東アジアにおける関連資産の調査（視察概要）…………… 15

第2章 特別研究事業

- 航海と海域ネットワークから見た海の世界遺産…………… 47
秋道 智彌
- 沖ノ島祭祀遺跡と竹幕洞祭祀遺跡からみた倭国と百済との交流…………… 81
禹 在柄
- 古墳時代の日朝交渉における海の道
—朝鮮半島南・西海岸地域の倭系資料の分析を中心に—…………… 103
高田 貫太
- 秦氏と宗像の神—「秦氏本系帳」を手がかりとして—…………… 119
田中 史生
- 宗像・沖ノ島における古代祭祀の意味と中世への変容
—人間の認知機能と環境変化の視点から—…………… 139
笹生 衛
- 媽祖以前の航海信仰—泗洲大師を中心に—…………… 157
王 海燕

第3章 総括

- 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群
古代東アジアの航海・交流・信仰—とくに航海・交流の観点から—…………… 163
佐藤 信
- 沖ノ島祭祀の機能と変容：古代東アジアの航海・交流における
祭祀・信仰へのアプローチの観点から…………… 165
溝口 孝司

第4章 資料

- 国際検討会報告概要…………… 179
プロフィール…………… 186

第1章 序 章

特別研究事業の経緯と概要

はじめに

世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の特別研究事業「古代東アジアの航海・交流・祭祀」が平成30年（2018）度から令和4年（2022）度にかけて行われた背景には、世界遺産一覧表への登録推薦時の経緯がある。そのため、ここではその経緯を時系列で辿るとともに、5ケ年の特別研究事業を概観することとしたい。

1 暫定リスト記載から推薦まで

本遺産群は平成21年（2009）1月に「宗像・沖ノ島と関連遺産群」として世界遺産暫定リストに記載された。福岡県・宗像市・福津市は「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議（以下、「推進会議」という）を設立し、世界遺産への登録推薦を目指すこととなった。推進会議の諮問機関として推薦書を作成する専門家会議の初会合では、この資産が本当に世界遺産としての価値である「顕著な普遍的価値」があるのか、考古学、日本史の分野ではその学術的な価値は確立しているかもしれないが、他の分野では、あまり知られているとは言いがたい。また、大部な報告書が作成された学術的な発掘調査からすでに40年が経過し、その評価についても現在も有効か検証が必要である、との意見が出された⁽¹⁾。こうした意見を受けて開始されたのが、平成22年（2010）度から24年（2012）度にかけて行われた委託研究事業である。この調査研究は、調査後40年が経過した「沖ノ島」の世界遺産としての価値である「顕著な普遍的価値」を明らかにするための研究であったと言える。この事業では、国内外の総勢31名の専門家により33本の論文が執筆された（表1）⁽²⁾。

3年間にわたる委託研究事業の意義としては人類史的価値の立証のため、（1）研究の主流であった考古学・歴史学のみならず、文化人類学、民俗学、宗教学、建築史など、学問領域を超えた検討を行ったこと、（2）韓国竹幕洞祭祀遺跡の比較研究を始め、東アジアやヨーロッパなど海外の研究者による新たな視点からの検討が行われたこと、（3）祭祀考古学研究を先進的に進める

國學院大学との共同研究により、古代における祭祀儀礼の復元という新たな視点をもたらされたこと、さらには（4）沖ノ島の三次の学術調査に参加した小田富士雄氏が、調査者の立場から祭祀遺跡を再検討・評価したことが挙げられよう。

平成23年（2011）には委託研究報告会が行われ、委託研究者が研究報告を行うとともに、「沖ノ島祭祀の成立」「祭祀の変遷」「航路」「沖ノ島祭祀の奉斎者」など本遺産群を説明する上で重要な考え方について、専門家会議委員も同席の上、議論が行われた。この委託研究事業では、多くの新しい知見が示され、沖ノ島の学術的価値が再確認されるとともに、本遺産群が世界的に比類ない価値を持つことを証明した点でその意義は大きい。

一方、推薦書作成にあたっては、基本的には学術的に確立した定説をとる形でまとめられた⁽³⁾。これは推薦の各段階で多くの人々を巻き込む議論があることから、議論の余地がある新たな見解については学会の評価を待つ必要があるとされた為である。

あわせて、この間、地元でも様々な調査研究成果があった。特に大島の中津宮の背後の御嶽山山頂にある御嶽山祭祀遺跡（大島御嶽山遺跡）が平成22年（2010）に宗像市教育委員会により調査が行われた⁽⁴⁾。この調査により、沖ノ島祭祀遺跡の露天祭祀段階である1号遺跡と共通した祭祀が行われていること、また共伴する須恵器から遺跡の時期が7世紀に遡ることが明らかにされた。また福津市でも平成23年（2011）に勝浦峯ノ畑古墳の報告書が発刊される⁽⁵⁾など、古代宗像氏に関わる古墳についても研究の進展があった。

この世界遺産登録の流れに合わせて、本遺産群が九州古墳時代研究会や九州前方後円墳研究会がテーマとして取り上げられるなど、再びその重要性が注目されるようになっていったのは大変意義深いことである⁽⁶⁾。

2 世界遺産登録時の議論

平成28年（2016）2月に本遺産群の推薦書が国からユネスコへ提出され、その後、諮問機関であるイコモス（国際記念物遺跡会議）の審査を受ける⁽⁷⁾。同年8月にはイコモスの調査員が資産の保存管理を実際に訪れて確認する現地調査が行われた。一方、価値に関わる部分につ

いては、イコモスから文書にて問い合わせがあった。その内容は多岐にわたり、「古代祭祀が行われた4世紀から9世紀について、航路や航海技術など、当時の航海はどのようなものであり、その中でどのように祭祀が行われたのか?」、「当時の東アジアの古代国家間においてどのような政治的・文化的交流があり、それがどのように祭祀に影響を与えたのか?」、「祭祀はなぜ、どのようにして行われ、それがなぜ変遷したのか?」という本質的なものから「禁忌の成立」、「みあれ祭の成立」や「顕著な普遍的価値における新原・奴山古墳群の位置付け」などについても質問があった。

これに対しては文書での回答を、追加情報として同年11月と平成29年(2017)2月の2回にわたり提出した⁽⁸⁾。

特に議論の争点となったのは、信仰の継続性についてである。当初、イコモスはこの推薦の要旨は、①沖ノ島における航海安全の古代祭祀と②今日に続く三女神を崇拝する祭祀の出現として、①と②は二つの「より糸」が組み合わされている、と、それぞれを別に捉えていた。この思いも寄らない前提の誤解に対し、自然崇拝にもとづく①と信仰の形である②は一体不可分なものであり、さらに考古学・歴史学など科学的にその起源を辿ることができる稀な例であることを丁寧に説明した。最終的にはこの決定的な前提の誤解を解くことはできたものの、世界的な価値としては沖ノ島だけが卓越するという考えを変えることはできなかった。

平成27年(2017)5月5日に出されたイコモス勧告で、沖ノ島と付属する岩礁のみを世界遺産に登録するとされたのは周知の通りである。その理由として示されたのは、以下の通りである。

- ・沖ノ島に対する崇拝の価値は認めるが、その崇拝が宗像三女神信仰に発展したことは証明されていない。
- ・4世紀から9世紀にかけて古代東アジアの国家間の交流を反映するものとして、沖ノ島の祭祀遺跡のみ価値が認められる。
- ・宗像大社と新原・奴山古墳群は、ヤマト王権の下で重要な役割を果たした宗像氏の遺産であるが、国内的な価値にとどまる。
- ・17世紀以降に確実な証拠が残る禁忌や遥拝は、今に続く沖ノ島への信仰として価値が認められる。特に、沖ノ島への眺望が持つ重要性から、現在のバッファゾー

ンは適切である。

これを受けて、勧告で除外された宗像大社と新原・奴山古墳群が沖ノ島と一体不可分のものであること、また、その重要性について説明を行うこととなった。平成29年(2017)7月9日ポーランド・クラクフで開催された第41回世界遺産委員会で本遺産群の世界遺産登録の審議が行われた。審議では21ヶ国の委員国のうち20ヶ国より発言があり、多くは、この資産の価値は沖ノ島と3つの岩礁だけでなく、宗像大社と新原・奴山古墳群を含む8つの全ての資産が一体となっはじめて神聖なる島への崇拝の長期にわたる伝統が証明される、という趣旨のものであった⁽⁹⁾。この審議の結果、沖ノ島以外の全構成資産も登録されることになった。一方で「日本および周辺諸国における海上交流、航海およびそれに関連する文化的・祭祀的实践についての研究計画を継続・拡大させること」と世界遺産委員会から調査研究の継続・拡大を求められることとなった⁽¹⁰⁾。

3 特別調査研究事業

3-1 本事業の概要

世界遺産登録後、推進会議を再編し、福岡県、宗像市、福津市、宗像大社からなる「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会(以下、「協議会」という)を設立、この協議会が本遺産群の保存管理・公開活用を担うこととなった。

本特別研究事業は、世界遺産登録時の世界遺産委員会の勧告に応える形で専門家会議の指導の下、協議会が行うこととなった。

当初は、平成30年(2018)から令和2年(2020)まで3年間の計画であったが、令和元年末からの新型コロナウイルス感染症の世界的流行により一時休止を余儀なくされ、令和4年度まで延長して5年間にわたり行うこととなった。

本事業の研究テーマは勧告を受けて「古代東アジアの航海・交流・信仰」としたが、テーマが広範にわたるため、論点を明確にすることを目的に、世界遺産登録時のやりとりの中でイコモスから提示された課題を共有してすすめることとした。

表1 平成22～24年（2010～2012）度に行われた委託研究一覧・キーワード

平成22年度 委託研究 I		
①沖ノ島祭祀の成立前史	武末純一	田熊石畑遺跡、青銅武器埋納祭祀、弥生時代日朝交渉、特定有力集団、海村交易網
②沖ノ島祭祀遺跡の再検討	小田富士雄	沖ノ島祭祀遺跡、岩上祭祀、大和政権、宗像氏、宗像海人族、宗像の初期古墳・鉄 奉供祭祀・鍛冶祭祀、集落内祭祀・国家型祭祀
③宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀	重藤輝行	対外交渉、首長墓、津屋崎古墳群、馬蹄系土器、渡来人
④古代の宗像氏と宗像信仰	亀井輝一郎	胸形君、宗像神主、沖ノ島、ウケヒ神話、イチキシマヒメ、高階真人、出雲国造
⑤宗像の島々・小呂島、沖ノ島、大島の歴史と地誌	服部英雄	高田牧、唐坊（チャイナタウン）、貝原益軒、青柳種信、大島漁民
⑥神道史上における沖ノ島の祭祀（講演録）	椋山林継	—
⑦ヤマト王権と沖ノ島祭祀	白石太一郎	沖ノ島祭祀遺跡、宗像三女神、ヤマト王権、倭・韓交渉ルート、前方後円墳、宗像 氏、水沼君、百濟、新羅、高句麗、遣唐使
⑧宗像大社の無形民俗文化財	森弘子	祭の再興、みあれ祭、古式祭、七夕祭、生業とまつり
⑨宗像大社所蔵文書と宗像大社中・近世史	河窪奈津子	宗像大社文書、宗像大宮司、海外交渉、年中神事、社殿造営
⑩沖ノ島祭祀遺跡の再検討－祭祀考古学の視点から－	サイモン・ケイナー	祭祀、宗教考古学、祭儀、国家的祭祀
⑪竹幕洞祭祀遺跡と沖ノ島祭祀遺跡	禹在柄	竹幕洞祭祀遺跡、沖ノ島祭祀遺跡、倭国、百濟、中国南朝
g1.沖ノ島祭祀遺跡における遺物組成と祭祀構造 －鉄製品・金属製模造品を中心に－	笹生衛	鉄製品、鉄、幣帛、『皇太神宮儀式帳』、祭式
g2.5世紀における石製祭具と沖ノ島の石材	篠原祐一	石製祭具、祭場、奉納品、クラ、倭五王
g3.沖ノ島出土銅矛と青銅器祭祀	柳田康雄	ムナカタ、青銅器祭祀、元始王権、沖ノ島、北部九州の東漸
g4.古代神祇祭祀制度の形成過程と宗像社	加瀬直弥	神郡、律令神祇祭祀制度、天皇、対外交渉、宗像神主
g5.沖ノ島出土のガラス碗	椋山林継	ガラス碗、カットガラス、古代祭祀、玉器（たまもひ）
g6.韓国における祭祀遺跡・祭祀関連遺物 －沖ノ島祭祀の位置づけのための比較検討資料－	高慶秀	扶安竹幕洞祭祀遺跡、土製模造品、土馬・鉄馬、新羅土偶、有刺儀器
平成23年度 委託研究 II-1		
①沖ノ島祭祀遺跡の再検討 2	小田富士雄	岩上祭祀、岩陰祭祀、祭壇、21号遺跡、8号遺跡、17号遺跡、6号遺跡、22号遺 跡、勝浦峯ノ畑古墳、同型鏡、画文帯同向式神獸鏡、浮出し円文ガラス碗
②日本における古代祭祀研究と沖ノ島祭祀 －主に祭祀遺跡研究の流れと沖ノ島祭祀遺跡の関係から－	笹生衛	神観、依代、御形、祭式、自然環境
③文献からみた古代王権・国家のカミマツリと神への捧げ物 －沖ノ島祭祀の歴史的前提－	西宮秀紀	カミマツリ、律令制神祇祭祀、神への捧げ物、祭祀具、神宝、幣物、沖ノ島祭祀、 宗像神（社）、ヤマト王権
④宗像大社復興期成会による調査以前の沖ノ島	椋山林継	貝原益軒、青柳種信、江藤正澄、柴田常恵、大場磐雄、御金蔵、沖嶋御番
⑤日本民俗学（伝承分析学・traditionology）からみる沖ノ島 －日本古代の神祇祭祀の形成と展開－	新谷尚紀	三種の神器、金銅製紡織具、律令神祇祭祀、持衰、イミビト（imibito）
⑥東アジアの海洋文明と海人の世界 －宗像・沖ノ島遺産の基盤－	秋道智彌	海人、海洋文明、潜水漁、海藻神事、捕鯨、海の祭祀
⑦日本における社殿の成立と宗像神社	山野善郎	神祭り、可視化、多元的、中世田島宮、曼荼羅的重層
平成23年度 委託研究 II-2		
①中国古代の祭祀	王旒・劉岷原・陳建憲・姜波	牛河梁遺跡、天壇、宗廟、祖先祭祀、皇帝祭祀、泰山、媽祖信仰
②朝鮮半島における航海と祭祀 －古代を中心として－（講演録）	俞炳夏	—
③世界から見た沖ノ島 －祭祀、政治、交易の物語の創造－	サイモン・ケイナー	—
④神道から見た沖ノ島	ノルマン・ハイヴズ	神道、沖ノ島、信仰、ウケヒ、宗像三女神、ヤマト王権、女人禁制、禁忌
⑤国家形成からみた沖ノ島	ウェルナー・シュタインハウス	国家形成、初期国家、祭祀・儀式、宗教、神聖性のある王権、国家的祭祀
平成24年度 委託研究 III		
①沖ノ島祭祀遺跡の再検討 3	小田富士雄	半岩陰・半露天祭祀、露天祭祀、磐座・磐境、葬・祭の未分化と分化、 律令的祭祀、中国系将来遺物
②古代宗像の渡来人	亀田修一	宗像、朝鮮半島系考古資料、渡来人、オンドル住居、軟質系土器
③古代宗像氏の民族的展開	篠川賢	倭王権、宗像三女神、ウチ・カバネ、宗像神主、神郡司
④交流史から見た沖ノ島祭祀	森公章	「海北」、多元的通交、遣唐使、持衰の報賞、新羅海賊

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群
世界遺産登録時のイコモスからの課題

1 航海について

古代沖ノ島の祭祀は、航海の安全を祈願して行われたと考えられているが、古代の航海はどのようなものだったのか。

- (1) 航海はどのようなルートで行われたのか？
- (2) 停泊地や港はどこにあるのか？
- (3) 航海に使われた船の形態は？
- (4) 沖ノ島での祭祀を行ったのは誰か？
- (5) 祭祀はいつ行われたのか？

2 交流について

祭祀は4世紀から9世紀の古代東アジアの交流を背景に行われたが、この異文化との交流は、沖ノ島の信仰と祭祀にどのような影響を与えたのか。

- (1) 東アジアとの交流が沖ノ島に関わる信仰と祭祀および祭祀の変遷に与えた具体的な影響は？
- (2) 交流によってもたらされた沖ノ島に捧げられた奉獻品は、実際どこからどのようにもたらされたのか？
- (3) 古代東アジアにおける政治・経済・文化的な交流の痕跡が、日本列島、朝鮮半島、アジア大陸の沿岸部にどのように残されているのか？

3 祭祀について

古代祭祀は巨岩の上から下へそして巨岩から離れた露天へと祭祀の場所、および捧げる品が時代とともに変化した。そして祭祀は沖ノ島だけでなく、大島、九州本島でも行われるようになり今日に続く社殿での祭祀が行われるようになった。

- (1) 一連の祭祀の変化は、なぜ起こり、何を物語るのか？
- (2) 各段階の奉獻品は何を意味するのか？
- (3) 宗像三女神への信仰はいつ、どのように生まれたのか？
- (4) 古代の東アジアで、航海安全に関わる祭祀や、聖なる島など、類似した事例はどのくらいあるのか？

4 信仰の継続性

沖ノ島の古代祭祀と宗像三女神信仰の継続性をより明確に説明できるか？

- (1) 5世紀後半～6世紀の「空白期」をどう理解するか。
- (2) 7世紀から9世紀の大島御嶽山遺跡、下高宮祭祀遺跡と沖ノ島祭祀遺跡のつながりは？
- (3) 古代祭祀の痕跡が9～10世紀に途絶える理由は？
- (4) 自然の中での祭祀が社殿での祭祀に変化したことが示すものは何か？
- (5) 沖ノ島における禁忌と制限の成立はいつか？

以上を踏まえ、提示された課題に関連する分野の専門家（委託研究者）とともに、調査研究を行うこととした。本研究事業は、考古学・文化人類学・歴史学の各分野を代表する国内外の研究者にお願いすることとした。メンバーは以下の通りである。

議長：佐藤信（専門家会議副委員長、東京大学名誉教授、歴史学）

溝口孝司（専門家会議委員、九州大学教授、考古学）

委託研究者：秋道智彌（山梨県立富士山世界遺産センター所長、文化人類学）

笹生衛（國學院大学教授、考古学（祭祀・神道））

田中史生（早稲田大学教授、歴史学（交流））

高田貫太（国立歴史民俗博物館教授、考古学（交流））

禹在柄（韓国・忠南大学校教授、考学（交流））

研究協力者：王海燕（中国・浙江大学（歴史学））

事務局：磯村幸男（「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群専門家会議委員）

岡寺未幾（福岡県文化振興課九州国立博物館・世界遺産室）

大高広和（九州国立博物館）

岡崇（宗像市世界遺産課）

池ノ上宏（福津市文化財課世界遺産係）

福嶋真貴子（宗像大社文化局）

横断的に課題を理解するために、三度の国際検討会を開催した。テーマは「古代東アジアの航海と宗像・沖ノ

表2 特別研究事業 スケジュール ●は事務局と委託研究者の打ち合わせ会議

	平成30年度			令和元年度		令和2年度	令和3年度		令和4年度			
	8月	12月	H31.2月	8月	R2.1月	R3.3月	8月	R4.3月	8月	11月	12月	R5.3月
検討会	●		第1回 国際検討会		第2回 国際検討会	● 中間検討会	●	第3回 国際検討会			総括検討会	成果報告会
視察		中国視察		韓国視察					能登視察	対馬視察		
報告書												報告書刊行

表3 特別研究事業一覧

第1回国際検討会「古代東アジアの航海と宗像・沖ノ島」(平成31年(2019)2月26・27日)		
4世紀から9世紀の日本における造船・航海術	森田克行	高槻市今城塚古代歴史館特別館長、考古学
南方世界の造船・航海術と信仰	後藤明	南山大学、文化人類学
沈没船から読み解く造船技術と航海	佐々木蘭貞	九州国立博物館、水中考古学
古代韓半島を取り巻く航路と交易様相の変遷過程	權五榮	韓国・ソウル大学、韓国国史学
古墳時代の日朝交渉における海の道	高田貴太	国立歴史民俗博物館教授、考古学
東シナ海～日本海の海流と航海環境	広瀬直毅	九州大学応用力学研究所大気海洋環境研究センター、海洋物理学
第2回国際検討会「古代東アジアにおける地域間交流と信仰・祭祀」(令和2年(2020)1月12・13日)		
「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の研究上の課題—世界遺産の視点から—	ケース・ファン・ローイエン	オランダ文化遺産庁
九州における渡来人と信仰—ヒメコソ・玉女・薩摩塔—	田中史生	早稲田大学教授、歴史学
宗像地域における対外交流の様相と胸形氏の動向	花田勝広	野洲市教育委員会、考古学
古代日本における祭祀の実態と神観—日本列島の自然環境と東アジアとの関係から—	笹生 衛	國學院大学教授
中国における道教の成立と民間信仰の日本への影響	二階堂善弘	関西大学、文化交渉学
韓半島における民間信仰の歴史的展開と対外交流	宋華燮	韓国・中央大学校、歴史学
第3回国際検討会「古代東アジアの海洋信仰と宗像・沖ノ島」(令和4年(2022)3月21・22日)		
日本の神々と海	ファビオ・ランベッリ	カリフォルニア大学サンタバーバラ校
古代中国における航海と信仰	姜 波	中国・山東大学、水中考古学
日本近世の航海信仰からみた古代の持衰	山内晋次	神戸女子大学、歴史学
宍岐・対馬の海洋信仰と大和政権	堀江 潔	佐世保工業高等専門学校
古代瀬戸内海の島々と祭祀遺跡	妹尾周三	廿日市市教育委員会、考古学
古代能登の境界性から見た寺家遺跡と気多神社	中野知幸	羽咋市教育委員会、考古学
中間検討会(令和3年(2021)3月8日)		
近世以前の沖ノ島の構成要素と景観について	大高広和	福岡県文化振興課九州国立博物館・世界遺産室
沖ノ島21号遺跡の調査についての再検討	岡寺未幾	福岡県文化振興課九州国立博物館・世界遺産室
沖ノ島祭祀遺跡の各遺構・遺物の概観	岡 崇	宗像市教育子ども部世界遺産課

島」(第1回国際検討会 平成31年(2019) 2月26・27日、九州大学産学官連携イノベーションプラザ)、「古代東アジアにおける地域間交流と祭祀」(第2回国際検討会 令和2年(2020) 1月12・13日、中小企業振興センター)、「古代東アジアの海洋信仰と宗像・沖ノ島」(第3回国際検討会 令和4年(2022) 3月21・22日、大丸エルガーラホール)であり、テーマごとに関連する研究者を招聘して報告いただき、それを元に議論を重ねた。なお、コロナ禍の中でも事業継続を図る為、中間検討会(令和3年(2021) 3月8日) およびオンライン会議(令和3年(2021) 8月20日)を開催した。併せて、中国、韓国および国内各地の航海・交流・信仰に関わる文化遺産や博物館等の現地調査を行った。中国視察(平成30年(2018) 12月23日から30日)では、舟山列島から澳門までの広域にわたる浙江・福建方面を、韓国視察(令和元年(2019) 年8月19日から26日)では、李康承氏の協力を得て、黒山島から韓国西海岸・南海岸の航海・交流・信仰に関わる文化遺産や博物館等を訪れた。国内は、寺家遺跡をはじめとする能登半島(令和4年(2022) 8月10日から12日)および、対馬(令和4年(2022) 11月4日から6日まで)の視察を行った。現地調査の詳細については、「第1章 2. 視察の概要」をご覧ください。

本報告書に収録されている5本の委託研究者の論考は、以上の国際検討会および視察を踏まえて、それぞれの専門的見地から執筆されたものである。なお、事前に各研究者が執筆した論文の要旨を報告し、意見交換を行う総括検討会(令和4年(2022) 12月17・18日アクロス福岡大会議室)を開催した。また、令和5年(2023) 3月12日には、特別研究事業の成果を広く一般に伝えるための成果報告会を九州国立博物館で行った。

3-2 第1回国際検討会「古代東アジアの航海と宗像・沖ノ島」⁽¹⁾

本遺産群で古代祭祀が行われた四世紀から九世紀の航海について、各分野・地域における現在の知見を集積し、具体的な航路や航海術など、祭祀が行われた背景と宗像・沖ノ島の特質について検討を行った。課題1「航海について」・2「交流について」・3「祭祀について」を扱うものである。

討論は、第1部「航海(造船・航海術)の実態」、第

2部「日韓間の航路と沖ノ島、宗像」をテーマに佐藤議長により行われた。

森田克行「4世紀から9世紀の日本における造船・航海術」では『記紀』にある官船の記載と考古資料から、倭王権から律令国家成立への経過のなかで、幾多の兵員移送にかかる大型輸送船の獲得状況を素描し、「磐井の乱」を復元するとともに、巨大な刳抜式家形石棺を熊本宇土から畿内へ運んだ航海ルートを復元する。今城塚古墳の事例から継体朝の航海の分析を進める森田氏は、5世紀末から6世紀にかけての継体朝では、これまで言われているように準構造船ではなく、埴輪の線刻画にあるように二本の帆を持つ構造船が存在した可能性を指摘した。

佐々木蘭貞「沈没船から読み解く造船技術と航海」では、水中考古学の立場から、沈没船など発掘調査により明らかになった海事文化、特に交易の形態や造船技術の変遷を紹介。沖ノ島で祭祀が行われた時代の航海を復元する上で鍵となる重要な背景を提供した。

後藤明「南方世界の造船・航海術と信仰」では、東南アジア島嶼部からオセアニアにかけての事例から、伝統的な造船技術と航海術、航海が行われる交易活動や宗教活動、また聖地とされる島や遺跡の事例を紹介。特に航海術は、スターナビゲーションやナン・マードルやタブアアテアなどオセアニアにおける航海の文脈から沖ノ島と共通項を持つ世界遺産の事例も紹介された。

広瀬直毅「東シナ海～日本海の流れと航海環境」では、大型計算機により精緻な海流変化をシミュレーションする手法を用いて、東シナ海から日本海の流れ特性を概観し、対馬海峡の渡航ルートを検討。古代の人々が、潮汐・潮流の周期的変化を経験則として利用して、最も困難とみられる対馬海峡の渡海を達成したと想定する。広瀬氏による海流の分析は古代の航海について、自然環境による季節的な制約があったことを明らかにするとともに、また、玄界灘における航海の難しさを再確認することになった。

高田貫太「古墳時代の日朝交渉における海の道」では、5世紀から6世紀にかけての倭と朝鮮半島の交流では、朝鮮半島の南・西海岸そして東海岸の寄港地をつたう航路が活用されていた。倭系集団は、航路沿いの地域集団

と密接に関わり、時には短期的に「雑居」しながら、目的地までの円滑な航行を試みたとする。その中で、航海の途中で死を迎えた人物を「倭系古墳」を造営して葬ったり、あるいは一部の人々が現地に定着する状況があったと当時を復元する。

権五榮「古代韓半島を取り巻く航路と交易様相の変遷過程」では、初期鉄器時代から南北朝時代までのガラス玉の分析から、東北アジアと東南アジア国家の主要な変化に伴って、広域の海外交流と流通の様相が変化していく様子を捉える。

3-3 第2回国際検討会「古代東アジアにおける地域間交流と信仰・祭祀」⁽¹²⁾

本遺産群で古代祭祀が行われた四世紀から九世紀を中心とした時期に、東アジアではどのような信仰や祭祀があり、多様な地域間交流が各地域における信仰や祭祀にどのような影響を与えたのか、各地域の信仰や祭祀文化の共通点および相違点を探り、宗像・沖ノ島における信仰と祭祀の東アジアのなかでの特質について検討した。課題2「交流について」・3「祭祀について」・4「信仰の継続性」を扱った。

討論は、第1部は「航海（造船・航海術）の実態」（佐藤議長）、第2部は「日韓間の航路と沖ノ島、宗像」（溝口議長）をテーマに行われた。

ケース・ファン・ローイエン「「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の研究上の課題 —世界遺産の視点から—」では、中世初期（4世紀から10世紀）のヨーロッパにおける宗教・貿易・交流の事例を報告するとともに、本遺産群の世界遺産登録の登録審査に関わった氏が審査時における議論を振り返った。沖ノ島の出土品は、アジア大陸や日本列島との交流において沖ノ島が果たした重要な役割を物語るものであり、祭祀や航海と王権との関わりは明白である。しかし、交流とは本来もっと多様なものであり、一方向でなく双方向であったのではないか。世界遺産としては、そうした文物・人々の交流、人間の行き来があったという証拠がみたいと考えた。交流の多様性についての視点を持ち、より広域での研究を進めてほしい。それは、本遺産群に対する理解を深めるだけでなく、新たな考え方や研究の視点を切り開くだろ

う、との指摘があった。氏から直接、見解や今後の課題について意見を聞く機会が得られたことは、非常に有意義であった。

田中史生「九州における渡来人と信仰 —ヒメコソ・玉女・薩摩塔—」古代から中世前期の九州における渡来人の信仰である、ヒメコソ信仰、玉女、薩摩塔を検討し、文献史学の立場から、交流による信仰の変化を読み解く。九州には、他地域と比べ中国や朝鮮半島の信仰が直接入りやすい環境がある。一方で、その展開には、九州の地域性と結びついた変容が認められるという状況を明らかにした。

花田勝広「宗像地域における対外交流の様相と胸形氏の動向」宗像は地理的に入海・潟など、農耕生産が低く、海民的特性を活かして海上交通・交易を特化させ、古墳時代には有力氏族となる。沖ノ島祭祀に伴うヤマト政権の祭祀品、朝鮮半島からの舶載品は、畿内色が著しく、ヤマト政権による海上交通路の掌握に関与した。交通・軍事上の要衝地となった宗像では、「道主貴」と称される海上交通の特殊祭祀が行われた。

笹生衛「古代日本における祭祀の実態と神観—日本列島の自然環境と東アジアとの関係から—」では、認知考古学の立場から、地形環境と神観・祭祀を相互に結びつける立場を取る。4世紀後半から5世紀の日本列島の各地域では祭祀遺跡が確認されるが、共通する儀礼用の遺物と遺構から、①供献品の準備、②祭祀、③祭祀後の供献品の撤下・収納という祭祀の構成が復元でき、これは『皇太神宮儀式帳』（延暦23年（804））が記録する神宮祭祀の「祭式」と一致する。また、沖ノ島の学術調査が行われた際に主流であった折口信夫の「依代」にもとづく神観については再考が必要として、「神観」を改めて再定義する。祭祀の対象である「神観」は、人々は、自然環境の特別な働きに、それを起こし司る「行為者（Agents）」を直観し、そこに「カミ(deity)」が居ると考え、祭祀を行った。このような祭祀と神観は、4・5世紀の朝鮮半島と日本列島(倭国)との交流の活発化と、7世紀の中国の統一帝国との関係の中で整えられ、律令時代の神祇祭祀へとつながると考察する。

二階堂善弘「中国における道教の成立と民間信仰の日本への影響」では、中国における道教の起源と成立について概観したのち、道教の日本への伝来について紹介。

道教はまとまった形で伝来しなかったため、日本には道観はなく、道士もいない。また、道教で最も重視される三清の信仰はほとんど存在しない。しかしながら道教文化自体は多様な形で渡来し、様々な影響を与えている。これに対して民間信仰は、シャーマニズムに基づくもので、民間で行われるために激しく変化する。また、民間信仰自体もそれぞれ個別の形で渡来しており、日本の神道や仏教の信仰と習合していることが多い。

仏教の影響は良く検討される一方で、道教や民間信仰の伝播についてはこれまであまり触れられることは少なかった。二階堂氏の報告は、道教や民間信仰についてもその影響や、シンクレティズム（宗教の融合）も、前提にしておかなければならないことを明らかにした。

宋華燮「韓半島における民間信仰の歴史的展開と対外交流」では竹幕洞祭祀遺跡についての検討を行い、百済の外交関係は、東城王・武寧王の時代に本格化し、竹幕洞祭祀遺跡の対外交流に関する遺物として、倭の石製模造品と中国の青磁片がある。沖ノ島系統の石製模造品は、国家的祭祀の奉獻品であったものの出土する時期は一時的なものであり、民間信仰としては、その後、伝承されなかった。一方、中国南朝国家との文化交流は国家主導と民間主導が並行したため、海洋信仰が伝承されたとする。統一新羅時代に民間貿易が盛んになると、竹幕洞祭祀遺跡でも中国舟山群島普陀洛迦山系統の水聖堂と海浜洞窟信仰、南海観音信仰などの海洋民俗信仰が発達した。海浜洞窟には航海の守護神が常住し、南海観音は「開洋（ケヤン）ばあさん」という化身として水聖堂に安置された。このように茁浦湾と辺山半島には、中国系の海洋仏教および海洋民俗信仰が統一新羅以降の高麗時代、朝鮮時代、現在までも持続的に維持されている。宋氏の報告は、東アジアでの交流が信仰と祭祀に影響を与えた事例として重要である。

3-4 第3回国際検討会「古代東アジアの海洋信仰と宗像・沖ノ島」⁽¹³⁾

本遺産群で古代祭祀が行われた四世紀から九世紀を中心とした時期に、東アジアではどのような海洋信仰があり、またその実践としてどのような祭祀が行われたのか、各地域・時期の様相を踏まえて宗像・沖ノ島における信仰と祭祀の特質について検討を行った。これは課題

2 (3)「古代東アジアにおける政治・経済・文化的な交流の痕跡が、日本列島、朝鮮半島、アジア大陸の沿岸部にどのように残されているのか?」、3 (4)「古代の東アジアで、航海安全に関わる祭祀や、聖なる島など、類似した事例はどのくらいあるのか?」に答えるものである。

討論は、「古代東アジアにおける海洋信仰と日本」(佐藤議長)、「古代東アジアの海洋信仰からみた沖ノ島(宗像)の信仰と祭祀」(溝口議長)をテーマに行われた。

ファビオ・ランベッリ「日本の神々と海」では、聖なるものに対する日本人の考え方で重要な役割を果たしているものといえば、通常「山」が考えられがちである。しかしながら、「海」もまた重要な役割を果たしているとして、海の神聖さと海の神々の様々な側面について述べる。古代の日本人が考える海の神は、別個の要素を持つ三神から成り、それぞれの構造と宇宙観に基づいて構成されるとする。たとえば、宗像は水平的コスモロジーで構成されており、沿岸(辺津宮)、岸から少し離れた場所(大島の中津宮)と沖(沖ノ島の沖津宮)というように区別されたと分析する。

姜波「古代中国における航海と信仰」では、世界遺産「泉州:宋と元の中国の海洋商業貿易センター」の事例から、泉州の港の隆盛と福建の海商勢力の増大に従って、媽祖が海神としての地位を次々と上げ、媽祖、天妃、天后と変遷した過程を追う。

山内晋次「日本近世の航海信仰からみた古代の持衰」では、日本近世の漂流記録にみる断髪祈願習俗の意味や歴史的淵源を古代中国にまでさかのぼって検討。さらに3世紀の『三国志』魏書・東夷伝・倭条にみえる、中国との航海において特殊な役割を演じた「持衰」について、「髪を梳(くしけず)らない」という習俗が記録されている意味を考える。

堀江潔「壱岐・対馬の海洋信仰と大和政権」では、古来、対外交流で重要な役割を果たしてきた壱岐・対馬について、壱岐の月神、対馬の日神を主人公とする『日本書紀』顕宗天皇紀の伝承記事から、当該期の海洋信仰の実像、および、その信仰と大和政権との関係を考える。

妹尾周三「古代瀬戸内海の島々と祭祀遺跡」では、瀬戸内海の島々に点在する祭祀遺跡は5～6・7世紀の遺

跡と8～9・10世紀の遺跡に大別できる。前者はいずれも共通した背景による祭祀と推定されるが、後者は、巖島でのあり方とその他の島々では異なっていた可能性が高い。その背景には、巖島神社とこの島の主峰である弥山を中心とした山岳信仰と密教の修行思想があると指摘する。

中野知幸「古代能登の境界性から見た寺家遺跡と気多神社」では、8・9世紀を中心とする古代祭祀遺跡である寺家遺跡について紹介。気多神社とその祭祀に関連する施設群と豊富な祭祀遺物が出土した寺家遺跡の調査研究成果を踏まえ、日本海交流と関わる能登の地域性を概観した。

神社に関わる施設群の発掘調査成果は、宗像においてはまだ発見されていないが、今後、調査を行う上で寺家遺跡の事例を念頭におくことが重要と考える。

4 特別研究事業の成果

これまでみてきたように、特別研究事業のテーマに関連する三度の国際検討会および中国・朝鮮半島・国内の関連資産の視察を踏まえ、委託研究者がそれぞれの専門の見地から調査研究を進めたものが、本書第2章に収録されている5本の論考であり、本研究事業の成果である。

なお、報告書作成にあたっては、総括検討会（令和4年（2022）12月17・18日アクロス福岡大会議室）を行い、各研究者が論文の報告を行った。併せて「航海・交流について」（佐藤議長）・「祭祀・信仰について」（溝口議長）・「今後の課題について」（佐藤議長）について討論を行い、本特別研究事業についての総括を行った。

秋道智彌「航海と海域ネットワークから見た世界遺産モデル」は、古代沖ノ島の祭祀は、航海の安全を祈願して行われたと考えられているが、古代の航海はどのようなものだったのか、という問いに答えるものである。

氏の広範な知識と豊富な研究蓄積から、古代から現代まで、宗像・日本・中国・朝鮮半島東アジアを超えて太平洋までと、地域と時代の枠を超えて検討するものである。海流・季節風などの自然環境を踏まえつつ、古代の航海を造船術、航路、航海方法からとらえた上で、「航海」に関わる信仰・祭祀についてまとめられており、これら

の事例は、今後も本遺産群の世界史的意義を考える上で前提となろう。あわせて、海産資源と島嶼間ネットワークの検討からより広域・分散型の新たな世界遺産モデルを提唱、海で一体として繋がるアジア太平洋に研究や取り組みを拡大していく必要があるとする。

次に、特に沖ノ島祭祀に直接影響を与えた倭と朝鮮半島の航海・交流について、韓国・日本の研究者から検討が行われた。

禹在柄「沖ノ島祭祀遺跡と竹幕洞祭祀遺跡からみた倭国と百済との交流」では、朝鮮半島と倭の関係、当時の交流・航海を権力からだけではなく、商人という観点から復元を試みる。また、禹氏は倭船舶が韓国南海岸に到着したのち①そのまま目的地まで行く場合と②百済船舶や③加耶船舶に乗り換える3つのパターンを想定している。特に6世紀の沖ノ島にみられる新羅系遺物の採用や勝浦峯ノ畑古墳に見る高句麗の石室の導入は、宗像氏の外交戦略であったと解釈する。交流の直接の窓口となる宗像氏は、実際は百済と密な関係を持つ一方、朝鮮半島といくつもの繋がりを持つておくことは死活問題であり、外来の要素を取り込むことは、戦略的対応だったと考察する。

高田貫太「古墳時代の日朝交渉における海の道—朝鮮半島南・西海岸地域の倭系資料の分析を中心に—」では、5世紀から6世紀にかけて百済や榮山江流域社会、加耶、新羅などとの交渉にのぞむ倭系集団は、構築された朝鮮半島東海岸の寄港地を伝い南・西海岸地域をたどる航路・地域ネットワークを活用し、航路上の地域集団と密な関係を築き、一時的に「雑居」しながら、円滑な航海を企図した。朝鮮半島における倭の交流のあり方は、航海の途中で死を迎えた人物を「倭系古墳」に埋葬し、百済が運営する祭祀場で祭祀を行い、あるいは一部の人が現地に定着する状況が生じたとする。

竹幕洞祭祀遺跡の評価については、これまで百済と倭の共同祭祀と評価されることが多かったが、禹氏は倭の使者と商人が関わったとし、高田氏は当時の交流はより複雑な様相を呈しており、現段階の発掘調査の成果では、倭が祭祀を単独で行ったのか共同で行ったかどうかは区別が難しいと考える。倭系古墳が築造された経緯については、禹氏は百済が戦略的に倭の要素を取り込んだと考えるが、高田氏は被葬者が倭人の場合も倭との繋が

表4 特別研究事業 委託研究論文一覧

特別研究事業「古代東アジアの航海・祭祀・信仰」		
航海と海域ネットワークから見た世界遺産モデル	秋道智彌	山梨県立富士山世界遺産センター所長、文化人類学
沖ノ島祭祀遺跡と竹幕洞祭祀遺跡からみた倭国と百済との交流	禹在柄	韓国・忠南大学校教授、考古学
古墳時代の日朝交渉における海の道 —朝鮮半島南・西海岸地域の倭系資料の分析を中心に—	高田貴太	国立歴史民俗博物館教授、考古学
秦氏と宗像の神 —「秦氏本系帳」を手がかりとして—	田中史生	早稲田大学教授、歴史学
宗像・沖ノ島における祭祀の意味と中世への変容 —人間の認知機能と環境変化の視点から—	笹生衛	國學院大学教授

りがある場合も様々なパターンがあったと考える。両者の議論をふまえると、古代の朝鮮半島と倭との関係を考えるためには、より複雑な構造で考えていく必要があるだろう。

田中史生「秦氏と宗像の神—「秦氏本系帳」を手がかりとして—」は、東アジアとの交流が沖ノ島に関わる信仰と祭祀および祭祀の変遷に与えた具体的な影響の事例として注目される。10世紀の年中行事書である『本朝月令』が引く「秦氏本系帳」から、秦氏が山背（山城）国の松尾神社（松尾社）に宗像神が招請・奉安した経緯を読み解く。その背景には、来目皇子が新羅征伐のために九州に駐留した際に、ミヤケの経営に関わった豊前に拠点を置く秦氏に影響を与えたことが契機となることを明らかにした。

さらに氏は、推古16年（608）に山背国の松尾大社に勧請した宗像神は「大島の姫神」とするが、これは御嶽山祭祀遺跡の年代から7世紀後半とされてきた大島における祭祀の開始について一石を投じるものである。

笹生衛「宗像・沖ノ島における祭祀の意味と中世への変容—人間の認知機能と環境変化の視点から—」は、課題3「祭祀について」および課題4「信仰の継続性」について沖ノ島の古代祭祀と宗像三女神信仰の継続性と祭祀が変遷した理由について取り扱う。地形環境と神観・祭祀を相互に結びつける立場から、古代祭祀と中世への変容について読み解く。

ヤマト王権による沖ノ島での祭祀の開始は玄界灘の航海で海上の目標となる沖ノ島に神の存在を直感したこと

から始まったとする。このような祭祀と神観は、4・5世紀の朝鮮半島と日本列島（倭国）との交流の活発化と、7世紀の中国の統一帝国との関係の中で整えられ、律令時代の神祇祭祀へとつながっていった。また、沖ノ島祭祀の画期を7世紀後半に求め、それ以前の国家的な対外的なイベントに対応した祭祀から、神郡の設置により多量の奉獻品を供給する体制が整えられた恒例的な海上交通路の祭祀へと性格が変化したと考える。

また、古代から中世にかけての祭祀の変質には、10世紀頃には、釣川河口に海浜の砂丘である浜堤が形成され、辺津宮の前面に広がっていた入海がラグーンへと変化し、境内景観も著しく変化した。こうした自然環境の変化による神観の変質は10世紀において日本列島全域でみられ、宗像三神への信仰・祭祀の変質もこれと連動するものと考えられる。その後、12世紀までに辺津宮境内に第一宮・第二宮・第三宮が並び建ち宗像三女神を合祀するようになるのと連動し、沖ノ島は禁足地的な特別な聖域へと変化していく。古代から中世にかけての、信仰の基礎には、沖ノ島・大島・釣川河口という場所と環境への特別な意識が流れ続けていたとする。

5 登録後の調査研究事業の成果

世界遺産登録後、協議会では特別研究事業の他、推薦書にもとづき、（1）遺産群全体の顕著な普遍価値に関わるもの（2）個別の構成資産や関連する文化財に関わるもの（3）資産の保存管理に関わるものの3つの観点

表5 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会による調査研究

1 遺産群全体にかかる調査研究	a 特別調査研究事業	「古代東アジアの航海・交流・祭祀」
	b 価値の発信	遺産群と関連する展示施設との連携事業など 公開講座 『沖ノ島研究』 デジタル・アーカイブ事業、他
2 遺産群に関わる研究	a.古代祭祀および三宮の成立を明らかにするための調査	国宝沖ノ島出土品の台帳作成 沖ノ島発掘調査関連記録(写真・図面)の整理
	b.信仰の継続を明らかにするための調査	文書調査
	c.宗像地域を明らかにするための調査	宗像市内における関連する文化財調査・ 『新修 宗像市史』の刊行
	d.宗像氏と沖ノ島祭祀のつながりを明らかにするための調査	福津市における新原・奴山古墳群の調査
3 遺産を守るための調査等	a.モニタリング	沖ノ島など各構成資産におけるモニタリング その成果を年次報告書として専門家会議へ報告(年1回) 概要を文化庁へ保全状況報告書として提出(年1回)
	b.計画関係	包括的保存管理計画など関連計画
	c.修理事業	国宝沖ノ島出土品金属器の修理事業

から調査研究を進めている。本事業は(1)に該当する。このうち(1)・(3)については協議会が行い、(2)や(3)の個別の資産に関わるものは各市・宗像大社において取り組みを進めている(表5)。

沖ノ島関係では、宗像大社と共同で、国宝沖ノ島出土品の管理台帳の作成・デジタル化作業や学術調査に関わる記録資料の調査・整理やデジタル・アーカイブ化および、小田富士雄氏をはじめとする調査関係者の聞き取り調査を進めている。また、宗像大社文書の調査など宗像神社境内にかかる基礎的な調査を進めている。

また、九州本土では辺津宮境内にある上高宮古墳は、5世紀前後に築造された円墳であり、沖ノ島祭祀とも関わる重要な遺跡であることが想定される首長墓であるが、調査・整理作業が令和3年(2021)度から5年(2023)度にかけて行われており、その成果が目目される⁽¹⁴⁾。また、海浜集落である浜宮貝塚の調査により海の民である古代宗像氏のくらしが調査により明らかになっている⁽¹⁵⁾。さらに宗像市では令和元年(2019)から6年(2024)にかけ『新修 宗像市史』(全6巻)⁽¹⁶⁾が発刊され、宗像の調査研究は分野・時代を超えて立体的に行われている。

新原・奴山古墳群については、イコモス現地調査時に整備計画および調査研究の不足について指摘を受けている。これを受けて平成28年(2016)11月の追加情報では「新

原・奴山古墳群行動計画」を提出⁽¹⁷⁾、令和3年度には行動計画を元に整備と調査研究計画を更に発展した「第2次 新原・奴山古墳群整備計画」を福津市教育委員会が作成⁽¹⁸⁾、それに基づきながら、古墳群の調査が着々と進められている。このように、構成資産のみならずそれを取り巻く地域全体の文化財についても調査研究が行われるようになった。

また、令和元年度より本遺産群に関わる文化財や関連情報(写真・映像資料、研究文献)のデジタル化を進めるとともに、ウェブサイト公開するMUNAKATA ARCHIVESを構築・公開している⁽¹⁹⁾。

さらに、本遺産群の価値をわかりやすく伝え、遺産への関心を深めるとともに、新たな調査研究の契機となることを目指し、令和元年(2019)度から「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群公開講座も開始された。令和元年(2019)は平成22年から24年(2010-2012)にかけての調査研究の成果を、令和2年(2020)度は本遺産群の世界遺産としての価値、国際的な価値と保存管理をテーマに、令和3年(2021)度は「沖ノ島祭祀と人の関わり」という観点から「古墳群」や「奉獻品」の考古遺跡に焦点をあて講座を行った。特に、奉獻品についての報告では、いくつもの最新の知見が示される。この講座とあわせて、展示されている奉獻品のみどころを講師が解説する「解

説動画」の作成を行った。令和4年(2022)度は、「海と人々の関わり」をテーマに海の信仰に関わる遺産について国内外の事例を紹介している⁽²⁰⁾。

『沖ノ島研究』は、本遺産群に関連する調査研究成果を広く公表することを目的に平成27年(2015)から年1回程度刊行されている。刊行時の課題は、歴史時代に関する調査の不足であったが、特に近年は中近世を対象とした歴史学の分野からの調査研究も多く投稿されている。また、沖ノ島の奉獻品に関する論考も増加傾向であり、特に、沖ノ島のガラスについて東京理科大学の中井泉氏を中心としたチームと宗像大社の理化学調査の共同研究の成果が掲載されたことは大変意義深い⁽²¹⁾。

6 今後の課題について

これまでみてきたように世界遺産登録後は、多角的な視点から、幅広い形で宗像地域の調査研究が進められている。協議会以外の取り組みとして、学術誌で宗像・沖ノ島に関する特集が組まれるなど⁽²²⁾、本遺産群についての調査研究は拡大傾向にあると言える。

総括検討会で本事業に関わった専門家から今後の研究上の課題として挙げられたのは、以下の通りである。①海の世界遺産として、海で一体に繋がるアジア太平洋地域に研究や取り組みを拡大していく必要がある。②国内、朝鮮半島、東アジアの交流・祭祀・信仰に関わる類似の事例については、更に比較研究が必要である。③神話学・宗教学からの分析を進める必要がある。④宗像地域の中世以降については、なお重点的に研究を進めていく必要がある。

また、今回の特別研究事業で終わりとするのではなく、こういった分野を超えた調査研究を継続することが何よりも重要である、というのが共通見解であった。

ただし、こうした資産全体にかかる価値の議論の精度を高めていくためには、これと連携して、基礎資料である沖ノ島の遺構や遺物の再検討、新原・奴山古墳群や大島をはじめ、構成資産や宗像地域の基礎的な調査研究も継続して進めていく必要がある。本特別研究事業では多くの新たな見解が示されたが、地元による基礎的な調査研究の積み重ねがなければ、学術的な評価と妥当性を検討することはできない。本研究事業のような顕著な普遍

的価値全体にかかる世界的規模での学術的な調査研究と地元が行う基礎調査を両輪で継続的に進め、その成果を継続して発信することが求められている。

おわりに

本遺産群の世界遺産登録および調査研究事業は、暫定リスト登録以来にわたり、本当に多くの国内外の専門家にご協力いただいた。依頼の多くは困難な課題の上、しかも短期間であったにも関わらず、本当に快く、熱心にご協力いただいた。記して感謝を申し上げたい。また本協議会とは直接関係なく行われている多くの研究もまた本遺産群の価値を支えていることはいままでのまま。末筆ながら本遺産群の調査研究に関わる全ての研究者に感謝申し上げます。

注

(1) 宗像神社復興期成会 1958『沖ノ島 宗像神社沖津宮祭祀遺跡』吉川弘文館

宗像神社復興期成会 1961『続沖ノ島 宗像神社沖津宮祭祀遺跡』吉川弘文館

宗像大社復興期成会 1970『沖ノ島1 宗像大社沖津宮祭祀遺跡昭和44年度調査概報』

宗像大社復興期成会 1971『沖ノ島2 宗像大社沖津宮祭祀遺跡昭和45年度調査概報』

宗像神社復興期成会 1979『宗像 沖ノ島』吉川弘文館

(2) 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議 2011『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』I

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議 2012『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』II-1

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議 2012『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』II-2

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議 2013『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』III

以下のHPからダウンロード可能。

<http://www.okinoshima-heritage.jp/reports/index/2>

(3) 日本国 2016『「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群世界遺産一覧表への記載推薦書』

(4) 宗像市教育委員会 2012『大島御嶽山遺跡 福岡県宗像市大島所在遺跡の発掘調査報告』宗像市文化財調査報告書第

64集

(5) 福津市教育委員会 2011『津屋崎古墳群Ⅱ 勝浦峯ノ畑古墳』 福津市文化財調査報告書第4集

(6) 九州古墳時代研究会 2011『宗像地域の古墳』 第37回九州古墳時代研究会資料集

九州前方後円墳研究会 2012『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』 第15回九州前方後円墳研究会

(7) 岡寺未幾 2017「世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群登録への軌跡」『考古学研究』 第64巻 第3号(通巻255号) 年

(8) 追加情報 Supplementary Information <https://whc.unesco.org/en/list/1535>

(9) 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会 2019『世界遺産登録記念誌「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群』

(10) 第41回世界遺産委員会決議文WHC/17/41.COM/18 4.h <https://whc.unesco.org/en/decisions/6891>

第42回世界遺産委員会決議文 WHC/18/42.COM/8B.Add, <https://whc.unesco.org/en/decisions/7159>

(11) 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会 2019『特別研究事業 第1回国際検討会「古代東アジアの航海と宗像・沖ノ島」報告書』

(12) 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会 2020『特別研究事業 第2回国際検討会「古代東アジアにおける地域間交流と信仰・祭祀」報告書』

(13) 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会 2022『特別研究事業 第3回国際検討会「古代東アジアの海洋信仰と宗像・沖ノ島」報告書』

(14) 岡崎 敬 1979「第1章 宗像地域の展開と宗像大神◆上高宮古墳」『宗像 沖ノ島』 吉川弘文館 pp.457-460

(15) 宗像市教育委員会 2018『浜宮貝塚：福岡県宗像市神湊の発掘調査報告』 宗像市文化財調査報告書第76集

(16) 宗像市教育委員会『新修 宗像市史』は2023年現在第五巻まで刊行、全六巻。

(17) Supplementary Information pp.35-55 <https://whc.unesco.org/en/list/1535>

(18) 福津市教育委員会2022『第2次 新原・奴山古墳群整備計画』

(19) 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群 デジタルアーカイブウェブサイト MUNAKATA ARCHIVES

<https://www.munakata-archives.asia/>

(20) 公開講座のアーカイブは公式HP、YouTubeで公開。 <https://www.okinoshima-heritage.jp/>

(21) 推薦書作成過程で検討された課題等をまとめたのが『沖ノ島研究』 現在9号まで発刊されている。

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議2015～2018『沖ノ島研究』 第一～四号

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」保存活用協議会2019～2023『沖ノ島研究』 第五～九号

(22) 世界遺産登録後、本遺産群について特集が組まれた主な学術誌等に以下がある。

おうふう 2014『季刊 悠久 第136号 特集「宗像信仰」』

一般財団法人 西日本文化協会 2015『西日本文化 地域特集 宗像』 No.476

雄山閣 2016『対馬海峡と宗像の古墳文化』 環太平洋文明叢書4

梓書院 2018『季刊 邪馬台国 宗像と古代日本』 132号

ニューサイエンス社 2018『特集 祝 世界文化遺産登録 沖ノ島祭祀遺跡とその周辺 The ritual sites on Okinoshima island and the surrounding area』 月刊 考古学ジャーナル 1 No.707

春成秀爾編 2018『季刊 考古学 別冊27号 世界の中の沖ノ島』



第1回国際検討会（平成31年（2019）2月26・27日）



第2回国際検討会（令和2年（2020）1月12・13日）

東アジアにおける関連資産の調査（視察概要）

大高 広和 九州国立博物館

はじめに

本特別研究事業の実施にあたっては、古代東アジアにおける本遺産群と関連・類似する資産との比較の視点が求められた。そのため、中国・韓国および日本国内における、航海や交流とそれに伴う信仰に関わる文化遺産についての現地視察・調査を3か年計画で計画した。

中国においては海洋文化の発展を見た浙江・福建方面、韓国においては日本と中国とを結ぶ西・南海岸方面、日本においては本遺産群とも関係・類似点が多い能登および壱岐・対馬の視察を計画した。当初3年目の実施を予定していた国内視察については、新型コロナウイルス感染症の影響を受け延期を繰り返し、壱岐・対馬視察については対馬視察に規模を縮小した。さらに、2022年9月に計画した対馬視察も台風11号（HINNAMNOR）のため延期となり、11月の実施となったため、この視察には参加できない方々も多かった。

しかし、参加者・関係者各位の御尽力・御協力により、いずれも印象深く実りある体験ができ、それらは直接・間接に今回の各研究成果に反映されていると思われる。以下はそれらの視察の概要である。特に断った以外は報告者の個人的所感であり、文責は全て報告者にある。

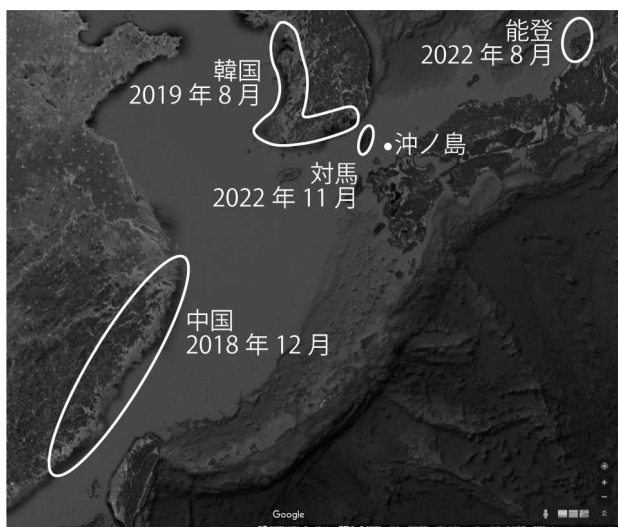


図1：視察先の位置

各遺跡・文化財についての概説的説明については、末尾に参考文献として挙げた書籍・論文や案内書等に多くを負っていることをお断りしておく。

1. 中国視察

(1) 概要

日程は2018年12月23～30日。参加者は秋道智彌、笹生衛、田中史生、禹在柄、李康承、王海燕、岡寺未幾（福岡県）、大高広和（同）（敬称略）。調査にあたっては、王海燕氏（浙江大学教授。当時は京都の国際日本文化研究センターに滞在中）の多大な協力を得た。なお、李康承氏（忠南大学校名誉教授）には、韓国視察への協力を仰いだ。

対象地域は、遣唐使などが東シナ海を渡って到着した

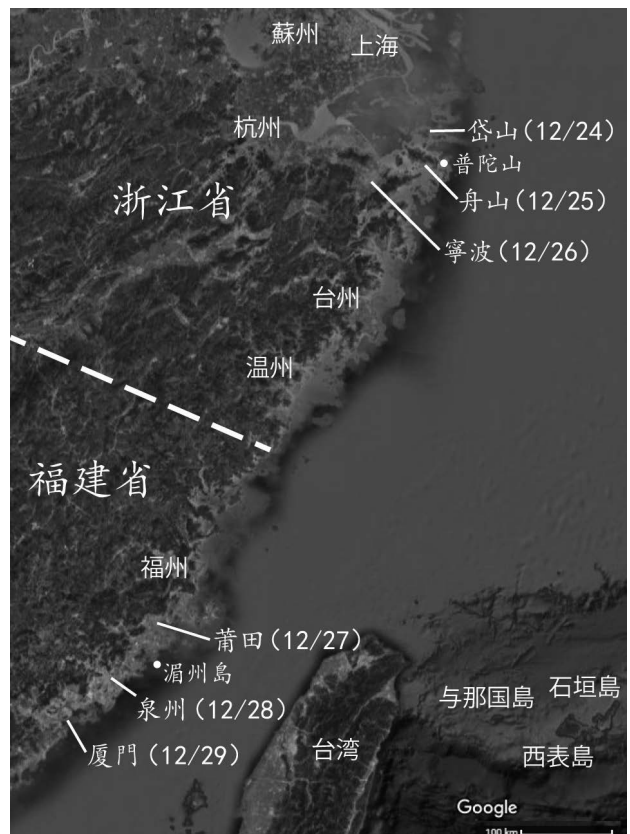


図2：中国視察行程図

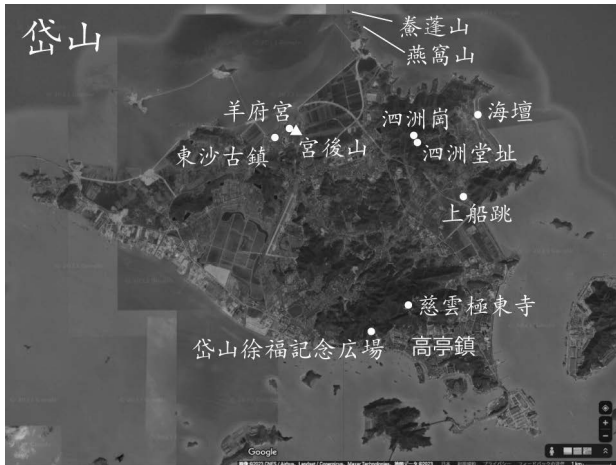


図3：岱山視察地図



図4：泗洲堂址（泗洲崗）

記録が残る舟山列島などの浙江省沿岸部や、宋代以降海上交易で栄え、海洋信仰や航海・対外交関係の遺跡・遺物の多い福建省の沿岸部とした。

(2) 舟山列島・寧波（浙江省）

ア) 岱山（島）

岱山は、杭州湾に展開する舟山列島で最も大きい舟山島の北に浮かぶ島で、もともと西岱山と東岱山に分かれていたらしいが、現在は繋がっている。舟山列島北部の小洋山という島には上海から長い橋が架けられ、当初はそこから船で岱山へ渡る予定だったが、欠航のため寧波方面から橋を渡って舟山島に入り、舟山島の三江という港から岱山へ渡った。なお2021年には、舟山島と岱山も橋で結ばれたようである。

岱山の古い信仰として指摘できるのが、媽祖信仰以前の航海信仰の一つである泗洲大師信仰である。島の北東部の泗洲崗では、山の中腹にある泗洲殿の少し下方（東）に古い泗洲殿址がある。成尋の『參天台五台山記』延久4年(1072)4月の記事には、「東茹(茄)山」に到着して船頭らが山頂の「泗州大師堂」に参拝したとある。堂は石で四面に壁を作り、僧伽和尚の木像が数体置いてあったとも記され、我々の見た泗洲殿址もそうした状況を彷彿とさせるものであった。海を見渡すこともできたが、立地が成尋の記録とは合わず、別のものようである。同様の施設が各地にあったらしい。

成尋の見た「泗州大師堂」は、島の西側だが元々東岱山に属する古い漁村、東沙古鎮の東にある宮後山に存在



図5：羊府宮前面の高台より燕窩山・鯨蓬山を望む

したらしい（田中2011）。視察では詳しく踏査できなかったが、以前調査を行っている田中氏によれば、宮後山からは舟山島を視認することができ、成尋の記述に一致する。「山南面上下有二井。水極清浄也。」との記述に対応する、麓の湧き水があることは確認できた。

東沙古鎮には、羊府宮という清の乾隆22年(1755)に創建され地元の信仰を集める祠があり、平安船という船を奉納する風習や、漁業に関する取り決め等を記した清代の石碑などが確認できた。また、その前面の海に面した高台に小祠があり、民国23年(1934)1月の年紀をもち「崇拝燕窩老相」と記された石碑が中央に埋め込まれていた。位置関係からすると、そこから約3km先の燕窩山という陸繋島を遥拝するためのものとみられ、その島の神が「燕窩老相」だろう。そのさらに先にある鯨蓬山と言う小島には20世紀半ばに灯台が設置されるなど、古くか

ら地元の航海の目印であったらしい。現在確認できる小祠の時期は新しいが、航海および遥拝という本遺産群に類似する信仰を窺わせるものであった。また、地形的に、後述する対馬の豊の椎根島と類似するものがある。

岱山ではほかに、地元の研究者の案内のもと、徐福が船出したという伝説をもつ**上船跳**、年に一度全国の漁民を集めて大きな祭典を行われるという**海壇**などを見学した。美しい海岸風景が広がっていたが、海水は土砂の色をしており、遣唐使が海水の色の変化で唐の海域に入ったことを知ったという話が実感された。

イ) 舟山島

舟山島では、五代の時代に開かれたという**祖印寺**（旧名を蓬萊院と言い、岱山島の北の衢山島にあったという）を見学した。元代に使者として来日し、そのまま一生を終えた一山一寧（四明〔寧波の西方〕の祖印寺から普陀山の補陀落山観音寺に移り、住職を務めていた）の像のほか、五代に築かれたという「祖印寺井」があった。

また、**舟山博物館**も見学し、2001年の工事中に島内の岑港回峰寺から出土したという泗洲大師像の頭部（推定）を特別に調査できた。

ウ) 普陀山（島）

中国仏教の聖地の一つで、海洋信仰（観音信仰）で知られる。東の小島の洛迦山とあわせ普陀洛迦山とも言う。9世紀半ばに日本僧恵鏝が建てたという**不肯去観音院**、また『高麗図経』（1124年成立）に新羅人が観音像を置いたと記される**新羅礁**のほか、**観音跳**、**普濟禪寺**、



図6：新羅礁



図7：潮音洞遠景

法雨禪寺などを見学した。**新羅礁**では周囲を流れる激しい潮流の様子が実見できた。また海に面して多数の磨崖石刻がある**潮音洞**では、古絵図に描かれている建物跡（柱穴など）も含め、航海信仰の代表的景観を確認できた。

エ) 寧波

明州と呼ばれた唐代より遣唐使船の発着港としても利用され、また南海貿易の港として発展した港湾都市である。行程の都合で一部の見学に留まったが、**寧波博物館**では対外交渉・交流、陶器類に関わる展示を中心に見学した。また、寧波運河とともに世界遺産「中国大運河」の構成資産となっている、奉化江・姚江・甬江の三つの河川の合流点で河港があった**三江口**の畔には、清末に商人たちによって設けられた**慶安会館（浙東海事民俗博物館）**があり、船の模型など航海に関する展示のほか、媽祖をまつる天后宮の様子も見学できた。

(3) 福建省沿岸部

ア) 莆田

莆田は、福建省中東部の都市で、台湾海峡に開ける興化湾に臨む都市である。兼濟河の畔にある**三清殿**は、唐代（628年）に創建され、宋代の建物が残る**道観（元妙観）**で、境内には幾つかの石碑とともに**興化軍祥応廟記碑**が安置されている。紹興8年（1138）に莆田県の名族であった方一族が、地元の祠廟「祥応廟」の来歴を記して建てたもので、廟神が示した**靈驗**の中には商業活動に伴う航海安全のご利益があったことを伝えている（須江1998）。



図8：祥応廟

莆田市内の元来**祥応廟**記碑があった白杜村（現、溪白村）も訪れた。「溪白」バス停の位置で下車し、王氏が地元の住民に聞き取りを行うと、すぐ近くに廟が現存していると言う。歩いて向かうと、そこには高層ビル開発の手が間近に迫った農地の中にぽつんと残る**祥応廟**と、それを管理する方氏の人々の姿があった。隣接する建物には方氏の歴史が展示され、外には明清時代の石刻類が多数置かれていた。廟の裏側には小さい山があったが失われたと言うことで、碑文中に見える「溪山」はその山のことだろう。宋代の沿岸の地方勢力による交易への参画と地域の信仰との関係は、同時期の宗像大宮司家による対外交易とのよい比較材料とできるかもしれない。

経済発展による変化が著しい昨今の中国にあって廟の行く末が心配されるが、その中で伝統ある信仰が置かれた状況の一端を垣間見ることができ、非常に貴重でかつ印象深い体験となった。なお、この祥応廟への訪問については、田中氏による紹介文も公表されている（田中2020）。

イ) 湄州島

莆田市の南の文甲港から沖合約3kmに浮かぶ**湄州島**は、媽祖(天妃、天后などとも)となった娘の出身地である。媽祖信仰については詳述しないが、12世紀に地方から登場し中国の海洋信仰の頂点に登り詰めたもので、ここがその発祥地・聖地である。**媽祖祖廟**の現況と島の地形や立地等を視察したが、現在も参拝客が絶えず周辺整備が著しく、媽祖信仰発生前の島内の様相を窺うこと



図9：媽祖祖廟上方からみた湄州島

はなかなか困難なことと思われる。

ウ) 泉州

莆田から南西に約70kmに位置する、福建省中部の港湾都市である。晋江下流の北岸に位置し、歴史的にはより上流の南安の方が古いが、唐代から南宋にかけて海外交通の要地として発展した。南東部は泉州湾を晋江が埋めた沖積平野で、土砂の堆積により港湾機能が退化し、また外洋船の大型化もあって、その後は衰退していったという。

泉州西郊の晋江を約7km遡った川沿いにある南安市の**九日山**は、宋・元時代に航海の安全と順風を祈る「祈風」が盛んに行われ、これに関わる碑文（磨崖石刻）が多数残されている。延福寺内の靈嶽祠の神（通遠王）は、風伯などの機能神とは異なり泉州の地方神として様々な祈



図10：九日山

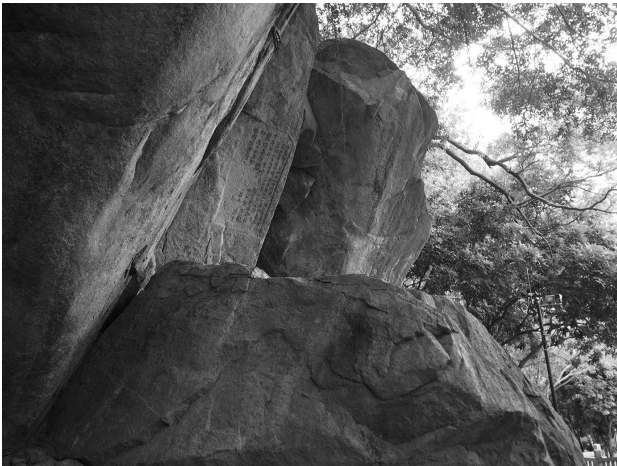


図11：九日山山内の磨崖石刻

禱の対象となっていたが、特に順風の靈験が強調されらしい（佐久間1987）。後には航海神として金門島の太武山などに分祀されている。

山内を踏査したが、常緑樹に覆われ白い岩が点在する雰囲気は、沖ノ島にも通じるような感じられた。また、沿岸方向には泉州の市街地が望め、かつては晋江が海に注ぎ込む河口部がよく見渡せる立地だったと考えられ、入り海に面する高台の祭祀遺跡から展開した宗像大社辺津宮にも近い部分がある。

泉州市東郊の洛陽に架かる**洛陽橋**は、宋代に蔡襄によって築かれ、長さ約1kmにも及ぶ。橋の北には海神通遠王をまつる**昭恵廟**もあり、泉州の海上交易の発展と結びついていた。

泉州海上交通史博物館の見学の後、東西両塔をもつ古刹**開元寺**の境内に建つ、同館別館の**泉州湾古船陳列館**



図12：洛陽橋（南側から）



図13：泉州湾古船陳列館

で、発掘された沈没船に関する展示を見学した。

宿の近くにあった関羽と岳飛の廟である**通准関岳廟**では、現代の庶民信仰のあり方も見学することができた。2018年の段階で、廟内の占師がスマホ決済で料金を受け取っていたのが印象深かった。

エ) 厦門

泉州から南西に約60kmの九竜江河口の湾に浮かぶ島である厦門島は、10世紀ごろから海賊などの拠点となり、明末には鄭成功が一時占拠した。17世紀半ばからはヨーロッパ商人が出入りし、1842年の開港後は、泉州・漳州をしのぐ繁栄を見せた。

島の南部に位置する**南普陀寺**は、舟山の普陀山と同じ観音信仰の聖地である。初めに寺が設けられた唐代には普照寺と呼ばれたが、五代のときに泗州院と改名され、



図14：南普陀寺（五老山）

宋代に旧名に戻ったという。元明時代には荒廃したが、清の康熙年間に現名に改まるとともに整備され、福建省南部の仏教信仰の中心地となった。五つの峰が並列する五老山の下にあるが、山上からの景観や山内の普照寺、湧き水の存在などを確認した。ここも九日山と同様に、やはり亜熱帯季節風気候で冬がないという温暖な気候の植生と白っぽい巨石の存在により、沖ノ島に似た雰囲気を感じられた。

(4) 小結

言うまでもなく中国は広く、本視察では該当地域の主だった地を訪れたに過ぎない。また、沖ノ島祭祀の年代と並行する時期の、航海や海洋信仰に関する史跡等は限られ、直接の影響関係などを論じることは難しい。しかし、その中でも信仰の対象となる存在の地形や立地条件・自然環境など、航海に関する信仰の形には、日本と中国との間で通底する部分があることは随所で感じられた。それらを踏まえた上で、各国における特徴や交流関係を抽出・検討していくことが必要となるだろうが、時期的に違うものを並べて議論するにはもう少し類例の蓄積も必要だろう。今回は旅程の都合で山東半島や広東地方といった、同様に航海が発展した地域には足を運ぶことができなかったため、それらの地域の調査が重要な課題として残されたことを付記しておきたい。

2. 韓国視察

(1) 概要

日程は2019年8月19～26日で、参加者は佐藤信、秋道智彌、笹生衛、田中史生、禹在柄、李康承、王海燕、岡寺未幾、大高広和、池ノ上宏（福津市）（敬称略）。視察にあたっては、李康承氏および禹在柄氏による全面的な協力を受けた。

対象地域は、黄海（韓国名「西海」）を挟んで中国大陸と向かい合う韓国の西海岸と、対馬海峡（韓国名「南海」）を挟んで日本と対峙する南海岸の諸地域とした。リアス式海岸や多島海が広がり、日中韓の船が行き交った地域・海域である。

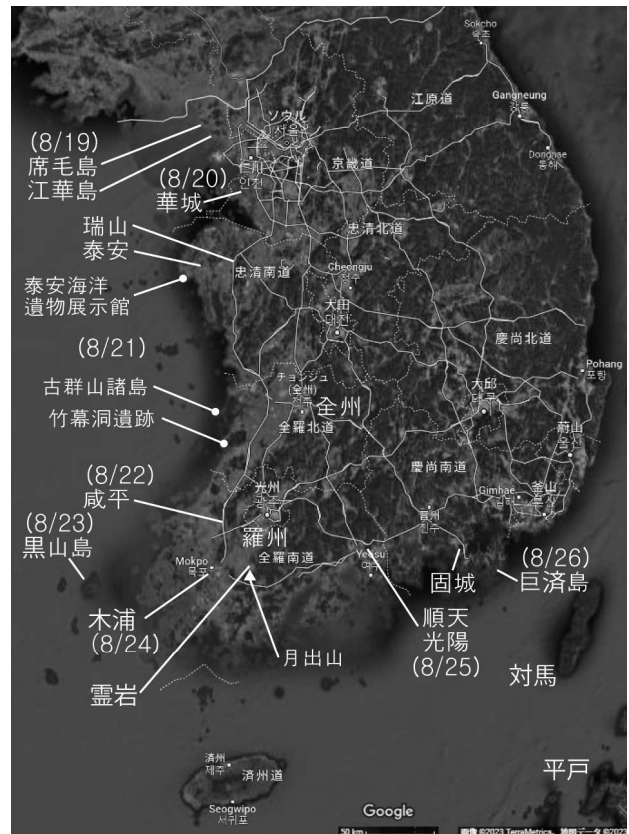


図15：韓国視察行程図

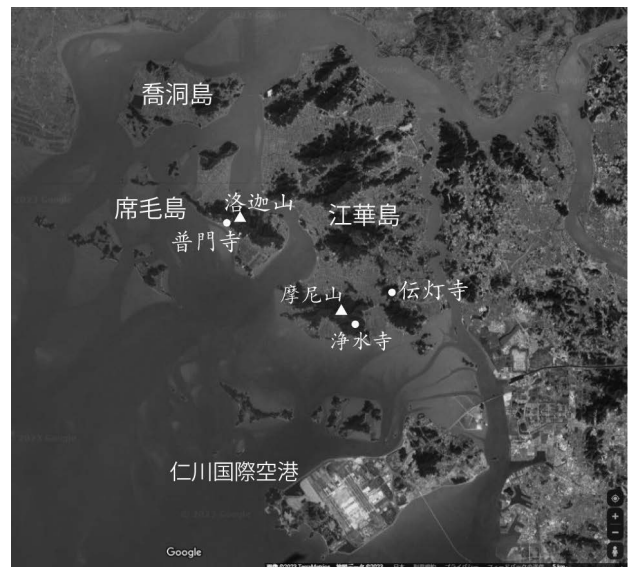


図16：席毛島・江華島周辺地形図

(2) 西海岸

ア) 席毛島・江華島

仁川国際空港から、まず近年江華島と橋で結ばれ観光客が増加しているという席毛島へ向かった。多くの島や入り江が展開していた江華島周辺の地形は、高麗時代以



図17：洛迦山（席毛島）

降の長年の干拓事業により単純化しており、現在は江華島・席毛島・喬洞島の三つの島に統合されている。

席毛島には、中国・舟山列島の普陀山の東の小島、洛迦山と同名の**洛迦山**（235m）があり、その中腹に位置する寺院が韓国の三大海上観音聖地（ほかには江原道襄陽郡の洛山寺、慶尚南道南海郡の錦山菩提庵）の一つとされる**普門寺**である。635年、新羅善徳女王の時代の創建と言うが未詳。境内からは干満の差が激しい西海（ソヘ、黄海）を見渡すことができ、航海安全の信仰に相応しい。釈迦牟尼仏・弥勒菩薩・羅漢の石像が奉安されている石室は1812年に再建されたものとみられるが（1980年に再修理）、石像は一体を除いてより古いもののように思われた。なお、石室は635年に築かれ、これらの石像も新羅の漁師によって海中から網で掬われたとの伝承もある。創建年代についての調査・研究の進展が望まれる。

江華島の古刹、**伝灯寺**は、江華島南部の鼎足山の山麓に建つ曹溪宗の寺院で、伝承では高句麗の阿道和尚が381年に建てたとされるが、記録が残るのはモンゴルの侵攻を受け江華島に王宮が遷った13世紀からである。1621年に建てられた大雄殿と薬師殿、1097年に北宋で鑄造された梵鐘は国の宝物に指定されている。戦乱による王朝の記録類の焼失を避けるための史庫も設けられていた（『朝鮮王朝実録』を収蔵）。三聖閣は道教と仏教が韓国で融合した過程を物語るとされる。

江華島にはほかに、朝鮮の始祖神檀君が祭祀を行ったとされる摩尼山頂の塹城壇や、新羅の善徳女王8年(639)に懷正禪師が塹城壇に参拝した後に創建したとされる浄

水寺があるが、行程の都合で訪れることはできなかった。

イ) 華城（唐城）

唐城は仁川の南、京畿道華城市の南陽半島のほぼ中央、九峰山(約159m)にある周囲約1200mの山城である。643年に百済が高句麗とともに攻め、新羅が唐に救援を要請した党項城（『三国史記』百済本紀、義慈王3年11月条）に比定されている。当地は初め百済の地で、のち高句麗の唐城郡となり、新羅の景德王が唐恩郡と改め、829年には唐城鎮が置かれた（ただし、高句麗が当地を支配していた6世紀前半には唐王朝はまだなかったため、本来の地名は唐〔党とは音通〕とは無関係ではなからうか）。『新唐書』巻43下（地理志7下）には、中国から新羅の王城に至るルート上に「唐恩浦口」が見え、崔致遠撰「万寿山聖住寺朗慧和尚白月葆光塔碑」（保寧市）にも、825年に唐に朝貢した新羅王子の船が「唐恩浦」から出港したことが見えている（浜田2012）。

発掘調査によって、百済時代に南西の一番高いところに山頂（**ㄷ**＝鉢巻）式山城が築造された後、新羅が規模を拡大した包谷式山城を築いたと推定されている。漢江流域を支配下に置いた後の新羅にとって、唐への海上交通路上に位置した重要な拠点であったことが窺われる。東門・西門・北門と井戸（集水施設）、各種建物址等が確認されており、礎石が残る城内の最高点には高麗時代に望海楼が築かれ、かつ三国時代から何らかの形で利用されていたと推定されている。周辺からは文字瓦片・土器類のほか、土製馬23体も出土し、祭祀も行われたことが分かる。また、そこから一段下がった平坦地では八

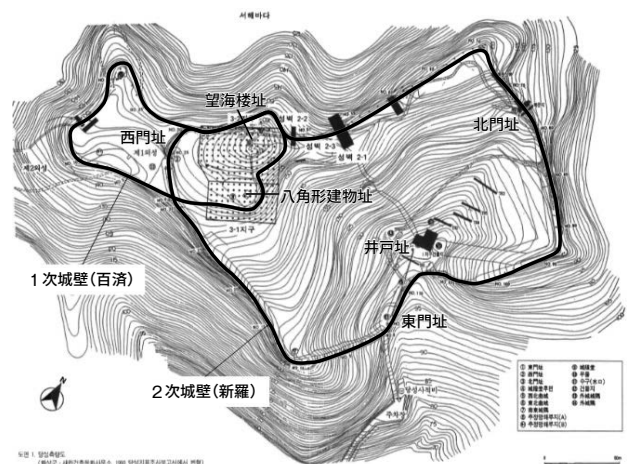


図18：唐城平面図（裴・朴2001に追記）

角形の建物跡（6世紀末～9世紀）も確認されている。

あまり標高は高くないが、頂上部からは西海を含む周囲を見渡せ、戦略的・交通上の重要性が見て取れた。東方の河口部は南陽半島の付け根にあたり、かつてはより湾入していたとみられ（『大東輿地図』で「海門」）、海上交通と慶州方面への陸上交通との結節点だったと考えられる。

ウ) 瑞山

龍賢里磨崖三尊仏像は、忠清南道の瑞山市街地から東に15km、迦耶峽と称する谷の高さ数十mの断崖の中腹に、縦横約3mの大ききで三尊が浮き彫りされているものである。中央が如来立像、左が菩薩立像、右が半跏思惟菩薩坐像（弥勒菩薩）で、百済仏特有の印象を見せる。如来の光背は火焰をめぐらせた宝珠形で特に大きい。前方に木で覆屋を付した磨崖石窟形式の代表例で、6世紀末～7世紀初のものと考えられている。

今回は訪れることができなかったが近隣に伽耶山普願寺址という百済時代に遡る廃寺があり、磨崖仏はこれに関係して制作されたものと考えられている。

エ) 泰安

瑞山の西の泰安邑の北側にある白華山（284m）の山頂近くにある寺院、太乙庵の東30mには**東門里磨崖三尊仏像**がある。「白華」は唐の李通玄が普陀洛（potalaka）を「小白華樹山」と意識したこと（陳2022）と関係しよう。磨崖仏は西海（黄海）を見下ろせる位置にあり、高さ5m

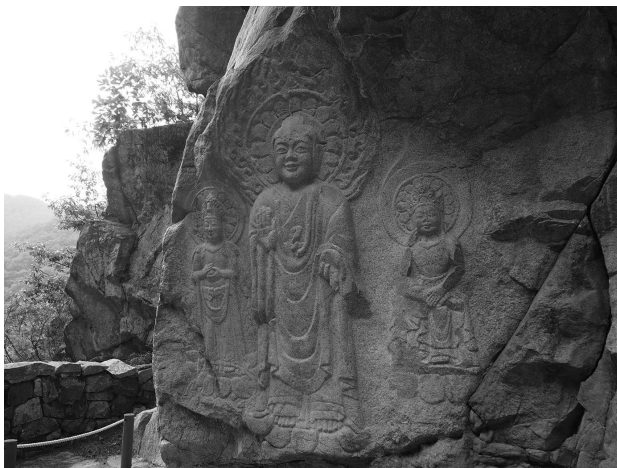


図19：瑞山龍賢里磨崖三尊仏



図20：泰安東門里磨崖三尊仏

余の巨岩の東面の下半を浅い龕室状にし、立像を厚く浮き彫りしている。中央は約2mの菩薩像で、左右はともに約2.9mの如来像。百済時代の蓮花台座をもち、瑞山の三尊仏に先行する韓国の磨崖仏の初期の例で、中国の石窟外側壁に刻まれた仏像群と似ているとされる。菩薩（観音か）が中央にあるのは珍しいが、両側の如来像（左が釈迦もしくは阿弥陀、右が薬師）よりも遅れて彫られたもののように見受けられた。

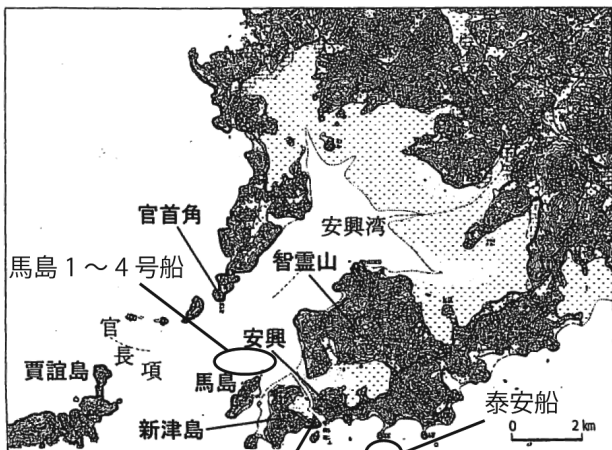
黄海に突き出た泰安が百済の海上ルートにおける重要地点であることが磨崖仏制作の背景にあるとみられているが、白華山山頂からの海への眺望はそのことを実感させるものであった。ただし、当初から観音信仰として捉えられるかは検討が必要である。

泰安半島西南部の安興半島の先にある新津島には、木浦の国立海洋文化財研究所の別館として2018年に開館した**国立泰安海洋遺物展示館**があり、数日前に会期が終わった展示をイ・ヨンジェ（이연재）氏の案内で見学させて頂いた。展示館の本格オープンは2019年11月の予定だったが、建造中の馬島1号船の復元船も見学できた。韓国の水中文化財としての沈没船は黄海に集中していて、新津島の北方で馬島1～4号船、安興半島の南方で泰安船の沈没船が発見・調査されている。泰安の展示館はこれらを含む泰安より北側の海域を担当する調査研究・展示機関である。

馬島沈没船からは陶磁器や木簡を含む約3万点の遺物が発見されており、漕運船であることが明確となっている。馬島1号船は13世紀の船で、材木は松。アカマツが



図21：国立泰安海洋遺物展示館（展示見学風景）



国立泰安海洋遺物展示館

図22：泰安（安興）周辺図（森平2013に追記。原図は陸地測量部5万分1地形図「安興」〔1919年〕）

主で、部分的に柔らかい広葉樹を用いているという。馬島3号船では頭蓋骨の一部が付属した鹿の角が船首・船尾の両端から発見されており、祭祀的な目的があるのではないかとのこと（鹿は学名 *Cervus Nippon Hortulorum* で、韓国では大陸鹿とも呼ばれる鹿。角以外にも骨などが残っていたという）。

なお、新津島は複雑なりアス式海岸による激しい潮流と暗礁で海の難所として知られた「安興梁」に面しており、特に賈誼島と官首角との間の水道、官長項は難所として名高い。展示館のある新津島と安興半島間の水域（内港）は、水深が保たれるため古くからの錨泊好適地となっており、朝鮮時代には水軍の拠点（安興鎮）が置かれた。宣和五年（1123）に宋の徐兢が高麗に使者とし

て往来した記録である『高麗図経』によれば、徐兢は往路で「馬島」に到着し、「安興亭」という客館の存在を記録しているが、安興半島全体が「馬島」で、安興亭は現在の安興や新津島東岸に想定されている（森平2013）。

「馬島」には泉があり、官馬が放牧されていたという。また、安興半島の主峰である智霊山には、高麗時代に漕運船の安全祈願のため安波寺という寺が建てられたという（『新增東国輿地勝覧』）。

オ) 古群山諸島、扶安・全州（竹幕洞祭祀遺跡）

全羅北道の辺山半島・扶安に向かう途上、群山から世界最大級の防潮堤、セマングム防潮堤の堤防道路を利用して古群山諸島（もと群山島）を車中見学した。『高麗図経』によれば、徐兢は6月6日、前日に停泊していた苦苦苦（辺山半島沖合の蝸島）から恐らく北西方向への潮流を利用して、群山島へ到着・停泊した。船乗りの信仰を集める五龍廟などが客館の「群山亭」の西にあったとされ、その位置は仙遊島の西南の南島に想定されている（森平2013）。

扶安竹幕洞祭祀遺跡は、黄海に面して突出した辺山半島の突端の標高22m程の海蝕断崖上に位置し、対岸に蝸島がある（調査当日は蝸島との間にある小島までしか望めなかった）。小さな湾と岬（展望台がある、竹幕洞祭祀遺跡遠景の撮影スポット）を挟んだ南には歴史的な港

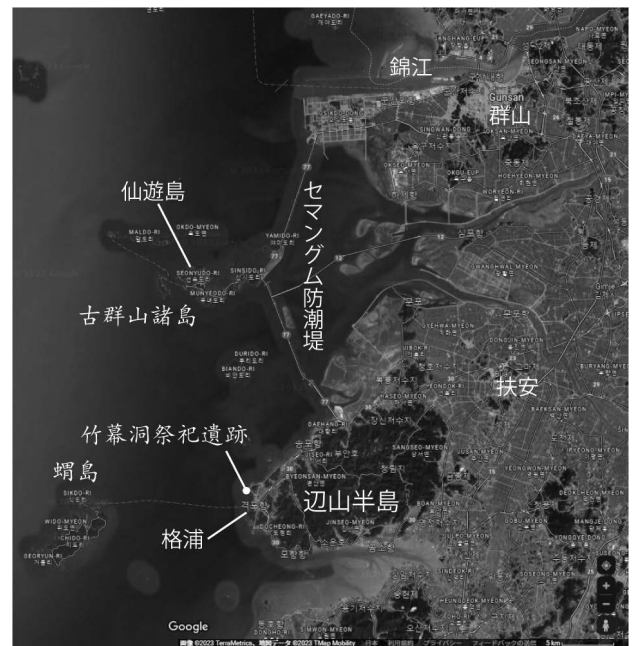


図23：古群山諸島～辺山半島周辺図

である格浦が位置する。

遺跡からは土器、土製および石製模造品、武器と馬具中心の金属遺物、中国産陶磁器片、日本列島製の祭祀具などが集積して出土している。当時地上および地下に人工的施設物はなく、露天祭祀が行われたとみられている。港で風待ちをして、海からも目立つ岬で祭祀を行ったのだろう。遺跡のある岬と北隣の岬（獅子岳）の間には断崖が入り込んでいて、この断崖と祭祀（当地の神聖視）との関係も考えられるが、獅子岳には軍事施設があり調査は行われていない。

遺物は馬韓時代の4世紀中頃から7世紀前半までの百済の全時期に及ぶが、中心は5～6世紀代にあり、漢城から公州に遷都して以降、滅亡までの百済の国家的な祭祀が主に行われたとみられている。統一新羅時代になっても、規模を縮小しながら地域の有力者による土器を中心とする祭祀が高麗時代まで継続し、朝鮮時代以降は地域の漁民たちの祭祀となった。現在は「ケヤン婆さん」と8人の娘という海の女神が**水聖堂（水城堂／수성당）**で祀られ、娘はそれぞれ中国の海、眼下の海、ソウルへ行く海などを守っているという。

また、韓国の土着の信仰である巫俗（シャーマニズム）の巫女（ムーダン）たちからも聖地として信仰を集めており、1月14日には全国規模の集会が行われているらしい。水聖堂の周囲にはいくつか祭壇が設けられており、ムーダンはそこで祭儀（天）を行っていたが、近年これが禁止され、近隣に設けられた建物内で祭儀を行うこととされたという。

なお、イシモチの産地として有名な対岸の蝸島では、

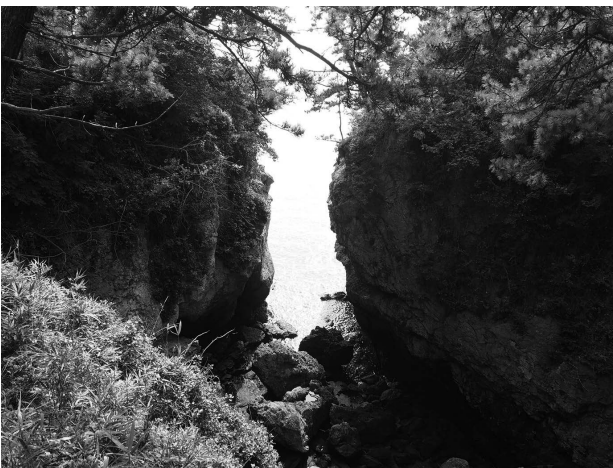


図24：竹幕洞祭祀遺跡に隣接する断崖



図25：水聖堂内部（中央がケヤン婆さん）

3月（旧暦正月13日）に行われる巫俗行事が国の重要民俗文化財に指定されていて、チガヤで作った実物大の船にカカシを立て、願い事を書いて海に流し、漁師の安全を願う祭りで、島にある3つの村ごとに行うという。妻の髪や爪、自分の服を船に入れることもあり、沖縄のオナリ神との共通性が窺われるという。

竹幕洞祭祀遺跡の出土品は現在、**国立全州博物館**で収蔵・展示されている。崔フンソン学芸室長より説明を受け、特別に収蔵庫も少し見学が許された。崔氏によれば、竹幕洞祭祀遺跡には龍の洞窟（隣接する断崖のこと）があり、特徴的な地形からここで祭祀を行った。引き潮の時は100mほど海岸が現れるが、海中投与は確認できていない。中国南朝の黒陶、百済・新羅・加耶の土器など国際的な遺物が見られる。土器は割って置かれたもので、ここでしか出土しない黄色い土器は祭祀のために特別に作られたものと考えられる。土馬もわざと頭と足、尻尾を壊している。小さな器台は公州の王宮（公山城）で同型のものが出土している。4世紀までは馬韓で、5世紀になると有力な古墳のある益山の勢力のもとで国家的な祭祀になるとみられる。有孔円板と剣形は、近くから同様の石材が採れるので、地元の石を用いて制作されたものとする。約10km離れたところにも祭祀遺跡があり、蝸島でも祭祀が行われていた。済州島の龍潭洞、公州艇止山遺跡、扶余論峙遺跡などの祭祀遺跡のように、古代祭祀自体はあちこちで行われたが、竹幕洞祭祀遺跡は突出している、といった説明があった。収蔵庫内で復元されている土器の多くは大甕で、焼成時にひしゃげた壺も



図26：竹幕洞祭祀遺跡出土土器の展示（国立全州博物館）

奉獻されているので、祭祀用と考えられているという。

これに対し視察参加者からは、祭祀が引き潮の時に龍の洞窟で行われ、その遺物を廃棄した場が竹幕洞祭祀遺跡である可能性、また大甕による酒の奉獻が主である可能性が示された。ほかに、カシューナッツのような独特な突起を付けている土器は、静岡県西畑屋遺跡出土品に類例があること、剣形は5世紀後半の福島県の建鉾山祭祀遺跡と同タイプだが、現在の民間信仰における形代の吊るし方を参考にしているという同館での有孔円板・剣形の展示方法は、奉獻品としてではなく細い木の枝に沢山掛けて祭場を飾り立てるといふ古代日本の祭祀でのあり方とは異なっているという指摘もなされた。さらには、鉄矛や馬具も甕の中に入れて奉獻されている点、鉄鏡はここ以外では皇南大塚でしか出ていない貴重なものである点なども注目された。竹幕洞祭祀遺跡全体では5000点ほどの遺物があり、2000点は大体整理が終わっているが、土器と鉄器に手付かずのものがあつて、研究を進めているとのことである。既に卜骨や馬形製品など祭祀遺物の調査研究が行われており、報告書を拝受した。

カ) 咸平

咸平長鼓山古墳は、全羅南道の咸平郡中央北部の標高50m程の丘陵の先端部に位置し、西方2kmには海が広がっている。墳丘は前方後円形で前方部を南西に向け、墳長は66mである。墳丘は高く、日本の前方後円墳に比べて急斜して築造されている。周濠などの外部施設は見つかっていないが、周辺で円筒埴輪が見つかっている。



図27：咸平長鼓山古墳

ただし、日本のように全体を圍繞するのではなく、くびれ部分のみなど一部に限られる。5世紀中頃から6世紀中頃の築造と推測されている（禹在柄氏によれば6世紀前半）。

その東500mほどには在地系の高塚古墳である**金山里方台形古墳（米出古墳）**があり、禹在柄氏によれば5世紀後半の築造で、馬形や人形の埴輪の一部が見つかっているなど、百済と倭の双方の影響を受けて築かれている。葺石は、倭の影響か積石塚の積石を省略したものか、二説ある。周溝もあるが、日本と異なり不規則な形で作られている。

近隣には、両古墳の造営に関わつたとみられる集落遺跡である老遺跡カ地区があり、住居跡や堆積土中から埴輪（円筒形土製品）13点や須恵器系土器が出土し、地域社会の中に在地化していく倭系渡来人が存在したと想定されている（高田2012）。当地は崇山江流域における前方後円墳と在地勢力との関係、ひいては交流の実態を考える上で重要である。

キ) 黒山島

木浦から高速船で多島海を通り抜けて約2時間、**黒山島**へ渡つた。黒山島は円仁の『入唐求法巡礼行記』にも見えており、『高麗図経』によれば中国の使者のための館舎があつた（邑洞の地か。森平2013）。

海に長く突き出た岬の付け根あたりにある**鎮里堂**（当地の地名が鎮里）には、カクシ（乙女）神がまつられていて、新郎新婦がこの島に船で来る途中に、新郎が船で

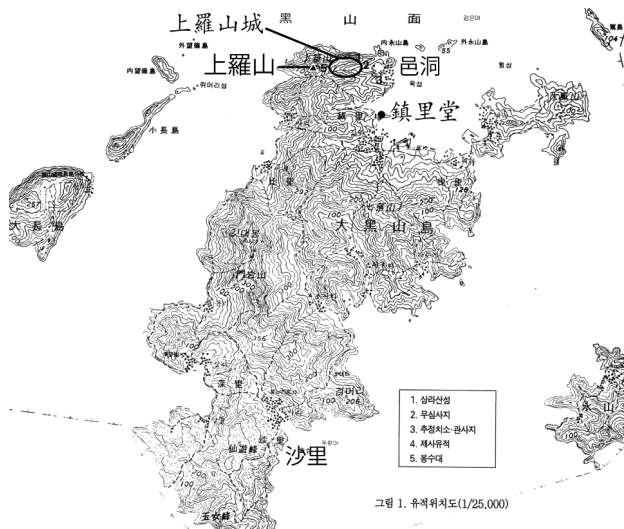


図28：黒山島地図（木浦大2000に追記）



図29：鎮里堂のある岬（手前）と上羅山（奥）

死に、それを嗅いで新婦が後追い自殺をしたのをまつたという伝承と、木浦から船に乗せて航海安全のための生け贄にした処女をまつとの伝承がある。後者は中国の舟山列島に同じ伝説があり、舟山群島から伝説が伝わった可能性があるという。

建物は近年再建されたものだが、本殿と拝殿（報告者による仮称）を塀で結んで囲う構造となっていた。毎年正月に行われる祭祀は、以前は漁師の海の祭りだったが今は敬老の祭りだという。たまたま当地を訪れていた黒山島出身の女性によると、近くにあった井戸の水が澄んでいないと堂のお祭りは行わなかったらしい。堂の裏手には七星を祀る小祠があった。

また、堂に隣接して、甕を売る船に乗ってきて取り残された青年（チョンガ）のものという伝承をもつ墓があっ



図30：鎮里堂

た。青年は笛の音によって女神に見初められ、本土に帰ろうと船を出しても逆風で船が出せず、巫女に聞いたところ青年を残していけば帰れると言われ、船は彼を残して去っていった。男は松の木に登って船の帰りを待っていたが、落ちて死んだ。鎮里堂には彼と女神の絵が飾られているという。

また、近くには国の天然記念物に指定された、樹齢数百年の招霊木（オガタマノキ）があったが（朱2003、今石2006）、枯死して今は幼木があるのみであった。招霊木は韓国ではここと済州島にのみ確認されるらしい。岬の突端には龍王堂もあった。

黒山島の邑洞は9世紀に活躍した「張保阜の村」と伝わり、統一新羅時代の港があったと考えられている（高麗、朝鮮時代、現代と尾根の南側に港が移っていく）。円仁は、黒山島に3～400戸の家があったと記す。新羅末のものとされる縦縞模様様の陶器や蛇の目高台青磁、高麗時代の緑青磁、象眼青磁、宋の同安窯系青磁などが多数表採されたほか、瓦片や門柱石なども見つかっている。集落南西の山裾には石の基壇の建物址が残り、集落西方の谷に二基の石塔・石灯が残る寺院址からは、新羅末とされる「無心寺禅院」銘瓦や高麗時代の瓦磚が採取されており、ここが無心寺址である。現地では石塔が「おじいちゃん」、八角形の石灯が「おばあちゃん」と呼ばれ、村人が今も祭祀をしているという。赤い岩は、海賊が城を建て、おじいちゃんが石塔を建てる勝負をして、おじいちゃんが勝って海賊の首を切ったところと言われている。ただし、石塔類は崩壊したものを不正確に積み直し



図31：上羅山山頂から西方を望む（遠くは紅島〔白山〕）

たものであり、原形ではなかった。八角形の石碑は9世紀以降流行したもので、高麗時代の仏頂尊勝陀羅尼経碑の可能性があると指摘があった。

標高約230mの上羅山は島の北端に位置し、山頂から邑洞集落の北側に伸びる尾根に上羅山城がある。北側は自然の断崖を利用し、他の三面に石壁を巡らせ、半月城との呼び名と、張保臯が築いたという伝説をもつ。城とその周辺で出土した遺物のほとんどは9～10世紀のものともみられ、統一新羅時代の築造とされる。見学路は草木が繁茂していたため踏査は諦め、山頂へ向かった。

上羅山山頂には祭祀遺跡があり、鉄製馬と新羅末～高麗時代の陶磁器片が採取され、航海に関する祈りの場と想定されている。烽燧台址もあり、『高麗図経』によれば、ここは中国からの使者を見つけ烽燧で王城まで知らせる伝達経路の起点であつたらしい。ここからは『高麗図経』のように南西に至れば長江下流域であり、北西に向かえば張保臯が拠点をもっていた山東半島である。韓国ではここから木浦につながるため、栄山江の入口と言われている。この地が朝鮮半島から中国へ往来する上で重要な位置を占めており、そのため山城や烽燧台の跡、そして祭祀遺物が残されていると理解できる。

黒山島を一周して島内の様子を見学したが、黒山島は済州島ともに配流地としても知られ、19世紀初めに流された丁若銓は沙里で寺子屋「復性齋」を開き、『茲山魚譜』（茲山は黒山のこと。海洋生物学書）を遺したことで有名である。現在は流配文化公園がある沙里では、道端で昆布を所狭しと乾燥させていた。

ク) 木浦 (国立海洋文化財研究所)

国立海洋文化財研究所では、通常展示と海南地域で作られた青磁の特集展示を見学した。11～13世紀の船（群山十二東波島船、莞島船、木浦達里島船）の復元展示があるが、船首の残りはいずれも悪い。十二東波島船からは鹿角が30個体出土したという。

1975年に発見され研究所設立の契機となった新安沈没船は、中国から直接新安に向かって来たのではなく、東福寺の再建のために高麗経由で日本に行く途中に難破したと考えられている。船のバランスを取るために重りとして28トンもの銅銭と紫檀（小さいものも松の木一本と同じ重さがあり海に沈む）を下に積んでいた。銅銭は鐘の材料などにもなり、紫檀は梱包材としても使われ、到着後は商品にもなった。スギもしくはヒノキで作られた画一的な荷箱は、墨で書かれたマーク・文言から日本製と考えられ、竹の釘が用いられていた。鈴になっている人形は、海が荒れた時に海中投与するものらしい。マツ、クス、クリなどが船材として使われており、船首に入れられた鏡や、銭貨、北斗七星などの船での祭祀の風習から、船は中国福建省泉州のものと考えられている。

ケ) 霊岩 (・羅州)

木浦から栄山江を遡ると、霊岩の馬韓文化公園として整備された区域内の丘陵上に堂が建っており、ここが南海堂址（南海神祠址）である。かつては直近まで入り江（南海湾）になっていた栄山江下流域を眺望でき、遠くの月出山にも向かい合うように立地している。高麗の顕



図32：1925年発行5万分の1地形図「栄山浦」(部分)に追記



図33：南海堂（右）と月出山（左奥）

宗19年（1028）に初めて祀典に掲載され（『増補文献備考』）、朝鮮時代に定められた5箇所の海神・江神の一つである（江原道襄陽の東海廟、黄海道豊川〔北朝鮮〕の西海壇のほか北朝鮮北端に江神が2箇所ある）。発掘調査で廟堂の設置状況が明らかとなり、陶磁器類・瓦類のほか、銭貨や鉄製馬が出土している。立地や周辺の古墳の分布状況なども勘案すると、航海安全の祭祀の場としての歴史は古く遡る可能性もあろう。

内洞里双墓とともに見学した霊岩泰澗里チャラボン古墳は、栄山江中流の左岸に広がる平野の中央部に位置し、墳丘は前方後円形で前方部を南南西に向ける。墳長は現況で35.6mだが、もとは48mと推定されている。墳丘周囲には周溝が巡らされているが、段築・葺石などの外部施設は認められていない。墳丘を取り囲む円筒埴輪状土製品が約50点見つかったほか、周濠からは木製品も



図34：霊岩泰澗里チャラボン古墳

多数出土している。埋葬施設としては後円部中央に百済系とされる竪穴式石室があり、百済系の冠のほか、鋊や釘が見つかったことから木棺が使用されたとみられている。6世紀初頭～前半の築造と推測され、霊岩郡地域では4世紀から多数の古墳群が営まれているが、チャラボン古墳はこれらから距離を置いた地域に築かれている。百済と倭の双方の影響を受けた古墳である。

木浦大学校博物館から移された南海堂址と月出山祭祀遺跡出土の遺物を見学した国立羅州博物館は、潘南面徳山里古墳群の向かいにある。当地は行政区分上は羅州市であるが、その南端で霊岩郡とは接した位置にあり、上述した霊岩の古墳などと同じまとまりの地域としてみるべきである。

霊岩の南にある月出山は統一新羅の鎮山（「月奈山」。霊岩郡はもと百済月奈郡）として「小祀」を行った所で、栄山江の河口と周辺近海を眺望する天皇峰の頂上部に祭祀遺跡があり、傾斜面と岩間から各種土器片と土製馬が出土した。月出山が航海上の指標として利用されたことなどを勘案したとき、祭祀の内容は海上活動に関連していた可能性が高いとされ、土器を祭器として、土製馬を奉献物として、海神、山神、あるいは天神に遠距離航海上の安全を祈願したと推定されている（兪2018）。

月出山には龍巖寺址三層石塔、磨崖如来坐像、聖風寺址五層石塔、師子寺址、月山寺址、無為寺、月南寺址三層石塔など、山中および周辺に見るべき文化財が多数あるが、今回は現存するただ二つの寺のうち、月出山の西の山中に位置する道岬寺を視察した。新羅末に道洗国師が創建したとされる曹溪宗の寺院で（1090年以前の創建



図35：道岬寺の五重石塔と大雄宝殿（本殿）、月出山

は確実)、1473年に再建された。1977年に冥府殿と解脱門を除く全堂舎が焼失し、1981年に復元再建された。山門の近くには榎の巨木がある。朝鮮初期の建築様式をもつ解脱門は、解体修理の際に1473年の再建時のものと確認された。高麗初期の五重石塔は、百済の伝統が統一新羅を経て高麗時代まで続いたことを示すものとされる(新羅末期との説もあり)。山神閣の堂内では、韓国の土着神の絵を取り囲むように、月出山のものともみられる奇岩の絵が描かれていたのが注目された。境内の奥へ進むと弥勒殿があり、中には高麗初期から中期頃に作られ、新羅的な様相も伝える石像如来坐像が安置されていた。



図37：馬老山城集水地（右奥が入り江・河口部）

(3) 南海岸

ア) 順天・光陽

行程上あまり多くの時間を割けなかったが、木浦から南海岸を東へ移動した。1597年に築かれた順天倭城は、西に百済の剣丹山城を望む湾の奥部に位置し、埋立てが進んでいるが、海城と言ってよい立地である。倭城では最も西に位置し、小西行長が半島撤退のために最後の闘いを朝鮮・明軍と繰り広げた城である。その湾の向こうに見える光陽の馬老山城は、全羅南道のほぼ東端、標高210mの馬老山に築かれた、百済および新羅の山城である。交通路や海と近い立地にあり、百済と加耶・新羅との境界領域にあったと考えられる(百済の馬老県が新羅

で晞陽県、のち光陽県と改められる)。城内西側の入り江を望む高所からは、9世紀代の祭祀遺物(韓国でも最多の土馬285点や鉄斧)が出土しており、海上交通との関係も考えられるかもしれない。出土品を所蔵する順天大学校博物館は休館日のため見学できなかったが、一部は国立全州博物館で後百済期(892~936)のものとして展示されていた。

なお、馬老山西麓の龍江里石停遺跡では、河口東岸に4世紀後半~5世紀前半頃に集落が営まれ、現地の土器の他に百済・阿羅加耶・倭といった多様な系譜の土器が竪穴住居から出土している。多様な人々が雑居し、付近の港で交易を行っていたとみられる。また龍江里遺跡では竪穴建物から破碎された子持勾玉1点が出土しており、立地や建物配置から祭祀場の可能性がある(高田2019)。

イ) 固城

慶尚南道固城の松鶴洞古墳群は、小加耶(古自・古嗟・久嗟)を代表する大型墳で、5世紀後半~6世紀前半のものともみられる。古墳群は固城の市街地内にあり、現在は南側のみが海に面しているが、かつては北・東にも海が入り込んでいたとみられる。

以前は全長約66mの前方後円墳とも言われた松鶴洞1号墳は、発掘調査によって異なる時期に3基の円墳が連続して築造されたものと判明しており、造墓集団(の属した勢力)が加耶→百済→新羅と変遷したと考えられている。1A号墳(「後円部」)は円形の墳丘の頂上部に

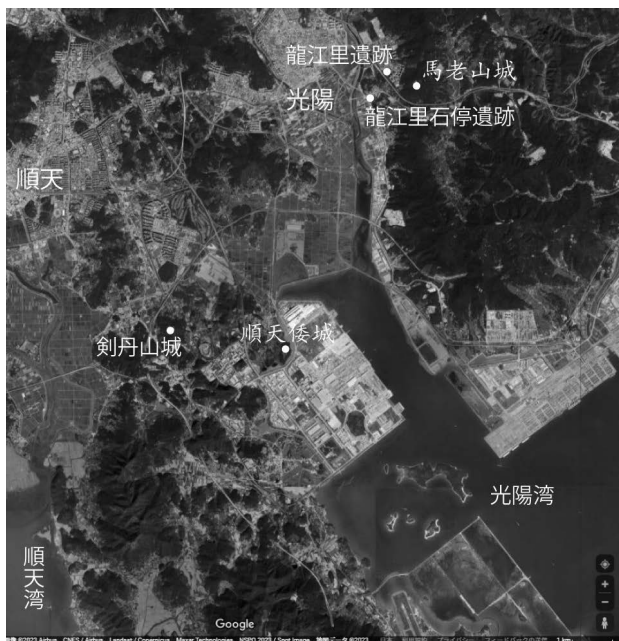


図36：順天・光陽周辺図

11基の竪穴式石槨をもつ。また1B号墳（「前方部」）は内部を赤く彩色した非加耶系の横穴式石室をもち、在地系の土器とともに新羅系や百済系、そして日本の須恵器などが副葬されていた。イモガイ製の馬具（雲珠）は沖ノ島でも出土していて、石室に赤色顔料を塗ることは韓国では珍しい。そしてこれらの中にある1C号墳は横口式の石槨をもち、最も遅れて築造されたものである。遺構と築造手法には在地的要素と外来的要素が共存しており、また出土した小加耶の在地系の高坏類は南海岸一帯に分布し、有台長頸壺・有孔広口小壺などとともに古自国の活発な対外交渉が窺われるという（沈2001）。

古墳の横にある**固城博物館**では、松鶴洞古墳群のほか、東外洞貝塚遺跡や内山里古墳群などから出土した遺物が展示されており、近隣では製鉄遺跡もみついているようだ。なお、参加者の一人が急遽体調不良となり病院に駆け込んだ際、固城博物館の説明員には大変お世話になったことを特記しておく。

ウ) 巨済島

固城の南の統営から橋で巨済島へ渡った。巨済島は韓国で済州島に次ぐ二番目の大きさを持ち、対馬までは約60kmと近い。高句麗広開土王の南下により金官加耶が大打撃を受けた後（金海の王墓からは鉄鋌が5世紀になると途端に出なくなる）、代わりに巨済島に倭人の足跡が現れるようになるという。

巨済鵝洲洞遺跡は、島の東部中央の玉浦湾に面する集落遺跡で、北部九州系の土師器系高坏や韓国西南部系統の甑や長胴甕など、搬入品が多数確認されている。それらは竪穴住居において共伴し、倭系集団と馬韓系集団が4世紀後半に「雑居」していた可能性が高い。弥生時代からこの地域には北部九州の土器が入っていたが、5世紀になると布留式など畿内系の土器になっていくという。排水溝などの竪穴住居の特徴から半島西南部、栄山江流域の人々が営んだ集落である可能性が高く、そこに倭の人々もやってきて交易・雑居が行われた状況が想定されている（高田2019）。

なお、鵝洲洞ではほかに統一新羅時代の三層石塔や県城址、支石墓や古墳群なども確認されているが（沈・李1995）、大規模な造船所とそれに伴う市街地の開発が著しく、往時を偲ぶことは難しい。

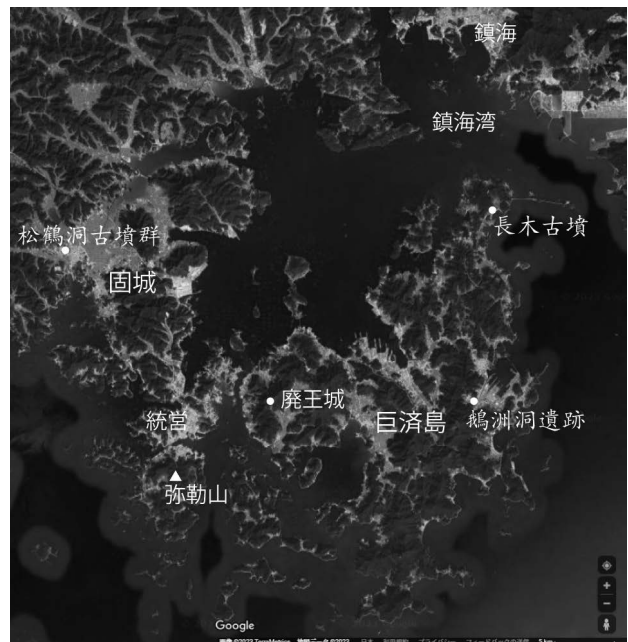


図38：固城～巨済島周辺図



図39：巨済長木古墳のある丘陵（中央）

巨済島北端部の**巨済長木古墳**は、6世紀頃に築造された横穴式石室墳で、海拔80mほどの海に突出した丘陵の頂上部に築造されており、前面には砂浜が広がり湾になっている。底径は18m、残存高さ3m程度で、下を高速道路のトンネルが走る。表面には葺き石と円筒形土器（埴輪）が施されていて、固城の松鶴洞1B号墳からも同型の埴輪が見つまっている。福岡県京都郡菟田町の番塚古墳など、北部九州の石室との共通性が指摘されているが、福井県の若狭地方の初期横穴式石室墳（向山1号墳と十善の森古墳）と対比し、5世紀からの若狭との結びつきを推測する説もある（高橋2007）。いずれにせよ、

海上交通および対外交流と関わりが指摘できる。

現在は巨済島北端部から加徳島を経て金海まで橋が架けられており、我々もそのルートで金海国際空港より帰路に就いたが、一方で巨済島の北の奥に広がる鎮海湾は安羅加耶地域（咸安や昌原〔馬山〕）に通じており、長木古墳の位置は加耶や倭の船などが往来したこの海の道を望むものであったと言えよう。

（４）小結

中国視察から一年未満で韓国の類似する文化財を見学できたことは、東アジアにおける信仰の交流を考える上で非常に刺激的な体験であった。共通性をもつ精神的基盤と直接・間接的な交流が存在し、その中で各国の宗教文化（特に観音信仰関係）が展開したことは疑いない。ただ、やはり沖ノ島祭祀遺跡と直接比較しうる存在は竹幕洞祭祀遺跡において無く、今後の類例の発見と研究の進展が待たれる。旧入り海に面した南海堂址も、日本列島における港湾の神々の鎮座地を考える上で非常に示唆的であったが、10世紀以前に遡る確証はなく、参考として留めざるをえない。

また、始めにも述べたように、韓国の西海岸・南海岸にはリアス式海岸や多島海が広がっている。今回、日中韓三国間の航海の要衝であったとみられる黒山島への視察が実現できたことは幸いだったが、その分、複雑な海岸線と無数の島が展開し、倭系古墳も存在する南海岸の半島などは十分訪れることができなかった。また、東海廟や鬱陵島など東海岸地域についても同様である。

3. 国内視察

（１）概要

国内視察は日程等の都合で能登と対馬に分かれる。能登視察の日程は2022年8月10～12日で、参加者は佐藤信、秋道智彌、笹生衛、田中史生、禹在柄、王海燕、福嶋真貴子（宗像大社文化局）、岡寺未幾、大高広和、池ノ上宏（敬称略）。対象地域は口能登と呼ばれる能登半島の付け根の石川県羽咋市から、舢倉島を含む奥能登（輪島市・珠洲市・鳳珠郡能登町・穴水町）にかけてである。日本海の海上交通において重要な地域であり、8～10世紀には海の向こうの渤海との通交もあった。古代国家に

としては、北方世界への境界としての性格も有していた地域であったとみられ、宗像との類似点は多い。

対馬視察の日程は同年11月4～6日で、参加者は溝口孝司、秋道智彌、田中史生、禹在柄、岡寺未幾、大高広和（敬称略）。対象地域は玄界灘の西に位置する対馬の全域（長崎県対馬市）で、有史以来の対外交流との関係は言うまでもなく、また古い信仰のあり方や痕跡が浦々に多く残っているとされる。対馬から沖ノ島の島影を望むことも一つのテーマである。

（２）能登視察

ア）羽咋（気多大社）

羽咋の視察については、羽咋市教育委員会の中野知幸氏に全面的に協力いただいた。羽咋市歴史民俗資料館では、寺家遺跡の調査成果と気多大社との関わりを中心に羽咋市の地形・歴史について解説を受けた。

日本海と旧邑知湯との間に発達した砂丘上にある寺家



図40：能登視察行程図



図41：寺家遺跡・気多大社周辺図（中野2022より）

遺跡は、8世紀中頃から後半に繰り返し大規模に火を焚いた大型焼土遺構が他に例を見ない特殊なもので、渤海使に関わる祭祀遺構とされてきたが、具体的には不明な点も多く、史跡整備を見据えた再検討が進められている。墨書土器等から、神饌の用意をした「宮厨」といった神社に関わる施設・組織があったことは間違いなく、神戸集落が存在した可能性も想定されている。そのような面での情報が少ない古代の宗像大社辺津宮を考える上で重要な遺跡である。10世紀の砂丘移動により古代の遺構は埋もれてしまい、遺跡を横断する自動車道の存在もあり、現地で往時の景観をイメージすることは難しいが、砂丘の移動・発達には宗像でも想定される問題である。

能登国の一宮である気多大社は、寺家遺跡の北西に位置し、創建は遅くとも8世紀に遡るが、当初から現在の位置に境内があったのか、寺家遺跡といかなる関係にあったのかは明確でない。中世には現在の位置にあったことが確認できるが、地形や地割りなどをみると、本殿とそこからまっすぐ伸びる参道のラインは、古くは内海となっていた邑知瀨方面を向いていたように思われる。現在は日本海に向かって参道が伸び、大鳥居が海岸に立てられているが、邑知瀨干拓後のものではなかろうか。また、本殿の裏側（奥側）には土塁状の遺構が確認でき、図面によればその方位も邑知瀨方面を向いているよう



図42：気多大社



図43：滝大塚古墳付近から日本海を望む

だ。なお、気多大社の取り計らいにより、拝殿での参拝後、本殿等の社殿の見学を許された。

なお、気多大社の古縁起の一つには、海の彼方から大船に乗って渡ってきた王子を舳倉の翁が育て、王子は翁とともに珠洲・間脇・穴水・能登島などを経てやがて竹ノ浜に至り、やがて亡くなりその地に気多神社が創建されたとする内容が伝えられている。示唆するところは多いが、なお検討を要する（浅香1988、岡崎2019）。

最近調査が進められているシャコデ廃寺は、古代の気多神宮寺の可能性があり、塔跡や回廊・南門遺構が検出されているが、現在出土している土器は10～11世紀のもので、創建時期や伽藍配置の確定が課題となっている。

日本海に面した高台に築かれた5世紀中頃の帆立貝式古墳、滝大塚古墳は、南西から北上してくる日本海の海流を受け止めるような高台上にあり、少し海側に出る



図44：旧福浦灯台と福浦港湾口部

と、羽咋の地理的な特徴がよく分かる素晴らしい光景が広がっていた。墳丘は削平部分も大きい、全長90mと推定され、地割りも含めるとその形状は今でもある程度確認できる。本遺産群の新原・奴山古墳群の21号古墳は同時期・同規模の帆立貝式古墳である可能性があり、当時のヤマト王権における羽咋と宗像の位置づけについての手がかりとなる。

イ) 福浦津 (福浦港)

羽咋から輪島へ向かう途中に、渤海使の帰国の際の出港地であった福浦津の推定地、福浦港 (羽咋郡志賀町) に立ち寄った。具体的な遺跡は見つかっていないが、天然の良港としての地形はよく確認できる。北前船の寄港地でもあり、金毘羅神社や石造の方位盤、国内現存最古 (明治9年建造) の木造灯台である旧福浦灯台などの文化財があった。古く慶長年間にはかがり火を焚いて航行する船の安全を守っていたらしい。

ウ) 舩倉島

舩倉島へは輪島からフェリーが出ており、通常であれば日帰りでも4時間程度の滞在が可能である。視察の前後、日本海上では低気圧の通過が続いていて、8月4日には北陸を豪雨災害が襲っていた。我々が渡航する同11日もあまり気象条件は良くなく、お盆で輪島本土の鐘崎海女の集落、海士町に帰る島民を運ぶため「着き返し」で運航されることになった。それでも、当海域の歴史を考える上で貴重な体験になると考えて乗船した。

輪島港から北に約20kmに七ツ島という無人の群島があり、そのさらに北約28kmに舩倉島が位置する。『万葉集』には、749年に能登守だった大伴家持が、「珠洲の海人」が「沖つ御神」あるいは「沖つ島」で潜水して採ってくる「鮑玉 (真珠)」を京の家にするために所望した歌が収載されており、また『今昔物語集』には、加賀国から沖の島 (「猫ノ島」) に遭難して、その島の蛇とさらに北の島のムカデとの戦いで蛇を助けた釣り人7人の話、また、能登国の「光ノ浦」 (光浦。輪島市中心部から西へ約2km) の海人が、沖の「(鬼ノ) 寝屋島」で鮑漁を行っていたが、能登守の苛烈な徴求により逃散した話が載せられている。後者は「寝屋島」のさらに彼方に「猫ノ島」があるとされていて、前者とは一致しないが、後者によれば寝屋島=七ツ島、猫ノ島=舩倉島である。



図45：七ツ島 (大島)

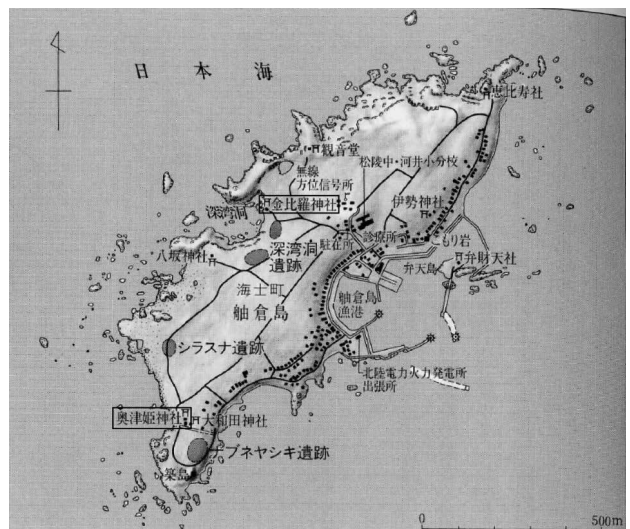


図46：舩倉島地図 (小嶋1990より)



図47：舢倉島北部、金毘羅神社から西方向を望む

七ツ島の大島からは、近世のみならず平安前期の須恵器が見つかっていて、上記の説話の裏づけとなるが、同島には井戸があり、真水も手に入ったらしい（小嶋1990）。また舢倉島からも弥生時代中期から中世にかけての遺物が見つかっており、人間の活動が確認される。近世の鐘崎海女の移住までは、輪島市中心部からみて北東の名舟の集落の人々が主に舢倉島へ渡っており、光浦からの逃散も史実とすれば、その後名舟から渡りようになったと考えられる。

なお、七ツ島は輪島市などの海岸から容易に望むことができるが、舢倉島は距離がある上に標高が12mしかなく、能登半島からの視認はまず不可能である（地形解析によれば、標高62mの大島最高部付近からは見えるらしい）。輪島市からの距離感は沖ノ島と似ているが、島の形状は全く似ていない。

舢倉島では、島民が乗船し出港の用意が調うまで特別に船外に出ることを許された。その約10分間で、島の中央東側にある港から反対（北西）側の金毘羅神社まで行き、周囲の様子を眺めて船へ戻った。洋上から島の位置が視認しやすくするために築かれたという石積みを確認できた。島の西南部で宗像の神をまつている**奥津比咩神社**への訪問は叶わず、船上から望見した。

海女と思しき女性達を含む島民を乗せた帰りの船は、恐らく豪雨の影響で流されてきた流木群が梶に挟まったようで、数十分漂流した。先に紹介した『今昔物語集』の前者の説話では、加賀国の「熊田宮」から「猫ノ島」（ここでは七ツ島か）に渡るという記述がある。「熊田宮」

は洪水で流出してしまったが、手取川の河口にあったとされている（小嶋1990）。報告者は福岡から小松空港への飛行機の中から、豪雨の影響で手取川の河口から大量の流木を含む泥水が流れ出ているのを見ており、北へ延びていく濁った海水は海流をよく示していた。我々の船に影響を与えた流木群が手取川から来たという確証はないが、『今昔物語集』の背景には、手取川河口から海流に乗れば七ツ島や舢倉島の辺りに至るという自然条件があったことを強く示唆しているのではないだろうか。

エ) 輪島市内

輪島市中心部に位置する**重蔵神社**は、恐らくかつては海に面していて、式内社**辺津比咩神社**の論社（候補）の一つである。「延喜式神名帳」では能登国に43座もの官社が記されているが、鳳至郡9座のうちに奥津比咩神社・辺津比咩神社がある。奥津比咩神社は『万葉集』でも「沖つ御神」あるいは「沖つ島」と見える舢倉島と概ね考えられている。辺津比咩神社は諸説あるが、「重蔵」は「へぐら」とも読み、その表記は中世に遡るから、やはり何らかの形で舢倉島と関係があるのだろう。

辺津比咩神社のもう一つの論社が、輪島市中心部から約11km東にある名舟の**白山神社**である。日本海に面した陰しい高台の上に鎮座し、七ツ島がよく見えた。奥津比咩神社の遥祠ともされ、「奥津姫神社」と記した石碑も建っていた。中世以来、名舟は舢倉島と深い関係を持っているが、『今昔物語集』が記すように古くは光浦の海人が舢倉島に行っていたとするならば、より光浦に近い



図48：名舟の白山神社から名舟港を見下ろす



図49：名舟の白山神社から見た名舟港と岩倉山



図50：岩倉寺境内から西に日本海を望む

重蔵神社のほうが適当なのかもしれない。ただし、重蔵神社境内がどこまで遡れるかは定かではない。

なお、奥能登の玄関口、七尾湾（北湾）に面した穴水町の穴水大宮も論社の一つとされる。これらの神社は現在いずれも宗像三女神をまつっているが、宗像との関係が古代に遡るかは不明である。

名舟から約6km東に位置するのが岩倉寺・石倉比古神社である。式内社である石倉比古神社は、船人や漁師が信仰を寄せた岩倉山（357m）の神をまつたものと考えられるが、文永年中（1264～75）に岩倉山頂から中腹に下ろしたという。舩倉島からの船中では能登半島の山々がよく見えたが、その中でも岩倉山は目を引いた。現在は元々神宮寺であったとみられる岩倉寺の境内の林中にひっそりと鎮座している（窪田2001）。岩倉寺は1300年前に海中で発見されたと伝わる千手観音像を本尊として、大漁祈願などの信仰を集めてきたという。境内には鎌倉時代の石造五重塔や室町時代の宝篋印塔などがあった。

岩倉山を下り、町野川をやや遡ったところにあるのが、網野善彦氏の著作などでも著名な上時国家である。能登に配流された平時忠の子、時国の子孫が当地に館を構えたとされ、日本海交通を利用した海運業や製塩・金融業などを行っていたことで知られる。住宅は国の重要文化財、庭園は名勝に指定されており、その規模・作りには圧倒された（下時国家の時国家住宅は公開停止中）。ただ近隣（能登半島の北岸）に特筆すべき古墳などはないようであり、古代までの主要な交通路は邑知潟を介した羽咋～七尾のルートだったのではなかろうか。

オ）珠洲市内（ほか奥能登）

能登半島北東端の最果ての地、珠洲市狼煙町の祿剛崎からは、空気が澄んでいれば佐渡が望めるが、視察当日は残念ながら見えなかった。能登半島の先端部は珠洲岬として史料に現れ、『出雲国風土記』の国引き神話では、「高志の都都（ツツ＝スス）の三埼」から引っ張ったのが島根半島東端の美保関だとされる。祿剛崎の南にある鈴ヶ岳（山伏山）はやはり海上からもよく目立つ秀麗な山容をもち、古くから航海者や漁民の目印とされたという。山頂には珠洲郡の式内社、須須神社の奥宮があり、狼煙町の氏が管理してきたとのことである。須須神社はその後、南側の現在の珠洲市三崎町寺家に遷り、信仰を集めてきた。宝物殿には神像などが所蔵されているが、感染症の影響で長期休館中であった。



図51：祿剛崎から見た鈴ヶ岳



図52：見附島と富山・新潟両県の山々

なお、鈴ヶ岳では船のために狼煙が焚かれ、珠洲（ス・鈴）は烽（ススミ）に由来するとされるが、烽を「ススミ」と読んだ事例は『日本書紀』（北野本）の訓にしがなく、8～9世紀頃には「トブヒ」と読んだ事例しか確認できていないため、当地に古代から烽（狼煙）が存在したかは慎重な検討が必要である。根本的に灯台と烽火では機能が異なる。

珠洲市南部の鵜飼海岸に位置する見附島は、別名軍艦島とも呼ばれる特異な景観を誇っており、干潮時には近くまで歩いて行くことができるようだ。海の向こうには富山・新潟県境あたりの山々がそびえ、海岸には空海や加志波良比古神（珠洲郡の式内社）にまつわる伝承をもつ見附神社があり、市杵島姫神（弁才天）がまつられていた。

なお、『海東諸国紀』の「海東諸国総図」では、丹後国から能登国にかけての北の海域に「見附島」という島が描かれており、同名のこの島をあてる説もあるが、位置関係や島の規模から言って無理がある。

なお、舳倉島に滞在するはずだった空き時間には、上述の穴水大宮のほか、南東部に位置する能登町の真脇遺跡縄文館を見学した。イルカ漁や環状木柱列で有名な縄文遺跡で、縄文時代からの能登と海との深いつながりが窺われた。

（3）対馬視察

対馬については、古代の推定郡域をもとに便宜4地域に分けて叙述する。



図53：対馬視察行程図

ア) 上県郡東側沿岸

千尋藻（ちろも）集落にある六之御前神社は、彦火々出見尊と六女神をまつるとされ、韓国・竹幕洞の水聖堂の「ケヤン婆さん」と8人の娘を連想して立ち寄ったが、特にめばしい情報は得られなかった。

佐賀は室町期に宗氏が本拠を構えた浦で、その後厳原に移転した。門前に宗氏居館があったとされる円通寺には、貞茂以下3代とされる墓地があり、中国と朝鮮の様式が混淆した異形の梵鐘をもつ。

その佐賀で最も注目すべきは、神功皇后と宗像三女神をまつる和多都美神社で、近世までは宗像八幡宮と言い、対馬の宗像信仰のなかで最も由緒がある。既に文永4年（1267）の文書に「佐賀宗形官司」と見える。同社は入り海が広がっていた低地の中にあり、現在の社殿が建てられるときに盛り土して整地したという（荒木2017）。興味深いことに、貞享2年（1685）成立の『対州



図54：円通寺の梵鐘



図56：胡籙神社鳥居・参道



図55：佐賀の和多都美神社（宗像八幡宮）



図57：胡籙神社の北側から鳥居を望む

神社誌』(鈴木1972)の佐賀村の部分では、「金御崎」(＝鐘崎)の神と、宗像同様に筑前から勧請したという「天神」の神も挙げられており、勧請の経緯の解明が今後の課題であろう。ただ誠に残念なことに、現在の和多都美神社の社地には「宗像」を窺わせるものは何一つなかった。

琴(きん) 集落の胡籙御子神社から山道を歩き東海岸に出ると、崖の上に琴崎の胡籙神社があり、鳥居と石段が玄界灘へと続いている。いずれも式内社であるが、海神(少童命)と阿曇氏の祖神とされる磯良をまつっており、中近世には琴崎大明神と見える。例祭日は旧暦3月3日の大潮のときで、海底に岩礁が現れ海神が姿を見せるといい、その日のみは不入の聖地である琴崎も人々に開放されるようだ。

舟志浦の北の入江の奥に、大增の宗像神社が鎮座する。『対州神社誌』によれば、昔、佐賀村(宗像八幡宮)

から勧請されたという。経緯は不明だが、今も「宗像」を称する恐らく対馬唯一の神社である。

対馬の最北端部についても便宜ここで記述する。豊集落の湾に面した高台に、①島大国魂神社(式内社)・②那祖師神社(式内社)・③若宮神社の三者が合祀されている。①はもと豊の北東約1.5km沖に位置する椎根島(沖椎根島)の白水山に鎮座し、中近世には島頭(しまのこうべ)大明神と称していた。椎根島は干潮時に陸繋島になるが人々の立入りを禁じる聖地で、そこへ至る浜も通行が許されない「不通(とおらず)浜」の名をもち、③はそこに鎮座していたらしい。②は元々の位置に鎮座している可能性があるが、上記の経緯を踏まえると、その地は椎根島への遥拝所としての性格が想定できる。境内周辺の高所からは湾の入口付近に位置する椎根島(沖椎根島・地椎根島)をよく望むことができ、先述したよう

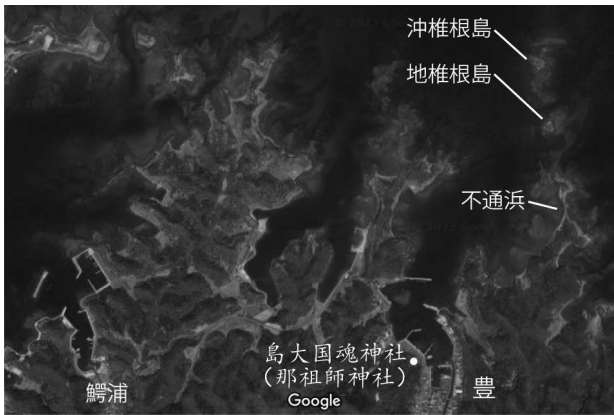


図58：豊・鰐浦周辺図



図60：千俵蒔山展望台からの釜山（望遠）

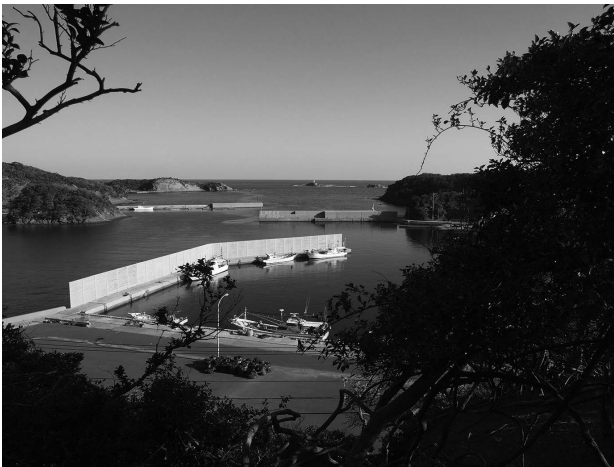


図59：那祖師神社横の高台から椎根島を望む



図61：千俵蒔山から見た佐護湾（中央が天道山〔雄嶽〕）

に中国の舟山列島、岱山の燕窩山を遥拝する小祠のことが思い出された。文化10年（1813）4月に豊村を測量した伊能忠敬は、椿ヶ浦の雑木山中にある「島頭神社」は社も鳥居もなく、領主が祈願する際は海辺に墨を敷き神楽を行っていたと記している。

なお、豊の西隣の鰐浦は、朝鮮通信使の寄港地（釜山への冬場の渡航口）であり、対馬藩が設けた関所の跡地などに高床の小屋群が建ち並んでいた。

イ) 上県郡西側沿岸

佐須奈湾と佐護湾との間に位置する標高287mの千俵蒔山（井口嶽）の展望台から周囲を遠望した。天候に恵まれ、50～60km先の釜山や巨済島など、韓国が本当によく見えた。古代には烽があったという推定も、朝鮮半島から出航した舟を視認でき、その名の通り山頂部には比較的平場が多いここならば領ける。

対馬では珍しい水田地帯をもつ佐護には、古い信仰の

形態を残すとみられる神社が二つある。一つは湾の西側、天道山（174m）の麓にある**天神多久頭魂**（あめのかみたくずだま）**神社**で、「延喜式神名帳」にある天神多久頭多麻命神社と考えられ、中世に対馬独自の天道信仰と習合したとされている。境内の両脇に石積みの塔2基があり、中央には社殿はなく石積みの祭壇がある。祭壇の背後は山塊だが天道山ではなく、右が天道山である。祭壇に向かって左側（南側）にある鳥居が北向きに天道山を向いている。『対州神社誌』の記述を見る限り、山の比定は間違っていないようで、その意味するところは難しい。

同書には「天道大菩薩」とあり、山には雄嶽・雌嶽の二つの峰があって、一町半離れた北が雌嶽とする。高さ100間の雄嶽の頂上に天道菩薩の住居があり、8分目の所に礫石が数百あると記されているが、踏査は行ってい



図62：天神多久頭魂神社の祭壇



図64：神御魂神社の社殿の周囲に広がる石敷



図63：天神多久頭魂神社（南側から。奥が天道山）



図65：海神社社殿

ない。

もう一つは、佐護川の対岸の尾根の突端部に位置する**神御魂（かみむすび）神社**で、『対州神社誌』では女房神とされていた。北の佐護には女神（カミムスビ）、南の豆殿には男神（タカミムスビ）、両地域に子神（タクズダマ）がまつられるというのが対馬における天道信仰の構造である。

『対州神社誌』によれば、同社には社殿や神像があり、祭礼は観音の住持が勤めていたという。神体の木像は永享12年（1440）の像底墨書銘に「天道女躰宮御神躰」と記され、胸に日輪を抱く女神の姿をしているらしく、神話にいう日光に感精した処女との関係が指摘されている。『対州神社誌』の豆殿村の記述によれば、照日某という長者の娘が日輪の光に感じて懐妊し、出産した男児が天道法師である。

現地では簡素な社殿を石垣が囲い、その外側はかなり広い範囲にさらに川原石が敷き並べられていた。また裏手にはかなり大きな井戸もあった。これらが構築された時期は不明だが、聖地としての伝統を感じさせるものだった。

木坂集落の北、伊豆山の中腹に鎮座する海神（かいじん）神社は、古くは八幡宮・喜佐賀八幡宮・上郡正八幡宮などとみえ、巖原の下津八幡宮に対して上津八幡宮の称もあり対馬国一宮とされた。「延喜式神名帳」の上県郡の和多都美神社に比定する説も強いが、次に述べる仁位の和多都美神社をあて、海神社は同じ式内社の和多都美御子神社とする説に従うべきか。史料から永暦元年（1160）以前に八幡宮があったことは確実である。明治3年に和多都美神社、同4年に海神社と改称された。

祭神は応神天皇・神功皇后のほか、豊玉媛命・彦火火



図66：仁位の和多都美神社前面の潟地（奥が神社）

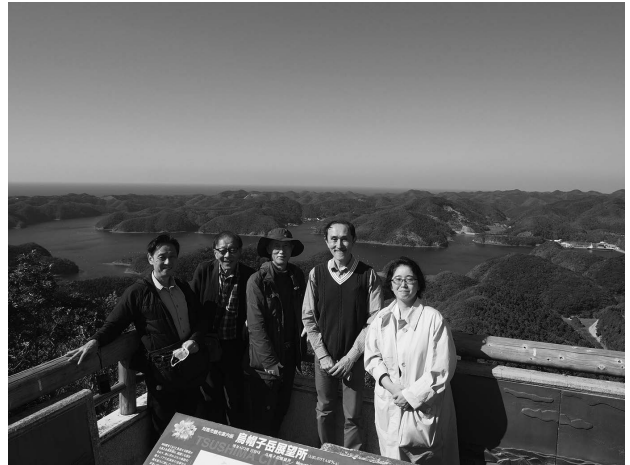


図68：鳥帽子岳展望所から西側を望む



図67：磯良恵比須と三柱鳥居の結界

出見尊・鵜飼草葺不合命とされ、八幡宮と海神宮を合わせたものである。『対州神社誌』にみえる神体五体のうちの金像の一体が8世紀の新羅仏とされる銅造如来立像（重要文化財）で、その他多くの宝物をもつが、宝物館は閉鎖中であつた。

境内前面の御前浜には、藻を貯える藻小屋（舟屋）のほか、ヤクマ塔と呼ばれる石積みの塔があり、これは天道（日の神）信仰とも関わり、無病息災や大漁を祈るヤクマ祭の際に浜石が積み上げられるというが、かなり小ぶりのものしか見当たらなかった。

仁位は弥生時代の対馬の中心部とされ、浅茅湾の北の奥部にあたる仁位浜の外浦の「わたづみ」浦に**和多都美神社**が鎮座している。海神の豊玉彦命がいた海宮の跡とされ、上述のように「延喜式神名帳」上県郡の和多都美

神社に該当するか（近世以降は下県郡域なので注意が必要）。祭神は彦火火出見尊・豊玉媛・鵜茅葺不合尊とされる。

同社は中世も一貫して「わたづみ」と号し、「渡海宮」とも称された。文永4年（1267）2月20日の講師某注進状写（八幡宮文書）には、上郡の八幡本宮（海神神社）、佐賀宗形宮（宗像八幡宮）とともに和多津美宮が見え、当社に比定されている。

満潮の際には社殿の近くまで海水が満ちるといふ宮前の潟地には、海中にかけて鳥居が建ち並ぶほか、鱗状を呈した自然の亀裂をもつ石（磐座と称されている）があり、蛇体であった安曇磯良に因み磯良恵比須と呼ばれている。その周囲は京都・太秦の木嶋坐天照御魂神社（木嶋神社、蚕の社）でも見られる三柱鳥居の方式で結界されていた（同じ結界は本殿近くの亀甲石にも施されていた）。また、元来禁足地だった境内奥の社叢（撮影禁止）には、豊玉姫の陵墓とする磐座があり、また井戸も残されていた。これらの立地条件を勘案するとやはり古くからの海に関わる神社であることは疑いないだろう。

なお、同社の南約1.6kmにある**鳥帽子岳展望所**からは、浅茅湾を中心に対馬の地形をよく把握できた。

ウ) 下県郡北半

南北に長大な対馬では、その中部において船を東西に通すことが試みられた。対馬空港の東に位置する、1672年開削の大船越、1900年開削の久須保水道（万関瀬戸）がそれであるが、より古くはもう少し北の、玄界灘側の



図69：小船越の切通し



図71：阿麻氏留神社参道から小船越湾方向を望む



図70：西漕手浦

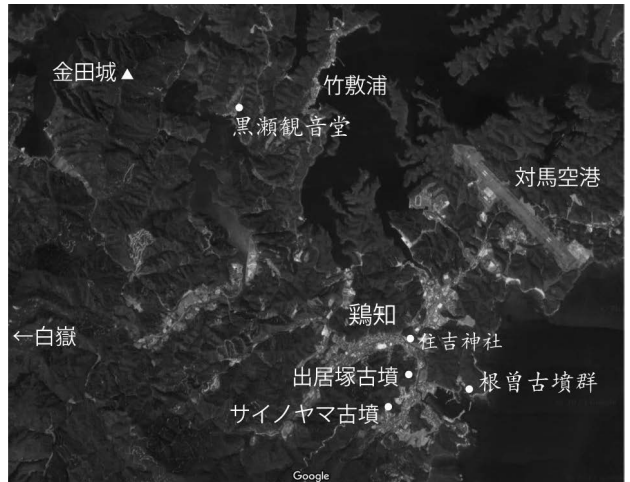


図72：鶏知周辺図

小船越湾（浦）から浅茅湾側の**西漕手浦**（深浦）に出る**小船越**のルートで「船越」が行われていたらしい（「漕手」は「越出」とも）。ただ、地名として見られるのは中世からで、古代については確証がない。現地の地形を見るに、峠付近ではそう古くない時代に切通しが行われているように思われ、小船はともかく遣唐使船のような大型構造船を引いて越えるのは現実的ではない。現地の解説板によると、小舟は船越を行い、大船は積荷を積み替えて船を乗り換えたと想定しているようだが、大船と言っても準構造船の大型のものだろう。北路で中国に向かっていた7世紀段階の遣唐使船も、『万葉集』にみえる遣新羅使船も、その船はまだ構造船ではなく準構造船であったとすれば、船越が行われた可能性はあるだろう。

そして小船越のルートに面して鎮座するのが**阿麻氏留神社**である。「延喜式神名帳」の下県郡13座の一つで、

『対州神社誌』では「三所権現」（神体弥陀三体）とあり、その中心が照日権現という（明治維新後に阿麻氏留神社と改称）。この照日権現が天日神命（天照魂命）とされ、『先代旧事本紀』（天神本紀）で天日神命が対馬県主等の祖とされているように、対馬の豪族による古い日神信仰の存在が想定される。『古事記』における津島県直の祖神も天菩比命（天穗日命）で、日神である。

こうした古代の対馬の信仰を象徴するような神社が小船越にあることは、ここの交通が古く遡ることを示唆している可能性がある。阿麻氏留神社から北に100mほどの丘の上にある**梅林寺**は、欽明朝に百濟から仏像と経文を献上した使いが建立した堂宇を起源とする、日本最初の仏跡と称している。もちろん鵜呑みにはできないが、この地の歴史的な性格が反映された伝承である可能性はある。

対馬の中央部東海岸、玄界灘に開く**鶏知**（けち）浦に



図73：黒瀬観音堂の仏像（左が銅造如来坐像）

面しては、5～6世紀の前方後円墳と円墳からなる**根曾古墳群**や、4世紀後半の前方後方墳の出居塚古墳、7世紀前半の石で段築された方墳であるサイノヤマ古墳などが集中して分布している。根曾古墳群の1・2号墳は、全長約30m台の積石塚の前方後円墳で、前方後円墳の少ない対馬においては重要視されている。

また鶏知には式内社の論社である**住吉神社**もあり、現在はやや内陸に位置しているが、鶏知浦に注ぐ鶏知川に面しており、海上交通に関わるとみてよい。祭神は住吉神ではなく豊玉姫などの海神で、『対州神社誌』には「神体虚空蔵木像 脇ニ宗像金像有」と記されるように、宗像神もまつられていたらしい。

式内住吉神社のもう一つの論社は、小船越の東に位置する鴨居瀬の住吉神社で、鶏知の住吉神社は鴨居瀬から勧請されたと伝承されている。鴨居瀬の方は訪問できなかったが、先述のように小船越の交通上の重要性を認めるならば、古代に遡る蓋然性はある。一方、鶏知の周辺には古墳が分布し、また7世紀後半には鶏知の北西に古代山城の金田城が築かれる。どちらが式内社かはさておき、どちらの住吉神社も古代に遡る可能性を考えたい。鶏知が古代の対馬において重要な地域だったことは疑いない。船越をするのではなく船を乗り換えるのならば、鶏知でも十分容易に玄界灘側から浅茅湾に出られる。

金田城は行程に入れなかったが、その東の湾（洲藻浦）の対岸に**黒瀬観音堂**があり、8世紀の新羅仏（銅造如来坐像。重要文化財）と14世紀の高麗仏（銅造菩薩坐像）をまつっている。前者は火によって損傷しているが優秀



図74：曲集落共同墓地の供養塔

な作で、如来像でありながら「女神」として信仰されてきたらしい。航海に関係する観音信仰との関係が想起されたが、請来の年代は不明で議論することが難しい。

エ) 下県郡南半

現在の対馬の中心部である**厳原**では、視察延期の影響で2022年4月に開館した**対馬博物館**を見学できた。対馬の歴史について総合的に展示しており、朝鮮通信使についての特別展も観覧した。

古代に国府が置かれた厳原の中心部の、清水山の東麓に位置する**八幡宮神社**は、木坂の上津八幡宮（海神神社）から勧請されたといい、島主の崇敬を受け、府内八幡宮、下津八幡宮などと称された。近世から明治初期までは下県郡の式内社**和多都美神社**にも比定されていたが、八幡宮としての歴史を強調し現在に至っている。

厳原の北東、阿須湾の北東の奥部に、鐘崎海女が定住した**曲集落**がある。伝説では寛元4年（1246）、宗重尚の入国に従って筑前鐘崎から来たと伝える。曲に定着する以前の海人船は、対馬の浦々に漂泊しいずれの海で網を引いてもよいとされ、その特権の代わりに京進の公事のほか時々の肴の用意を負担した。また宗氏が兵を九州に動かす際にも海人船団が活躍した。その後漁業権が制限されるようになり、近世中期には曲浦に定住したとされる。その後も鯨組の羽差（刃刺）として活躍し、俵物とする鮑などの磯物を採って生業とし、農業は行わなかった。

集落の上手の共同墓地の中央部に、寛政元年（1789）



図75：尾浦トンネルの巖原側入口付近から見た沖ノ島



図78：多久頭魂神社社殿東側の祠（石積み）



図76：裏八丁角（鳥居は平成29年奉納）



図77：表八丁角

建立で「海人先祖代々為菩提」と記す供養塔があり、側面に「金崎口（自り？）御附渡先祖」の文字が確認できた。ただ、集落内には山住神社があるだけで、宗像関係

の神は確認できなかった。

対馬の南端の龍良山および豆殿（つつ）に向かう車中、県道24号線尾浦トンネルの巖原側入口付近で、念願の沖ノ島を望むことができた。沖ノ島は東の方向に約78kmの距離で、正三角形に近い形状に見えた。視察の三日間の内、山上の展望台などからも沖ノ島は見えるはずだったが、やはり距離があるため十分な高さとかかなり澄んだ空気がないと見えないようだ。

豆殿の北東、龍良山の北麓には裏八丁角（郭）、南麓には表八丁角と呼ばれる聖地があり、前者が天道法師の母、後者が天道法師の墓所とされている。強烈なタブーの存在によって龍良山は照葉樹原始林として国の天然記念物に指定されており、どちらも異様な空気感が漂っている気がした。祭壇・石積みの構築年代などは明らかにしえないが、『対州神社誌』には天道法師の修行の地、入定の地などとして「八町角」の存在が記されており、やや位置づけは異なるが近世に遡る聖地であることは間違いない。『津島紀事』（1809年成立）は表八丁郭をタクズダマの磐境、裏八丁郭をタカミムスビの本社としている。

赤米神事や亀卜の習俗も残る豆殿集落に鎮座する多久頭魂神社は、式内社「多久頭神社」にあてられる。文永4年（1267）の文書にみえる「殿豆御寺」（豆殿観音）は同社の神宮寺と考えられているが、同社にはもともと社殿がなく、龍良山（天道山）の山中に神籬を卜定して祀っていたとされ、明治初年に旧観音堂が現在地に移され社殿となった。その社殿の東側にはクスノキの巨樹

と、龍良山の方向を向いた祠（五王神社）があり、祠の下には石積み基壇と丸石の集積があった。その後方は不入坪（イラヌツボ）と呼ばれる禁足地が広がることから、元々の龍良山に対する遥拝の形態を残す遺構のように思われた。

また同社境内には、式内社「高御魂神社」にあたる神御魂（たかみむすび）神社も鎮座するが、もとは神田川の河口に近い海辺の森（豆殿中学校付近）に鎮座していたのを、昭和32年に移されたものである。『対州神社誌』には「高雄むすぶの神」とあり、神体の石はかつて醜豆崎（豆殿崎）に漂流してきた「うつお船」（丸木舟）に船を寄せて見たところ、奇怪に光る霊石であったのでまつたという。

天道信仰も興味深いのが、8世紀以前には遡らないと考えられ、古代神話では造化の三神とされているカミムスビとタカミムスビ、そしてそれと対馬ト部との関係などを検討していく必要があろう。その意味で、『日本書紀』顕宗天皇3年4月庚申条に、任那に遣わされた阿閉臣事代が日神から、磐余の田を我が祖高皇産霊（タカミムスビ）に献じるよう託宣を受け、その通り田14町が献じられ、対馬下県直にまつらせたという記事は重要で（堀江2012）、更なる検討が必要である。

境内の外れにあった観音堂は、昭和になって再建されたものらしいが、掲げられている扁額は古そうであった。元禄十年（1697）の年紀をもつ「南無観世音菩薩」の扁額のほか、年紀のない「瑠璃堂」「普陀山」「毘沙門」と大書された三つの扁額があり、その意味するところは定かではないが、近世の豆殿観音に関係するものであろう。

対馬南西端の豆殿崎からは、壱岐や五島列島の宇久島と思しき島を望むことができた。

厳原から北西に向かい西海岸に出た地が小茂田浜（佐須浦）で、文永11年（1274）の元寇の際に守護代の宗助国が上陸した元軍と戦って全滅した。当時は湾が入り込んでいて、戦場はもっと川を遡った地（金田小学校の付近）であったともされるが、その少し手前の丘陵上に、3基の積石塚からなる矢立山古墳群がある。1・2号墳はともに九州でも例が少ない積石方形段築墳で、1号墳は東西11.6m、南北10.5m、高さ2.4mの3段築成で無袖式の横穴式石室をもち、7世紀前半から終末までとされ



図79：矢立山古墳1号墳

る。2号墳は東西8.8m、南北10.5m、高さ2.5m以上の3段築成で、T字形を呈する横穴式石室をもち、7世紀中葉から終末に位置づけられている。3号墳は墳丘に石を積み上げた東西4.2m、南北6.6mの長方形積石塚で、未盗掘のまま保存されている。ヤマト王権でも最新かつ格式の高い墓制が採用されており、7世紀後半の国際情勢の中での対馬の位置を考える上でも重要であるし、674年に見つかった近隣の銀山との関係も考える必要がある。今回の視察では銀山関係の場所（式内社の銀山神社・銀山上神社など）の見学はできなかった。

（4）小結

北陸の能登、朝鮮半島に近接する玄界灘の対馬という2地域への国内視察は、コロナ禍の中で実施され、閉館・休館している施設が多いなどの一部制約もあったが、非常に得るものの多い視察となったと感じている。特に能登では曲がりなりにも舢倉島まで往復できたこと、対馬では南端から北端まで島内をほぼ一周し、数々の聖地とされてきた場所を見学できたこと、そして宗像から見て“横”からの沖ノ島の島影を望むことができたことが、個人的に特筆すべき体験だった。

これらの地域は僻地であるが故に古い信仰の形がよく保存されていると考えられるが、その反面、調査研究の手が十分に行き届いているとも言い難い。また能登や対馬は全国的に見ても式内社が特に多い地域でもあるが、江戸時代以来の治定・考証に問題があることも多く、また現在では一切痕跡や手がかりのない式内社もあり、古

代の信仰に迫る上での障壁となっている。上記の課題は簡単に解決できることではないが、一つ一つ解決していくしかなく、今後の調査研究の進展に期待したいし、我々も少しでも貢献できればと考えている。

おわりに

各視察の概要については以上の通りである。報告者の力量不足により平板な記述が多くなってしまい申し訳ないが、これらの体験を深いレベルで有機的に結びつけ、検証していくことは、本研究事業のみならず本遺産群の調査研究を行っていく上で非常に有意義なものになると信じている。

視察日程・行程の調整にあたっては、折角だからと視察先を詰め込みすぎた感があり、参加者の方々には負担をかけてしまった。それでも行くべくして行けなかった所も多数あり、それらは今後の課題、あるいは研究上の伸びしろとして残しておくこととして、拙い視察報告としたい。

参考文献

(論文等)

浅香山木1988「古代の能登国気多神社とその縁起」『寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター
荒木和憲2017『対馬宗氏の中世史』吉川弘文館
今石みぎわ2006「つばき・おがたま・たぶー黒山島探訪ノート」『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』5
岡崎道子2019「気多社嶋廻縁起の世界」石川県立歴史博物館編『いしかわの神々』
窪田涼子2001「奥能登岩倉寺の復興と地域社会」神奈川大学日本常民研究所奥能登調査研究会編『奥能登と時国家』研究編2
小嶋芳孝1990「舩倉島と能登」網野善彦編『日本海と北国文化』海と列島文化1、小学館
西都原考古博物館2018『海山に宿る神々～日韓の祭祀遺跡～』
佐久間博正1987「泉州南安県九日山の祈風」『駒沢史学』36
朱剛玄著・黒澤真爾訳2003『黄金の海・イシモチの海』法政大学出版局
秦弘燮1998『韓国仏教美術』文藝出版社(韓国)
沈奉謹2001「加耶地域と国際交流一固城松鶴洞古墳群」『東アジアの古代文化』109
沈奉謹・李東注1995『巨済市文化遺蹟精密地表調査報告書』東亜大学校博物館

須江隆1998「福建莆田の方氏と祥応廟」宋代史研究会編『宋代社会のネットワーク』汲古書院

鈴木棠三1972『対馬の神道』三一書房(『対州神社誌』等は同書による)

高田貫太2012「栄山江流域における前方後円墳築造の歴史的背景」『古墳時代の考古学7 内外の交流と時代の潮流』同成社

高田貫太2019「古墳時代の日朝交渉における海の道」『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群特別研究事業 第1回国際検討会「古代東アジアの航海と宗像・沖ノ島」報告書

高橋克壽2007「韓国巨済長木古墳の石室と若狭の初期横穴式石室」和田晴吾編『渡来遺物からみた古代日韓交流の考古学的研究』

田中史生2011「海上のクロスロード」鈴木靖民・荒井秀規編『古代東アジアの道路と交通』勉誠出版

田中史生2020「福建省莆田市の「祥応廟記」と祥応廟」『日本歴史』895

陳怡安2022「李通玄のpotalaka観及び梵語の理解度」『印度學佛教學研究』70-2

中野知幸2022「古代能登の境界性から見た寺家遺跡と気多神社」『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群特別研究事業第3回国際検討会「古代東アジアの海洋信仰と宗像・沖ノ島」報告書

裴基同・朴晟喜2001『唐城 2次発掘調査報告書』漢陽大学校博物館・華城郡

浜田耕策2012「新羅の東・西津と交易体制」『史淵』149

堀江潔2012「継体朝の対外交渉と壱岐島」細井浩志編『古代壱岐島の世界』高志書院

木浦大学校島嶼文化研究所・新安郡2000『黒山島上羅山城研究』森平雅彦2013「文献と現地の照合による高麗一宋航路の復元」

『中近世の朝鮮半島と海域交流』汲古書院

兪炳夏2018「古代の海洋活動と祭祀遺跡」『祭祀遺跡の研究は何を明らかにしたか』西都原考古博物館講演会レジュメ(2018年10月27日)

(案内書等)

『中国の歴史散歩』3、山川出版社、1996

森浩一監修、東潮・田中俊明編著『韓国の古代遺跡 2 百済・伽耶篇』中央公論社、1989

井上秀雄・江坂輝彌・山口修・李進熙編『韓国の歴史散歩』山川出版社、1991

『歴史探訪 韓国の文化遺産』上、山川出版社、2016

『石川県の歴史散歩』山川出版社、2010

『長崎県の歴史散歩』山川出版社、2005

『長崎県の地名』日本歴史地名大系、平凡社、2001

「対馬神社ガイドブック」「対馬歴史観光ガイドブック」一般社団法人対馬観光物産協会



特別研究事業総括検討会（令和4年12月17・18日）



特別研究事業成果報告会（令和5年3月19日）

第2章 特別研究事業

航海と海域ネットワークから見た海の世界遺産

秋道 智彌 山梨県立富士山世界遺産センター

要旨：東アジア海域では、漁撈・交易・朝貢・移住・侵略・亡命など、海を越える多様な活動が歴史的に展開した。本海域の海流と潮流、季節による卓越風の風向、台風の来襲、暗礁の位置などの自然要因と、船舶技術要因(船底・水密構造・船材の接合法)が航海の成否を大きく規定した。航海では、天体・生物現象、山や島嶼の位置が航路の目安とされ、大小多種類の船(漁船・家船・遣使船・輸送船・軍船・商船)が用いられた。女神である船霊への土俗的信仰を背景とする航海祭祀は、宗像三女神、住吉神、綿津見神などと結びついた。とりわけ宗像の神がみは国家祭祀に昇華され、沖ノ島での奉獻品に結実した。海人の関与した貝類交易では、アワビ(貢納品)やイモガイ・ゴホウラ製貝輪(威信財)などが王権・首長権を支える媒体となった。海を介在する世界遺産では、島嶼間ネットワークを基盤とする広域・分散型の海域モデルが有効である。

キーワード：航海と船、船霊、航海安全祭祀、貝の道、島嶼間ネットワーク、海の世界遺産

はじめに

中国と朝鮮半島を含む大陸沿岸、黄海・東シナ海・対馬海峡域から日本海に至る東アジア海域では、洪積世の最終氷期を経て、海面上昇による島嶼化が方々で起こった。その線上で、船と航海を通じたヒト・モノ・情報の新たな交流が実現した。

人類の海洋世界における植民の歴史では、東南アジアからオセアニアへのオーストロネシア民族の拡散(Bellwood 1979;秋道・印東編 2020)がもっとも顕著な例である。地中海では、エーゲ海における航海民の活動(Hall 1970)、極彩色の壁画に描かれた航海と船(Doumas 1992)やキプロス島を中心とするフェニキア人の拡散(Simmons 2014)が顕著な例である。インド洋では、インドス河下流域のグジャラートからアラビア海・ペルシャ湾への移動(長田 2013)、エリユトラ海案内記に記された紅海・インド洋・ベンガル湾・マレー半島まで広域の航海活動(薮 2016)(AD40-70)などが著名である。

東アジアでは、古代の日本海文明交流への視点が提起されており(小林 2006)、最近では旧石器時代以降の海洋進出と拡散・交流が注目されつつある(海部・佐藤編 2022)。

本論は、東アジア海域世界における航海と海域ネットワークの問題群から沖ノ島の世界遺産について考察することをねらいとしている。以下、1. 東アジア海域の航

海と船、2. 航海安全祭祀と海の信仰、3. 海産資源と海域ネットワークに分けて論じ、最後に4. 海域ネットワークと世界遺産を提案する。

1. 東アジア海域の航海と船

沖ノ島の宗像大社沖津宮・小屋島・御門柱・天狗岩(4)、大島の宗像大社中津宮・宗像大社沖津宮遥拝所(2)、宗像大社辺津宮(1)、新原・奴山古墳群(1)の8構成資産からなる「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群は、平成29(2017)年7月9日、世界遺産として登録された(括弧内の数字は資産数)。

4世紀後半から9世紀末までのおよそ500年間、沖ノ島における祭祀は日本の対外交流を支える航海安全を中核とした(小田 1988)。沖ノ島の1~22号遺跡に残された祭祀遺構は岩上祭祀から岩陰祭祀、半岩陰祭祀、半露天祭祀、露天祭祀へと変遷してきた(小田 2011, 2012, 2013;「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議 2011, 2012a, 2012b, 2013;「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会 2019, 2020, 2022)。

本節では、これまでの成果を踏まえ(永留 1997; 秋道 2012; 亀田 2019; 白石 2019; 重藤 2019;「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会 2020)、東アジア海域における航海と船について多角的に検討する。

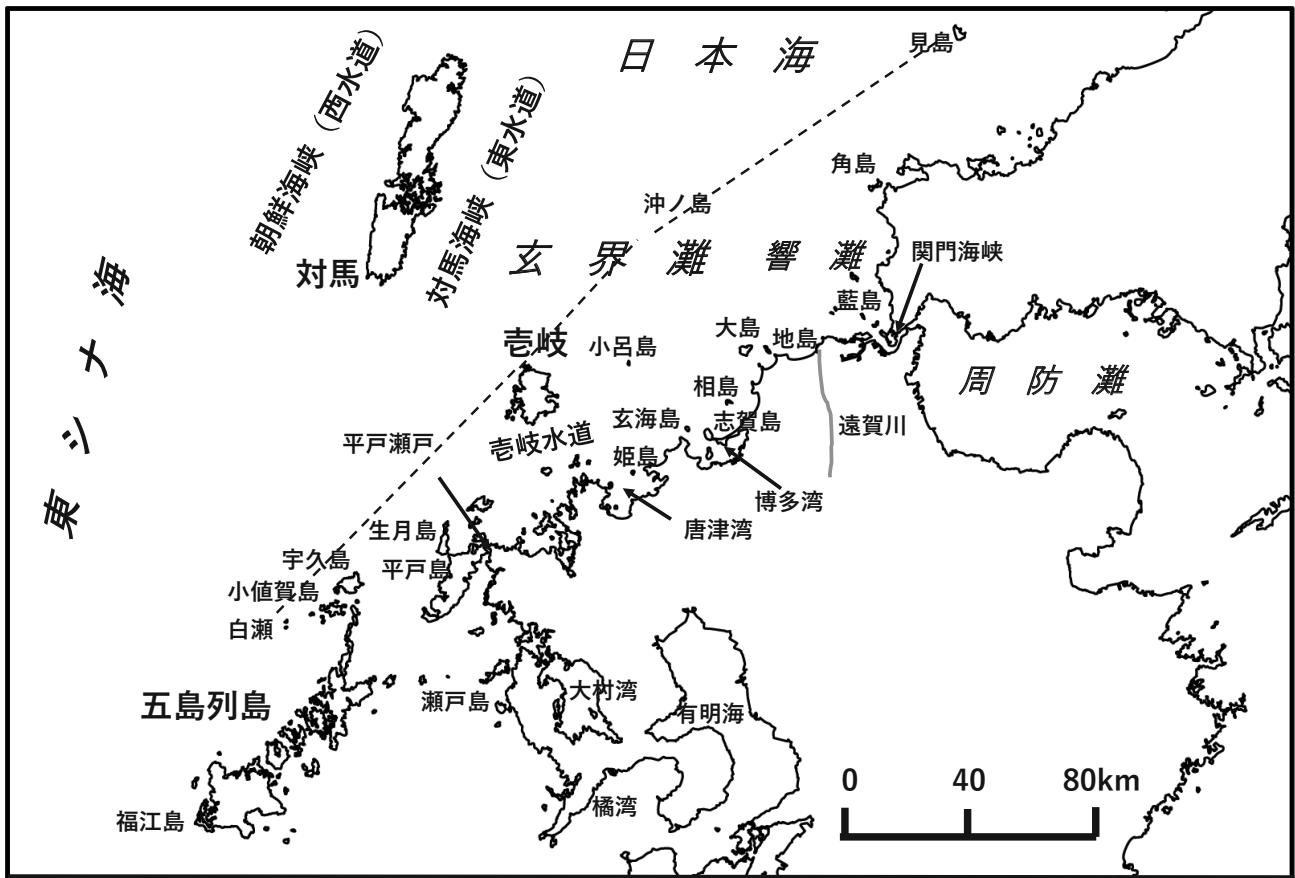


図1：玄界灘と周辺

山口県最北端の見島（萩市）、福岡県最北端の沖ノ島（宗像市）、長崎県の壱岐島北西端、同県・北五島の小値賀島西沖約20kmにある白瀬の間に基線が設定されており、これより南東側は海洋法上日本の内水（内海）である。

（1）海流・潮流・風

ア）対馬海峡

対馬海峡は朝鮮半島と北九州の間にあり、対馬の東側を対馬海峡東水道、西側を対馬海峡西水道と称する（図1）。南北の陸域から張り出す大陸棚が海底を形成し、水深は120m以浅である（桂 1985）。玄界灘は、北部九州の海岸部から、沖合の大島、地島、沖ノ島、小呂島、壱岐、対馬までの海域を含む。

玄界灘を南西から北東へと流れる対馬暖流は、黒潮本流とくらべて流量は10分の1、流速も4分の1で（0.5～1.0 knot）、その勢力は3月に極小、12月に極大となる。対馬暖流は、北緯40度以北で冷却され、反転して沿海州沿いに南下するリマン寒流となる。

対馬海峡域では、潮流の動態に特徴がある。「上げ潮」は北東から南西へ、「下げ潮」は南西から北東に流れる。前者は低潮後1～2時間から高潮後1～2時間まで、後者は高潮後1～2時間から低潮後1～2時間までに流れ

る。最強流速は北東流の場合は高潮後3～4時間で、南西流の場合も低潮後3～4時間で出現する（井上・三井田・俵 1985: 922-923）。北東流（下げ潮）の最強時流速は、場所にもよるが1.4～3.0 knot/時、南西流（上げ潮）で0.7～1.7 knot/時である。潮流の流速は対馬暖流の影響を受け、下げ潮が上げ潮より速い（図2）。また、海域により卓越する潮流の流速や方向は異なる。レーダー観測の資料によると、下げ潮の場合、対馬東部沖では北～北東流（R）、対馬東部沿岸では南西～南流（Q）、壱岐北部では西流（S）、対馬西部では北流（P）と、潮流の方向と速さは微妙に異なる（図3）（Yoshikawa et al. 2006）。

玄界灘では冬季（11～2月）、北西季節風が卓越し、海は荒れる。春から秋（3～10月）、風向は一定しないが、南西から南、東南の風が多い。角島、鐘崎、沖ノ島、糸島、壱岐、巖原、鰐浦の1990～2020年における月別最大風向を見ると地域差がある。沖ノ島・巖原ともに周年、西北西・北北西風が卓越するが、鐘崎・糸島では夏季に北風

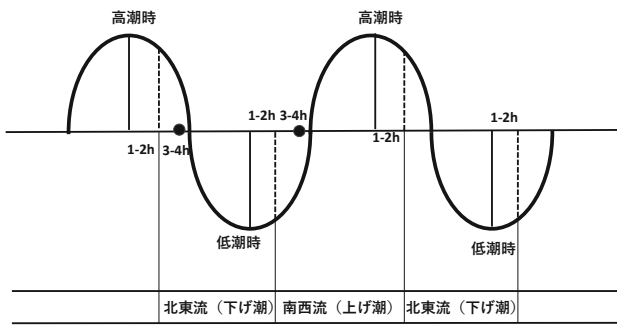


図2：対馬海峡における潮流の変化を示す模式図
(井上・三井田・俵 1985: 922の記載を元に筆者作成)
●は、最強流速の出現時。
1-2h, 3-4hは、高潮・低潮時からの時間

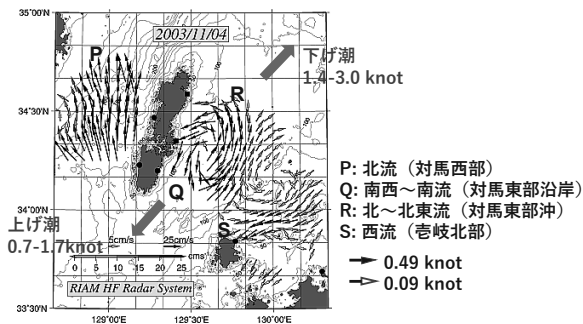


図3：対馬海峡における潮流の動向
[Yoshikawa et al. 2006]による

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12 (月)
沖ノ島	ENE	ENE	ENE	ENE	ENE	ENE	ENE	ENE	ENE	ENE	ENE	ENE
鐘崎	SE	SE	N	N	N	N	N	N	N	N	SE	SE
糸島	SE	SE	N	N	N	N	N	N	N	N	SE	SE
壱岐	N	NNE	NNE	SW	SW	SW	SW	SW	NNE	NNE	NNE	NNE
巖原	NNE	NNE	NNE	NNE	NNE	NNE	NNE	NNE	NNE	NNE	NNE	NNE
鰐浦	W	WNW	WNW	WNW	WNW	W	E	SW	E	E	WNW	WNW
角島	E	E	E	E	E	E	E	ESE	E	E	E	E

1991-2020年における数値。風向は月別最多風向。鰐浦は2020年。
国土交通省・気象庁による。

表1：玄界灘各地における月別最多風向

が、冬季に南東風が吹く。壱岐では4～8月に南西風が、鰐浦で7～10月に東風が卓越する。角島では年間を通じて東風が多い(表1)。

櫂による手漕ぎないし帆走による先史・古代の航海では、季節による風向きの変化、高潮→低潮時と低潮→高潮時で異なる潮流の日内変化、大潮と小潮の月齢変化などの大気海洋現象が航海の是非を左右する重要な制限要

因となった。

最近のシミュレーションによる航路推定モデルでは、広瀬・尹・宮本(2019)による対馬海峡の報告と、オセアニアのビスマルク諸島・パラオ諸島間における例がある(Callaghan and Fitzpatrick 2008)。後者のほうが推定範囲は格段に大きい。日本、朝鮮半島、東シナ海、琉球列島、台湾、越南あたりまでを含む東アジア海域で同様な試みがなされるべきだろう。

イ) 東シナ海・黄海・渤海

東シナ海では、台湾沖から北東に向きを変えて流れる黒潮と大陸の沿岸流が主要な海流を形成する。黒潮は琉球列島の西側を流れ、北緯30度、東経128度より南で分岐し、西側は黄海暖流、中央と東側は対馬暖流となる(菱田ほか 1990)。

黒潮本流は東シナ海の陸棚斜面上を北東に流れ、九州南西部で方向を東向きに転じ、大隅諸島とトカラ列島間のトカラ海峡を通過し、日本南岸を流れる。黒潮は幅100km、最大流速は4knot/時にもなる高温・貧栄養の海流で九州方面から南に向かう航海では大きく東に流される。このため、東寄りの風はとくに帆走船の場合に重要となる。季節にもよるが、琉球列島の西側を流れる黒潮との間に時計回りの渦が循環流の黒潮反流として生じ、流速こそ黒潮に及ばないが(0.6knot/時)西から南西に流れる。琉球列島は東側の急斜面が6,000mの琉球海溝に至るが、西側は200m前後の浅瀬が多く東シナ海に至るリッジにある(内山ほか 2016)。後述するように、九州から琉球列島に至る航路は遣唐使時代に南島ルートとされたが、正規の航路ではなかった。

2022年8月に噴火した小笠原諸島の海底火山「福德岡ノ場」の軽石が大量に奄美・沖縄列島に漂着した。黒潮の南側における黒潮反流が軽石を運搬した。このメカニズムについて、黒潮の沖縄本島海域における黒潮反流のもたらす海洋構造への影響として捉えられ、とくに春季には冬季にくらべて顕著な黒潮反流が生起する(内山ほか 2016)。

九州西部では、五島列島東部沖に南流する五島反流がある。五島列島南の甌島列島にも甌南下流がある。上甌島東部の陸繋島砂州(トンボロ)は海砂が堆積したもので、甌南下流が大量の土砂を運搬して形成された。甌島における伝承によると、五島起源の釣り具(餌木)や溺

死体が甌島に漂着する例が多い（原田 2020）。

一方、黄海は長江河口部と済州島を結ぶ線より北側で、山東半島北端と遼東半島南端を結ぶ線より南側にあたり、北黄海と南黄海に分かれる。黄海の北側は渤海（湾）である。黄海と渤海の平均水深はそれぞれ44 m、18 mである。東シナ海で黒潮から分岐して北流する黄海暖流は北黄海で向きを西に変え、渤海湾奥で時計回りと反時計回りの沿岸流となり、後者は黄海沿岸流として渤海湾を東流し、山東半島をかすめて黄海を大陸沿いに南流する（図4）。この海域は遣唐使船の北ルートにあたる。黄海沿岸流と浙江・福建沿岸流との中間には長江からの希釈沿岸流が東沖に流れる。またその沖合には、台湾沖から東シナ海に至る台湾暖流がある（Yanguang Dou et al. 2016）。

東アジア海域における「海の色」は多様である。黒潮海域は濃紺色で、玄界灘も「玄＝黒」色、琉球列島沿岸のサンゴ礁の暗礁や浅瀬は「コバルトブルー」の海である。大陸では黄河から流れ出す黄土の影響を受ける黄海、長江河口部沖の「灰褐色の海」がある。実際、航海中に海水の色が変わると錨を下して水深を確かめることがなされた（茂在 1987: 31）。

ウ) 日本海

日本海は東アジア海域東部を形成する表面積97万8,000 km²の半閉鎖海である。対馬海峡から流入する高温・高塩分の対馬暖流は蛇行、分枝を繰り返して北東に流れ、津軽海峡から太平洋に東流する。一部はさらに北上し宗谷海峡から東南に向きを変え、オホーツク海で宗谷暖流となる。

東京大学大気海洋研究所と水産研究・教育機構の共同研究であるFATOプロジェクトは、対馬暖流の海流システムを4つの分枝流（沿岸分枝、沖合い北分枝、沖合い南分枝、亜寒帯前線）に区分し、海面の凹凸を捉えた海面高度データから追跡するアルゴリズムを開発した（Yabe et al. 2021）。古代航海への示唆として、沿岸分枝は九州から隠岐まで顕著だがそれより東部では沿岸分枝は見られない。沖合い南分枝と北分枝は、離岸・接岸の傾向が顕著に大きいと、ともに津軽海峡に収斂する。そして、亜寒帯前線のみが北海道北部まで北上する。沖合北分枝の過去25年間における流路平均値では、朝鮮半島南東部から一気に津軽半島まで達している。日本海では、日本

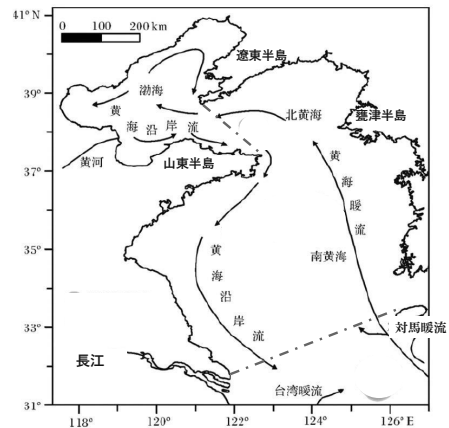


図4：黄海と渤海の海流

沿岸域での航海とともに、大陸との横断航海（遣唐使船・新羅船の横断航路や渤海使船の日本海縦断航路）に与えた影響が示唆に富む。

エ) 風向と遣唐使船

遣隋使・遣唐使船の航海時期について残された記録は少ないが、往路は7月（1回、南風）、8月（5回、南東～東南東風）、10月（1回、北北東風）、復路は5月（1回、微南風）、6月（2回、微南東～東南東風）、8月（1回）、9月（1回、北東風）、10月（1回）、11月（1回、北北西～北風）、12月（3回、北北西風）である。

東シナ海の風向については、茂在寅男が水路誌402号を元に月別東シナ海の季節風を示している（茂在 1987: 32-40）。上田雄も長崎海洋気象台発行の『東シナ海の気候図30年報（1971-2000）』による月別風向図の資料を引用し、大局的には夏季に南・南東風、冬季に北西・北北西から北北東風が卓越する傾向を指摘している（上田 2007: 275-287）。遣唐使船は大卒で往路は夏季、復路は冬季とされていたが（上田 2007; 本馬 1976）、冬季の帰路は季節風が強く危険をとまなう。夏季も梅雨時の低気圧や秋季の台風との遭遇も問題となった（茂在 1987: 39-40）。

風向を考慮して現地に半年程度滞在して「風待ち」をする戦略は、低緯度（0-20度）のオセアニアにおける航海で重要であった。北東（北半球）・南東（南半球）貿易風の卓越する時期（10-3月）と、北西（北半球）、南西（南半球）の季節風が卓越する時期（4-9月）は半年ズレるからだ。

インドネシア東部・スラウェシ島のマカサーン漁民が

オーストラリア・アーネムランドへ北西の季節風に乗ってナマコ漁に出漁し、半年後、南東の貿易風に乗り、乾燥ナマコをたずさえて帰還した事例がある（MacKnight 1976, 1986）。

先史・古代の東アジア海域では、数日から数週間、順風を待つことは常套であっただろうが、後代、北前船の往来した日本海や瀬戸内海の沿岸各地に多くある「風待ち港」は古代にも使われた可能性は大きい。たとえば、能登半島外浦の福浦（石川県羽咋郡志賀町）は、奈良時代、渤海使が到着し、船の修理をおこない、渤海国に帰還する港であったが、江戸時代にも北前船の寄港地であり、弘化4年(1847)寄進の石製方位盤が残されている（図5）（北見 1986: 243-258）。

風待ち港には船頭が風や天候を予測するために遠方を展望できる小高い「日和山」が多い。近世期、江戸と大坂をつなぐ東廻り・西廻り航路上の寄港地には数多くの日和山があった。西廻りと東廻りにおける日和山の数は38、40で両者の差はない。また、日和山の標高も100mまでである（南波 1988）。

オ) 台風をめぐって

東アジア海域は低緯度のミクロネシアで発生した台風の進路上にあり、夏から秋に来襲する頻度が高い。ごく概略で月別の台風の進路を示すと、6月は台湾・琉球列島、7月は東シナ海と黄海、8月は東シナ海東部から対馬海峡、日本海、9月以降は太平洋側に進路を取る季節変化がわかる（図6）。もちろん、気圧配置やエルニーニョ南方振動（ENSO）により台風の進路が大きくズレることがある。

ミクロネシアは台風発生の温床であり、台風はカロリン諸島を東から西へと進み、やがて進路を北西～北東に変えて東アジアに接近する。

カ) 航海と方位

羅針盤やGPSのない時代の航海では、太陽・月・星座などの天体現象が拠り所とされたことが想定されている。東アジア世界では古代中国の28星宿は天界を7区分し、それぞれに4星座を配するものであった。ミクロネシアでは星の出没方位が大きな目安とされ（Goodenough 1953; 秋道 1981）、北極星、南十字座のほか15の星座の出没方位を元にした32方位からなる星座コンパスが汎用されてきた。北極星が真北、南十字座の南中時が真南を

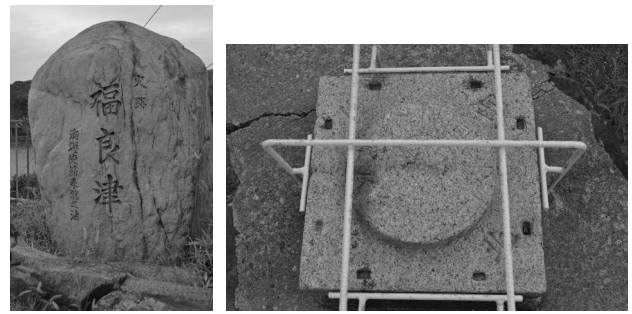


図5：能登半島外浦の福良港にある「福良津」の碑（左）と石製方位盤（右）で、江戸末期の弘化4年（1847）寄進

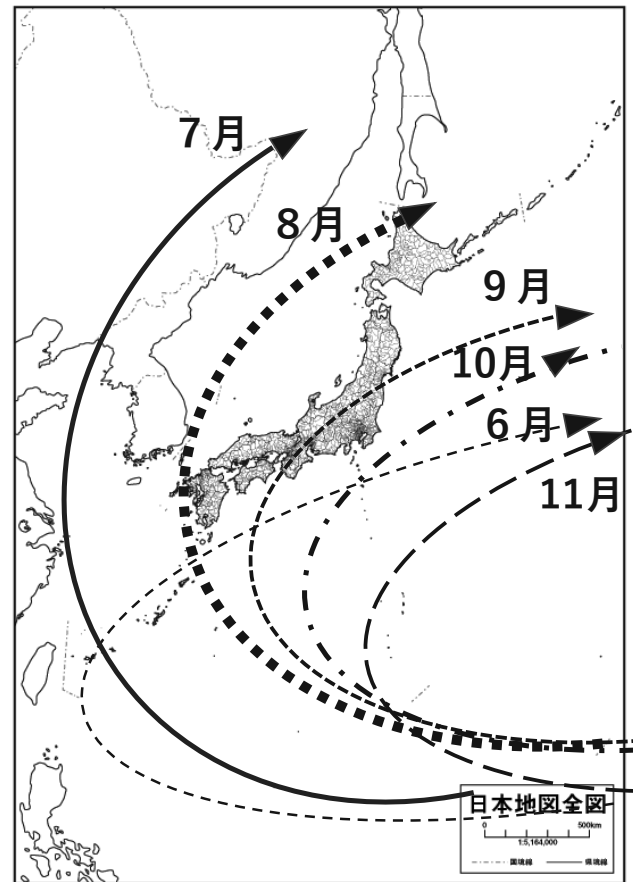


図6：東アジアにおける台風来襲の季節変化（6月～11月）。

(https://imgc.eximg.jp/i=https%253A%252F%252Fs.eximg.jp%252Fexnews%252Ffeed%252FExcite%252Fbit%252F2014%252FE1409707104551_2.jpg,quality=70,type=jpg) を元に作成。

指し示す。陸上ではタコノキの葉製マット上にサンゴ礫をならべ、タコノキの葉の細い「こより」を補助線として使い、航海術のさまざまな知識を学ぶ（図7）。

日本でも北極星の方位から東西南北や45度ずれた北東、南東、南西、北西の方位が推定された。北斗七星も

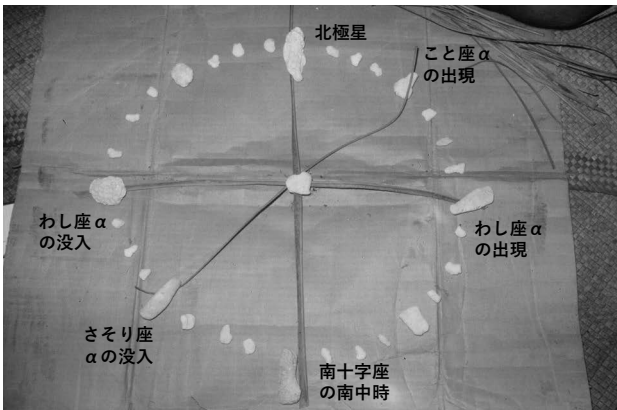


図7：カロリン諸島における星座コンパス。
サンゴ礫を使い、32方位を円周上に等間隔に配置したもの。円の中央にカヌーを想定し、タコノキの葉製こよりで補助線を引き、航海術を学ぶ。

広く用いられた星座であり、柄の三ツ星はカジボシ（舵星）、升の四ツ星はフナボシ（船星）と呼ばれ、航海者や漁民に親しみのある星であった（後藤 2017）（図8）。プレイアデス星団（スバル）、オリオン座、こと座、さそり座などは農事暦や季節を知る目安とされたが、航海とはあまり関係がない。オリオン座の三ツ星が航海に使われたとする説があるが、オリオン座は冬季に顕著な星座であるが海の荒れる時期でもあり、夏季に見える時間も限定されるため汎用されたわけではない（亀山 1986）。

周知のとおり、太陽の出没方位は季節や緯度により異なる。対馬（N34.42度）、鬱陵島（N37.50度）、石垣島（N24.41度）、礼文島（N45.39度）における太陽の出没方位の季節差を示した（図9）。

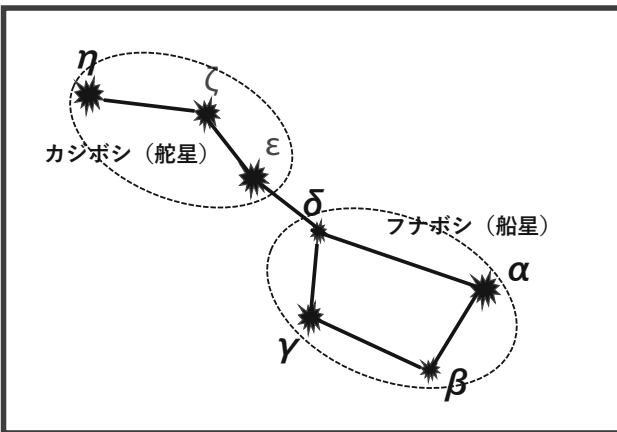


図8：北斗七星とシソウノホシ（四三の星）

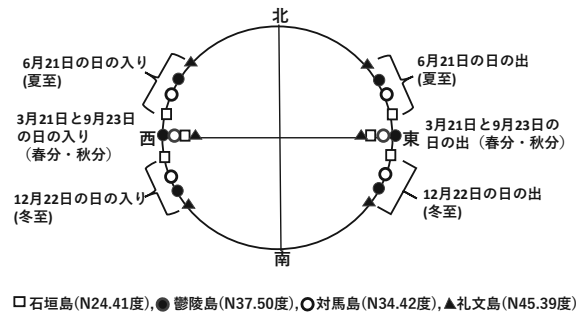


図9：太陽の出没方位の季節性と緯度差

(2) 先史・古代の航海と船

いまから数万年前の洪積世、海面が現在より100mほど低かった時代、東南アジア側のスダ大陸と、ニューギニア・オーストラリア側のサフル大陸間は海により80~100km隔てられていた。この海域はウォーレシア（Wallacea）と呼ばれ、人類はこの海を渡ってオセアニアに拡散した。洪積世の旧石器人類が使った船に関する証拠は残っていないが、熱帯・亜熱帯地域に多い連軸型（仮軸型）地下茎をもつ竹は数十本の程が大きな株を作るのが特徴で、こうした種類の太い竹材製の筏を航海に使ったとする仮説が提示されている（Anderson 2018）。筆者は竹筏以外に、流木を使った可能性も重要と考えている。民族誌例であるが、アドミラルティー諸島西部のニニゴ諸島やソロモン諸島のオントンジャワ環礁で利用されるカヌーの原材は流木で、後者の場合ほとんど西方のニューブリテン島から漂着したものである（Haddon and Hornell 1937）。

ア) くり船・双胴船・竹筏

船の発展系列については、これまで多くの研究がある（Heine-Geldern 1932; Haddon and Hornell 1937; Hornell 1943; Doran 1981; Mahdi 1999; 石井 1957; 出口 1987, 1992; 後藤 2006, 2013, 2014）。東アジアでは筏/くり船、準構造船、構造船へと発展した。くり船は、日本では雷下（市川市）（7,500 BP）が、中国・朝鮮半島では跨湖橋、竹辺^{チュンビョン}（8,000 BP）、飛鳳里（7,700 BP）、河姆渡（7,000 BP）などが最古級である（秋道 2012; 李 2014）。縄文時代前期、沖ノ島社務所前遺跡から出土した大量のニホンアシカの骨は、当時九州ないし朝鮮からくり船か筏で来島した人びとが利用した可能性があり（正木 2008）、くり船・筏は沿岸域だけのものとはかぎらない。

東アジア世界で、竹製筏は古くから河川で利用されてきた（出口 1992, 1995; 秋道 2019）。台湾南部のアミの人びとは海域で帆走の竹筏船を使う（劉・高編 2005）（図10）。対馬北部の佐護湊における木製筏は沿岸での海藻採取用であり、対岸の朝鮮半島南部、済州島、鬱陵島の影響があると思われる。越前海岸の左右（福井県丹生郡越前町）にも海藻漁用も海藻漁用の木筏船が飛び地的にあり、日本海を經由した伝播の残存と推定できる（出口 1995）（図11）。

なお、『史記』第10「張儀列伝」(BC 4 C)にある舩船はポリネシアのダブルカヌー（双胴船）に相当するが、東アジアにおけるその後の発展はない（秋道 2012）。民族誌例であるが、湖北省当陽県の内水面では鵜飼漁に小型の双胴船を使う（卯田 2022）。

白雉4年(653)の第2次遣唐使派遣のさい、第2船（120名乗船）は漂流し、大隅諸島の竹嶋（竹島）に5名が漂着した。人びとは島に自生していた竹で筏を作り、島からの脱出を図った（『日本書紀』巻第25（幸徳天皇・645～654年））。竹島に自生する竹はリュウキュウチク（*Pleioblastus linearis*）であり、鹿児島以南の琉球列島に分布する。この竹から筏を作るには相当な数を束ねる必要がある。10本程度を束ねたものを単位として、それらを組んで筏を作ったのだろうか。

イ) 準構造船と構造船

先史時代、東シナ海を渡った船の構造と形態は不明である。青銅器時代、韓国・蔚山大谷里の太和河上流部河岸にある盤龜台岩壁画(3,000 BP?)の線刻画・面刻画から大型船に7名と19名が乗船し、鉞を投げる鉞手と櫂を使った漕ぎ手によりナガスクジラ・マッコウクジラ・コククジラなどの捕鯨をおこなった様子が示されている（朴 1995; 平口 2003）。対馬の佐賀貝塚（縄文中期～後期）でも海獣漁に使われたとされる鉞が出土している（正林 1989）。沿岸捕鯨では大型のくり船が使われたと思われるが、以下にふれる準構造船であった証拠は弥生時代以降とされる。4—9世紀における船については、埴輪・石・木・壁画などの資（史）料を渉猟した森田の報告がある（森田 2019）。

弥生時代～古墳時代の板絵にあらわされた船団図（鳥取県青谷上寺地遺跡・兵庫県袴狭遺跡）、古墳時代の船型埴輪（大阪府長原高廻り2号墳・宮崎県西都原170号墳）

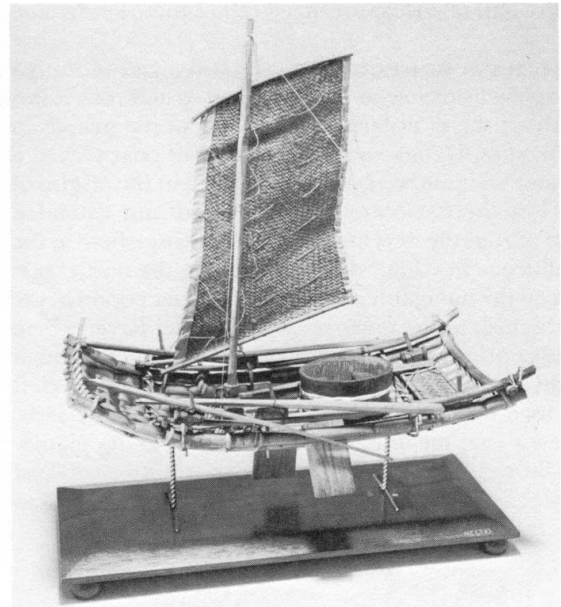


図10：台湾・アミの人びとが外洋で使う帆走竹筏の模型（National Maritime Museum）

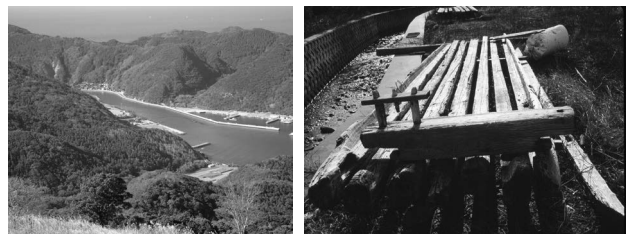


図11：対馬北部の上縣郡・佐護湊(左)と木製筏（藻刈舟）(右)。（筆者撮影）

にあるように、くり船に舷側板を縫合し、船の艫に波切板を接合した「準構造船」は弥生時代中期以降、瀬戸内海沿岸諸国を中心に建造された。舷側板の高さ・厚さ、舷側板の両端を固定する堅板の接合、両側の舷側板を固定する貫や船梁の有無などにより、準構造船を4類型に、全長も7m以下、7—9m、9—12m、12m以上と4段階に区分する案が提示されている（柴田 2013, 2020）。また、くり船は単材だけではなく、複数の材を接合した複材くり船もある。天保9年(1838)、尾張国海東郡諸桑村（愛知県愛西市諸桑町）で発見された船首・胴・胴・船尾からなるくり船はクスノキ材（*Cinnamomum camphora*）4本を使ったものである（安達 2016）。遺跡からの複材くり船は、全国で5例報告がある。

和船の準構造船から構造船への発展系列では、船底部の板材を複材として前後に広げ、その上部に棚板を縫合

した「棚板タイプ」と、船底部の丁板を複数つなぎ、それにL字形の単材である^{おもき}面木をつなぎ、その上に舷側板を縫合した「面木タイプ」の2系列が知られており、造船工法が異なるうえ分布もちがう（石井 1995a, 1995b; 出口 1995）。出口晶子は、これをくり船からシキ（船底板）とタナ（舷側板）の2つの発展系列により構造船が生みだされたとするモデルを提示した（出口 1987, 1995）。

用材としてタナ系が瀬戸内海・太平洋岸・琉球列島に分布するクスノキを使ったのにたいして、シキ系はクスノキが分布しない日本海域で、スギ・ヒバなどを使ったとされている。クスノキは幹が太くなるが直立していないのにたいして、スギ・ヒバの針葉樹は直立して長い用材となる。しかし、九州では対馬を含め、北部・中部でもクスノキは自然分布している。西北九州の神社に残されている神木はクスノキの巨木であることが多く、保全されてきた点に注目すべきであろう（図12）。また、朝鮮半島には矮性とはいえ済州島以外クスノキは分布しないとされるが、蔚珍郡・竹辺遺蹟出土のくり船（長さ64cm, 幅50cm, 厚さ2-3cm, 8,000BP）はクスノキ、櫂はクスギである。気候変動にともなう植生の変化も考慮すべきであろう。

日本海側では大型の構造船はこれまでの調査でも分布しない。日本海と直結する朝鮮半島では、面木造り同様、船材を左右に結合して船を造る技術が存在する。1975年に慶州の雁鴨池から出土した統一新羅時代（677-935）の小船は、単材割船を二分して、その間に一材を入れて幅を広げている。朝鮮の木造船の外板構成は面木造りの船に類似している。たとえば、1984年に全羅南道莞島郡の^{ランド}助葉島沖海底10mで発見された沈船の場合、5材よりなる船底部は両舷を貫通する穴に木釘を打ってとめ、面木とおなじL字形の断面の船材を船底部上縁に縫合し、舷側材は木口を切りさいて上から下に斜めに木釘を打って固定している。沈船の積載品青磁や壺、箸・さじなどの特徴から、高麗時代初期の11世紀の船とされている。また、1995年に木浦市の達里島沖で発見された沈船は莞島沖の沈船より2世紀のちとされ、断面がL字形の船材でないこと以外、船底部と舷側板の固着法は莞島船と類似している（安達 2016）。

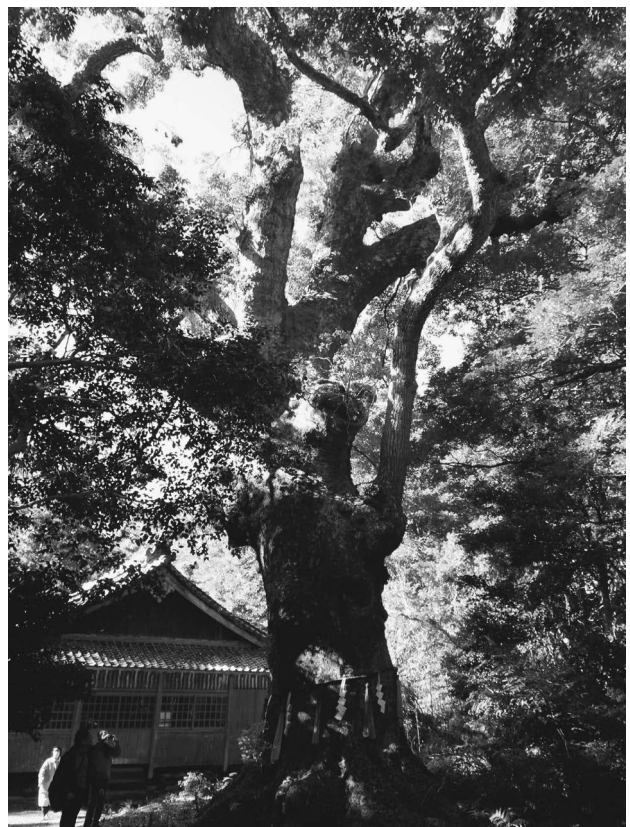


図12：対馬の下縣郡・豆殿の多久頭魂神社境内にあるクスノキの御神木。

ウ) 遣使船

飛鳥時代以降の遣隋使・遣唐使・遣新羅使・渤海使で使われた船についての発掘資料はなく、文献史料・鎌倉時代以降の絵画・宋・元代の沈船（新安沖・泉州、後述）などから検討されてきた。これまでの調査研究で、遣唐使船は平底の箱型船で2本の帆柱をもつ中国のジャンク（戎克）型の帆船とされてきた。平らな船底部の上縁に先述した面木を接合し、さらに舷側板を縫合した構造船は、百済系集団による技術伝播が想定される。

『日本書紀』の「白雉元年是歳」（650）の項に^{やまとあやのあたひあがた しらかへのむらじあぶみ なにわのきしあぐら くだらのつみ}「倭漢直隕、白髪部連鑑、難波吉士胡床、百済舶^{ふたつ}二隻を造ら使めたまふ」とある。舶は「大きな船」を表す。この2隻は白雉4年（653）の第2次遣唐使船として使われた可能性がある。ただし、この時の乗員数は第1船が121人、第2船が120人とされるきわめて大型の船であり、7世紀中葉当時の百済舶のサイズが120人規模を収容する大型船であったかどうかは疑問が残る。

時代は下るが、最後の遣唐使船の派遣は承和5年（838）

で、4船中の第3船が対馬沖で座礁した。残りの3船は無事に南ルートで東シナ海を横断し、翌年、第1船・第4船が楚州（江蘇省）より、第2船が海州（江蘇省）より北ルートを目指したが、第2船は南海の島に漂着し、かろうじて小船2艘で大隅にたどり着いた。残りの2船の乗組員は楚州から新羅船9隻をチャーターして長崎の生月島に帰還している。このさい用いられた新羅船には、日本の遣唐使船2隻の乗員280人が1船当たり31人分乗したことになる。ただし船・水夫などの数は不明であり、さらに十数名が乗船したとおもわれる。新羅船規模の船は中型で、喫水線は浅かった。じっさい、新羅船は平安初期、大宰府で建造、使用された。このことは『続日本後紀』承和6年（839）7月丙申に、「令_下大宰府造_中新羅船_上。以_三能堪_二風波_一也」とあり、新羅船が日本船より耐波性に富むことが知られていた。

遣唐使船の規模について、これまで全長30m、幅8m、排水量300ton、積載量150tonで、1隻あたり120～150名が乗船と推定されてきた（石井 1983, 1995a, 1995b; 茂在 1987）。なぜ、新羅船規模を大幅に越えた大型船が建造されたのか。難破、座礁した要因として、往路すぐの座礁は積載量が多くて喫水線も深いこと、航海中、平底船は横波に弱く、推進力の劣る点、竜骨をもたないために風波の衝撃に脆弱である点、甲板と船倉部の気密性の欠落（海水の船内への流入）、船底部の航と舷側板、艫や舳と船体部分の縫合が完璧でなかった可能性がある。

たとえば、宝亀8年（777）、中国を出た4船のうちの第1船（160人乗船）が暴風雨のため漂流し、横波で舷側板が破損、帆柱が折れ、船体が部分破壊された。かろうじて艫と舳部分の板にしがみついて艫にいた56人は薩摩国・甌島に、舳にいた41人は肥後国天草郡西仲島（現在の、阿久根市長島）に漂着した（『続日本紀』卷第三十五 天宗高紹天皇（光仁天皇）宝亀九年（778）十一月乙卯（十三））。結局、副使の小野朝臣石根ら38人、唐使・趙宝英ら25人らの計63人（総乗船員の約4割）が犠牲となった。このあと、11月庚申18日（12月15日）、安芸国で船2艘の建造が命ぜられた。これは前述の第1船で艫につかまって甌島に漂着した唐の判官らを送るためとされている。

ジャンク船が構造船あったとする仮説は、日本への漂着船の記録から推定されている。『日本三大実録』第35

卷には、元慶3年（879）3月13日、丹後国竹野郡に漂着した異国船は、長さ6丈（18m）・幅1丈5尺（4.5m）とある。同書第37巻の元慶4年（880）5月17日と19日の条に、但馬国二方郡と美含郡でそれぞれ長さ10丈（30m）・幅不明、長さ5丈余（15m余）・幅1丈6尺（4.8m）の沈船・漂流船が記録されている。これらの大型船は規模からして構造船と想定されている（茂在 1987:26）。

エ) 水軍の軍船

斉明6年（660）の百濟滅亡後、倭国にいた百濟最後の王子、長璋を百濟に送り届けるさい、5,000人の護衛と170艘が派遣された。とすれば1艘あたり30人弱となる。約100年後の天平宝字3年（759）、新羅遠征のため北陸道（89）、山陰道（145）、山陽道（161）、南海道（105）に計500艘の軍船建造が指令されており（田中 2022: 148）、天平宝字5年（761）には合計515艘が検品された（笠井 1975: 90）。長原古墳群（大阪市）出土の船形埴輪から、全長15m、幅3m、数十人積載可能な準構造船が復元されている。新規の軍船建造以外に、既成の漁船の船底部を複材として使い、舷側版を縫合して積載能力を増す試みがあったかもしれない。

オ) 帆

外洋航路で用いられた帆についてふれておこう。外洋航海用のジャンク船に装備された帆は、割いて細くした竹材を格子状に編んで、間隙をシュロ・ササの葉で充填した直方形の網代帆（松木 1998）であった。網代帆は蛇腹式に折りたたむことができ、後方からの順風で進むさいは横帆とし、向かい風や横風のさいには縦帆として利用されたとおもわれる。

中国福建省・泉州の「泉州湾古船陳列館」には宋代に東南アジアから帰還し、泉州湾で沈没した沈船の実物展示があり、当時のジャンク船の実態が明らかにされた。船材の部位による樹種のちがいや接着剤の種類、船倉の隔室による水密構造、V字形の船底部など、唐代とは異なる造船技術の進化を見ることができる（図13）。また、韓国の全羅南道新安郡・智島にある道德島沖で発見された「新安沈船」は1323年、中国の慶元（寧波）から博多に向かう途中漂流し、新安沖で沈没したものである。大量の銅銭・陶磁器・木簡・香辛料・塩辛などのほか日本刀の鏢・サイコロなども見つかっており、日本人が乗船していたとされる（図14）。同様に、忠清南道の泰安沖

で約800年前の高麗時代の沈船（2008年回収）から木簡、竹簡、陶磁器などが発見され、泰安の「国立海洋遺物展示館」で展示されている（図15）。

カ) 漂流船

先史時代以来、漂流船、難破船、沈船は数知れないが、15世紀における漂流民記録を参考にしよう。朝鮮・崔溥の『漂海録』は弘治元年（1488）正月3日、済州島から43名の乗船した船が漂流し、浙江省臨海県沖に至る経緯の記録である。『朝鮮王朝実録』には済州島から琉球列島3例、琉球列島から済州島2例の漂流民記録がある（伊波 1974；関 2021）。1450年、1463年、1477年の済州島からの漂流例では、出航が12月、1月、2月と冬季であり、北西寄りの風と暴風で漂流したとおもわれる。1477年の金非衣らの与那国島への漂流民の詳細な記録によると、「鼻居刀船」と呼ばれる船が使われた。全羅道・慶尚道で使用され、軽捷さを特色とする軍船であった点に注意しておきたい。

（3）航海ルートとオーシャン ジオ・ポリティクス

東アジアの海域世界では、外交上の冊封関係、海域を越えた侵略・勢力拡大などが列島と大陸との航海ルートに多大な影響を与えた。

ア) 遣隋使船の航海ルート

遣隋使は推古8～26年（600-618）（隋滅亡年）間に3次以上にわたり派遣された。推古15年（607）、小野妹子に同行した裴清（裴世清）が翌年の推古16年（608）、ふたたび日本に向かった。

裴清が倭国（倭国）に航海するさい、百済から竹島（おそらく珍島）、南方に耽羅島（済州島）を見つつ、都斯麻国（対馬）、一支国（壱岐）、竹斯國（筑紫、博多）、さらに東の秦王国（不明）へと進んでいる。したがって、隋の大興城（長安）を出て、黄海を東進し、朝鮮半島南西端の珍島から半島南岸沖を東に進み、対馬・壱岐経由で北九州に至っている。隋-百済間のルートは不明である。

イ) 遣唐使船の航海ルート

遣唐使は、舒明2年（629）の第1次から第20次の寛平6年（894）9月、遣唐大使であった菅原道真おほつつかいの建議により廃止されるまで266年間実施された。

遣唐使船の派遣は第7次までは2船、第8次以降は4



図13：「泉州湾古船陳列館」に展示の沈船。水密構造をもっていたことがよくわかる。



図14：新安沈船。
1323年、中国の慶元（寧波）から博多に向かう途中漂流し、新安沖（全羅南道新安郡）で沈没した。木浦・国立海洋研究所所蔵。

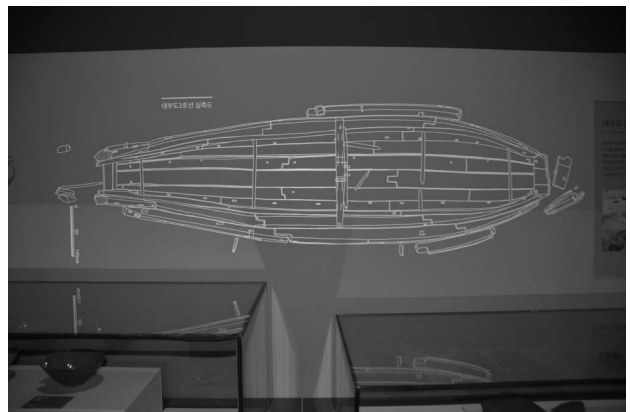


図15：約800年前の高麗時代の沈船の復元平面図。
木簡、竹簡、陶磁器などが発見され、泰安の「国立海洋遺物展示館」で展示。

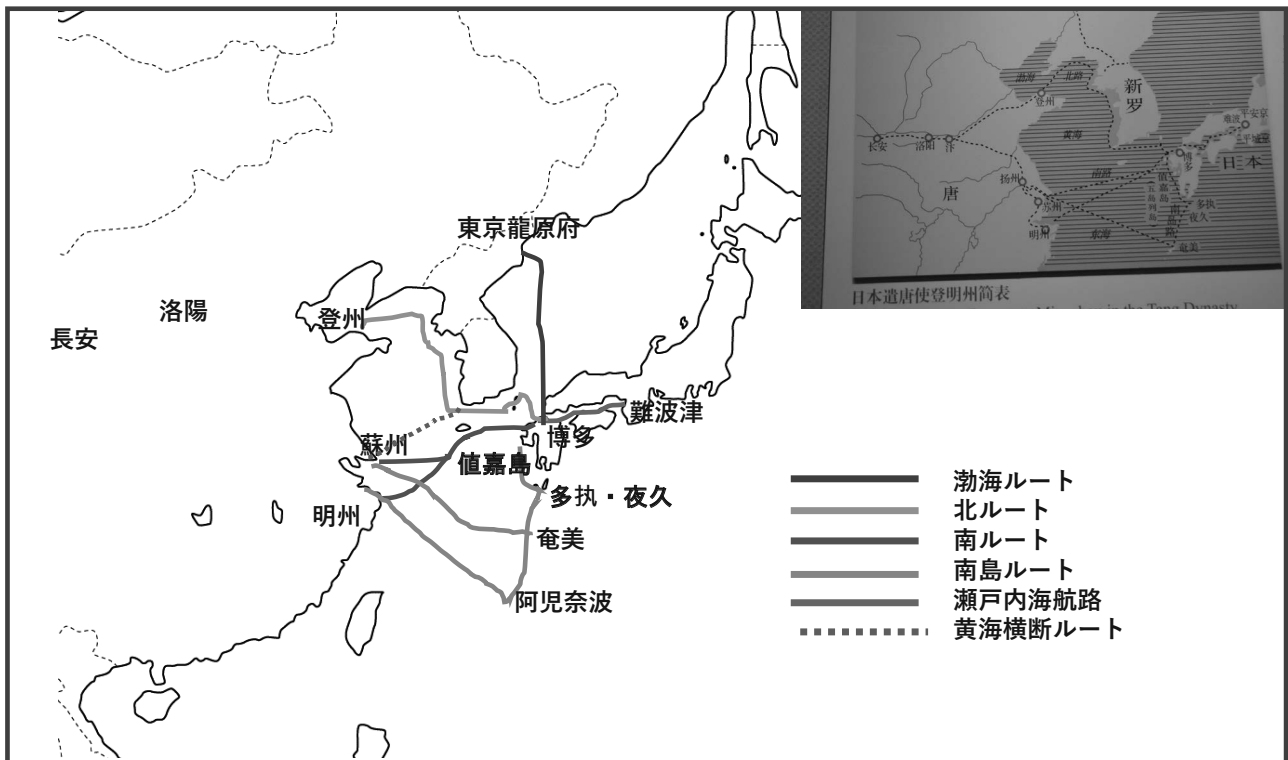


図16: 寧波博物館開館10周年記念展示にある遣唐使ルート。北路（山東半島の登州経由）、南路（浙江省の明州とおそらく蘇州経由）、南島路（おそらく蘇州経由）を想定している。

船でおこなわれ、1船当たりおよそ120～150名が乗船したとされている。

中国の寧波博物館開館10周年記念展示（寧波博物館建館十周年文物征集成果展 2018. 12. 5～2019. 4. 8）を観覧した際、遣唐使船の解説展示で北路、南路、南島路の3ルートが示されていた。南島路では、値嘉島（小値賀島）、多執（種子島）、夜久（屋久島）、奄美が記載されている（図16）。

舒明2年～天智3年（630～665）まで遣唐使の航海ルートは、博多から対馬経由の場合を含めて、朝鮮半島西海岸沿いに進み、甕津半島から山東半島の登州、そして陸路、長安へと至る北ルートを取った。ただし、白雉4年（653）と斉明5年（659）における遣唐使は、往路で九州から朝鮮半島西南端から黄海を横断するルートをとった（大高 2018）。

白村江の戦いが天智2年8月（663年10月）に朝鮮半島の白村江（現在の忠清南道・全羅北道を流れて黄海に注ぐ）で日本・百濟遺軍と唐・新羅連合軍が戦闘をおこなわれ、唐・新羅軍の勝利となった。

その後、咸亨元年～上元3年（670～676）の唐・新羅戦争により新羅が朝鮮半島統一を果たしたため唐と新羅の関係が悪化した。こうして日本は北路での遣唐使派遣が出来なくなった。なお、天智3年（665）の遣唐使は、白村江の戦いの後に唐から日本に来た使節が、唐に帰るさいの送唐客使である。

代わって、大宝2年～承和5年（702～838）までは五島列島（福江島西端の三井楽）から東シナ海を横断するルートが取られたが、先述のとおり7世紀中葉に日本から百濟南端を経て直接、唐に至る航海ルートがあった。中国へは浙江省の蘇州・明州（寧波）・揚州が寄港地となった。

なお、大宝2年～天平勝宝5年（702～753）、奄美・沖繩を経由し東シナ海を横断して中国に至る南島ルートが想定されている。しかし、南島路は往路の場合、黒潮の影響を受けるので、正規のルートであったわけではない。船が南に流されたさいのルートとされ、これを航路として認定することに疑義が提示されている（東野 2007；森 2008；上田 2007）。

第12次の遣唐使船は、天平勝宝4年（752）の派遣で、往

路は南ルートを経たが、帰路は翌年11月、揚州から4船が日本に向かった。第4船は漂流し、安南に漂着、他の3船は12月20, 21日に阿児奈波（沖縄本島）に到着した。沖縄から第1船は流され、大使の藤原清河と副使の同伴安麻呂は安南中部に漂着するが、のち755年長安に戻り、帰国することなく唐において重責の任についた。残りの3船のうち、第2船には高僧の鑑真が同船しており、屋久島から薩摩の秋妻屋浦に上陸を果たし、大宰府、瀬戸内海を経由して難波津に到着後、平城京に至った。第3船は沖縄から屋久島経由で紀伊・牟漏津（牟婁郡）に、第4船も薩摩の石籬浦に到達している。

天平宝宇2年(758)2月、小野田守を正使とする初の遣渤海使が派遣され、秋9月に渤海使の楊承慶らと帰国し、はからずもこれが第4回目の渤海使来日となった。楊承慶は当時の唐における政治情勢や藤原朝臣清河が無事に長安に戻ったことを報告している。

これを受けて、入唐大使の藤原朝臣清河を日本に連れ戻す第12次遣唐使が計画された。航路は例外として、渤海ルート（日本海の朝鮮半島東岸沿いに北上）を取った。大使の高元度は高句麗王族系の渡来人である。当時、唐国内は「安祿山（安史）の乱」で混乱状態にあったため、渤海経由で入唐が図られた。渤海国と連携して新羅を征討する藤原仲麻呂の進言を考慮したことも背景にあったとされている。

翌天平宝宇3年(759)2月、帰国する渤海使の楊承慶を含めた99名で出航し、渤海に到着した。前述したように唐での「安史の乱」の影響でじっさいに入唐したのは高元度や先述した楊承慶を含む11名で、楊は唐に賀正使として随行している。しかし、長安では藤原朝臣清河を帰国させることは時期尚早との唐朝の意向で断念し、高元度らは唐の差し向けた船で蘇州から南ルートを経由して10人で天平宝宇4年(760)末に帰国している（1名は唐に残留）。なお、この中国船は全長8丈(約24m)あり、中国人の船頭・水手38名が操船にあたり、航海における乗員数は48名でその国際性は明らかであろう。一方、渤海に残った88名も帰国している。

ウ) 渤海使船のルート

渤海国は、713年に建国された東アジア世界東縁部の国で、現在の朝鮮半島北部からロシアの沿海州地方にあった。渤海国は、神亀4年(727)の出羽国着岸以来、

延長4年(926)に渤海国が減ぶまでに、日本へ36回使節(ないし34回、35回)を派遣し、日本からも渤海へ13回使節を送っている。通常の海外使節は大宝律令以来、筑紫大宰府で入国し、難波津に向かうルートをたどったが、渤海使は出羽・能登・山陰と来日場所も異なっていた。およそ200年の間における渤海使のルートについて議論がある。大きくは、渤海から朝鮮半島東岸沖を南下するルート、日本海を日本まで直行するルート、北回りで樺太から北海道沖を時計回りに日本海沿岸を南下するルートが想定されてきた。それぞれのルートの妥当性について、航海船の技術的側面、8～10世紀における地球温暖化と冬季の不凍港問題、東アジアにおける政治的緊張関係などが論拠とされてきた(上田 1992; 古畑 1994; 上田・孫 1994; 古畑 2017)。前節の日本海における海流についてふれた部分でも、対馬海流の分枝と航路との関係や季節風と航路は重要なかわりがある。出帆時期については、遣唐使の場合とおなじく、元旦の朝賀に参列するために9～10月に限定される場合、朝賀参列がなされない場合とでは航海時の風の状況はたいへん異なる。渤海使の場合、政治的な問題として、朝鮮半島東部沖を南下する場合の新羅との敵対関係や、北ルートで北海道沖を南下する場合、日本によるアイヌ(蝦夷)征伐時期と重なったことから、航海の安全面で忌避された可能性が指摘されている。古畑は、渤海—日本の航海ルートを時代別に分け、おもに7類型として示している(古畑 2017: 95-198)。

渤海使の来日ルートは遣唐使船の航海ルートの変容とも連動しており、遣唐使船が渤海経由を取ったこともあった(上田 1997)。

エ) 亡命と侵略

『三国史記』「新羅本記」には、初期の記載の史実性に問題があるが、紀元193年大飢饉のために千人余りの倭人が新羅に渡来したとある。後代の統一新羅時代(668-900)の8世紀中葉(745-750後半)、新羅国内の飢饉や疫病蔓延で日本に亡命する人民が増えた(田中 2022: 35)。

一方、白村江の戦い(663年)で唐・新羅連合軍に敗北した倭国にとり、新羅・唐の侵略は脅威であり、じっさい対馬や北九州が頻繁に襲われている。『三国史記』によれば、天平3年(731)年「日本国の兵船300隻が海を越えて、(新羅)東辺を襲う」とか、天平宝宇3年(759)

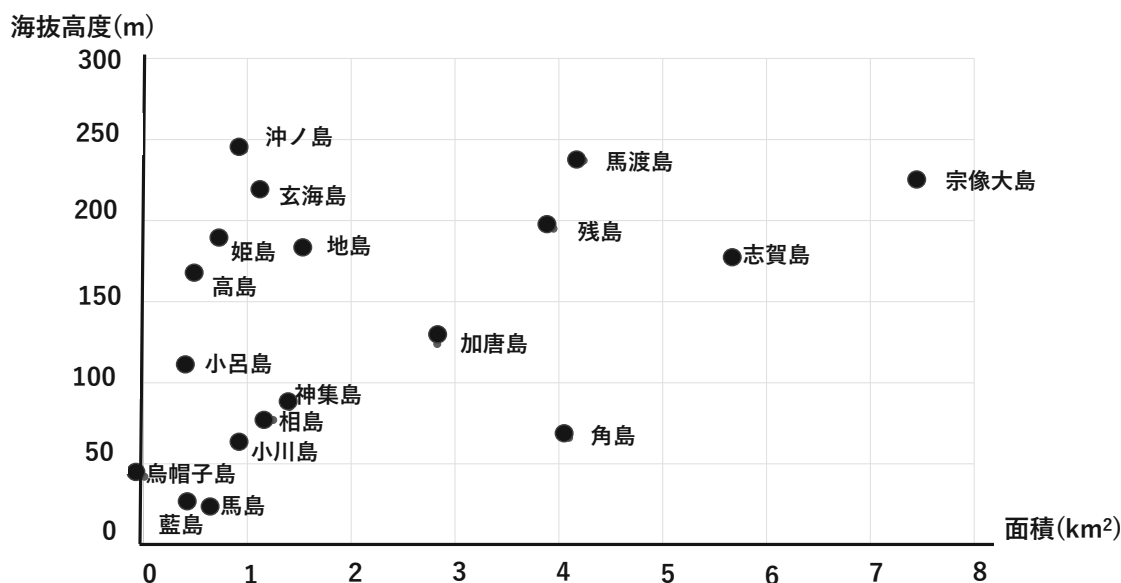


図17：玄界灘における離島の面積と海拔高度

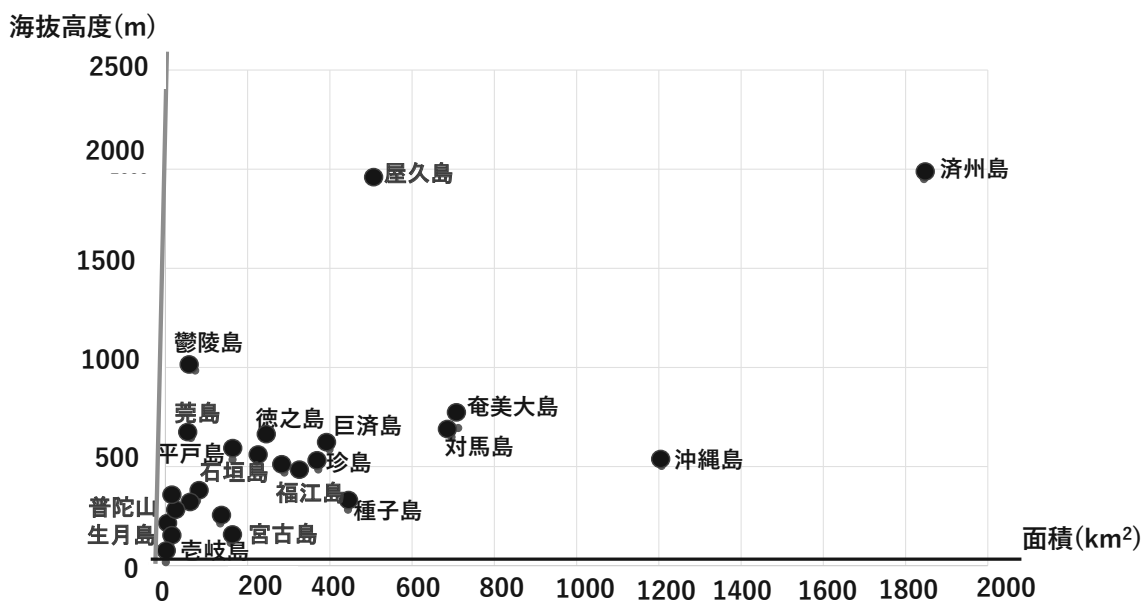


図18：東シナ海・日本海西部における島嶼の面積と海拔高度

新羅が日本の使節に無礼があったとして、藤原仲麻呂は軍船394隻、兵士47,000人を準備する計画を立案した。軍船や亡命に使われた民間船は中・小型船のくり船や準構造船であっただろう。

オ) オーシャン・ジオ・ポリティックス

サハリンから台湾までを含む広域の東アジア海域世界における航海は、古代の冊封体制と密接に関わっており、海洋に着眼した地政学（オーシャン ジオ・ポリティ

クス）の課題でもある。これを海の文明論の東アジア版として広く位置づけたい（川勝 1997；ブローデル 2004；秋道 2016）。

3) 沿岸航法とヤマタテ（ヤマアテ）

ここでは、玄界灘を例として海から見た九州の山やまや、九州本土から見える島の位置づけ方について例示したい。

ア) 玄界灘のヤマタテと航海

玄界灘の離島と、東シナ海・日本海西部における島嶼の面積と海拔高度について、図17と図18に示した。沖ノ島や宗像大島、玄海島、鬱陵島、濟州島、莞島、巨濟島、珍島などは「高い島」である。

日本の航海では、陸地を見ながらの「地乗り」航法と陸地の見えない「沖乗り」航法がある（北見 1986:233-243）。前者では海上から2、3方向にある目標物を見て自船の位置を探るヤマタテの慣行が広く知られている（柳田・倉田 1975）。沖乗りでは、太陽・月・星座・雲などや海鳥・魚などの天体・大気・海洋現象が利用された。

一方、明治期の農商務省に登録された地先・慣行による専用漁業権『原簿』の登録は全国で5,467件あるが、「専用漁業漁場図」のないものもある。しかし、ヤマタテを使った漁場図が特異的に福岡県の事例に図示されている（秋道 2021）。明らかにヤマタテによる方位の確認がなされたことは全国各地の「専用漁業漁場図」の文面からも読み取れる。明治漁業法成立前の明治初期～中期の玄界灘における漁業関係文書にはヤマタテの図が頻出する（たとえば、『奈多浦漁協文書』1878）。これらの文書では漁業紛争や入会の申し合わせを扱っており、当時、境界裁定にヤマタテが論拠とされたと考えられる。

イ) ヤマタテとシマ（島）タテ

漁場策定の原理について整理しておこう。

第1は島の場合で、最大高潮時の海岸線から一定距離沖合まで延ばした線で囲まれた海域を漁場とするものである。『原簿』では、「最大高潮時海岸線ト同線ヨリ沖合〇〇間（〇〇m）トニ依り囲マレタル区域」と記載されている。その距離は福岡県の相島では1090.9m（600間）（図19）、姫島で872.7m（480間）である。

第2は、九州本土側の沿岸における専用漁業漁場を一定の沖出し距離で策定する場合で、最大高潮時の海岸線に平行して沖出した範囲が漁場の外縁となる。海岸線における境界は郡・村・大字など行政上の領域区分に依拠する場合が多い。博多湾の例では石堂川河口左岸から西公園荒津山の荒津崎までの沖合80間（145,44m）以内が漁場であったが、江戸期に西崎の向かいに鴻臚館があり、周辺の埋め立てにより大きく変貌している。博多津が古代の潟湖に立地した点に注目しておきたい（本書の笹生論文を参照）。

基点からの沖出し線の方位は、新宮浦では沖合の相島と小呂島が目安とされている（図20）。沖に見える島の中央部や2つの島の中間点の方位を基準にするもので、これは見える島による方位確認法であり、「シマ（島）タテ」という概念を提起しておきたい。シマタテでは、遠方の島の中央部や左右端、二つの島の中間点などが方位を決める目安となる（図21）。

もう1例、糸島半島の野北浦漁業協同組合の場合、乙点の三瀬岬から沖合の燈台瀬（ロ点）までの方位と距離は自動的に決まる。甲点の大戸鼻から沖出しの方位と距離は、沖合に見える小呂島と烏帽子島の間の中間点と大戸鼻を結んだ線と、唐津湾内の高島と姫島のシマタテによる対景の見え方の線との交点が図のイ点で、甲、イ、ロ、乙を結んだ海域が漁場となる（図22）。

第3は、島の周囲、島から離れた海域、ないし九州本土から沖出し海域を矩形で囲んだ海域が専用漁業漁場となる場合である。福岡県では、玄界島、志賀島、大島、沖ノ島、藍島、馬島、小呂島などの例がある。

沖ノ島では島の甲乙丙の3点からイ～ホの5地点に至る沖出し距離はいずれも5454.5m（3000間に相当）である（図23）、小呂島では島の4点（甲・乙・丙・丁）から東、南、西と331度の方向に甲と乙から1963m、丙と丁から5890mの距離の基点（イ・ロ・ハ・ニ）を結んだ線の内側と島の最大高潮線で囲まれた海域を指す。1963mの約3倍が5890mに相当するが、間（1間=1.818m）で計算しても妥当な間数とはならない（図24）。いずれも島の周囲にある基点の方位の決め方が不明である。

これにたいして、宗像大島や藍島の場合、漁場範囲の外縁となる複数の基点から2ないし3方向に見える島や山の形状と名称が「対景」として図示されている。つまり、漁場範囲を示す基点はヤマタテにより決められる対景に、島と島の重なり具合（シマタテ）と九州本土のヤマタテが図示されている。

宗像大島の場合、島の周囲にある3つの瀬、1つの曾根とほかに5基点の合計9基点を結んだ矩形が漁場となっている。9基点はそれぞれ2、3方向に見える対景が漁場図に図式化されている（図25）。

たとえば、現在は無人島の勝島（草崎半島の北西沖にあり、半島の根元に鐘崎がある）と織幡山の重なりが図にある。この織幡山は織幡神社のある佐屋形（小屋形）

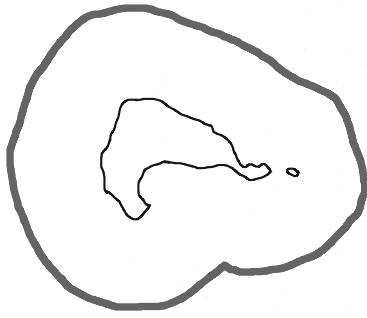


図19：相島の専用漁業漁場図(C5149)。
最大高潮時の海岸線から沖出し600間 (1090.9m)。Cは「地先漁業権」、数字は登録番号。

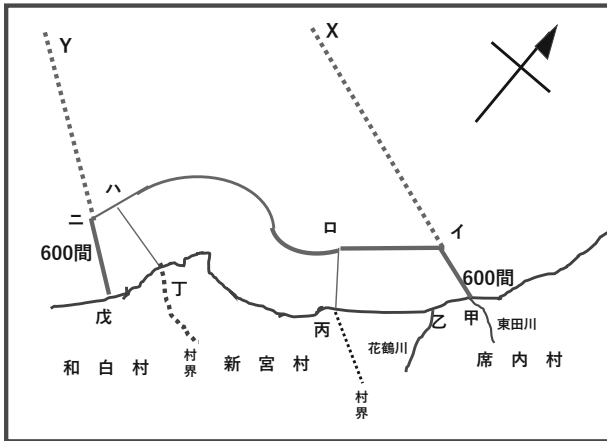


図20：新宮浦における専用漁業漁場 (K2725)。
方位X：「甲ヨリ相島中央見通線上」
方位Y：「戊ヨリ相島ト小呂島トノ中央見通」
Kは「慣行漁業権」

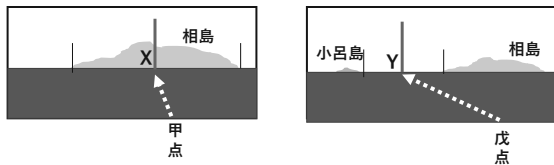


図21：新宮浦の専用漁業漁場図で方位の基礎となる沖合の島を使った「シマ(島)タテ」。
Xは甲点から見た相島の中央見通し方位
Yは、戊点から小呂島ー相島間の中央見通し方位

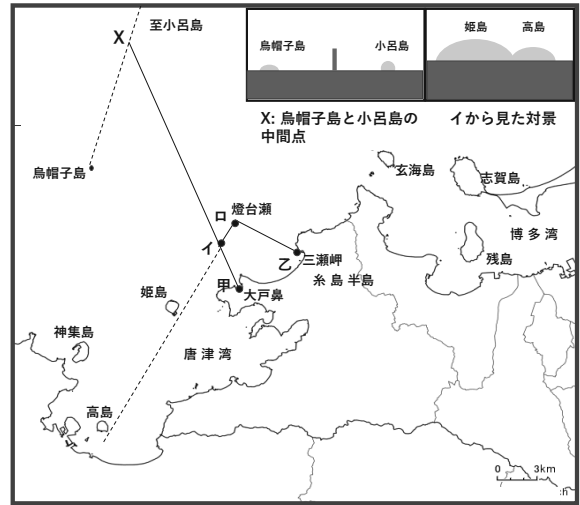


図22：糸島半島・野北浦村における専用漁業漁場図(C2707)とシマタテ。
小呂島、烏帽子島、姫島、高島が基点の方位を決めるうえで参照されている。

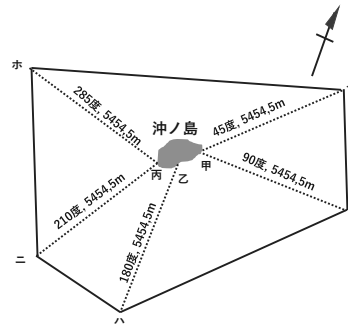


図23：沖ノ島における専用漁業漁場図(C5125)。
島の基点、甲乙丙から周囲の基点までは等しく5454.5m (3,000間)で、イは北東、ロは東、ハは南を指す。しかし、ニとホの方位の決め方は不明。

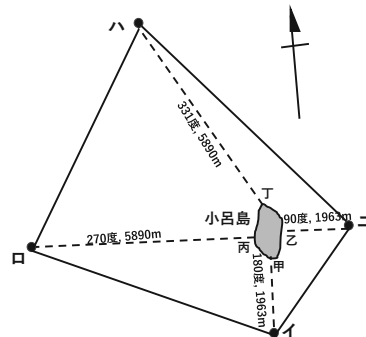


図24：小呂島の専用漁業漁場図 (C5117)。
島の基点甲乙丙丁から周囲のイ、ニの距離が1,963m、ロ、ハがその約3倍の5,890mである。ニが東、イが南、ロが西と方位が明瞭だが、ハは331度である。

山 (53.4 m) である。宗像大島でヤマタテ・シマアテに用いられた山と島の一覧を表2に示した。

藍島の場合、7基点 (甲、乙、丙、丁、戊、己、庚) により囲まれた海域が漁場となる。これらの7基点から藍島、男島、女島、六連島や、北九州の戸ノ上山 (517m)、鬼が城山 (620m)、下関の権現山 (317m)、数ヶ所の燈台がシマタテ、ヤマタテに用いられている。標高と位置が不明の櫛ノ山、老ノ山、呼ノ山などがあった。紙面の関係で詳細は省くが、玄界灘では島嶼や北九州の山やまを見て漁場が決められていたことは明らかであり、この伝統が古代までさかのぼる可能性は十分にあるといえよう。

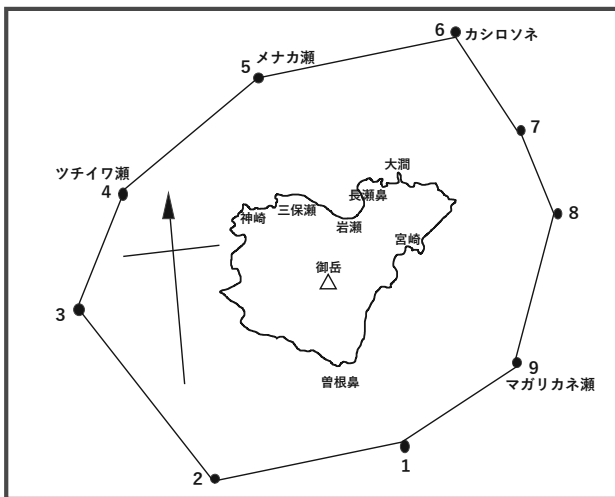


図25：宗像大島における専用漁業漁場図 (K2039)。

帆柱山 (488m)
在自山(あらじやま)(235m)
丸山 (75m)
宮地岳 (172m)
孔大寺山 (こだいしやま) (499m)
薬師山 (54m)
立花山 (367.1m)
許斐山 (このみやま) (271m)
佐屋形山 (織幡山) (53.4m)
大岳 (地島) (41m)
小岳 (地島) (21m)
樽見山 (垂水峠?) (403m)
鳶郷山 (不明)
カリマタ山 (不明)
山田山 (不明)

宗像大島
地島
玄海島
勝島
彦島
志賀島
鼓島

表2：宗像大島における明治期の専用漁業漁場の設定で「ヤマタテ」に用いられた山と標高 (m) (左) と「シマタテ」により用いられた島 (右)。

ウ) 大陸との航海ルート

玄界灘では、沖ノ島への航路は宗像から宗像大島を経て直線上にあり (方位314度)、島における祭祀のためと島の周囲における漁撈のために航海がおこなわれた。

福津市の対馬見山 (243m) からは沖ノ島、壱岐、対馬を望むことができる。一方、対馬の厳原町久田・向山 (181m) から沖ノ島を見ることができる。対馬北端の千俵葺山 (287m) から釜山や巨済島などの朝鮮南部を一望できるし、対馬南端の豆酩崎 (約69m) から壱岐や松浦的山大島を展望できる。

大陸への航路としては、沖ノ島を経由するよりも、九州沿岸を西進して唐津周辺から壱岐、対馬経由で渡海するルートが万全であった。遣唐使船時代、本土から対馬東岸のこぶなこしうら小船越浦に至り、180mほどの地峡を越えて浅茅湾西岸のにしこのいで西漕出に至るルートが使われた。そのさい、小船はかついで、大きな船の貨物は西岸の別の船まで輸送された。浅茅湾は多くの入江をもち、後代、倭寇の根拠地ともなった海の要塞でもあった。もっとも近世期の朝鮮通信使の場合、朝鮮半島南端から最短距離にある対馬北端の鰐浦ないし佐須奈、東岸の琴、小船越、厳原、相島経由で下関から瀬戸内海を経て大坂、江戸に至るルートが利用された。鰐浦北には岩礁が多く、最大の難所とされ、元禄16年 (1703)、訳官船が沈没し、100名以上が犠牲となった。時代により、大陸と列島の航路は大きく変わった点に留意すべきであろう。

(4) 航海の目安と漂流物・海鳥

島嶼の可視性 (visibility) の議論では、東南アジアからオセアニアへの植民における島の探索をめぐり、陸地起源の漂着物 (流木・果実・軽石)、火山爆発、夜間における空の色、海鳥の飛来などが目安と考えられてきた (Lewis 1975)。東アジア海域では、とりわけ島に帰巢する習性をもつ海鳥のなかで温帯と熱帯を回遊するオオミズナギドリ (*Calonectris leucomelas*) が注目される。この鳥は2、3月日本に飛来し、繁殖後、11~12月に南へ移動する。カタクチイワシなどの小魚やオキアミ、イカ類を捕食するが、索餌後、島への帰巢時間が決まっており、きわめて正確な飛翔能力をもつ。日本では玄界灘の沖ノ島、隠岐諸島の星神島・沖ノ島、若狭湾の冠島、新潟県の粟島、津軽海峡域の渡島大島、岩手県三願島、

伊豆の御蔵島、八重山諸島の仲御神島が繁殖地である。韓国では、朝鮮半島南西部の東シナ海に面する泗水島ジャンスドに大繁殖地がある。オオミズナギドリは群れで生活し、大群で索餌する(図26)。宗像の漁民はこの鳥を「オガチ」と称し、魚群をねらうオガチ漁の目安とする。沖ノ島が漁撈の目安とされたことは明らかである。

海鳥の飛ぶ方向は帰巢する島を知る目安とされるが、種類により当てにならず航海者をだます海鳥のいることをミクロネシアの航海者は心得ている。シロアジサシは当てになるが、グンカンドリ、クロアジサシ、ネッタイチョウなどは当てにならないという(Lewis 1975)。カロリン諸島のサタワル島民は後者の海鳥をマンニ・ファエイソップ(manni faaeisoapw)（「嘘つき鳥」）と呼んでいる。

流木や流れ藻、南方からのココヤシやタコノキの実などの漂流物や遊泳する鯨類・魚類も航海の重要な目安とされてきたが、こうした海洋現象の記録は歴史文献にほとんどない。一方、海岸への漂着物については、前述した流木以外に寄り藻(畑作肥料用)や寄り鯨・漂着鯨が広く利用されてきた(石川 2003)。

玄界灘は鯨類の回遊路にあたり、平戸瀬戸(図1)にある縄文時代早期のつぐめのはな遺跡から石鈿やスクレーパーが出土しており、捕鯨や鯨類解体に使われたとされている(長崎県教育委員会 1986)。土器製作の土台として使われた阿高式土器の九州における広域分布もよく知られており(三島 1961; 金田 1998; 秋道 2009; 中園・安永 2009)、有明海でも寄り鯨が利用されたと推定されている(川道 2007)。

2. 航海安全祭祀と海の信仰

宗像・沖ノ島の世界遺産では、「航海安全」を祈願する祭祀自体、岩上祭祀から露天祭祀に至る変容が指摘されている。だが、航海安全に関する儀礼は沖ノ島の国家祭祀だけに限局されるわけではなく、東アジアを広く俯瞰して考える必要がある。

航海安全儀礼は、海に生きる人びと(海人)や航海を差配する首長・権力者により連綿と営まれてきた。祈る対象は海洋における自然の脅威をもたらす、もしくは鎮める力をもつカミにほかならない。玄界灘には航海安全

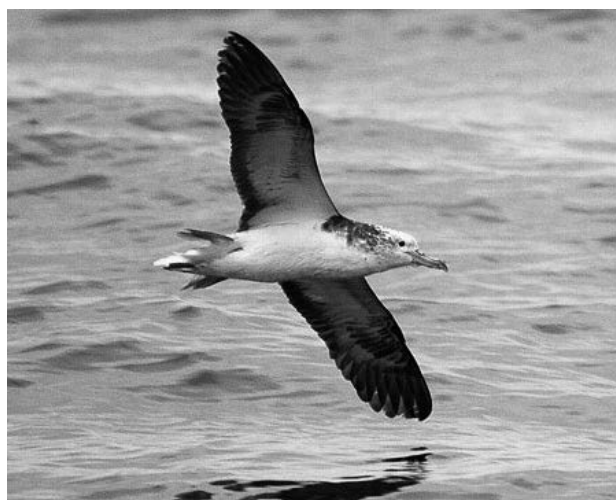


図26: オオミズナギドリ (*Calonectris leucomelas*)
オオミズナギドリ | むなかた電子博物館 (munahaku.jp)

に関わるカミが集中している(宗像市史編纂委員会編 1999)。また、航海が交易や漁撈だけでなく、軍船による侵略・征服を意図した場合(白村江の戦い、磐井の乱、新羅の寇、元寇)(笠井 1975; 松枝 1993)や戦渦や飢饉を避ける亡命のためであった点にも注意を払う必要がある。

(1) 航海安全の神—宗像三女神・綿津見神・住吉神

北九州では、航海神として宗像三女神、綿津見神、住吉神の存在が指摘されてきた(水野 1975a, 1975b)。

ア) 宗像三女神

沖ノ島における国家的な航海安全祭祀の対象は、宗像大神、道主貴みちぬしのむちの宗像三女神である。

沖ノ島で国家的祭祀の始まる4世紀後半以前における航海安全祭祀については、武末純一による整理がある(武末 2011)。沖ノ島で岩上祭祀がおこなわれた同時代、宗像を中心とする地域の祭祀については、小田富士雄がまとめている(小田 2011)。弥生期から古墳時代にかけての祭祀儀礼の変容過程を上田正昭は、以下のように述べている。

「沖ノ島の祀りは、もともと在地の海人集団の島神であり、やがて在地の有力氏族宗像君らの奉斎神となり、倭王権との結合もあってついには国家的な海神へ昇華したとするほうがより妥当ではないか。」(上田 1988:20)。

イ) 綿津見神

古代の北部九州では、海人を司る安曇(阿曇)氏が海

上を支配していた。志賀島は海上交通の要衝にあり、安曇氏が本拠地として朝鮮や中国との交流をおこなった。志賀島の志賀海神社は、全国の綿津見神社の総本社である。志賀海神社では、住吉三神とともに出生された底津綿津見神・仲津綿津見神・表津綿津見神の綿津見三神が祀られている。周知のとおり、「綿」は古語で海を指し、韓国語のバダ（海）に由来する（任 1990: 118-121）。

安曇氏の氏神は綿津見神であるが、安曇族の始祖である安曇磯良神（阿度部磯良）とする説もある。志賀島神社の社伝によると、「神功皇后が三韓出兵のさいに海路の安全を願い、阿曇磯良に協力を求めた。阿曇磯良は熟考の上で承諾して皇后を庇護した」とある。室町期の『太平記』によると、阿度部磯良は龍宮から潮の満ち引きを自由に差配できる潮盈珠・潮乾珠を皇后に献上した。そのおかげで神功皇后は三韓出兵に成功したとされている。

綿津見神社は全国に852社あり、福岡県（130）・佐賀県（61）・静岡県（56）・熊本県（53）・高知県（46）・愛媛県（44）・岡山県（39）・長崎県（36）と西日本に半分近くある。福岡県では、御祭神を綿津見神とする場合は多いが、神社名は綿津見神社のほかにも和多津（都）美神社、海童神社のほか、志賀海神社、志賀神社などがある。安曇氏は白村江の戦で派遣された倭の水軍でも重要な役割を担ったとされている（笠井 1975）。

ウ) 住吉神

住吉三神は、『日本書紀』には底筒男命・中筒男命・表筒男命とある。『古事記』では筒之男命となっている。この筒について諸説がある。古語で「つつ」が星を表すとか、オリオン座の三ツ星に相当するとかの星座説や、対馬南部の豆殿と同音であることによる地名説、「つつ」を津や港をつなぐパイプ説などがある（亀山 2012: 12-49）。綿津見神が縄文時代にさかのぼる外来神で、住吉系の筒男命は弥生時代以降の神で時代も新しいと考えてよい。

宗像三女神、綿津見神、住吉神を通覧すると、宗像三女神と住吉神は航海神であるとともに軍神の性格を持ち、地域の祭神が国家的な祭祀の神に昇格された性格が強いのにたいして、綿津見神は漁撈神としての性格が強い点が大きな違いであろう（本馬 1976: 103-115）。

エ) 海と山をつなぐカミ

ここで、海と山のつながりについての例を5つ挙げよう。志賀海神社では、毎年「山誉め祭」という神事があり、志賀島南部にある志賀三山（衣笠山、御笠山、勝山）で、春の「山誉種蒔漁獵祭」（4月15日）、秋の「山誉漁獵祭」（11月15日）を挙げる。祭事は海を守るためにも山を尊重する意味が込められている。

神功皇后が三韓征伐に向かうさい、船の帆柱に用いる木を伐ったとされるのが標高488mの帆柱山（福岡県北九州市八幡）である。山の九合目で熊野神を祀り、高見ノ宮と称せられ、戦勝を祈願された。のち遷座され、名称も鷹見神社となった。

隣接する皿倉山（622m）も神功皇后とゆかりがあり、皇后が山に登られ眺望をご覧になり、下山するさいに「更に暮れたり」といわれたことが皿倉山の名の由緒とされている。

帆柱山の海側にある日峯山（114m）の日峯神社は、社記によると貞観2年（860）9月、隠岐島・焼火山神社の祭神である大日靈貴命を日峯山山上に勧請し、彦火々出見命と火酢芹命の二柱の神を御鎮斎したのがはじまりである。

大日靈貴命は海上交通の安全を祈願する神として祀られている。

玄界灘に面する渡半島北西部の海岸部に祀られる楯崎神社がある（福岡県福津市）。御祭神は大己貴神・綿津見神・少彦名神であり、社名は海外からの異族が来襲したおり、大己貴神とその妃の宗像大神が楯を立て、鼓を打ち鳴らして敵を破ったことに由来する。裏山にある奥の院の薬師神社には巨大な神体石がある。下部は洞窟の祠があり、この岩陰で祭祀がおこなわれたとされている。この山は薬師岳で、かつて楯崎山と呼ばれた（108m）。山頂からは沖ノ島をのぞむこともできる。『宗像社記』には、神功皇后が三韓より帰り、船が着いたのが渡半島北部の東側にある京泊海岸であり、楯と弦のない弓を蔵められた場所が楯崎山であるとしている。楯崎神社の相殿に飛龍権現（神功皇后）を祀る由縁である。平安時代、唐に赴く最澄が薬師阿弥陀観音像を寄進したとき、古代には重要な神社であった（図27）。

オ) 多様な海の神

民間信仰を含めると、九州・瀬戸内海には宗像系、安曇系、住吉系以外に、大山祇系、金毘羅系、恵比寿系、

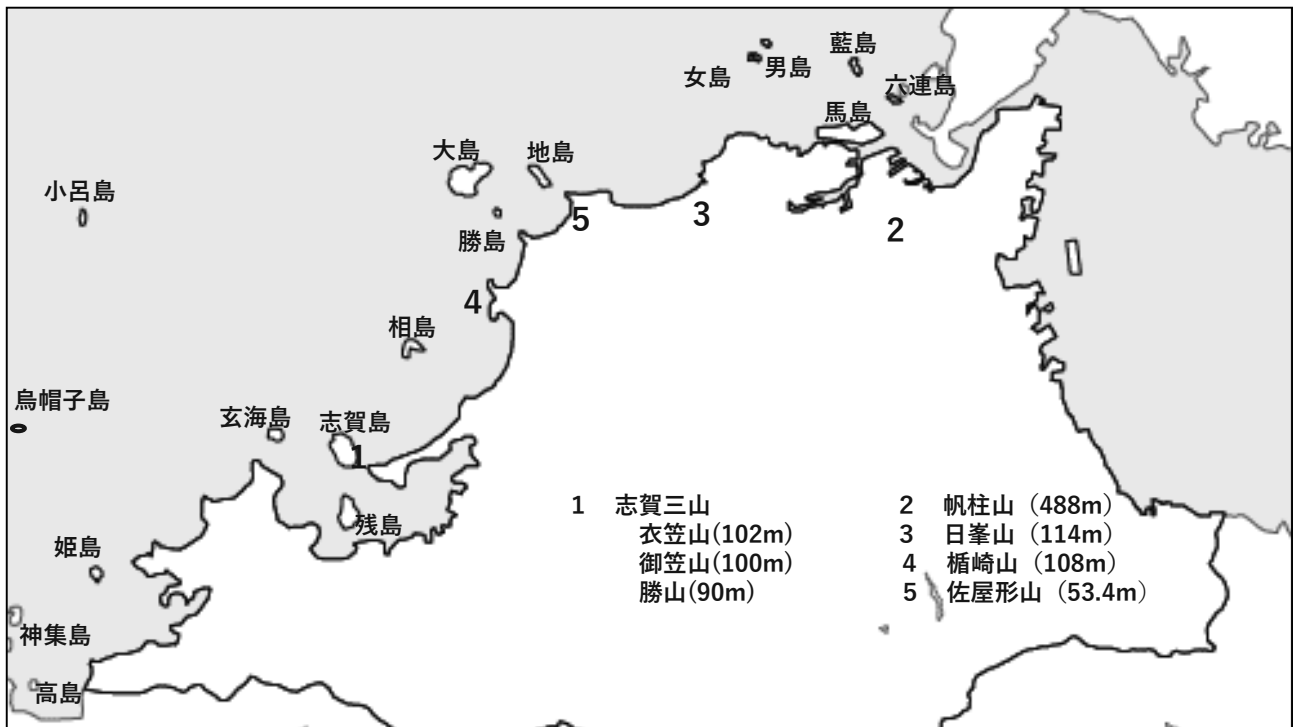


図27 玄界灘における海岸部の山

龍神系の信仰がある（刀禰 1990；楠本 1993）。

大山祇神社のある大三島（愛媛県越智郡大三島町宮浦）は瀬戸内海海運の要衝地である。戦国時代以降は海の神、武神、軍神として多くの武士の信仰を集めた。対馬の曲（厳原町）にある山住神社の拝殿に宗像の織幡神社の写真があり、曲と鐘崎の関係を示唆しているが詳細は不明である。

讃岐国西部の象頭山（538m）は山容が象の頭に似ている。象頭山松尾寺普門院の縁起によると、大宝年間に修験道の役小角が象頭山に登ったさい、天竺毘羅靈鷲山に住む護法善神金毘羅（クンビーラ）の神験に遭ったのが開山の由来であり、神仏習合の過程でこれが象頭山金毘羅大権現に、本地仏は不動明王とされた。インドにも山容が象頭に似た伽耶山（ガヤーシールシャ）がある。クンビーラはガンジス川の女神ガンガーの乗り物とされ、日本では海運に従事する船乗りの信仰をえた。香川県の金刀比羅神社は全国に約600社ある金比羅神社の総本山である。

宗像にある金刀比羅神社（福津市在自）は、江戸時代の享保元年（1716）、僧大澄が讃岐の金毘羅宮に参詣し、金毘羅大神を勧請した。当時、寛文12年（1672）西廻り航

路が河村瑞軒により開拓されて以降、糸島では五ヶ浦廻船（今津・唐泊・浜崎・宮浦・残島の業者が担当）が活躍した時代であり、筑前における廻船業者らの信仰を集めた（楠本 1993）。

恵比寿神を漂着神ないし漁業の神とする地域は多い。玄界灘は日本海におけるクジラ・イルカの回遊路に当たる。玄界灘の沿岸域における漂着物については、石井忠が詳細な収集と記録を残している（石井 1977）。宗像大宮司・興氏の時代（室町期）、海に浮かぶ翁面が収集され、その後、宗像大社の神宝となった。現在も、宗像大社では秋の大祭に奉納される舞に翁面が使われている。

龍神については竜宮伝説とのかかわりから漁神とされている。宗像では、大島や神湊に竜宮様（リュウゴンサマ）を祀る社がある（楠本 1993）。

（2）航海安全の祭祀と奉献・儀礼

航海安全祭祀を、航海前（プレ：pre）・航海中（インター：inter）・航海後（ポスト：post）にわけ、その形態と異同性を検討した。

ア) 沖ノ島の祭器

沖ノ島出土の銅戈（矛）（弥生時代中期前半）は、韓

カボドン
 国慶尚南道昌原市馬山合浦の馬山湾口にある架浦洞祭祀遺跡で発見された同時代の細形銅戈（173mm先端部欠損）と類似する。しかも、銅戈は岩の間に差し込んだ状態で見つかっており、沖ノ島の出土状況に酷似している。架浦洞遺跡は馬山湾口にあり、航海安全祭祀がおこなわれ、沖ノ島でも同様な航海祭祀があったとみなされている（武末 2011）。沖ノ島の細形銅戈は、戈身部と袋部の境に左右2個ずつ突起をもつ。類似のものは、架浦洞遺跡以外に蔚山市校洞里遺跡1号墓でも見つかっている。

銅戈は当時、重要な武器であり財でもある「権威と力の源泉」とされており、祭器である銅戈をカミに奉獻することで祈願を成就するいとなみと考えられる。また、航海のさいに遭遇する嵐や悪天候をちらす（to disperse）カウンター・マジックの機能を鋭い穂先をもつ銅戈に託したのではないかと。

沖ノ島では、のちの国家的祭祀のなかでじつに多様な祭祀品が奉獻されている。とくに注目すべきは、6～7世紀にそれまでの古墳の副葬品と共通する奉獻品（鏡・勾玉・鉄刀など）から、祭祀のために作られたものが増加する点である。ちょうど、岩陰祭祀の終わり頃（22号遺跡）から半岩陰・半露天祭祀（5号遺跡）、さらに8～9世紀の露天祭祀（1号遺跡）にかけての時期に相当する。たとえば、金銅製の紡織具や琴、祭祀用土器などのほか、滑石製の人形、馬形、船形などのミニチュア（形代）が含まれている。船形はくり船型の簡素なものであるが、外洋航海船を意識したものであろう。馬形は鞍をつけたものと裸馬とが100例以上あり、神の乗り物として神馬を奉獻したものとおもわれる。雨乞いに黒馬を、雨止めに白馬・赤馬を奉納するならわしが京都の貴船神社にあるが、農耕の五穀豊穡とは別に航海における好天候や霖雨を祈願したのではないかと。滑石は光沢のある白色で硬度1の鉱物で加工しやすい（ $Mg_3Si_4O_{10}(OH)_2$ ）。滑石製の船形は沖ノ島だけでなく、大島の御嶽遺跡や宗像大社のある下高宮遺跡からも出土しており、航海の安全祈願を航海前に祈願するプレ段階の祭祀を例証する発掘品である（図28）。

イ) 生贄

航海中に生贄（sacrifice）を捧げる祭祀がある。『魏志』倭人伝の東夷条に、航海する船に持衰、ないし生口（奴隸・捕虜）を同乗させたのがその証である。持衰は航海



図28：沖ノ島出土の滑石製「船形」(左)と「馬形」(右)

安全のための生贄であり、首尾よく航海が成功すればよいが、不首尾の場合、持衰は犠牲になった。これはまさに航海中の祭祀行為といえる。

ウ) 祭具の投棄

海上で鏡を海に投じて海神に航海安全を祈ることがあった（兪 2012）。時代は下るが、海中に仏像を投じて祈願成就を図る慣行は、仏教界でもある。中国浙江省・舟山列島にある普陀山は、中国四大仏教名山（五台山、九華山、峨眉山、普陀山）の一つであり、補陀落渡海の地として知られる。

普陀山の開祖は日本の僧、恵尊^{えがく}で、平安時代前期に何度も入唐した。恵尊は前述の五台山に至っており、大中12年（858）、寧波を出て五台山から招来した観音像を日本に持ち帰ろうとしたが、普陀山のすぐ沖の新羅瀬で行く手を阻まれた。これは観音が日本に行くことを拒んだものとされる。恵尊は島の南東部にある潮音洞から普陀山に上陸し、島に観音像を安置した。これを契機として観音は「不肯去」観音と呼ばれ、普陀山に多くの信者を集めるようになった。

恵尊が安置した観音像は現存しない。恵尊以前にも、天平勝宝4年（752）に入唐した第12次遣唐使船が翌年に帰国するさい、浙江省明州（寧波）から途上、普陀山に立ち寄っている。この船には鑑真が同乗していた。

元代にモンゴル勢力が舟山列島に至り、その後も明国の海禁政策下、舟山諸島一帯は16世紀中葉以降、後期倭寇による密貿易が蔓延した。普陀山でも倭寇による攻撃は絶えず、明国は島に来る僧侶を排除し、仏像も寧波方面に移していた。それでも、僧侶たちは全国から普陀山を目指した。かれらは島の南東部にある潮音洞で観音菩薩が出現するとして修行し、潮音洞に金銀の仏を投げ入れ、血が出るまで岩に頭を打ち付けて行を重ねた（図29）。なかには、自らのいのちを絶つ「捨身」をおこなう僧もいた（石野 2005）。



図29: 浙江省舟山列島・普陀山。
南端にある潮音洞は、仏僧の修行の場（左）と観音菩薩像（右）

エ) ト骨・陰陽師・託宣

シカやイノシシの骨（肩甲骨・下顎骨など）を焼灼してその割れ方から吉兆を占うト骨の慣行が弥生時代から古墳時代にあり、九州では原ノ辻遺跡・カラカミ遺跡（長崎県壱岐市）、牟田寄遺跡（佐賀県佐賀市）など弥生時代中期の例がある（國分 2014）。同時代、朝鮮半島の慶尚南道泗川市海岸部小島の勒島にト骨の集積遺構があり、勒島が当時の国際港であったことからして倭のト占の起源地と目されている（金 2002）。また、全羅南道海南郡群谷里貝塚からも80点近くのト骨が出土しており、勒島遺跡以前ではもっとも多い（木浦大学校博物館全羅南道・海南郡 1987；渡辺 1995）。国内で最大数のト骨を出土する青谷上寺地遺跡のト骨は韓国江原道江陵市の江門洞遺構のものと類似しており（紀元前2世紀）、日本海を越えた交流が想定されている（北浦 2002）。海岸部に多いト骨習俗は、農耕重視ものではなく航海安全や海洋気象が占われた可能性がある（渡辺 1995, 2002；金 2002）。ト骨祭祀は航海の前段階のものであることは明らかだろう。

オ) 船霊への祈り

航海安全を祈る対象として、沖ノ島三女神への信仰の前駆段階で、船と航海安全を祈願する対象としての「船霊」（フナダマ）についてふれておこう。天平宝字6年（762）、嵐にあった遣渤海使船が能登で、無事の帰国を船霊に祈ったとする記載がある（『続日本紀』巻24、天平宝字7年8月壬午（12日）条。この船霊は女性のカミであり、航海安全を守るのが女神であるとする民俗信仰があったと考えたい。しかも、船に人形、銅銭、航海者の姉妹の毛髪、五穀などを船の柱の下部や機関部に安置

し、一種の魔除け・お守り的な役目を果たした民俗例がある。筆者も長崎県国東半島多比良のバッシヤ船（朝鮮通漁に参画した最後の木船で、アンコウ網を積載。国立民族学博物館収蔵）の機関部に毛髪を安置する例を確認している。呪物として女性の毛髪を航海安全儀礼に使う事例は沖縄のオナリ信仰や南中国の媽祖信仰に通底する。

さらに船自体にたいする叙位もおこなわれた。たとえば、遣唐使執節使（大使より上位）であった粟田真人の乗船した佐伯船が無事に往復航海を達成したことで船に従五位下の位階が慶雲3年（706）2月22日に授けられた。先述した鑑真らの乗った遣唐使船2隻も無事帰還したことで天平勝宝6年（754）に従五位下の位が授けられた。同様に能登でも遣渤海使船が無事航海を達成したことで天平宝字7年（763）に従五位下の位階と錦冠を授かっている。これは航海後における祭祀の実例といつてよい。

カ) 『万葉集』に見る航海安全への思い

航海安全の祈願は祭祀を通じてだけおこなわれたわけではない。『万葉集』に航海の無事を祈る歌が長歌を含めて23首ある。

『万葉集第十九巻4243』に天平5年（733）、丹比土作による歌がある。

「住吉尔 伊都久祝之 神言等 行得毛来等毛 舶波早家<无>」（住吉に齋く祝が神言と行くとも来とも船は早けむ）

住吉大社の祝による住吉大神の託宣で、（遣唐使）船は行きも帰りも速く進むという。

『万葉集第十九巻4240』には、光明皇后が天平勝宝3年（751）、甥の藤原朝臣清河に賜った歌がある。

「大船尔 真梶繁貫 此吾子乎 韓國邊遣 伊波敵神多智内」（大船（おほぶね）に、楫（まから）しじ貫（ぬ）き、この我子（あこ）を、唐国（からくに）へ遣（や）る、齋（いは）へ神たち）

立派な櫓舵をたくさん取り付けた大きな船で、甥にあたる藤原朝臣清河を唐に派遣するが、どうぞ航海の無事をカミに託します。

天平勝宝4年（752）閏、藤原朝臣清河らを難波津で送るさいの孝謙天皇の御歌がある（第十九巻4265）。

「四舶 早還来等 白香著 朕裳裙尔 鎮而将待」

(四つの船早帰り来としらか付け我が裳の裾に齋ひて待たむ)

4隻(大型船)の(遣唐使)船の早期帰還を、裳裾に香を焚いて、祈りながら待ちましよう。

奈良の王府や難波津での王族の航海安全祈願の思いが歌に詠まれている。

キ) カロリン諸島の航海安全策

民族誌例であるが、ミクロネシア・カロリン諸島一帯ではエイの鋭い尾鱗を取り付けた航海安全の守護神の人像プワニプアワン (*pwaniipwan*) を航海術の熟練者のみもつことができた。ふだんは、カヌー小屋の上部から吊り下げておかれる(図30)(土方 1975)。筆者自身も、カロリン諸島サタワル島の航海熟練者から、嵐のさいにカヌー上でエイの鋭い棘を先端に取り付けた槍を天空に向かって突き立て、嵐をもたらす雨雲を晴らす儀礼行為をおこなったことを聞いている。

また、航海者は出航前に浜辺で親族との別れの場をもった。親族の女性たちは泣きながら航海に旅立つ男たちの体に水で溶いた黄色のウコンを塗り付けた。ウコンはショウガ科ウコン属の多年草で(*Curcuma longa*)、根茎部を薬用とする。カロリン諸島ではラーン (*raang*) と呼ばれ、災いから体を守る呪薬とされている。また、航海者は不慮の事故により旅先でいのちを落とすことを想定し、その遺体をくるむためのバナナの繊維を織った腰布(トエル: *toeru*)を持参した。

ク) 近世の船絵馬と奉納模型船

中世期の事情は不明だが、近世期、航海安全を祈願する民間信仰として、船絵馬や模型船の奉納がさかんにおこなわれた。

近世期の船絵馬では、京都清水寺の朱印船絵馬が著名で、これ以降全国各地で船絵馬が奉納されており、江戸末期から明治にかけて船絵馬が大量に作られた。日本海の例を取りあげよう。山口県東部の須佐町にある須佐高山(神山)(532.8m)の麓にある神の麓にある神山神社の主祭神は須佐之男命であり、伊邪那美命と市杵嶋姫神を配祀する。神話では、高山山頂で須佐之男命が新羅に行くさいの海路を眺望したとされ、須佐の名の由来は、須佐之男命の伝説にちなんでいる。

高山は、北前船の船乗りにとって航海の目印だけでなく、航海者の聖地とされてきた。天保年間、長州藩編纂



図30: カロリン諸島で用いられた「航海の神」としての木彫人像プワニプアワン (*pwaniipwan*)。下半身の白い部分は石灰で固めてあり、脚にはエイの尾びれを4本ずつ使用。人像は単体のものもある。(国立民族学博物館蔵)

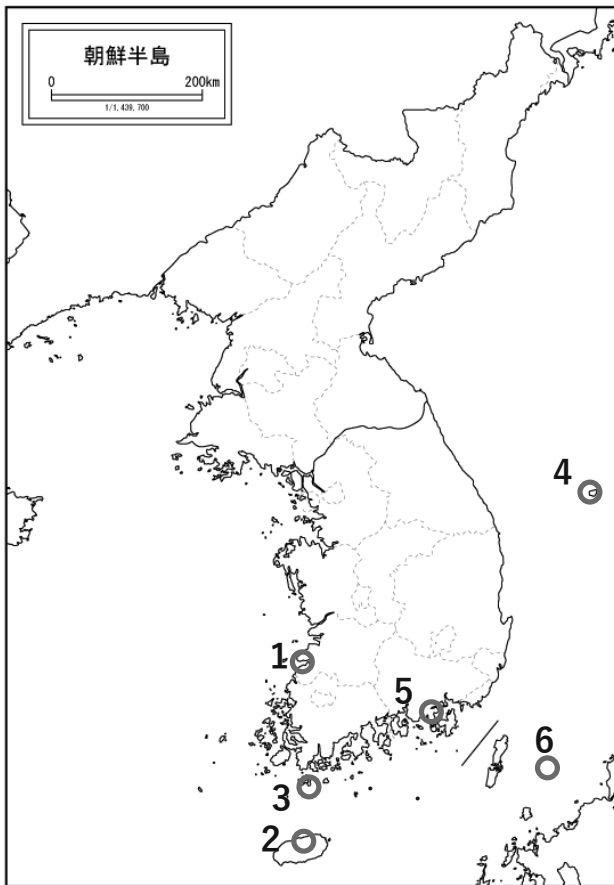
による『風土注進案』には、高山の「沖を行く船は帆を下げて敬拝」する作法が記載されている。当時、沖合を往来した北前船の船主や船乗りが神山を信仰した証左であろう。高山中腹にある宝泉寺とその境内鎮守である黄帝社に奉納された絵馬が67点残されており、49点が船絵馬である。初出は享和4年(1804)で、明治期以降までのものがある。

注目すべきは奉納者が長門・石見などの地元だけでなく、能登・越中・越前・丹後・出雲・隠岐の船主・船頭にまで広がっていたことで、江崎港、須佐港に停泊した船の船頭や船主を含む信仰の広がりを示している。なお、黄帝は中国古代の神話的な五帝の一人で『史記』では最初の帝とされており、現地では造船にまつわる神、航海安全を祈念する神として信仰されてきた。高山神社は元禄13年(1700)、益田家第二六代当主、長州藩永代家老・須佐領主益田家七代の益田就賢公なりたかにより祭神、社殿を須佐湾の社殿を須佐湾の中嶋に遷座された。

江戸時代、奉納模型船は数多く、最古のものが堺市博物館にある。概して西日本で大型奉納船が多い。若狭湾の小浜周辺から舞鶴までの地域では、模型船を船の守護女神である船玉様に奉納する例がある。これらの模型奉



図31：冠島（京都府舞鶴市）の老人嶋神社内の船玉社に奉納されている大型模型船。舷側板上部に格子状の垣立がある。



○ 航海祭祀遺跡

- 1 竹幕洞(フンマクド)遺跡
- 2 濟州島(チエジュド)龍潭洞(ヨンドンドン)遺跡
- 3 莞島(ワンド)清海鎮(チョンヘジン)遺跡
- 4 鬱陵島(ウルルド)玄圃里(ヒョンボリ)遺跡
- 5 馬山・架浦洞(ガポンドン)遺跡
- 6 沖ノ島祭祀遺跡

図32：朝鮮半島における航海安全祭祀遺跡と沖ノ島

納船は、舷側板の上部に垣立を備えている。軍船では水手が敵の矢を避けるためと、船内の荷物転落防止の役割をもった(松木 1990)。小浜の宗像神社(小浜市北塩屋)は三女神を主神とする神社で、ここにある船玉社に垣立をもつ模型船が奉納されている。冠島の老人嶋神社の船玉社にも大型の奉納模型が祀られている(図31)。老人嶋神社は式内社ではないが、『日本三代実録』元慶4年(880)10月13日条に記録があり、明治期までは冠島自体を神として崇拝し、沖ノ島同様に女性が入島できなかった。

ケ) 朝鮮半島の航海祭祀

朝鮮半島で航海安全祭祀儀礼がおこなわれたとされる遺跡は図32に示したように、黄海側の全羅北道扶安郡の竹幕洞遺跡、済州島の龍潭洞遺跡、慶尚南道・馬山の架浦洞(慶南大学校博物館 2006)、全羅南道莞島郡莞島の将島にある清海鎮遺跡、鬱陵島の玄圃里遺跡がある(俞 2011, 2012)。竹幕洞は海岸の断崖上にあり、海の難所される朝鮮半島西海岸のなかで避難港となったことで航海安全祭祀が4～6世紀おこなわれ、倭系前方後円形墳が10数基あり、武寧王陵が中国南朝・百済・倭・加耶などとの国際交流の進むなかで建造された。荣山江流域の古墳では日本産のコウヤマキが木棺として使われており、当時の倭国との密接な交流が明らかである。竹幕洞では、後の8世紀に露天から家屋での祭祀へと変化する(俞 2011, 2012)。現在、残されている「水聖堂」がその名残りであり、沖ノ島の航海安全祭祀との比較が興味ある(禹 2011; 西谷2014)(図33)。鬱陵島の玄圃里遺跡は海を見



図33：朝鮮半島の航海祭祀遺跡。

左：竹幕洞遺跡の水聖堂(断崖上にある祭祀家屋)
右：鬱陵島の玄圃里遺跡(島の北東部斜面にある)

下ろす斜面にあったが、周囲が畑で全貌がよくわからなかった。

3. 海産資源と海域ネットワーク

(1) 南海産「貝の道」

先史・古代の東アジア海域世界では海を越えた近距離・遠隔地交易のあったことが発掘品やその産地同定分析から明らかになってきた。本節では、遣唐使船ルートの南島路にからむ南海産資源の内、「貝の道」について考えてみたい(小田 2007)。

ア) イモガイ・ゴホウラ製貝輪と「貝の道」

北海道最北端の礼文島・船泊遺跡(縄文後期)から、イモガイ製ペンダント・タカラガイ製装飾品・マクラガイ製腕輪が出土した。青森県の三内丸山遺跡(縄文時代前期中葉~中期末)からも土製のイモガイ模造品が出土している。また、北海道・噴火湾内の有珠10遺跡(縄文晩期~続縄文時代)からイモガイ製腕輪やゴホウラ製の垂飾を身につけた女性が見つかった。

ゴホウラ、イモガイはともに奄美諸島以南の亜熱帯海域に分布する大型の貝(腹足綱)であり、原産地から九州を経て日本海を北上するルートで運ばれたであろう。南海産の「貝の道」については、古くは柳田国男の「海上の道」論に端を発し(柳田 1978)、考古学者による精力的な研究が蓄積されてきた(木下 1996, 2000, 2011, 2021; 安里 1993, 2011; 安里・岸本 2001)。

九州における南海産貝製腕輪の出土例では、佐賀県東松浦半島呼子町の大友遺跡(縄文晩期~弥生前期の墓地)からゴホウラ、イモガイ、オオツタノハの貝製腕輪(釧)を付けた人骨が多数出土している(宮本・春成編 2001; 宮本 2003)。壱岐でも、勝本町勝本浦の聖母宮西側の石棺櫃からゴホウラ貝輪が2021年出土しており(弥生時代初期)、壱岐・対馬初の発見となった(図34)。

長崎県佐世保市沖・高島における「宮の本遺跡」の包含層(弥生時代中期)にある40基の墓地(箱式石棺、土壙、甕棺)から40体の人骨が出土した。石棺は男性が土壙は女性が中心で、8体の女性は左手首にイモガイ製腕輪を装着していた。宮の本遺跡で独自の加工を施した貝輪製品と同種の遺物が北海道の有珠10遺跡でも見つかっており、宮の本遺跡は琉球列島原産の貝を加工してさらに遠

くへと交易したハブと考えられている。

東京大学総合研究博物館の海部陽介による男性人骨の分析から、内陸の弥生人にくらべて上腕骨が頑丈で、粗面が発達していることがわかった。宮の本遺跡の弥生人は縄文時代人的な運動量の多い生活を営んでいたと考えられ、宮の本遺跡に埋葬された住民が手漕ぎによる長距離航海を沖縄までおこなったとすれば、格段の渡海能力を発揮したといえる。高島に住居址が見つかっていないようだが、高島は埋葬場所で住居は別にあったとも推測できる。類似の例が響灘の貝島古墳群で、南側300mにある藍島の海人の墓地とみなされている(北九州市教育委員会編 1978)。

イ) 貝の集積と代替品

ゴホウラやイモガイを供給した琉球列島では、採集した貝の集積遺構や貝類の加工をおこなった形跡も認められ、炭素14による年代測定がおこなわれており(木下 2021)、単純な原材料提供地と貝輪加工地間の交易があったわけではない。しかも琉球列島における貝殻集積遺構は37ヶ所に及び、沖縄本島(26)(とくに浦添・宜野湾・読谷)以外に伊江島(5)・久米島(3)・慶良間諸島(座間味・渡嘉敷)(2)・津堅島(1)などで出土している(木下 2021)。

縄文時代から九州と沖縄間で交流のあったことは、小田による総括に詳しい(小田 2017)。「貝の道」交易はその後も持続し、古墳時代にはイモガイやゴホウラの貝製腕輪の形を模した碧玉(凝灰岩)や滑石製の石釧・車輪石・鋸型石などが宮中における宝具・威信財とされた。奈良の前方後円墳である島の山古墳出土品と酷似した車輪石や鋸形石の奉獻品が沖ノ島5号遺跡から、石釧は16号遺跡・17号遺跡等から出土している(図35)。後者は



図34: 左: 壱岐・勝本町勝本浦の聖母宮西側の石棺櫃から出土したゴホウラ製貝輪(弥生時代初期)。

右: 佐世保市高島の宮の本遺跡出土のイモガイ製腕輪(弥生時代中期)。



図35：車輪石（左）伝沖ノ島（4－5世紀）、鋏形石（中）沖ノ島5号遺跡（4世紀）、石釧（右）伝沖ノ島（左）、沖ノ島16号遺跡（右）（4－5世紀）。

岩上祭祀遺跡からの出土品であり、南海産貝輪製品の形状を石で模倣し、国家的な祭祀に利用されていた（木下1996；安里・岸本2001）。貝から石や金属に素材が変わった背景は単純ではなく、石釧や車輪石、鋏型石の出土遺跡の分布も一様でない（北條 2017）。イモガイ・ゴホウラなどの大型貝類の供給が縄文時代から古墳時代まで持続したかどうかの保証もなく、貝類資源の枯渇で石や金属が代替品として用いられた可能性がある。

ウ) ヤコウガイをめぐる

弥生時代を下ると、琉球列島はグスク時代に移行し、この時代からヤコウガイの交易が大きな転機となる。ヤコウガイはサンゴ礁のリーフ外縁部に生息する夜行性の大型巻貝である。光沢のある真珠層をもち、古来より貝殻が貴重品とされてきた。

琉球列島にはヤコウガイの遺物を大量に出土する6～10世紀の遺跡がある。たとえば、奄美大島では小湊フワガネク遺跡、土盛マツノト遺跡、用見崎遺跡、長浜金久遺跡、沖永良部島西原海岸遺跡、沖縄諸島では久米島の大原第二貝塚B地点と清水貝塚、沖縄本島野国貝塚B地点を含む三遺跡がある。小湊フワガネク遺跡（6～8世紀）からはヤコウガイ製貝匙とともに未成品や貝殻破片が大量に出土し、イモガイやゴホウラと同様、現地で加工された形跡がある（秋道 2016）（図36）。

ヤコウガイは螺鈿細工の重要な材料でもあり、唐代にヤコウガイが琉球方面から交易を通じて中国へ運ばれた。久米島の北原遺跡で出土した中国の開元通宝はヤコウガイ交易で中国からもたらされたと考えられる（木下 2000）。さらに、大量のヤコウガイが喜界島中央部の城久遺跡群ぐすくから見つかった（9～14世紀）。城久遺跡からは大宰府出土品と同様な土師器、須恵器や、中国・朝鮮製の陶磁器、滑石製石鍋などが発見されている（木下 2000）。城久遺跡が中国や韓国との交易品の集散地とし

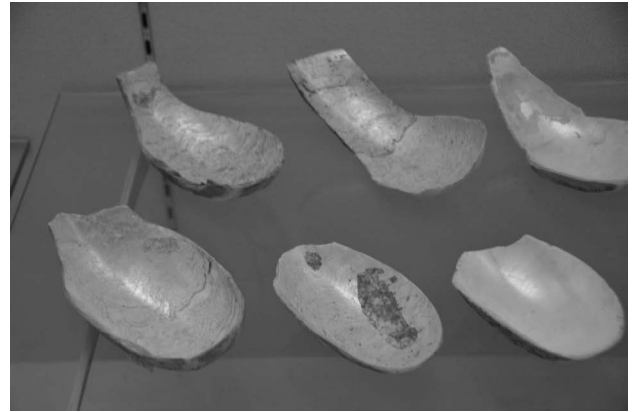


図36：ヤコウガイ製の貝匙（小湊フワガネク遺跡・奄美博物館所蔵）。

での役割をはたした可能性がある。高梨修は、奄美におけるヤコウガイ生産が琉球弧全体と東アジアにおける交易に重大な影響を与えたと指摘している（高梨 2005）。

南海産貝類の交易問題は、日本人の起源にも関わる「新・海上の道」論として、旧石器時代の東南アジア・琉球（石垣島の白保竿根田原洞窟遺跡、沖縄本島南城市のサキタリ洞遺跡）、伊豆諸島・小笠原諸島・台湾・フィリピン・マリアナ諸島を含む広い海域を視野においた研究の総括と展望が提示されている（小田 2017）。シャコガイ製貝斧の南琉球とフィリピンとの関係も重要な課題である（安里 1993）。

（2）アワビの結ぶ「海の道」

日本におけるアワビ漁業には船上からの突き取り漁と素潜り漁がある。縄文・弥生時代の遺跡からは鯨骨製や鹿角製のアワビオコシが出土している。北部九州のアワビオコシはすべて鯨骨製で（岡崎 1968）、縄文時代中期前半に出現し、縄文時代後期に併行する東三洞貝塚出土の鯨骨製・鹿角製アワビオコシよりも先行する（武末 2009）（図37）。壱岐の原ノ辻遺跡からは鯨骨製アワビオコシが出土しているが（中尾 2004, 2005；長崎県教育委員会 2007）、同島北部のカラカミ遺跡（弥生後期）からは鉄製のアワビオコシが見つかっており（山梨 2019）、弥生期以降は鯨骨に代わって鉄製のものが普及する。

貝原益軒が元禄12年（1699）に著した『日本釈名』のなかで、「^{アワ}蛸」の項に、「つねに船を家として くが（陸）にすまぬもあり俗に家ふねと云、年おひてハ船の中を子にゆづりて隠居してへさきのかたにすむ」とある（山本

2016)。あま（蛭：海士・海女）が家船に住む集団であることを示す初出の記述である。

貝原益軒は宝永6年（1709）刊の『筑前国続風土記』のなかで、「潜女^{かづきめ}」による潜水漁のおこなわれる浦が志賀島、大島、波津（元の宗像郡海部郷）、鐘崎にあるとしている。

『延喜式』の「卷第26 主税寮上」に「凡志摩国供御贄潜女卅人（御厨廿人、中宮十人）歩女1人、仕丁8人。其^{ろうりょう}粮料、穀四百八十斛。雑用料、二百五十六斛八斗二升、潜女衣服料、稻二千七百七十三束九把、並以伊勢国^{しょうぜい}正税充之。」とあり、潜女は古代り、潜女は古代から女性の潜水漁業者を指した。御贄のアワビを貢納するために潜水する潜女の食料・雑用費・衣服などの経費は伊勢国の税金から支給するとされていた。

潜女の著名な例が鐘崎（福岡県宗像市）の海女集団である。正保2年（1645）刊の『毛吹草』巻第四には、「筑前 西海道 玉嶋川 鮎 金崎 鯨 鮪」とある（竹内2000）。鐘崎（金崎）には江戸期に400人、のちの大正期にも200人の海女がいたとされている。現代の例であるが、鐘崎漁民の素潜り潜水漁で「ジョウアマ」は12～13尋（21.6～23.4m）、「瀉アマ」は4～5尋（7.2～9.0m）まで潜水する。『日本水産捕採誌』で、筑前海女の潜水は5～9尋（9.0～16.2m）までであるとしている（農商務省水産局 1929）。

海士・海女のアマ集団は鐘崎から漁期に合わせて対馬に移動し、船で寝泊まりする生活をつづけた。のち、鐘崎に戻ることなく対馬東部の曲に定着するのは17世紀終末期であるとされている（宮本 1975, 1983, 2015）。対馬では畑作農業が中心であり、海との関わりでいえば在地農民は海藻漁業に従事しており、対馬藩が肥料藻・和布・於胡菜漁業の口明け日を決めるなどの制限も課して

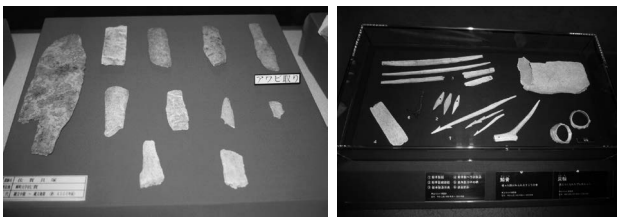


図37：鯨骨製のアワビオコシ。
左：対馬・佐賀貝塚（正林 1989）。右：杵岐・串山ミルメ遺跡。鉾・稽などもある。（著者撮影）



図38：対馬厳原市・曲における鐘崎海人の共同墓碑。「海人先祖代々之為菩提」寛政元年（1789）」

いた（大喜多 1985）。農民は湾内に接岸するイルカの群れやクジラを立網で囲んで獲る漁業にも従事した。近世の対馬では鐘崎の海女集団や泉州の佐野漁民による佐野網の伝播のように外部者により漁業が営まれた（宮本1983；津川 1987）。対馬の曲には、鐘崎由来の海人を弔う菩提碑がある（図38）。

鐘崎からのアマは西方の対馬・曲浦、杵岐・小崎、五島列島福江島・玉之浦、上五島・有川、西彼杵郡の大島、現長崎市周辺の西泊へと移住した。東方へは、玄界灘東部の藍島、山口県大津郡向津具村の大浦（油谷湾）、見島（山口県萩市）、島根県那賀郡の三隅、同郡濱田町の瀬戸ヶ島、波子、宍摩郡の波根、隠岐諸島、能登半島の輪島・舳倉島へと移住した。また、宗像大島からは鳥取県気高郡青谷村・夏泊へも移住がおこなわれた。

山口県の角島（下関市豊北町）に移住した海人もいた。島にある勝安寺の裏山には江戸中・後期に移住し、島で亡くなった鐘崎・大島の海人の墓が約100基ある。江戸後期の墓碑には天保年間のものであった（図39）。ちなみに、沖ノ島の旧社務所周辺における弥生前半期の出土品は、響灘以東のものである（武末 2011）。豊浦町の中ノ浜遺跡や豊北町の土井ヶ浜遺跡なども大陸との交流のあったことを示唆している（豊浦町史編集委員会編 1992, 1995；歴史学研究会・日本史研究会編 2004）。こうした移住を通して各地との交流が実現したわけで、海を介したディアスポラ（故郷を離れて離散し、なおかつ故地との関係をもつ集団およびその現象）が先史・古代から日本列島西部・朝鮮半島部を含む東アジア海域に展開していた好例であろう。

総じて、南海産貝類および温帯産アワビの採集と交易



図39:角島の勝安寺裏山にある鐘崎・大島出身者の墓。江戸中・後期に移住し、島で亡くなった海人の墓が約100基ある。

をめぐり、東アジアでは北海道以南の広域におよぶネットワークの存在があらためて明らかとなった。『魏志倭人伝』東夷伝倭人の条に「倭水人好沈没捕魚捕魚蛤」(倭の水人は沈没して魚蛤を捕るを好み)とあるように、倭人が潜水漁を好んでおこなっていた伝統はその後現代まで持続的に継承されている。家船に居住し、卓越した越境性をもつ海人の活動が先史・古代における航海活動に大きな影響をあたえたことは間違いない(高橋 1992)。

4. 海域ネットワークと世界遺産

(1) ライアーテア島と海の世界遺産

宗像・沖ノ島と関連遺産群が世界遺産として登録された2017年7月17日、仏領ポリネシアのライアーテア島(Raiātea)のタプタプアーテア遺跡(Taputapuātea)も登録された。両者とも、海と関連する古代祭祀のおこなわれた遺跡である(図40)。

ライアーテアはポリネシア人が最初に植民した東ポリネシアの島とされ、ポリネシア最大の露天祭祀場のマラエ(marae)がある。マラエは神や祖霊が降臨する場で、此岸(Te Ao)と彼岸(Te Pō)を結ぶ場でもある。島では、海岸部に祭司・戦士・首長らが居住し、それ以外の農民は山地に居住した。世界遺産はこのマラエだけでなく、合計4ヶ所のマラエ群と周囲のラグーンや小島、渓谷などの文化的景観を含む。タプタプアーテアはポリネシアのほかの島じまにもあり、マラエにはポリネシアの神がみが降臨する場である点では共通している。ライアーテアはポリネシア人の故郷とされ、ここからハワイ、ラパヌイ、アオテアロアに移住がなされたとするバックの説が大ダコの図に示されている(図41)(BUCK 1938)。

ライアーテアのマラエではとりわけ戦いの神であるオロ神が崇拝されていたが、オロの神像を長櫃に収め、ダ

ブルカヌーに積んで島じまをめぐった。まさに大海原をめぐる「移動マラエ」であった(山口 2020)。タヒチの祭祀場は残っていないが、クック諸島のラロトンガにはタプタプアーテアのマラエが残されている。この遺跡も世界遺産として認定されてもよい。ただし、陸地主体の世界遺産の考え方からすると、約1,000km離れた島をひとつの世界遺産とすることは無理があるのだろうか。

(2) 宗像・沖ノ島と海の世界遺産

宗像・沖ノ島の世界遺産は8構成資産(Property)からなるが、その周辺にはいくつもの関連遺産がある。たとえば、田熊石畑遺跡、津屋崎古墳群、津屋崎千軒、桜京古墳、織幡神社などは弥生・古墳時代における宗像氏や宗像の海人の活動を示す。しかも、海域を通じた交流の実態を示す遺構や古墳、祭祀遺跡は宗像を離れた地域にも数多く点在する。壱岐の原ノ辻遺跡、対馬の三根遺跡、朝鮮半島の勒島遺跡、莞島遺跡、竹幕洞遺跡(禹

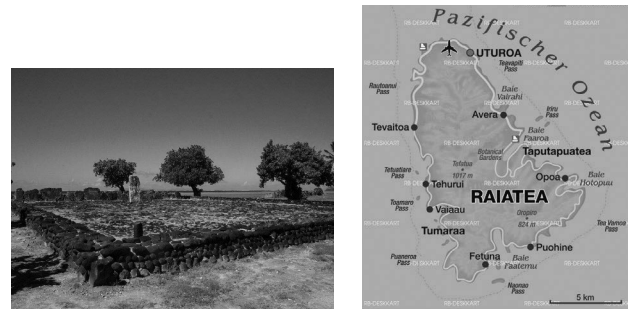


図40:ライアーテア島の世界遺産、タプタプアーテア。島の南東部オポアにあり、ポリネシアで最大のマラエ(祭祀場)がある。

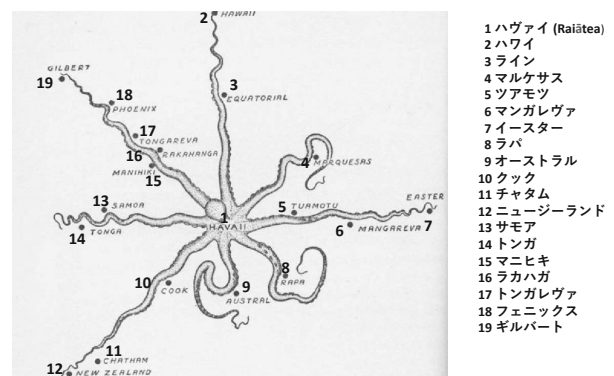


図41:ポリネシア人の拡散と大ダコ(Great Octopus)モデル [BUCK 1938]。

- 1 ハワイ (Raiātea)
- 2 ハワイ
- 3 ライン
- 4 マルケサス
- 5 ツアモツ
- 6 マンガレヴァ
- 7 イースター
- 8 ラバ
- 9 オーストラル
- 10 クック
- 11 チャタム
- 12 ニューゼaland
- 13 サモア
- 14 トンガ
- 15 マニヒキ
- 16 ラカハガ
- 17 トンガレヴァ
- 18 フェニックス
- 19 ギルバート

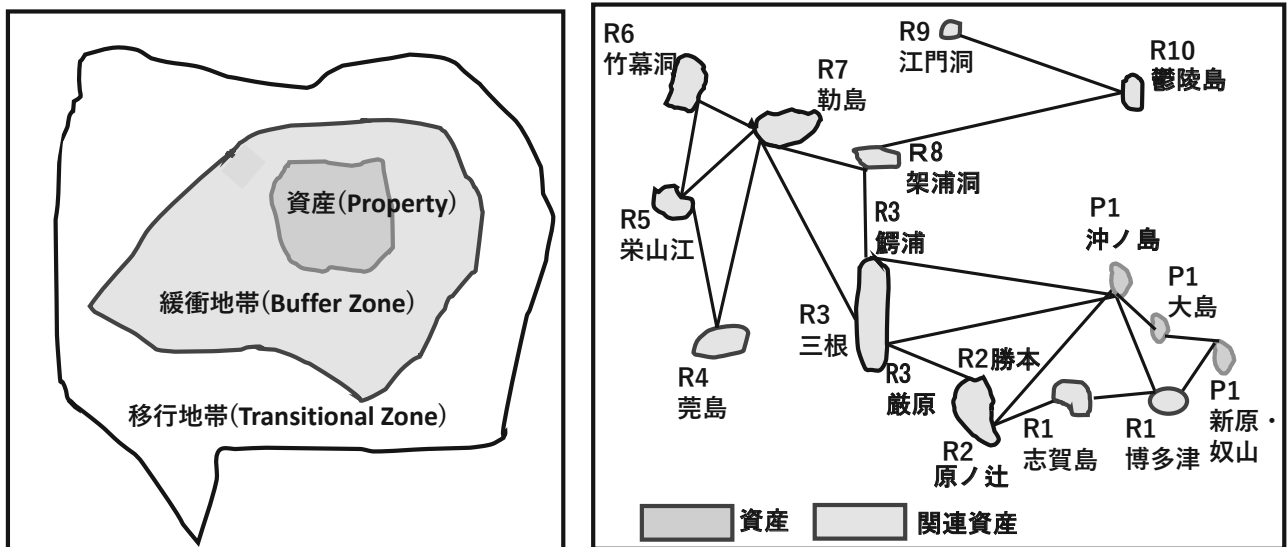


図42: 人間生物計画(MAB)/世界遺産(ICOMOS)の陸域モデル(左)と、宗像・沖ノ島資産(P1)と島嶼間ネットワークによる地域・島嶼遺産(R1～R10)(右)。R2は壱岐、R3は対馬。

2011)、栄山江流域の古墳群(高田 2019; 権 2019)、日本海の鬱陵島の玄圃里遺跡などがその例である。海を越えたネットワークの存在は縄文時代における日本と朝鮮半島で共通する漁具が見つかっている(渡辺 1984)。ト骨の遺物や鐘崎の海人が移動した足跡にも反映されている。さらに海底から回収された沈船や舶載品は、中国・韓国の博物館に所蔵・展示されている。日本の水中考古学の発展がのぞまれる。

以上みたように、海に関連する世界遺産は広域にわたる海域に分散し、島嶼や大陸の沿海部に偏在する。玄界灘の沿岸域や離島の古墳群は海的首長・海人集団と関係が深く、海から見たランドマークとしての意味がある。見島のジーコンボ古墳群(山口県編 1996; 山口県教育委員会 1983)、長門・吉母の甲山古墳群、藍島北にある貝島の円墳、津屋崎古墳群、糸島半島の平原古墳1号墳、朝鮮半島南部一帯に注目すべき古墳群が数多くある。

国境を越えた地域間交流はボーダーレス型のネットワークとして理解することが重要であろう。これは従来のMAB構想(Man And Biosphere)や世界遺産の資産と緩衝・移行ゾーンのような陸地中心の同心円的などらえ方とはきわめて異質の発想によるものであり、「海の世界遺産」(Maritime World Heritage)の独自点でもある(図42)。地域や国を越えた広域にまたがる世界遺産の存在意義がある。この点は人類史における歴史・文化のダイナミズムとも対応するものであり、今後の研究だけでなく、文

化資源の活用や関連遺産群との国際連携を含めた世界遺産の構成を考える新基軸の提案となることを期待したい。

文献

(日本語文献)

- 秋道智彌 1981 「Satawal島における伝統的航海術—その基本的知識の記述と分析」『国立民族学博物館研究報告』5(3): 617-641頁。
- 秋道智彌 2009 『クジラは誰のものか』(ちくま新書760)筑摩書房。
- 秋道智彌 2012 「東アジアの海洋文明と海人の世界—宗像・沖ノ島遺産の基盤」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』II-1 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議, ⑥-1(127)—⑥-18(144)頁。
- 秋道智彌 2016 『越境するコモンズ—資源共有の思想を学ぶ』臨川書店。
- 秋道智彌 2019 「アジア・太平洋の船と航海—竹筏に注目して」大阪・郵政公庫学会編『歴史・民族・考古学論攷(II)』大阪・郵政考古学会・辻尾榮市氏古稀記念論攷発行会361-381頁。
- 秋道智彌 2021 『明治～昭和前期漁業権の研究と資料下巻 漁業の地域多様性・資料編』臨川書店、730-733頁。
- 秋道智彌・印東道子編 2020 『ヒトはなぜ海を越えたのか: オセアニア考古学の挑戦』雄山閣。
- 安里嗣淳 1993 「南琉球の原始世界—シャコガイ製貝斧とフィリピン—」比嘉政夫編『海洋文化論—環中国海の民俗と文化—』凱風社、61-84頁。
- 安里嗣淳 2011 『先史時代の沖縄』(南島文化叢書25)、第一書房。
- 安里嗣淳・岸本義彦 2001 『貝の道—先史琉球列島の貝交易—』沖縄県史ビジュアル版 考古②、沖縄県教育委員会。
- 安達裕之 2016 「和船はどのように発達したか—構造と機能の盛衰史」(和船が運んだ文化)『水の文化』54: 5-8頁。
- 石井謙治 1957 『日本の船』創元社。
- 石井謙治 1983 『図説和船史話』至誠堂。
- 石井謙治 1995a 『和船 I』(ものと人間の文化史 76-I) 法政大学出版局。
- 石井謙治 1995b 『和船 II』(ものと人間の文化史 76-II) 法政大学出版局。
- 石井忠 1977 『漂着物の博物誌』西日本新聞社。
- 石川創 2003 「日本海の鯨類のストランディングレコード(改訂)」『哺乳類科学増刊号』3: 87-91。
- 石野一晴 2005 「明代萬曆年間における普陀山の復興—中國巡禮史研究序説」『東洋史研究』64(1): 1-36頁。
- 井上尚文・三井田恒博・俵悟 1985 「第23章 対馬海峡II物理」日本海洋学会 沿岸海洋研究部会「沿岸海洋誌」編集委員会編『日本全国沿岸海洋誌』東海大学出版会、914-933頁。
- 伊波普猷 1974 「朝鮮人の漂流記に現れた十五世紀末の南島」『伊波普猷全集』第五巻、平凡社、54-99頁。
- 禹在柄 2011 「竹幕洞祭祀遺跡と沖ノ島祭祀遺跡」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告I』「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議、281-296頁。
- 上田正昭 1988 「海人の原像」『住吉と宗像の神—海神の軌跡—』3-27, 16頁、筑摩書房。
- 上田正昭 1997 『東アジアと海上の道』明石書店。
- 上田雄 1992 『渤海国の謎—知られざる東アジアの古代王国—』(講談社現代新書)講談社。
- 上田雄 2007 『遣唐使全航海』草思社(再版)。
- 上田雄・孫栄健 1994 『日本渤海交渉史』(改訂増補版) 彩流社。
- 卯田宗平 2022 『現代中国を、カワウと生きる—鵜飼い漁師たちの技』(国立民族学博物館コレクション展示 2022年6月30日—8月2日) 国立民族学博物館。
- 内山雄介、小谷瑛千花、山西琢文、上平雄基、御手洗哲司 2016 「沖縄本島周辺海域における非対称海洋構造の形成機構」『土木学会論文集B2(海洋工学)』72(2), I_481-I_486頁。
- 大喜多甫文 1985 「近世のアマ潜水漁業」『歴史地理学』131: 19-32頁。
- 大高広和 2018 「七世紀における遣唐使の航海と沖ノ島祭祀の変遷」『沖ノ島研究』4: 9-18頁。
- 岡崎 敬 1968 「倭の水人一壱岐島弥生時代遺跡発見の鯨骨製品とその伝統—」金関丈夫博士古稀記念委員会編『日本民族と南方文化』平凡社、93-125頁。
- 長田俊樹 2013 『インダス文明の謎: 古代文明神話を見直す』京都大学学出版会。
- 小田静夫 2007 「琉球弧の考古学—南西諸島におけるヒト・モノの交流史」青柳清治先生退職記念論文集編集委員会編『地域の多様性と考古学—東南アジアとその周辺—』雄山閣、37-61頁。
- 小田静夫 2017 「考古学からみた新・海上の道」『南島考古』36: 21-34頁。
- 小田富士雄 1988 「北海道中—大陸と沖ノ島祭祀 —」小田富士雄編『古代を考える・沖ノ島と古代祭祀』吉川弘文館、227-257頁。
- 小田富士雄 2011 「沖ノ島祭祀遺跡の再検討I—4~5世紀宗像地方との関連で—」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告I』39-70頁 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議。

- 小田富士雄 2012 「沖ノ島祭祀遺跡の再検討2」 『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告Ⅰ』1-41頁 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議。
- 小田富士雄 2013 「沖ノ島祭祀遺跡の再検討3」 『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告Ⅰ』1-42頁 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議。
- 海部陽介・佐藤宏之編 2022 「特集 海洋進出の初源史」『季刊考古学』161頁。
- 笠井俊人 1975 「古代の水軍」大林太良編『日本古代文化の探求 船』社会思想社、85-116頁。
- 桂忠彦 1985 「第23章 対馬海峡Ⅰ地質」日本海洋学会・沿岸海洋研究部会「沿岸海洋誌」編集委員会編『日本全国沿岸海洋誌』東海大学出版会、901-903頁。
- 金田一精 1998 「付録 底部に鯨の椎骨の圧痕が残る阿高式土器」『黒橋貝塚』熊本県教育委員会、146-149頁。
- 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会2019『特別研究事業第1回国際検討会「古代東アジアの航海と宗像・沖ノ島」報告書』「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会。
- 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会2020『特別研究事業第2回国際検討会「古代東アジアにおける地域間交流と信仰・祭祀」報告書』「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会。
- 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会2022『特別研究事業第3回国際検討会「古代東アジアの海洋信仰と宗像・沖ノ島」報告書』「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会。
- 亀田修一 2019 「古代宗像の渡来人」『世界遺産「神宿る島」沖ノ島と関連遺産群 公開講座 20190907』(第3回 宗像氏と対外交流)カメリアホール大研修室(福津市複合文化センター・文化会館)。
- 亀山慶一 1986 『漁民文化の民俗研究』(日本民族学研究叢書)弘文堂。
- 亀山勝 2012 『安曇族と住吉の神』龍鳳書房。
- 川勝平太 1997 『文明の海洋史観』中央公論社。
- 川道寛 2007 「つぐめのはな遺跡のクジラ漁」『縄文時代の考古学』5: 163-169頁。
- 北浦弘人 2002 「鳥取県青谷上寺地遺跡出土のト骨」『月刊考古学ジャーナル』492: 14-17頁。
- 北九州市教育委員会編 1978 『貝島古墳群:北九州市小倉北区 藍島所在の海人の古墳群』(北九州市文化財調査報告書第28集)北九州市教育委員会。
- 北見俊夫 1986 『日本海上交通史の研究』法政大学出版社。
- 木下尚子 1996 『南島貝文化の研究—貝の道の考古学』法政大学出版社。
- 木下尚子 2000 「開元通宝と夜光貝」『琉球・東アジアの人と文化 高宮廣衛先生古稀記念論集上巻』高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会 187-210頁。
- 木下尚子 2011 「考古学からみた奄美のヤコウガイ消費—先史人は賢明な消費者であったか」『日本列島の三万五千年—人と自然の環境史』4: 157-172頁。
- 木下尚子 2021 「貝殻集積からみた先史時代の貝交易—2018年度の炭素14年代測定結果をもとに」『国立歴史民俗博物館研究報告』228: 213-246頁。
- 金建沫 2002 「韓半島のト骨」『月刊考古学ジャーナル』492: 18-21頁。
- 権五栄 2019 「栄山江流域の古代政治体を見直す多様な視角」『国立歴史民俗博物館研究報告』217: 13-28頁。
- 楠本正 1993 『玄界の漁撈民俗—労働・くらし・海の神々』(海鳥ブックス14)海鳥社。
- 慶南大学校博物館 2006 『馬山・架浦洞青銅器埋納遺蹟』(慶南大学校博物館・学術調査報告第11輯)慶南大学校博物館。
- 國分篤志 2014 「弥生時代～古墳時代初頭のト骨 —その系譜と消長をめぐって—」『千葉大学人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』27: 97-121頁。
- 後藤明 2006 「東南アジア・オセアニアにおける竹筏—もう一つの伝統」『水中考古学』2: 22-31頁。
- 後藤明 2013 「オセアニアのカヌー研究再考: 学資の批判的検討と新たな課題」『人類学研究所研究報告』1: 217-264頁。
- 後藤明 2014 「環太平洋海域の原初的造船技術: 熱帯・亜熱帯における船殻形成の概観」『国際常民文化研究叢書』5: 159-184頁。
- 後藤明 2017 『天文の考古学』(ものが語る歴史35) 同成社。
- 小林道憲 2006 『古代日本海文明交流論—ユーラシアの文明変動の中で』世界思想社。
- 薮勇造訳注・解説 2016 『エリュトラ海案内記』(全2巻) (東洋文庫870・874)、平凡社。
- 柴田昌児 2013 「古代瀬戸内海における海上活動に関する一試論」『みずほ別冊 弥生研究の群像』大和弥生文化の会 463-476頁。

- 柴田昌児 2020「準構造船と描かれた弥生船団」『青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報 2020』鳥取県 地域づくり推進部 文化財局 とっとり弥生の王国推進課 青谷かみじち史跡公園準備室、19-25頁。
- 正林 護 1989『佐賀貝塚』峰町文化財調査報告書第9集 峰町教育委員会。
- 白石太一郎 2019「ヤマト王権と沖ノ島祭祀」『世界遺産「神宿る島」沖ノ島と関連遺産群 公開講座 20191207』(第7回「ヤマト王権と沖ノ島」)カメラホール大研修室(福津市複合文化センター・文化会館)
<https://youtu.be/9301wU3XhVQ>
- 重藤輝行 2019「宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀」『世界遺産「神宿る島」沖ノ島と関連遺産群 公開講座 20191207』(第7回「ヤマト王権と沖ノ島」)カメラホール大研修室(福津市複合文化センター・文化会館) <https://youtu.be/COUx8SsZXvo>
- 関周一 2021「『朝鮮王朝実録』にみえる奄美諸島と先島」『国立歴史民俗博物館研究報告』226: 197-230頁。
- 高田貫太 2019「古墳時代の日朝交渉における海の道—朝鮮半島南—西海岸地域の倭系資料の分析から」『特別研究事業第1回国際検討会「古代東アジアの航海と宗像・沖ノ島」報告書』『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議、51-63頁。
- 高梨修 2005『ヤコウガイの考古学』同成社。
- 高橋公明 1992「中世の海域世界と済州島」網野善彦著者代表『海と列島文化第4巻 東シナ海と西海文化』小学館、163-205頁。
- 竹内若 2000『毛吹草』(岩波文庫)岩波書店。
- 武末純一 2009「三韓と倭の交流—海村の視点から」『国立歴史民俗博物館研究報告』151: 285-306頁。
- 武末純一 2011「沖ノ島祭祀の成立前」『宗像・沖ノ島と関連遺産群』研究報告I「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議、1-37頁。
- 田中史生 2022『越境の古代史—倭と日本をめぐるアジアネットワーク』(角川ソフィア文庫20361)角川書店(再版)。
- 津川正幸 1987「佐野網の対馬・五島への進出」『大阪府漁業史』大阪府漁業史編さん協議会、133-134頁。
- 出口晶子 1987「刳船の発達諸形態の分類と地域類型—日本とその隣接地域を中心として」『国立民族学博物館研究報告』12(2): 459-461頁。
- 出口晶子 1992「日本の伝統的船舶の系譜」大林太良著者代表『海と列島文化 第10巻 海から見た日本文化』小学館、485-519頁。
- 出口晶子1995「日本海、東シナ海沿岸の筏船と漁携」『日本と周辺アジアの伝統的船舶—その文化地理学的研究』文献出版。
- 刀禰勇太郎 1990「船と祈り」『特別展 ふねと信仰』福井県立若狭歴史民俗資料館、63-69頁。
- 東野治之 2007『遣唐使』(岩波新書 新赤版 110)、岩波書店。
- 豊浦町史編集委員会編 1992『豊浦町史三[考古編]』豊浦町。
- 豊浦町史編集委員会編 1995『豊浦町史三[民俗編]』豊浦町。
- 中尾篤志 2004『原の辻遺跡』(原の辻遺跡調査事務所調査報告書第28集)長崎県教育委員会。
- 中尾篤志 2005「鯨骨製アワビオコシの拡散とその背景—原の辻遺跡出土資料の紹介を兼ねて」『西海考古』6: 85-102頁。
- 長崎県教育委員会 1986『つぐめのはな遺跡—北松浦郡田平町所在—』(長崎県文化財調査報告書第82集)、長崎県教育委員会。
- 長崎県教育委員会 2007『原の辻遺跡—石田大原墓域緊急調査報告書』(原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35集)長崎県教育委員会。
- 中園成生・安永浩 2009「日本人と鯨の出会い—初期捕鯨時代」『鯨取り絵物語』弦書房、8-22頁。
- 永留久恵 1997『海人たちの足跡—環対馬海峡の基層文化』白水社。
- 南波松太郎 1988『日和山』(モノと人間の文化史60)法政大学出版局。
- 西谷正 2014「宗像・沖ノ島と韓国の扶安・竹幕洞」『歴史書通信』(歴史書懇話会)212: 2-5頁。
- 任東権 1990「玄界灘に残る韓国文化—民俗文化の源流を求めて」宮田登著者代表『海と列島文化第3巻 玄界灘の島々』小学館、105-136頁。
- 朴九秉 1995『韓半島沿海捕鯨史』圖書出版民俗文化。
- 農商務省水産局 1929『日本水産採探誌』(上・中・下巻)再版、水産書院。
- 原田信之 2020「鹿児島県甌列島の自然説明伝説」『新見公立大学紀要』41: 1-14頁。
- 土方久功 1975『流木—マイクロネシアの孤島にて』未来社。
- 菱田昌孝、小野房吉、小田卷実、佐藤敏、打田明雄 1990「東シナ海の海流・潮流の分離による対馬暖流・黄海暖流の源流の解明」『海洋調査技術(Journal of the Japan Society for Marine Surveys and Technology)』2(1): 1-9頁。
- 平口哲夫 2003「日本沿岸の先史捕鯨文化」『考古 日本人および日本文化の起源に関する学際的研究考古学班(研究代表者春

成秀爾)研究成果報告書科学的研究から見た木の文化・骨の文化』クバプロ、131-152頁。

広瀬直毅・尹宋煥・宮本真由美 2019「東シナ海～日本海の海流と航海環境」『特別研究事業第1回国際検討会「古代東アジアの航海と宗像・沖ノ島」報告書』『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会、65-70頁。

福岡市漁業協同組合奈多支所 1878『奈多志賀漁場約定(両村漁場地図など)』(奈多浦漁協文書) 福岡市総合図書館(平成11年6月16日撮影)

古畑徹 1994「渤海・日本間航路の諸問題: 渤海から日本への航路を中心に」『古代文化』46(8): 1-14頁。

古畑徹 2017『渤海とは何か』(歴史文化ライブラリー458) 吉川弘文館。

ブローデル・フェルナン 2004『地中海1』(浜名優美・訳) 藤原書店。

北條芳隆 2017「大和王権と腕輪 -大安場古墳出土石釧の背景を探る」(2017年7月17日 福島県郡山市文化・学び振興公社企画展記念講演会発表資料)

本馬貞夫1976「倭軍の朝鮮出兵と航海神」『東アジアの古代文化』10: 96-125頁。

正木晃 2008『宗像大社・古代祭祀の原風景』(NHKブックス1119) 日本放送出版協会。

松枝正根1993『古代日本の軍事航海史』(上・下) かや書房。

松木哲 1990「和船模型 特に小浜地方の奉納模型船」『特別展ふねと信仰』福井県立若狭歴史民俗資料館、57-62頁。

松木哲1998「松右衛門帆」『海事資料館研究年報』26: 1-10頁。

三島格 1961「鯨の脊椎骨を利用せる土器製作台について」『古代学』10(1):66-73頁。

水野祐 1975a『古代日本と浦島伝説・上』(第1部 浦島伝説の歴史的形成) 雄山閣出版。

水野祐 1975b『古代社会と浦島伝説・下』(第2部 伊勢神宮の創祀と古代漁撈民) 雄山閣出版。

宮本一夫・春成秀爾編 2001『佐賀県大友遺跡—弥生墓地の発掘調査』(考古学資料集16) 国立歴史民俗博物館。

宮本一夫 2003「大友墓地の変遷」『佐賀県大友遺跡2—弥生墓地の発掘調査』(考古学資料集30) 国立歴史民俗博物館、70-82頁。

宮本常一 1975『海の民』(宮本常一著作集20) 未来社。

宮本常一 1983『対馬漁業史』(宮本常一著作集28) 未来社、81-87頁。

宮本常一 2015「鐘ヶ崎の海人」『海に生きる人びと』河出書房新社、62-76頁。

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議 2011『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』I。

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議2012a『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』II-1、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議。

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議2012b『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』II-2、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議。

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議 2013『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』III、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議。

宗像市史編纂委員会編 1999「古代の海神 住吉の神 ツツノヲと住吉三神 津守連 安曇の神 阿曇連とヤマト王権 宗像神と住吉・安曇神」『宗像市史 通史編 第2巻(古代・中世・近世)』、19-25頁。

木浦大学校博物館全羅南道・海南郡 1987『海南郡谷里貝塚1』(木浦大学校博物館学術叢書第8冊)、木浦大学校博物館。

茂在寅男 1987「遣唐使概観」茂在寅男・田中健夫・西嶋定生・石井正敏著『遣唐使研究と史料』東海大学出版会、1-43頁。

森公章 2008『遣唐使と古代日本の対外政策』吉川弘文館。

森田克行 2019「4世紀から9世紀の日本における造船・航海術」『特別研究事業第1回国際検討会「古代東アジアの航海と宗像・沖ノ島」報告書』『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会、19-30頁。

柳田国男 1978『海上の道』岩波書店。

柳田国男・倉田一郎 1975『分類漁村語彙』国書刊行会。

山口県編 1996『山口県史 通史編—原始・古代』山口県、99、604-605頁。

山口県教育委員会 1983『見島ジーコンボ古墳群』山口県。

山口徹 2020「ラロトンガ島の祭祀遺跡タブタブアテアークク諸島にも届いていたオロ信仰」秋道智彌・印東道子編『ヒトはなぜ海を越えたのか—オセアニア考古学の挑戦』雄山閣、230-236頁。

山梨千晶 2019「壱岐における弥生時代の鉄」『長崎県埋蔵文化財センター研究報告』9: 51-59頁。

山本敏子 2016「「家船」の研究史」『駒澤大学教育学研究論集』32: 107-135頁。

兪炳夏 2011「竹幕洞祭祀遺跡と沖ノ島祭祀遺跡」『「宗像・沖

ノ島と関連遺産群」 研究報告 I』281-290頁。

兪炳夏 2012「朝鮮半島における航海と祭祀—古代を中心として—」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』II-2,「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議, 24-41頁。

李相均 2014「韓国飛鳳里貝塚で出土した丸木舟の様相」『東京大学考古学研究室研究紀要』28: 159-186頁。

劉炯錫・高清徳編 2005『「東海岸阿美族竹筏漁獵文化調査記録」計画調査報告』行政院文化建設委員會・交通部觀光局東部海岸国家風景区管理所。

歴史学研究会・日本史研究会編 2004『日本史講座 第1巻 東アジアにおける国家の形成』東京大学出版会。

渡辺誠 1984『縄文時代の漁業』(考古学選書7) 雄山閣。

渡辺誠 1995「全羅南道郡谷里貝塚出土のト骨」『日韓交流の民族考古学』名古屋大学出版会。

渡辺誠 2002「ト骨・ト甲でなにが占われたのか」『月刊考古学ジャーナル』492: 4-5頁。

(英語文献)

Anderson, Atholl 2018 Ecological contingency accounts for earliest seagoing in the Western Pacific Ocean. *The Journal of Island and Coastal Archaeology* 13(2): 224-234.

Bellwood, Peter S. 1979 *Man's Conquest of the Pacific: The Prehistory of Southeast Asia and Oceania*. Oxford: Oxford University Press.

Buck, Peter H. 1938(1985) *The Vikings of the Sunrise*. Santa Barbara: Greenwood Pub. Group.

Callaghan, R. T. and S. M. Fitzpatrick 2008 Examining prehistoric migration patterns in the Palauan Archipelago: A computer simulated analysis of drift voyaging. *Asian Perspectives* 47(28): 44.

Doran, Edwin 1981 *Wangka: Austronesian Canoe Origins*. College Station: Texas A & M University Press.

Doumas, Christos 1992 *The Wall-Paintings of Thera*. (Translator: Alex Doumas) Athens: The Thera Foundation
Petros M. Nomikos.

Goodenough, Ward H. 1953 *Native Astronomy in the Central Carolines*. Philadelphia: University Museum, University of Pennsylvania.

Haddon, A.C. and J. Hornell 1937 *The Canoes of Oceania, Volume II: The Canoes of Melanesia, Queensland, and New*

Guinea. B. P. Bishop Museum, Special Publications 28.

Hall, H. R. 1970 *The Civilization of Greece in the Bronze Age*. New York: Cooper Square Publishers, Inc.

Heine-Geldern, R. 1932 Urheimat und früheste Wanderungen der Austronesier. *Anthropos* 27: 543-619.

Hornell, James 1943 Outrigger devices: distribution and origin. *The Journal of the Polynesian Society* 52: 91-100.

Lewis, D. 1975. We, the Navigators. The University Press of Hawaii.

MacKnight, Charles.C. 1976 *The Voyage to Marege. Macassan trepangers in northern Australia*. Melbourne: Melbourne University Press.

MacKnight, Charles C. 1986 Macassans and the Aboriginal past. *Archaeology in Oceania* 21 (1): 69-75.

Mahdi, Waruno 1999 The dispersal of Austronesian boat form in the Indian Ocean. In R. Blench and M. Spriggs eds., *Archaeology and Language III: Artefacts, Languages and Texts*, London: Routledge, pp. 144-179.

Simmons, Alan H. 2014 *Stone Age Sailors: Paleolithic Seafaring in the Mediterranean*. New York: Routledge.

Yabe, Itsuka, Yusuke Kawaguchi, Taku Wagawa, Shinzou Doi 2021 Anatomical Study of Tsushima Warm Current System: Determination of Principal Pathways and its Variation. *Progress in Oceanography* DOI : 10.1016/j.pocean.2021.102590

Yanguang Dou, Shouye Yang, Xuefa Shi, Peter D. Clift, Shengfa Liu, Jihua Liu, Chao Li, Lei Bi, and Yun Zhao 2016 Provenance weathering and erosion records in southern Okinawa Trough sediments since 28 ka: Geochemical and Sr-Nd-Pb isotopic evidences. *Chemical Geology* 425: 93-109.
<https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S00>

Yoshikawa, Y. A. Masuda, K. Marubayashi, M. Ishibashi and A. Okuno 2006 On the accuracy of HF radaor measurement in the Tsushima Strait. *Journal of Geophysical Research* 111: C04009, 1-10.

沖ノ島祭祀遺跡と竹幕洞祭祀遺跡からみた倭国と百済との交流

禹 在柄 韓国・忠南大学校考古学科教授

要旨：沖ノ島祭祀遺跡の出現背景には、倭国の形成に伴う宗教体制の浮上という側面が強く作用したとみられる。しかし、倭国から朝鮮半島へ渡る玄関口と言える沖ノ島祭祀遺跡の地理的な位置を考慮すれば、宗教体制の形成のみならず海を渡る長距離交易システムの強化という側面からのアプローチも必要になる。4～6世紀頃、すなわち、古墳時代の倭国の政治エリート層に与えられた最大の課題は、鉄など戦略物資を海外から安定的に確保することであった。朝鮮半島における高句麗の南下政策によって、金官加耶から倭国への鉄素材の輸入も、厳しい統制を受ける状況に直面したとみられる。準構造船という荒波に弱い交易船にコウヤマキなど倭国の商品を積んで出港した航海の目標は、まず、金官加耶の国際的な港であった。遭難の危険性も高い航路であったと言える。特に、加耶鉄など海外で購入した戦略物資を積んで帰国する倭国の船舶が遭難した場合には、倭国の政治エリート層・商人集団も、致命的な損失を受けるようになる。当時の倭国は、高句麗の脅威に対抗するためにも、鉄など戦略物資の安全な運送に全力を尽くしたに違いない。交易船が玄界灘を往来する過程で、航海の安全を守るために多様な試みがあったとみられる。5～6世紀頃、倭国の政治エリート層・商人集団が、特に、力を注いだ分野は神への祈りであったと思われる。この祈りの主な目的は、鉄など貴重な戦略物資を積んだ交易船の安全な帰還であろう。交易船の難破は避けなければならない事態であったと言える。この事態を避けるために、倭国の政治エリート層・商人集団は、沖ノ島で盛大な祭祀を行うことを決意したとみられる。5世紀頃になると、沖ノ島における祭祀行為は一層強化される傾向がみられる。この現象は朝鮮半島における高句麗の南下政策の影響によるものであったと言える。沖ノ島祭祀遺跡に類似する祭祀形態は、百済の竹幕洞祭祀遺跡でも確認された。ここは、倭国から公州など百済の首都へ向かう百済の西海岸航路上に位置する海岸祭祀遺跡である。5～6世紀頃、この海岸祭祀遺跡では、百済様式の祭祀痕跡とともに、石製模造品を供献する倭国様式の露天祭祀が行われた痕跡も見つかった。この倭国様式の祭祀痕跡は、沖ノ島祭祀遺跡の様相とも類似するものであったと言える。これは、高句麗の脅威が高まった時期に、百済の西海岸航路を往来する自国の交易船の安全を守ることが、百済のみならず倭国の戦略目標であったことを物語る資料であろう。従って、当時、倭国と百済が直面した国際的な政治情勢と交易環境を理解する上で、沖ノ島祭祀遺跡と竹幕洞祭祀遺跡は、もともと、貴重な宗教遺産であったと評価できる。

キーワード：沖ノ島祭祀遺跡、竹幕洞祭祀遺跡、鉄、戦略物資、石製模造品、準構造船、倭国、百済、高句麗、金官加耶

はじめに

倭国の沖ノ島祭祀遺跡を歴史的に評価する上で、もっとも、注目すべき観点は、ここに倭国最大の海岸祭祀遺跡が生まれた背景であろう。すなわち、ここで航海の安全と国家の繁栄を祈願するようになった理由を解明することは、歴史的な評価への手掛かりになりうる。

私は、この背景を考える上で、まず、沖ノ島祭祀遺跡が位置する沖ノ島という島の地理的な特徴に注目したい。沖ノ島が位置する玄界灘は、紀元前後から倭の商人

が日本列島から朝鮮半島へ渡る唯一な航海ルートであった。

その後、古墳時代にも倭国の交易船と商人が、この航海ルートが無事に往復しなければ、鉄などの貴重な戦略物資、先進知識の輸入は難しくなったと思われる。特に、この玄界灘で帰国船の難破を想定すれば、倭国側の経済的な損失額は数えきれない。交易船の難破を防ぐために、倭国側は造船技術と航海術の向上を急がなければならなかった。しかし、沖ノ島祭祀遺跡で行われた祭祀がピークを迎えた5～6世紀頃には、まだ、準構造船と

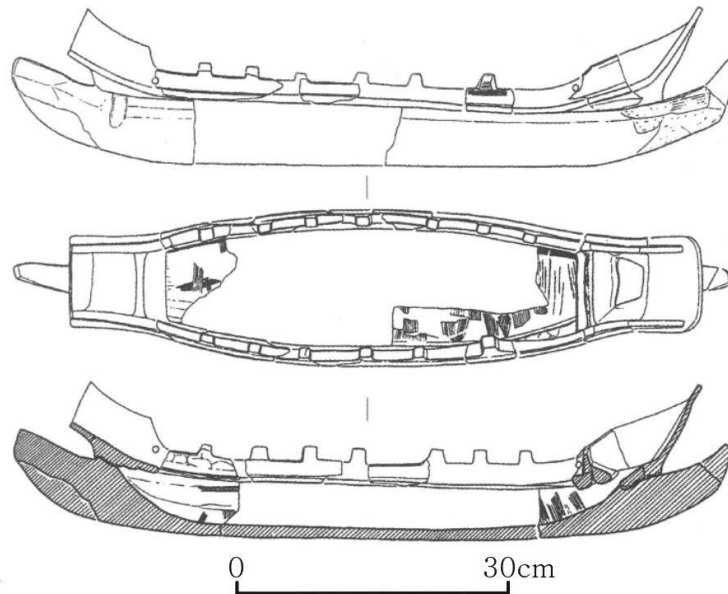


図1：京都ニゴレ古墳出土の船形土器（弥栄町教育委員会編1988）

呼ばれる櫓で漕ぐタイプの交易船が玄界灘を往復していた。この船舶の場合、天気、潮流などに恵まれた時期には、倭国と金官加耶との間で行われた航海を成功させる確率は、低くなかったと思われる。しかし、当時の準構造船（図1）の構造を復元することによって、試みられた大阪から釜山への実験航海を通じて認識したように（大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編1989、pp. 10-19）、当時の玄界灘を利用する航海ルートは、とても難しい航海であったと言える。すなわち、往復に失敗する航海ケースも少なくなかったと思われる。この状況の中で、当時、倭国側で航海の成功を祈るために、沖ノ島で盛大な海岸祭祀を行うようになったことは、やむを得ない選択であったかもしれない。

この現象は、5世紀中葉以降、倭国側が外交・経済的に急接近を試みた百済にも現れた。同時期の百済西海岸航路上に位置する竹幕洞祭祀遺跡では、倭国との海上交流の実態が把握できる祭祀遺物の出土が顕著になる。本文では、5世紀後葉～6世紀前葉頃、沖ノ島祭祀遺跡と竹幕洞祭祀遺跡で行われた祭祀様相の比較を通じて両国間の海上交流の実態にアプローチすることにしたい。このことは、沖ノ島祭祀遺跡の歴史的な評価のみならず、当時、倭国と百済との間で行われた海上交流の歴史的に評価にもつながる試みになると確信する。

1. 百済への長距離航海を試みた倭国の商人

（1）金官加耶の衰退に伴って急接近する倭国と百済

4世紀頃まで、倭国の商人が目指した朝鮮半島側の国は、現在の金海・釜山周辺に位置する金官加耶であった。金官加耶の国際的な港は、対馬から50km程度という最短距離に位置する恵まれた環境の交易港であった。

倭国から最短距離に位置するという地理的な利点以外にも、倭国の商人が金官加耶の国際的な港を目指して航海を試みた背景には、次のような二つの利点があったと思われる。

第一、ここは倭国では生産することが難しかった良質の鉄素材など戦略物資の購入が頻繁に行われた港であった。

第二、ここは鉄製の武器と甲冑の製作技術など先進技術の導入が可能な港であった。

当時の倭国の商人に同行し、海を渡った人物の中には、倭国中央から派遣された使者もいたと思われる。もちろん、使者の役割も兼ねた商人もいたに違いない。金官加耶は、紀元前後、すなわち、弁韓が存在していた頃から高品質の鉄を購入できる場所であった。倭国の商

人が金官加耶の国際的な港を目標に航海を試みた背景には、最短距離の航路、運送費用も安い高品質の鉄の購入というこの港が持つ二つの魅力的な利点が、特に、作用したと思われる。倭国の交易船の往復運賃と航海上の危険度を考慮した場合、倭国から最短距離に位置する金官加耶の港を目指した航海は、運賃という経済的な側面のみならず安全性というもっとも重要な側面においても最高の選択であったと言える。すなわち、最短距離を往復する航海の場合、長距離を往復する航海に比べて遭難の可能性も低いことについて、倭国の商人は熟知していたに違いない。

倭国側から見れば、朝鮮半島の国々の中でも、金官加耶で生産された鉄は、安くて品質の良い最高の商品であったと思われる。この金官加耶鉄の利点は、鉄の生産システムの効率性によって生まれたとみられる。特に、鉄鉱石から鉄を製品化する生産地が金官加耶を縦断する洛東江周辺に点在していることは大きな利点であった（韓国文化財調査研究機関協会編2012、pp. 397-430）。すなわち、金官加耶は、鉄の生産地と輸出用の港が洛東江の水運によってつながっていた国であった。この洛東江の水運を利用すれば、洛東江周辺から洛東江河口に位置する国際的な港までの鉄の運送費用も、朝鮮半島諸国の中で最安値になる可能性が高い。また、金官加耶以外の加耶諸国から生産された鉄も、金官加耶の港までつながっている南海岸航路によって運ばれてきたと思われる。加耶諸国の間で利用されていたこの航路の効率性を考慮すれば、これらの加耶諸国から生産された鉄の運送費用も低い水準であったと言える。すなわち、この鉄の生産と運送、輸出過程で金官加耶は最適の条件を満たした国であった。このことは、倭国側の商人が金官加耶の国際的な港を目指して航海を試みた背景の一つであったと言える。

この地の紀元前1世紀後半の首長墓である茶戸里1号墓（韓国考古美術研究所編1998、pp. 14-27）から出土した鉄斧など高品質の鉄製品を考慮すれば、この地の鉄生産に関する技術水準が、すでに、紀元前から最高に達していたことは明らかである。弥生時代の倭の商人もこのことについて熟知していたに違いない。長距離交易のために、日韓の間を往来した倭の商人集団の専門性を考慮すれば、この交易環境は、古墳時代の成立以降も大きな

変化はなかったとみられる。従って、古墳時代の成立以降の倭国の商人も、金官加耶の港を鉄の輸入拠点として利用した弥生時代の商人の伝統を守ることになったと思われる。

しかし、金官加耶の繁栄は5世紀初め頃になると終焉を迎えるようになる。鉄の生産と輸出によって繁栄を成し遂げた国であったが、高句麗によって大規模な軍事侵攻を受ける事態を迎えるようになる。この事件によって、金官加耶は経済的な危機に陥ったとみられる。経済危機の原因は、これまで金官加耶の国際的な港で行われた自由な鉄交易が、高句麗・新羅による統制を受ける事態に直面したことであろう（禹2020、p. 95）。すなわち、この港で金官加耶産を中心に行われてきた加耶鉄の交易は、続かなかったと思われる。当時の鉄が、第一級の戦略物資であったことを考慮すれば、加耶諸国で生産・集荷された鉄が、金官加耶の国際的な港を経由して倭国に輸出される交易システムは、急激に衰退したと思われる。高句麗による金官加耶への大規模な侵攻直後、新羅は自国で生産された鉄を倭国に輸出するシステムの構築を試みたと思われる。これまで倭国に輸出されていた加耶鉄の膨大な量を考慮すれば、新羅鉄の倭国への輸出は、新羅には経済的な利益をもたらす契機になったと言える。ただ、新羅で生産された鉄の場合、金官加耶の国際的な港までの運送費用を考慮すれば、金官加耶鉄に比べて運送費用の面では不利な条件を有していた。新羅鉄の値段は金官加耶鉄に比べて高く形成されるしかなかったと思われる。倭国の商人は、高句麗・新羅による加耶鉄の輸出統制によって、値段の高い新羅鉄の購入を強いられていたとみられる。彼らは、5世紀前葉頃まで、不利な交易条件にもかかわらず、やむを得ず、新羅鉄の購入を通じてこれまでの鉄の交易システムの維持に全力を尽くすことになったと思われる。

しかし、倭国側から見れば、この不利な交易環境の改善のために、新たな戦略を打ち出さなければならなかった。恐らく、鉄の輸入量や値段に関する不利な統制が続くことによって倭国側の経済的な損失はますます大きくなったに違いない。5世紀中葉以降、この不利な交易条件を打開するために、倭国側は新たな政策を試みたと思われる。これは、まず、百済と大加耶を含む加耶西部地域の政治体など高句麗の威嚇に悩んでいる国々との外

交・経済的な連携を強化することであった。この中で、特に、百済との交流強化を優先的に目指した背景には、東晋・中国南朝側との交流強化という国際政治に関する倭国の戦略的な判断が作用したと思われる。この時期、朝鮮半島諸国の中で、東晋・中国南朝側との密接な外交関係を結んでいた国は、倭国側が交流強化を目指すようになった百済であった。倭国側の百済への緊密な外交的接近は、当時の国際情勢を考慮した意図的な選択であったと言える。

(2) 倭国の商人が百済への長距離航海を成功させた要因

倭国側が百済との交流強化を目指す過程で最大の難関は、百済までの航路の無事通過であった。すなわち、金官加耶、阿羅加耶、大加耶、小加耶など朝鮮半島南海岸に点在する政治体の領海を倭国の交易船・商人が安全に航海することは、当時、倭国側の最優先課題であったとみられる。この課題を解決するためには、倭国の交易船と商人が通過すべき政治体との外交的な交渉は必然的なものであった。阿羅加耶、大加耶、小加耶との交渉は、以前からの外交ルートを通じて行われたに違いない。しかし、これらの加耶西部地域の政治体に接近するためには、これまでのように金官加耶の国際的な港を経由する必要があった。準構造船と呼ばれる当時の加耶船舶と倭国船舶の構造と西から東に流れる対馬海流を考慮すれば、対馬を出発した倭国船舶は、まず、最短距離に位置する金海・釜山周辺の金官加耶の港への入港を目指さなければならなかった。対馬を出発した準構造船が金官加耶の港を経由せず、阿羅加耶、大加耶、小加耶の港に直行できる可能性はとても低かったと言える。貴重な交易品の価値を考慮すれば、倭国側からのこの無謀な直行航海への挑戦はなかったと思われる。また、ここは、高句麗・新羅によって掌握された以降も、金官加耶の港が持つ国際的な交易港としての地位は、そのまま維持されていたと思われる。従って、ここは、高句麗・新羅による交易統制があったにもかかわらず倭国の商人には停泊しなければならぬ魅力的な港町であったに違いない。

ただ、金官加耶の国際的な港に入港する航海ルートの場合、入港する前に、ここを統制していた高句麗・新羅側との外交的な交渉を解決しなければならなかった。交易品目と輸入量、値段など既存の交易条件に比べて不利

なケースが多かったと思われる。しかし、倭国側から見れば、この外交的な牽制によって、倭国が受ける損失を避ける方法はなかったと思われる。もし、金官加耶の国際的な港への入港を避けて、阿羅加耶、大加耶、小加耶の港までの直行を試みた場合には、恐らく、遭難・難破に直面する可能性が高かったと思われる。すなわち、総合的な損益計算を見積もった場合には、まず、金官加耶の国際的な港に入港する航海ルートを選ぶことはやむを得ない選択であったと言える。

従って、倭国側が百済までの長距離航海を成功させるためには、表面的かもしれないが、高句麗・新羅側との最小限の外交関係の維持は必然的であったと言える。倭国の商人は、鉄など戦略物資を高値で購入する方式以外にも、高句麗・新羅側に好意を寄せる多様な努力をしなければならなかったとみられる。

倭国の商人グループに含まれていたと思われる宗像の最高位級の人物が葬られた墓からは、高句麗との関係改善を試みた倭国側の思惑が明瞭に読み取れる。例えば、5世紀中葉頃に築造された福津市勝浦峯ノ畑古墳から発見された高句麗様式の石柱の採用である(図2)。石柱は横穴式石室の内部に立てられていた。横穴式石室は高句麗や百済で広く使われていたタイプの墓室であったが、勝浦峯ノ畑古墳の事例は百済様式に近いタイプであったと言える(福津市教育委員会編2011、pp.86-89)。しかし、この事例で注目すべきことは、倭国側の首長がこの横穴式石室を採用することによって、好意を寄せる対象に百済とともに高句麗が含まれていることである。この石室を造営した宗像の最高位級の首長は、高句麗様式の石柱の採用を高句麗側に知らせることを意図したに違いない。このことは、高句麗との関係改善を露骨的に表現した行動であったと言える。この行動は、交易の担い手であった倭国側の一部の首長・商人の判断であったと思われる。この国際政治的な判断を実行に移した倭国の首長は、宗像地域を治めた最高位級の人物であったと言える。このことは、宗像の首長が朝鮮半島側の国々との交易過程で、倭国側の商人を代表する中心的な役割を担っていたことを示唆する。宗像の最高位級の人物の墓も、一般的には、倭国の中央政権との協議によって、序列に従った墓形式が採用されていたと思われる。この協議過程で、中央政権の最高級の墓にも採用されなかった高句

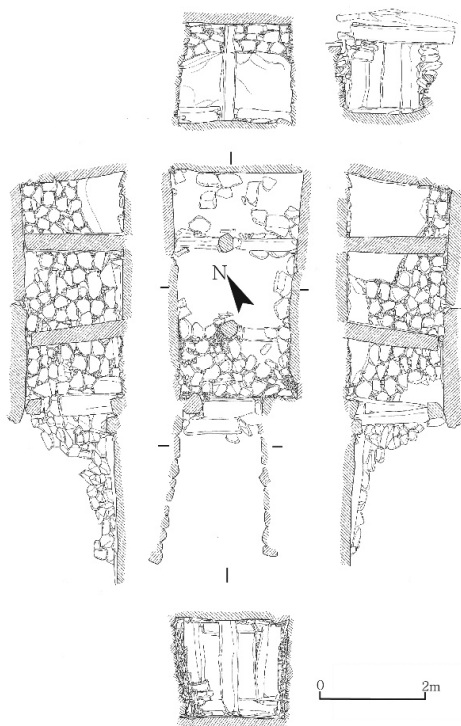


図2：福岡勝浦峯ノ畑古墳にみられる百済様式の横穴式石室と高句麗様式の石柱（福津市教育委員会編2011）

麗の墓様式の追加を試みた宗像の首長の企画は、百済との長距離交易を成功させることを念頭に置いた大胆な行動であったと評価できる。これは、恐らく、中央政権と宗像の首長との間に存在していた深い信頼関係をもとに採用された墓様式であったと言える。

ただ、この一時的で局地的な高句麗の墓様式の採用は、6世紀前葉以降、倭国中央から拡散されるようになる百済中央様式の横穴式石室の採用とは区別しなければならない。竈と甌など百済様式の炊事・暖房文化とともに拡散された百済中央様式の横穴式石室の採用は、倭国と百済との間に形成された深い絆を基礎に試みられた親百済政策を国内外に知らせることを目標にした倭国中央の戦略的な選択であったと思われる。しかし、宗像の勝浦峯ノ畑古墳に採用された高句麗の墓様式は、倭国側の親高句麗・新羅政策を国内外に知らせる目的で採用された産物ではなかった。敵対する高句麗・新羅との交渉の担い手であった宗像の首長に限られた行動であったと言える。この一時的で局地的な行動の場合も、倭国側の商人が金官加耶の国際的な港に入港し、交易交渉を行う過程では威力を発揮したに違いない。宗像の首長が高句麗

の墓様式を採用した情報は、ここを統制していた高句麗・新羅側にも伝わったと思われる。この情報は、高句麗側から見れば、倭国の商人の信頼性を判断する手がかりになったに違いない。

この高句麗を刺激しない賢い宗像の首長の活躍によって、倭国の商人・交易船が、無事に金官加耶の国際的な港を通過すれば、その以降、阿羅加耶、大加耶、小加耶を経由する百済までの長距離航海は、政治的には順調であったと言える。倭国は、金官加耶を軸に行われた既存の交易システムの再編を試みる過程で、阿羅加耶、大加耶、小加耶との外交的な親縁関係の構築に最善を尽くしたとみられる。倭国の商人側も、百済への航路上に点在するこれらの加耶西部地域の政治体との深い信頼関係の構築が、百済との交流強化を試みる過程で、先決課題であったことを十分に認識していたに違いない。

倭国の商人側は、阿羅加耶、大加耶、小加耶との親縁関係の強化とともに、これらの政治体の交易船を利用する戦略も試みたと思われる。交易船の乗り換え戦略とも言えるべき貨物の運送システムは、倭国から百済の都までの長距離を往復する過程で、対馬を出発した倭国の交易船の商人が、現地の船舶に乗り換えることであった。もちろん、倭国側の貨物の運搬もこの現地の船舶を利用するシステムであった。このシステムは、倭国の商人と貨物の安全運送の確率を高める戦略であったと思われる。もちろん、最初から最後まで倭国の交易船を利用する運送の方が費用の節約につながる可能性はある。しかし、朝鮮半島の南西海岸の複雑な海岸線を考慮すれば、安全通航の確率が相対的に高いと思われる乗り換え方式の運送も悪くない選択であったと言える。すなわち、倭国の交易船を百済の都までそのまま利用する方式と加耶・百済船舶への乗り換えを利用する方式（図3）が適切に採用されていたに違いない。これは、当時、倭国から百済への長距離航海の成功に大きく貢献したとみられる（Woo2018, p. 194）。

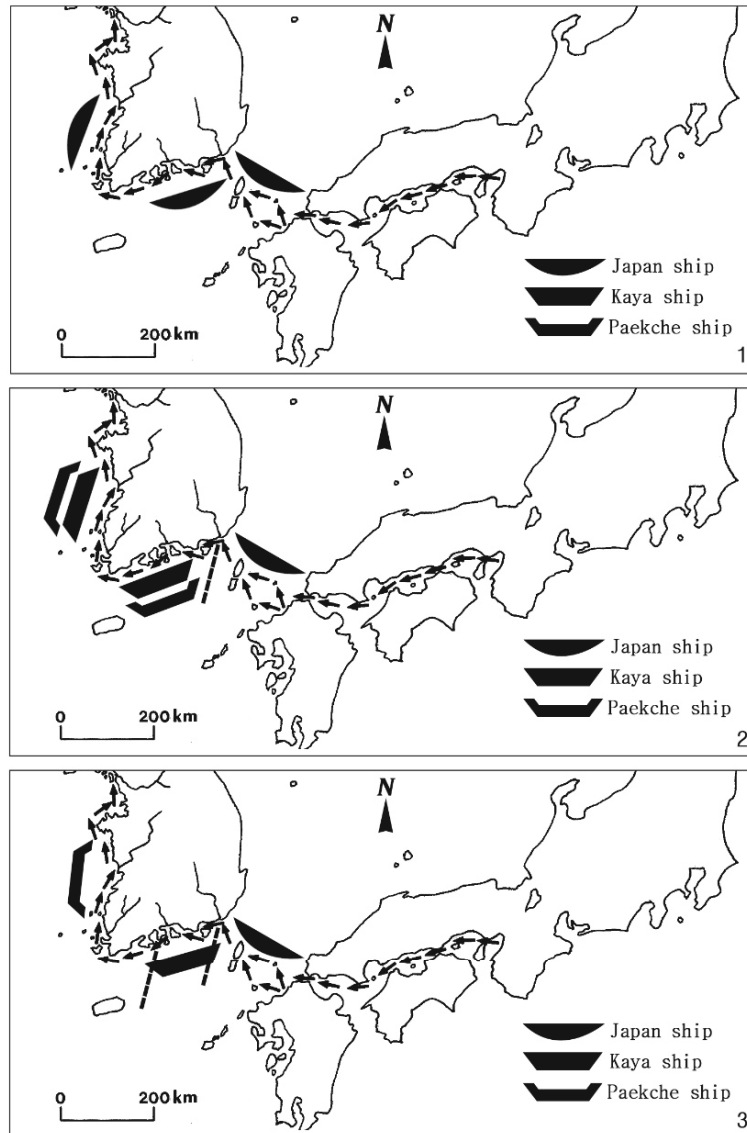


図3：5～6世紀頃、倭国から百済へ向かう三つの航海方式 (Woo2018)

2. 高句麗の脅威に対抗する過程で深まる倭国と百済との親縁関係

(1) 高句麗がもたらした危機を克服するために協力する百済と倭国

高句麗による金官加耶への大規模侵攻にもっとも衝撃を受けた国は、倭国と百済であった。倭国の場合、金官加耶を通じて順調に行われてきた鉄の輸入システムに大きな打撃を受けるようになる。5世紀前葉以降、金官加耶の港に入港した倭国の商人は、鉄の値段の上昇と輸入量の制限など不利な交易条件に直面することになったと思われる。これが一時的なものなのかを倭国の政治エ

リート層は判断しなければならなかったに違いない。高句麗から大規模侵攻を受けて以降、金官加耶はこれまでの鉄交易の軸としての役割を失ったと言える。金官加耶の国際的な港を往来する倭国側の商人は、倭国の政治エリート層に金官加耶の未来に関する否定的な展望を伝えたとに違いない。この倭国の商人からの情報を基礎に、倭国の政治エリート層は、金官加耶に頼るこれまでの輸入戦略を修正しなければならなかったと思われる。この新たに組み立てられた戦略の核をなす前提は、金官加耶の代わりに鉄などの戦略物資と先進知識を倭国へ供給できる国の選択であった。もちろん、高句麗による金官加耶への大規模侵攻以前のように、高品質の安い鉄を安定的

に購入できる国を探さなければならなかった。

阿羅加耶、大加耶、小加耶の場合、安くて高品質の鉄の生産地なので、鉄の輸入のみを目的に交渉する場合には、最適の国々であった。しかし、これらの政治体は、金官加耶を含めて加耶連盟に属する国々なので、高句麗による金官加耶への大規模侵攻以降、高句麗・新羅の牽制を意識しながら倭国側との交易交渉に臨むことになったとみられる。すなわち、これらの政治体は、倭国側が企画する自由な交易条件を満たすには、不十分な政治情勢に置かれていた国々であった。従って、倭国の政治エリート層は、最優先的に交流強化を目指すべき国として百済を選ぶことになった。これと同時に、百済への航海途中に必ず停泊しなければならない阿羅加耶、大加耶、小加耶との交流を一層強化する戦略も組み立てるようになった。この時期は、倭国のみならず百済も、高句麗に対抗できる国際的な連携を急がなければならない危機状況であったと言える。もちろん、両国のみならず阿羅加耶、大加耶、小加耶も、高句麗・新羅からの牽制を避けるために多国間の外交的な連携を待っていたに違いない。

これらの国々の共通点は、金官加耶が事実上高句麗・新羅の統制に置かれた以降、高句麗の波状攻撃を恐れた政治体であったことである。高句麗によってソウル地域の首都が陥落された百済、高句麗の大規模侵攻によって衰退した金官加耶を、隣で目撃した阿羅加耶・大加耶・小加耶には、百済・倭国との国際的な連携の推進は望むべき動きであったと言える。高句麗による金官加耶への大規模侵攻以降、既存の鉄交易の危機に直面した倭国は、高句麗の脅威に対抗するために必要な戦略を新たに打ち出さなければならなかった。このことを考慮すれば、この時期、戦略物資と先進知識の安定的な確保を念頭に置いた倭国の政治エリート層の最優先の外交戦略は、多国間の外交的な連携に合流することであった。この倭国の多国間の連携戦略は、この中で、特に、百済との交流をもっとも重視するという複合的な構造のものであったと思われる。倭国の最終的な目標であった、遠く中国王朝からの先進物資と知識の輸入を考慮すれば、百済重視の多国間の外交的な連携の推進は、倭国の政治エリート層の現実的な判断であったと評価できる。この時期、倭国側は、東晋、中国南朝との緊密な外交関係で結

ばれていた百済の国際政治上の位置を高く評価していたに違いない。倭国側が東晋、中国南朝との外交関係の強化を試みる過程で、地理的にも、百済は、倭国の使者・商人が、必ず、通るべき拠点地域を管理する国であった。結局、倭国は、金官加耶の代わりに新たな外交戦略の軸をなす国として百済を選ぶことになったと言える。

高句麗による金官加耶への大規模侵攻の直前、4世紀末、百済は高句麗の波状攻撃によって、ソウル地域の首都が莫大な被害を受けるようになる。この直後、5世紀初め頃、百済は高句麗の大規模侵攻によって金官加耶が衰退する過程も目撃するようになった。これらの一連の事件の後、高句麗の脅威を阻止するために、百済側が選んだ選択可能な新たな外交戦略は、経済的にも深刻な状況に陥った金官加耶周辺の加耶諸国と倭国をつなぐ広域の外交的な連帯の結成であったと思われる。恐らく、当時の高句麗の圧倒的な軍事力を考慮すれば、百済は、単独に対抗するよりは国際的な連帯を通じて対抗することが有利であったと判断したに違いない。結局、百済の政治エリート層は、高句麗の波状攻撃を阻止するために、倭国とともに阿羅加耶・大加耶・小加耶をつなぐ国際的な連帯の結成へ舵を切るようになる。

百済側が高句麗の脅威を恐れた決定的な理由は、第一、百済の背後に位置する友好国であった金官加耶が、高句麗・新羅によって交易統制を受けるようになったことであろう。近い将来、百済の自由な交易が阻止される状況を想定すれば、やはり、金官加耶のような深刻な経済的損失を覚悟しなければならなかったと言える。第二、最悪の場合、北と南東方向という両方向から高句麗の脅威にさらされる百済の姿を想定しなければならなかったことであろう。この二つの不安な状況を避けるために、百済は高句麗の脅威から生き残った隣国であった阿羅加耶、大加耶、小加耶など加耶諸国、海の彼方の倭国との外交関係の強化を試みるようになったと思われる。高句麗の波状攻撃を恐れた百済側のやむを得ない選択であったかもしれない。

百済側がこの新たな外交路線を組み立てても、阿羅加耶、大加耶、小加耶など加耶諸国と倭国側が同調しなければ、この政治的な構想の実現は不可能であったと言える。すなわち、倭国と阿羅加耶、大加耶、小加耶など加耶諸国がこの国際的な連帯に参加することによって得ら

れる政治・経済的なメリットがなければならなかった。倭国側は、前にも述べたように、戦略物資と中国からの先進知識を金官加耶の代わりに供給できる主な国として百済を選んだ。このことは、倭国側が百済との交流強化を通じて得られる政治・経済的なメリットを高く評価していたことを意味する。これは百済の外交的な構想に倭国側が積極的に同調した背景と言える。

阿羅加耶、大加耶、小加耶など加耶諸国も高句麗の脅威から生き残るために、倭国・百済側が選んだ外交戦略に類似する国際的な連帯を選ぶようになった。高句麗・新羅と対峙する緊迫な状況の中で、西側の隣国である百済、海の彼方に位置する南側の倭国との政治・経済的な連帯の強化は、やむを得ない選択であったかもしれない。特に、阿羅加耶、大加耶、小加耶など加耶諸国から見れば、倭国側は、加耶鉄の最大の輸出先であった。すなわち、倭国は加耶諸国の経済に大きく貢献してきた頼りになる隣国であった。また、百済は、地理的に、北からの高句麗の波状攻撃を一次的に阻止する城壁のような役割を担ってきた隣国であった。さらに、百済は中国からの先進文物・知識の供給先としての役割を果たしてきた国であった。すなわち、倭国・百済との国際的な連帯の強化が、経済的な貢献のみならず政治的な安定にもつながることについて、阿羅加耶、大加耶、小加耶など加耶諸国の政治エリート層は冷静に判断していたに違いない。

さらに、阿羅加耶、大加耶、小加耶が位置する加耶西部地域は、金官加耶の国際的な港から百済への長距離航海を試みる倭国の交易船・商人には、必ず、停泊すべき港を有する戦略的な拠点であった。従って、倭国側が推進する百済との交流強化のためにも、阿羅加耶、大加耶、小加耶など加耶西部地域の政治体との協力は不可欠なものであった。加耶西部地域の政治体に対する百済側の戦略的な思考も、この倭国側の思考とも類似する。すなわち、百済から倭国への長距離航路上に位置する阿羅加耶、大加耶、小加耶の港は、百済の交易船・商人にも、必ず、停泊しなければならない場所であった。当時の高句麗の脅威に伴う国際情勢と倭国と百済を往復する交易船の航路を考慮すれば、倭国も百済も阿羅加耶、大加耶、小加耶など加耶諸国との国際的な連帯に最善を尽くす必要があった。倭国と百済との交流強化のためにも、両国

は、阿羅加耶、大加耶、小加耶など加耶諸国を、両国間の国際的な連帯に合流させなければならなかったと思われる。

ここまで、倭国と百済との間で行われた交流強化の動きを分析する過程で、倭国と加耶西部地域の政治体との間で行われた政治・経済的な動きについても検討してみた。この他にも、もう一つ注目すべきことは、倭国と金官加耶との間で行われた交流の実態である。両国は、高句麗・新羅の牽制を避けながら密かに緊密なつながりを持っていたと思われる。

倭国の王墓域である大阪の百舌鳥・古市古墳群に位置する野中古墳と金官加耶の王墓級の墓である大成洞93号墳から出土した小型の加耶土器（高橋・中久保編2014・金海市大成洞古墳博物館編2016、図4・図5）は、高句麗の金官加耶への大規模侵攻以降も、倭国と金官加耶との間で、密かに、緊密な交流があったことを示唆する。

5世紀前葉、倭国の王墓域で出土したこの最高級の小型の加耶土器は、金官加耶から倭国へ送られた品物であったと言える。特に、大成洞93号墳の場合、高句麗による金官加耶への大規模侵攻直後の王墓級の墓である大成洞94号墳が位置する。鉄素材を大量に副葬した大成洞94号墳（図6）に比べて、同じく王墓級の墓にもかかわらず大成洞93号墳（図7）は、とても貧弱な副葬品を有している（禹2017、pp.150-154）。

この金官加耶の貧しい王墓級の墓に、野中古墳の副葬品と同じタイプの最高級の小型の加耶土器が副葬されている場合は、偶然の産物とは考え難い。貧しい王墓級の墓であった大成洞93号墳から読み取れることは、高句麗の金官加耶への大規模侵攻以降、金官加耶の経済状況が最悪の事態に陥ったことである。ここで、高句麗の金官加耶への大規模侵攻直後の緊迫した政治情勢にもかかわらず、金官加耶の王墓級の墓と倭国の高位級の人物の墓に、ほぼ、同じ時期に、同じタイプの最高級の小型の加耶土器が副葬されていたことに注目する必要がある。私は、この状況を、高句麗の金官加耶への大規模侵攻以降も、倭国と金官加耶との間に深い絆が密かに続いていることを示唆する考古学的資料とみている。倭国の場合、新たに百済と阿羅加耶、大加耶、小加耶など加耶西部地域の政治体との交流強化を試みる一方、金官加耶の復活

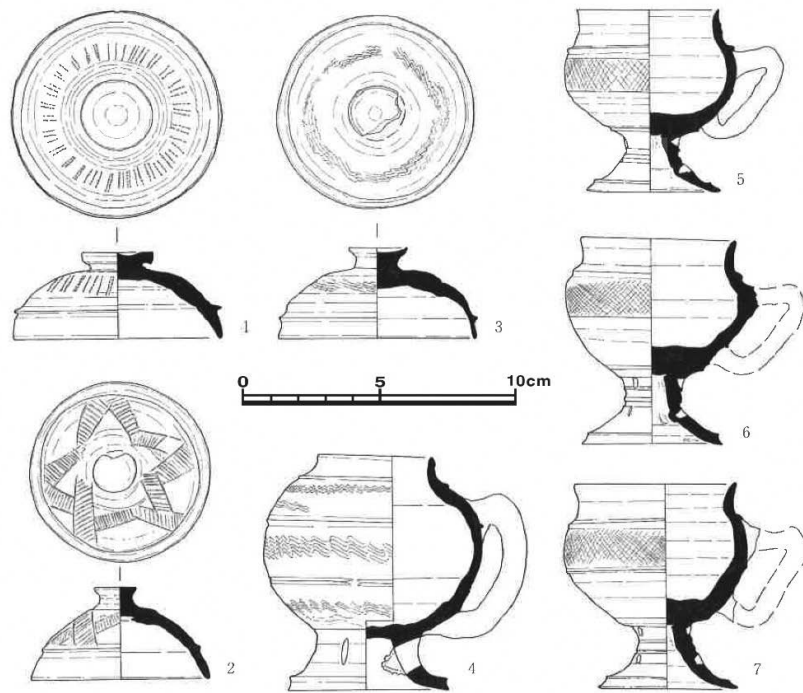


図4：大阪野中古墳出土の小型加耶土器（高橋・中久保編2014）

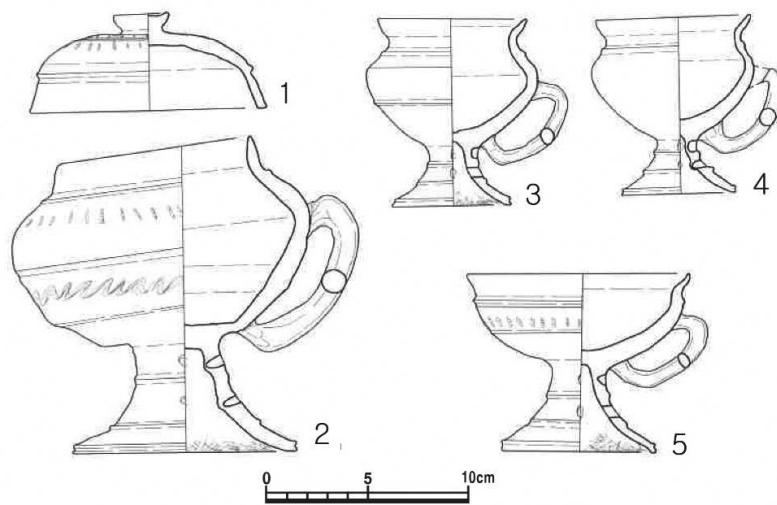


図5：金海大成洞93号墳出土の小型加耶土器（金海市大成洞古墳博物館編2016）

も密かに待っていたかもしれない。これらの加耶土器は、倭国が複合的な外交政策を並行して推進していたことを示唆する有力な考古学的資料であろう。5世紀前葉以降、金官加耶は衰退の道を歩むことになるが、百済と阿羅加耶、大加耶、小加耶へ向かう倭国の交易船・商人は、相変わらず、金官加耶の港町を利用する必要があった。この過程で、高句麗・新羅の牽制を避けながら、倭

国と金官加耶との密かな取引も試みられたと思われる。この密かな取引を成功させるためにも、倭国側は、衰退前の金官加耶との深い絆を密かに維持する必要があった。しかし、この倭国と金官加耶との間で行われた努力にもかかわらず、東アジアの鉄交易の軸としての金官加耶の役割は復活しなかった。結局、倭国は、百済との交流強化を随行する過程で、阿羅加耶、大加耶、小加耶な

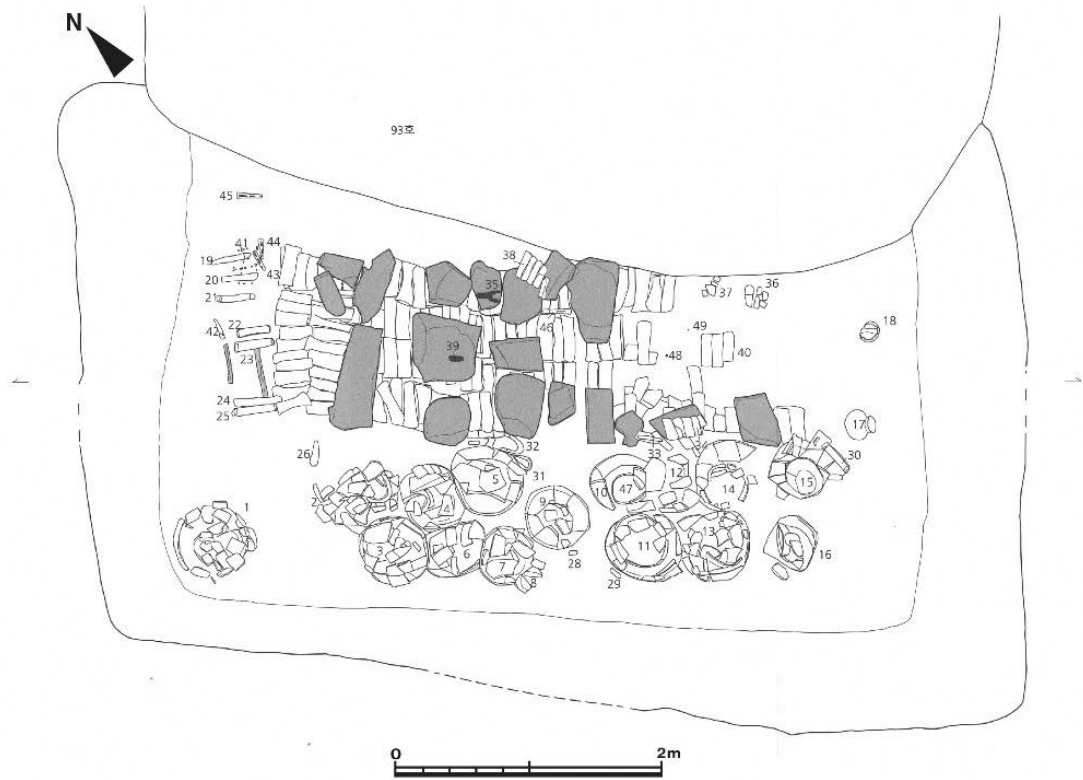


図6：鉄素材を大量に副葬した金海大成洞94号墳（金海市大成洞古墳博物館編2016）



図7：貧弱な副葬品を有する金海大成洞93号墳（金海市大成洞古墳博物館編2016）

ど加耶西部地域の政治体との経済的な交流も深めるとい
う新戦略へ転換を試みるようになる。

(2) 百済による親中国南朝・倭国政策の強化を物語る百 済地域の墓と海岸祭祀遺跡

百済との交流強化を重視する倭国の国際的な政治・経
済戦略の変更は、高句麗の脅威に悩む百済が、新たな外
交戦略を組み立てる過程にも影響を与えたと思われる。
高句麗の波状攻撃を阻止するために百済側が打ち出した
もっとも重要な外交的な構想は、東晋・中国南朝という
中国側と百済の後方に位置する倭国側という海の彼方に
位置する遠い友好国との政治・経済的な結束の強化で
あった。また、阿羅加耶、大加耶、小加耶など加耶西部
地域の政治体という国境を接する近い友好国との外交関
係の強化ももう一つの外交的な構想であった。南方から
の高句麗・新羅の脅威を一次的に阻止するためにも、南
方の国境に接する阿羅加耶、大加耶、小加耶との外交的
な密着は、百済側の欠かせない課題であったと言える。
さらに、倭国側との政治・経済的な交流を深めるため
にも、百済と倭国との間の航路上に位置する加耶西部地
域の政治体との外交交流を深める戦略は、やむを得ない選
択であったと言える。

高句麗による軍事的な圧迫が増加する5世紀後葉以降
になると、百済側の墓と海岸祭祀遺跡には、親中国南朝・
倭国政策と親加耶政策の強化を示唆する考古学的資料が
顕著になる。例えば、5世紀後葉、百済の西南部地域の
首長墓には倭国の墓様式の採用が登場する。一部の地方
首長墓では、倭国の円筒埴輪を模倣した円筒形土器を立
てる倭国の墓様式の採用が認められた。

3世紀頃、百済西南部地域の墓にも、在地的な円筒形
土器（国立清州博物館編2019、p. 91）を立てる墓様式は
存在していた。しかし、この3世紀頃の円筒形土器と倭
国の円筒埴輪を模倣した5世紀後葉の円筒形土器（図8）
は、異なる系統のものと評価される。墓に儀礼用の土器
を立てる墓様式は、3世紀頃の在地的な伝統に影響を受
けた可能性もあるが、5世紀後葉、百済西南部地域に現
れた円筒形土器は倭国の円筒埴輪を模倣した事例であ
る。すなわち、5世紀後葉、新たに登場した円筒形土器
を立てる墓様式は、在地の円筒形土器の型式変化とみる
よりは、円筒埴輪という倭国の墓様式の新たな採用とみ

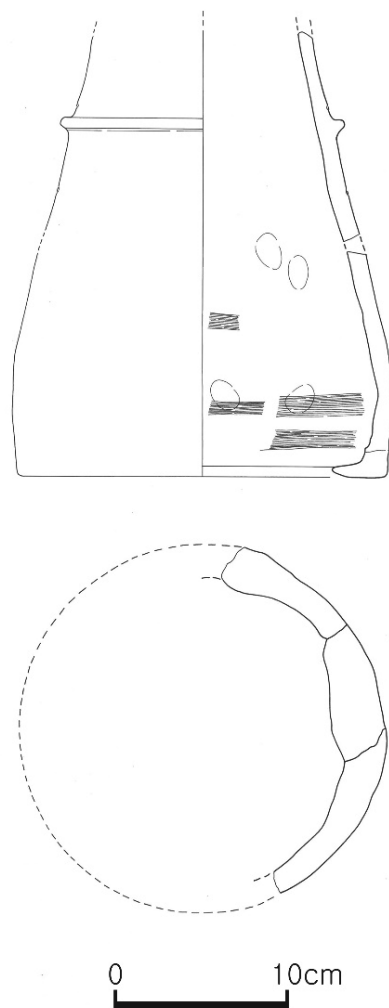


図8：百済の高敞鳳德里1号墳出土の5世紀後葉の円筒形土器
（円光大学校馬韓・百済文化研究所編2016）

ることが妥当であろう。

しかし、この新たな現象は、百済で多く目撃された憧
れの中国の先進文化の模倣とは、異なる背景を有する事
例であったと思われる。円筒埴輪を立てる倭国の墓様式
の採用背景を考える上で、注目すべき事項は、首都陥落
の前後という百済の政治情勢がもっとも不安な時期に、
倭国の墓様式の採用が現れたことである。特に、霊岩沃
野里方台形古墳の事例のように、倭国側との海上交流過
程で、担い手の役割を果たしてきた栄山江流域の首長墓
に採用された。このことは、この緊迫した時期に登場し
た倭国の墓様式の採用が、単純に憧れの倭国の埴輪儀礼
の採用ではなかったことを示唆する。

5世紀後葉、もっとも苦しい政治情勢下で、埴輪製作

費用の追加など葬式費用の増加が予想される倭国の墓様式を採用したことを、単純に憧れの隣国の墓様式の模倣とみることは合理的とは言えない。当時の百済の政治情勢を考慮すれば、憧れの外国の墓様式の採用を満喫する余裕はなかったはずである。百済側が経済的な負担増加にもかかわらず、新たに倭国の墓様式の採用を行った背景には、苦しい百済の政治情勢を打開する目的が潜んでいたと思われる。百済の高位級の首長墓で行われる葬式は、強化された百済と倭国との緊密な外交関係を、葬式に参加した周辺諸国の弔問使を通じて外部に知らせる絶好の機会であったと言える。百済と倭国との深い絆を視覚的に誇示できる倭国様式の埴輪は、各国の弔問使に深い印象を与えたに違いない。

5世紀後葉、倭国の墓様式の採用を媒介とした百済と倭国との政治的な結束は、6世紀前葉、武寧王期の百済の政治的な安定にも貢献できる契機を提供したと評価できる。この5世紀後葉の戦略的な選択がもたらした成果による学習効果かもしれないが、武寧王期の百済では、友好国の墓様式を採用する外交戦略は一層強化される。まず、武寧王は自身の墓を中国南朝様式の塼室墓で造営する。もちろん、この中国南朝様式の最高級の墓工事が行われる過程で、武寧王には中国南朝側から寧東大將軍という称号（国立中央博物館編1999、p. 120）が与えられた。また、中国南朝側からの塼室墓の工事技術者の派遣も行われた。この中国南朝様式の最高級の塼室墓を通じて、百済は、中国南朝側との間で結ばれた緊密な外交関係を、葬式に参加した周辺諸国の弔問使に誇示することに成功したと思われる。もちろん、百済の最終的な狙いは、百済の後ろ盾になっていた中国南朝側との間で結ばれた緊密な外交関係を高句麗に知らせることであろう。大將軍という称号とこれに相応しい中国南朝様式の塼室墓は、高句麗の脅威を阻止する過程で、立派な演出道具になっていたと思われる。

6世紀前葉、武寧王期は、ソウル地域の首都陥落と公州への遷都という大事件が発生した直後で、戦争資金の調達など百済の財政事情は最悪な状態であったと推定される。この苦しい時期に、中国南朝側から専門技術者を招聘し、巨額の建築費用が投入される王陵工事の強行が実施された背景には、強い国との外交的な連帯を通じて、高句麗の威嚇を阻止する必要性が高まった緊迫した

政治情勢があったと思われる。この塼室墓がもたらした、中国南朝側との強い政治的連帯の誇示を通じて、高句麗の脅威を抑えることに成功すれば、増加する戦争費用を抑えることにもつながったと思われる。結果的には、王陵工事に投じた巨額の建築費用は、戦争費用の節約につながる効率よい投資であったと言える。武寧王期の百済が、苦しい経済事情にもかかわらず高費用の中国南朝様式の塼室墓の建築に踏み切った背景には、この総合的な費用の考慮があったと思われる。この冒険は、武寧王期に訪れた政治的な安定を考慮すれば、成功した外交戦略の一つとして評価すべきであろう。

外国の墓様式の採用を利用した武寧王期の注目すべき外交戦略の試みは、前方後円墳という倭国の最高級の墓様式の採用からも読み取れる。6世紀前葉、武寧王期の百済西南部地域では倭国の前方後円墳を模倣した13基程度の首長墓が現れた。5世紀後葉、百済西南部地域の首長墓に採用された倭国様式の埴輪の製作費用に比べて、この前方後円墳の築造は、大幅な費用増額が必要な墓工事であった。5世紀後葉の埴輪の採用と同様に、経済的に苦しい6世紀前葉の百済側には、憧れを実現する目的で高費用の倭国様式の前方後円墳を築造する余裕はなかったと思われる。特に、一部の前方後円墳（国立光州博物館編1996、pp. 68-76）には円筒埴輪も同時に採用した痕跡が見つかった（図9）。このことを考慮すれば、倭国の墓様式を採用するために投じた費用という面では、6世紀前葉の前方後円墳の築造を目的に使った費用の方が、5世紀後葉の埴輪製作のみに使った費用に比べて、はるかに高額であったと言える。

このことから、6世紀前葉、武寧王期の百済の方が、5世紀後葉の百済に比べて、倭国の墓様式を採用する政策に、一層、力を入れていたことが読み取れる。これは中国南朝様式の塼室墓と倭国様式の前方後円墳という友好国の最高級の墓様式が、武寧王期の百済で、ほぼ、同時に採用されていたことを意味する。この現象について、百済の中央と地方で、各々自主的に行った外国の墓様式の採用とみる視角も存在する。中央の武寧王が、中国南朝側との協議を通じて、戦略的に中国南朝様式の塼室墓を採用したことについては異論の余地はあるまい。しかし、高句麗との戦争が激化した時期に、中央への戦費調達と人的資源の供給に苦しむ地方で、前方後円墳と

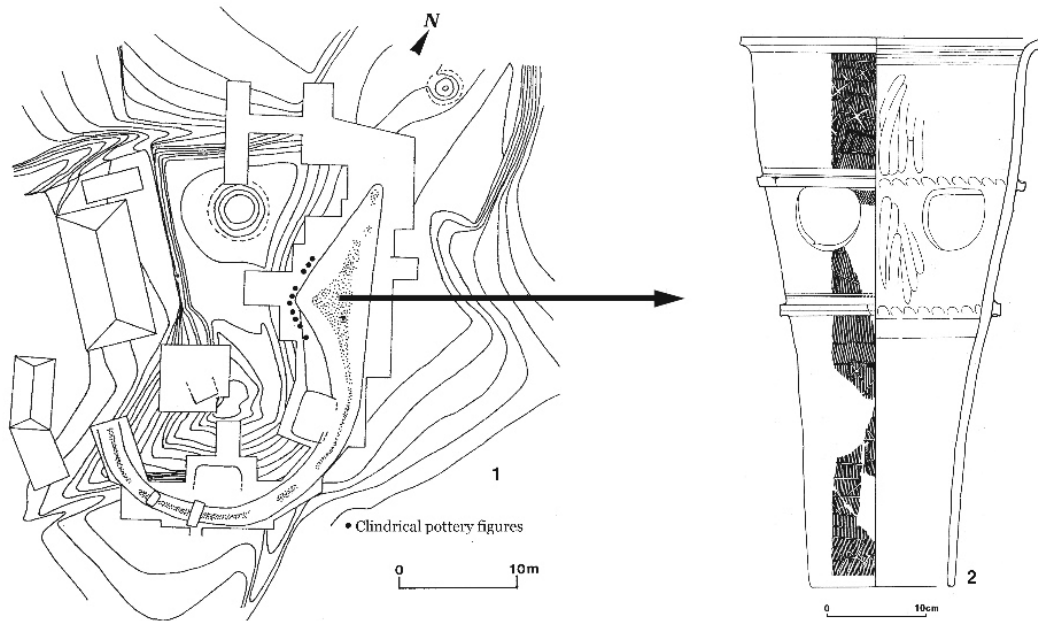


図9：前方後円墳である光州明花洞古墳と出土した円筒形土器（国立光州博物館編1996）

いう倭国の最高級の墓様式を自主的に採用する必要性は見当たらない。中央との政治的連帯の強化を通じて、高句麗の波状攻撃を阻止することが、当時の地方首長には最大の課題であったと思われる。中央との連携なしに独立的に外国様式の首長墓を造営する経済的な余裕もなかったと思われる。すなわち、中央と地方との緊密な政治的連帯を基礎に、高句麗に総力で対抗しなければならない緊迫した時期に、外国の高費用の墓様式の採用を自主的に試みた地方首長の存在は考え難い。

従って、百済西南部地域の一部の地方首長墓に採用された倭国様式の前方向後円墳は、百済と中国南朝との緊密な外交関係を象徴する武寧王の中国南朝様式の埴室墓と同様に、武寧王と倭国の継体政権との間で結ばれた緊密な外交関係を反映する記念物とみることが合理的な判断であろう。高度な国家システムを構築していた百済で、高位級の地方首長の好みによって、中央との協議なしに外国の最高級の墓様式を独立的に採用することは、不可能に近いと言える。高位級の地方首長の葬式には、百済中央のみならず親しい隣国からの弔問使の参加が予想される。地方首長の独自の決定によって、中央との協議なしに外国の最高級の墓様式を採用した場合には、結局、中央から葬式に派遣された弔問使に目撃される。職

位による墓形式の規律が厳しい百済で、国家の規律から離れた最高級の墓を密かに造営する愚かな首長はいなかったと思われる。従って、百済西南部地域における倭国様式の前方向後円墳の造営は、百済中央との協議を通じて、採用された政治的な産物と評価しなければならない。百済中央によって企画された外国の墓様式を採用する政策は、中央の王陵と西南部地域に位置する一部の地方首長墓に実施された。特に、西南部地域が選ばれた背景を考える上で、この地の地理的な特徴に注目する必要がある。まず、注目すべきことは、倭国と百済との海上交流過程で、倭国からの交易品の乗り換えと交易船の運航など、海上運送を担当していた西南部地域の各首長の主要な管轄区域に、前方向後円墳の築造が顕著に現われた点である。このことは、倭国の最高級の墓様式である前方向後円墳を採用する政策を実施する過程で、海上交易を通じて、古くから倭国との深い絆で結ばれていた西南部地域の首長が、まず、対象として選ばれた結果であろう。もちろん、倭国の最高級の墓様式の採用という百済の戦略は、倭国側にも伝えられたと思われる。ただ、倭国様式の前方向後円墳の築造の場合、中国南朝から専門技術者が派遣されていた武寧王陵の建築事例とは異なる築造過程が読み取れる。

例えば、百済の前方後円墳は、階段状の墳丘の築造、すなわち、段築という倭国の前方後円墳の独特な造成方式は見られない特徴がある。これは中国南朝様式と同じ造成方式が採用された武寧王陵の埴室墓の事例とは大きく異なる様相である。武寧王陵は中国南朝様式とは区別がつかない埴室墓であったが、西南部地域の前方後円墳は、段築の有無など細部的な築造工程を観察すれば、倭国から派遣された専門技術者による築造と評価することは難しい。私は在地の専門技術者によって、倭国の前方後円墳を模倣した事例と評価したい。

6世紀前葉、百済西南部地域の前方後円墳に立てられた円筒形土器も、5世紀後葉に採用された円筒形土器と同様に倭国の円筒埴輪を模倣した事例である。すなわち、主に、タタキ技法を使った在地の専門技術者によって、製作された円筒埴輪と言える。また、百済の事例には、円筒埴輪を墳丘上に大量配置するという倭国のような事例は見当たらない。5世紀後葉と同様に6世紀前葉にも前方後円墳の墳丘に少数の円筒埴輪を立てる特徴は続いていた。この墳丘築造と埴輪製作に関する百済の前方後円墳の特徴を考慮すれば、倭国から派遣された専門技術者によって築造された前方後円墳ではないことは明瞭である。すなわち、模倣による外国の墓様式の採用という点では、武寧王陵の事例とは異なるタイプの採用と言える。しかし、この採用の意図は、中国南朝様式の最高級の墓様式を採用した時に狙った戦略的な意図とも類似するものであったと思われる。百済の前方後円墳も武寧王の埴室墓と同様に、友好国との強い外交的な連帯を葬式に参加した周辺諸国の弔問使を通じて高句麗に誇示することを目的で築造された墓であったことは明らかである。従って、倭国様式の前方後円墳の採用は、武寧王の埴室墓を通じて親中国南朝という外交路線を誇示したように、親倭国という百済の外交路線の明瞭な意思表示であったと評価できる。5世紀後葉の倭国様式の埴輪の採用、6世紀前葉の中国南朝様式の埴室墓と倭国様式の前方後円墳の採用から読み取れることは、5世紀後葉～6世紀前葉頃、百済の親中国南朝・倭国政策がピークを迎えたことである。

このことを裏付けるもう一つの考古学的資料は、百済の国家的な海岸祭祀場所であった竹幕洞祭祀遺跡（国立全州博物館編1994、pp. 239-263）である。5世紀後葉～

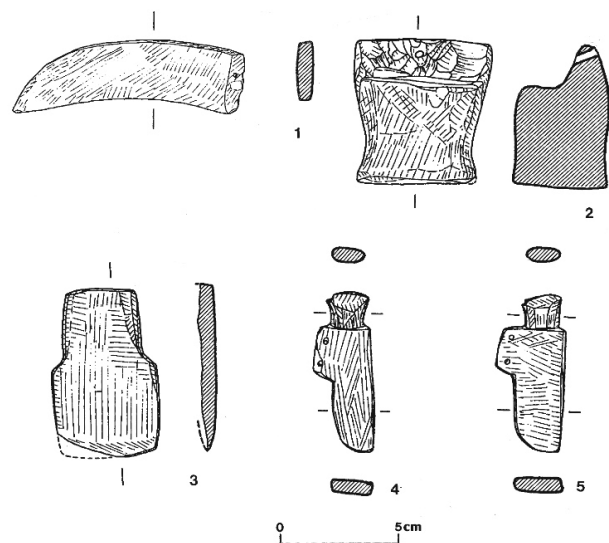


図10：百済の竹幕洞祭祀遺跡から出土した倭国様式の石製模造品（国立全州博物館編1994）

6世紀前葉頃、この竹幕洞祭祀遺跡からは、百済様式の多くの祭祀用品とともに、中国南朝様式の青磁、倭国様式の石製模造品（図10）、加耶様式の馬具の出土が顕著になる。この時期に国際的な合同祭祀が活発になった背景として、当時の百済の厳しい国際情勢との関連性を考慮する必要がある。475年、高句麗の侵攻によって、ソウル地域の百済の首都は陥落された。この国家の存亡にかかわる危機状況の中で、百済側は竹幕洞祭祀遺跡で国際的な盛大な海岸祭祀を行った。現代社会でも、家庭の危機状況に直面した時に、経済的な負担が増加するにもかかわらず宗教的な行事を盛大に行うケースは時々目撃される。このことを参考にすれば、国家的な危機状況の中で、経済的な負担増加につながる盛大な祭祀を行った当時の百済の政治エリート層・商人の心理状態は理解できる。彼らは、神様の力を借りて、国家と海上交通の安全を守りたい意志に燃えていたと思われる。例えば、海上交通の安全を祈願する竹幕洞祭祀の場合、高句麗との戦争に必要な戦争物資の安全な運搬、中国南朝・倭国・加耶諸国との交易船・商人の安全な運航も祈願の対象になっていた可能性が高い。

さらに、高句麗との戦いに必要な財源を確保するためにも、倭国など隣国との海上交易を成功させることは百済中央の重要な課題であった。従って、高句麗の脅威がピークに達した5世紀後葉～6世紀前葉頃に、多国籍の

竹幕洞祭祀が最盛期を迎えたことから、高句麗によってもたらされた危機を乗り越えようとした各国の強い願望が読み取れる。

この危機状況で、悪天候の影響によって交易船の沈没事故が発生した場合には、平穏な時期の事故に比べて深刻な被害が予想される。高句麗に対抗しなければならぬこの時期に、国家の防御に欠かせない海上交易の安全を祈願する海岸祭祀が強化されていたことはやむを得ない選択であろう。特に、百済側に5世紀後葉～6世紀前葉という時期は、高価な交易品、貴重な戦略物資、緊急に必要な戦争物資を海上運送を通じて運ばなければならない時期であった。従って、百済側は高い祭祀費用を投じる冒険も辞さなかったと言える。

この時期には、倭国側も百済との長距離交易を成功させるために全力を尽くさなければならなかった。5世紀前葉以降、金官加耶からの戦略物資の自由な輸入は難しくなっていた。この状況を考慮すれば、対馬と金海・釜山を往復する航海に比べて難度の高いルートであったが、対馬と百済の首都であった公州を往復する航海を成功させるために、倭国側は多様な戦略を組み立てていたとみられる。加耶船舶と百済船舶への貨物・商人の乗り換えもこの戦略の一つであったと評価できる。各区域別の海上ルートの事情に詳しい現地の船舶への乗り換えは、沈没の確率を下げる効果が期待されていたと思われる。

沈没そのものを完全に防ぐ装置はなかった時代であったが、当時の百済の政治エリート層・商人は、竹幕洞祭祀のような盛大な海岸祭祀を、重要な戦略物資、貴重な交易品の安全確保に貢献できる重要な装置の一つとして認識していたに違いない。5世紀後葉～6世紀前葉頃、竹幕洞祭祀遺跡で国際的な祭祀痕跡が顕著に現われた背景には、各国の間で百済の西海岸航路の長距離航海を成功させることが、高句麗との戦いを有利に導くための鍵である認識が作用していたと思われる。この認識の共有は百済の政治エリート層・商人のみならず倭国・加耶諸国の政治エリート層・商人にも拡大されていたとみられる。

3. 5～6世紀の倭国と加耶・百済の航海術

(1) 5～6世紀の倭国の航海術を物語る船舶部材と船形土器

百済の竹幕洞祭祀遺跡で行われた国際色豊かな盛大な海岸祭祀は、前に述べたように5～6世紀頃にピークを迎えた。この時期は、沖ノ島祭祀遺跡では岩上祭祀・岩陰祭祀と命名された第1・2段階に近い時期である。沖ノ島祭祀遺跡でも、中央王権との深い関連性を象徴する三角縁神獣鏡、朝鮮半島諸国との政治・経済的な交渉を象徴する鉄素材である鉄鋌、新羅様式の金製指輪とササン朝ペルシア産のカットガラス、百済様式のガラス玉、加耶様式の金銅製馬具など国際色豊かな祭祀遺物の出土が顕著な時期である。両国の最大の海岸祭祀遺跡で、ほぼ、同時期に、多国籍の祭祀遺物の供献が顕著に現れた背景には、高句麗の波状攻撃によってもたらされた不安な朝鮮半島情勢に関する危機意識の共有が内在していたと思われる。準構造船という当時の船舶構造、櫂で漕ぐ航海術を考慮すれば、倭国から朝鮮半島への長距離航海は険しい道のりであったことは言うまでもない。ここでは、5～6世紀、倭国と百済を往復していた船舶の構造から当時の航路と航海術について検討してみたい。危険度の高い船舶構造の場合、倭国から百済への長距離航海は、常時、難破の危険性にさらされていたと言っても過言ではない。実際、出土した船舶資料を考慮すれば、当時の倭国の交易船のみならず加耶諸国・百済の交易船も帆船ではなく櫂で漕ぐタイプの準構造船であったことは明らかである。

例えば、4世紀頃の事例であるが、大阪の久宝寺遺跡で出土した船舶部材を基礎に全体の構造を復元すれば、大阪の長原高廻り2号墳をはじめとする倭国の多くの5世紀頃の船形土器（松阪市教育委員会編2001、p.17）の原型になる。4世紀頃の絵画資料であるが、天理市の東殿塚古墳（天理市教育委員会編2000、pp.89-90）出土の船形絵画も、やはり、これらの準構造船を描いた事例（図11）である。

これまで出土した同時期の加耶諸国と百済、新羅の船形土器も、倭国の船形土器と類似したタイプの準構造船であった。加耶地域の昌寧松岷洞7号墳出土の船舶部材は、準構造船が木棺（図12）として転用された事例と評

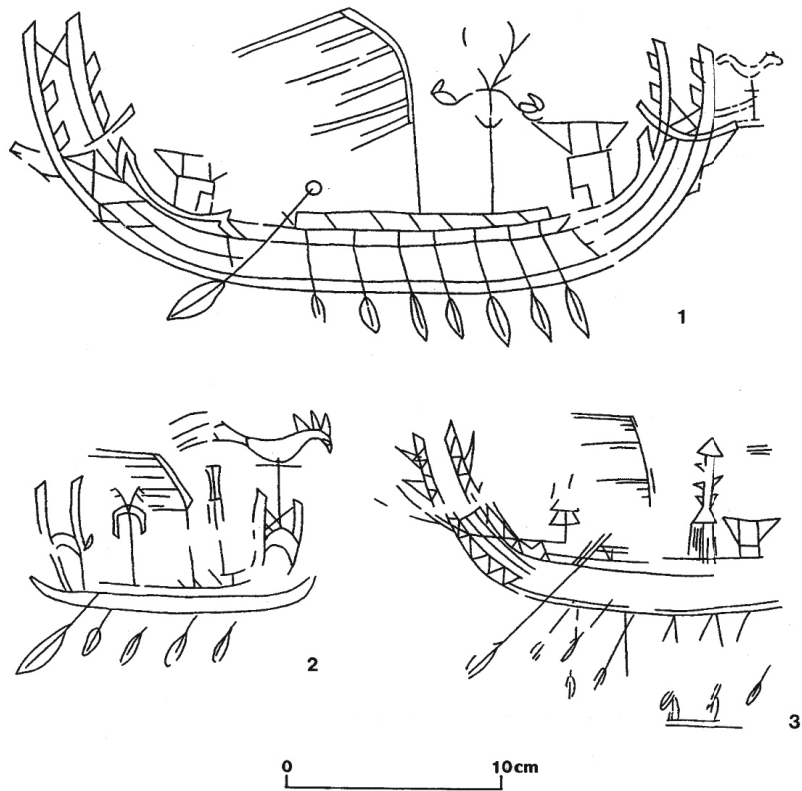


図11：天理東殿塚古墳出土の3隻の船形絵画（天理市教育委員会編2000）

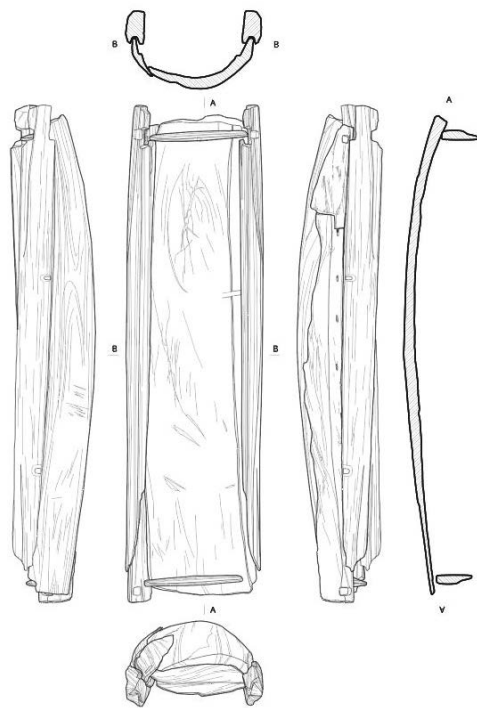


図12：木棺に転用された加耶地域の昌寧松峴洞7号墳出土の準構造船（国立加耶文化財研究所編2011）

価される（国立加耶文化財研究所編2011、pp. 254-258）。倭国に多いクスノキで製作された交易船は、当時、日韓の交易船の運航過程に乗り換えが多かった状況を示唆する資料として評価できる。倭国の商人は、帰国時には入国時の古い倭国船舶を残した後、加耶・百済で製作された新しい船舶への乗り換えによって帰還するケースが多かったと思われる。朝鮮半島で新しく建造された準構造船の方が彼らが乗ってきた古い倭国の準構造船よりは構造的に安定していたに違いない。やはり、加耶・百済の商人も倭国からの帰国時には、入国時の古い船舶を残した後、倭国の新しい準構造船を利用するケースが多かったとみられる。従って、この船舶部材は、倭国の商人と親しい関係を持つ昌寧地域の最高位級の人物の墓に木棺として再利用されることになったと思われる。恐らく、この木棺は相互の絆を深める友情のシンボルとしての役割を果たしていたかもしれない。また、このことは、当時の倭国と加耶諸国・百済が同じタイプの準構造船の造船技術を共有していたことを示唆する。このタイプの倭国の準構造船の原型が生まれた地域については、今後の

研究成果を待たなければならない。ただ、現状では、倭国における準構造船の出現背景に朝鮮半島からの造船技術者の到来、木材の結合技術の導入を重視する有力な見解が提起されている。この見解に注目すれば、加耶地域から倭国への技術移転を最有力候補として挙げることができる（弥栄町教育委員会編1988、pp. 101-104）。

特に、4世紀頃の倭国と金官加耶との緊密な海上交流を考慮すれば、百済よりは金官加耶からの造船技術の移入を考慮しなければならない。加耶諸国の経済は鉄の生産と中継交易によって支えられていた。鉄など貴重な戦略物資が交易船の沈没によって失われることを避けるためにも、長距離航海に適した準構造船の造船技術の向上に全力を尽くしていたとみられる。また、倭国と加耶諸国を往来していた交易船は、昌寧松峴洞7号墳から出土した船舶の事例を参考にすれば、現地の船舶への乗り換えによって帰国した事例も少なくなかったと思われる。さらに、倭国の船舶が現地で修理された後に帰国船として再就航した事例、倭国の中古船舶と新しく建造された加耶船舶との交換事例など様々なケースがあったはずであろう。加耶船舶が倭国から帰国する時にも、これと同様なケースが度々発生していたに違いない。この過程で、加耶諸国の造船技術は自然に倭国へ移転されるようになったと思われる。また、加耶諸国の場合、加耶鉄の最大の優良顧客であった倭国との海上交易を強化するためには、長距離航海に適した準構造船の造船技術を倭国に移転することも辞さなかったと思われる。恐らく、加耶諸国は、造船技術という高級技術を独占することによって得られる経済的な利益より、倭国への技術移転後に得られる経済的な利益の方を高く評価していたに違いない。すなわち、難破しにくい頑丈な準構造船の建造が、加耶諸国のみならず倭国においても海上交易の成功につながる交易環境の前提条件であったと言える。頑丈な準構造船は両国の政治・経済的な繁栄につながる牽引車として認識されていたと評価できる。

従って、4～5世紀頃、両国間の海上交易の規模拡大に伴って、加耶諸国の準構造船の造船技術が倭国に拡散されていく情況からは、長距離交易を成功させるために努力していた両国の政治エリート層の戦略的な判断が読み取れる。5～6世紀頃、金官加耶への高句麗の大規模侵攻以降、倭国から百済への長距離航海過程において

も、倭国と加耶諸国との既存の緊密な絆は、威力を発揮していたと思われる。倭国と加耶諸国は、船舶の修理、貨物と商人の乗り換え、帰国船の購入など交易船の運用に関する様々な分野で助け合ったとみられる。この時期、百済の竹幕洞祭祀遺跡で、倭国様式の祭祀遺物とともに、加耶様式の祭祀遺物が供献されていた背景には、百済と倭国・加耶諸国との間に存在していた深い絆が作用していたと思われる。

4～5世紀頃の国際的な交易環境を考慮すれば、準構造船の造船技術が金官加耶から倭国へ伝えられたことについては異論の余地はあるまい。朝鮮半島の最大の国際的な交易港が位置していた金官加耶で行われていた準構造船の造船技術の開発と技術移転は、金官加耶のみならず倭国の経済的な利益につながる共通課題であったと言える。

（2）5～6世紀の加耶・百済の航海術を物語る加耶地域から出土した船形土器

5～6世紀頃、加耶のみならず新羅・百済の造船技術と航海術の実態を把握する上で、決定的な船形土器は洛東江の川岸に位置する達城坪村里遺跡から出土した（慶尚北道文化財研究院編2010、pp. 252～257）。この船形土器（図13）は、大阪の久宝寺遺跡で出土した実物の準構造船の船舶部材のみならず木棺として再利用された加耶地域の昌寧松峴洞7号墳出土の船舶部材とも構造的に類似している。このことは、この船形土器が、当時、倭国から朝鮮半島へ向かった実物の交易船の形態に近い構造

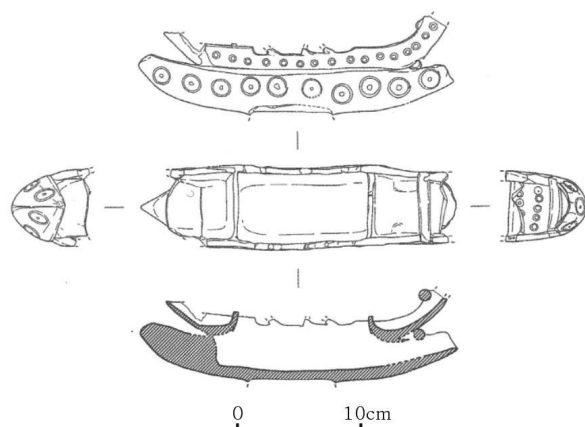


図13：加耶地域の達城坪村里遺跡から出土した船形土器（慶尚北道文化財研究院編2010）

であることを示唆する。近年、このタイプの準構造船の模型に近い船形土器は、これまで多く出土していた倭国の古墳のみならず加耶の高位級の首長墓からも出土している。このタイプの準構造船は、荒波と強い風に弱いタイプであるが、金官加耶の国際的な港から対馬を目標に出航した時に、船底に重い鉄素材を積むことによって安定性を維持することが可能になったと思われる。もちろん、倭国側が最も必要とする鉄という品物が、交易船の難破を防ぐバランスをとる材料として利用されていたことは、玄界灘を往来する準構造船の活動に、拍車をかける結果につながったとみられる。しかし、このタイプの準構造船の場合、重い鉄素材を効率よく利用していたにもかかわらず、構造上の弱点を克服することは難しかったと思われる。従って、いつも難破の危険性にさらされていたと言える。このことは、この船舶が有する航海上の限界とも評価できる。

結局、4～5世紀頃の沖ノ島祭祀遺跡、竹幕洞祭祀遺跡の出現とともに、5～6世紀頃、これらの海岸祭祀遺跡における祭祀がピークを迎えたことは、倭国と百済で、構造上の弱点を有する準構造船による長距離航海の成功を祈る必要性が高まったことを反映する様相であろう。特に、高句麗の威嚇が続く中で、倭国と百済を往復する航路には、コウヤマキなど倭国の特産品と鉄など朝鮮半島産の戦略物資の交易も増加していたと思われる。当時の戦争の勝敗を分ける要因の一つとして挙げることができる項目は、海上ルートを通じて戦略物資を安全に運ぶことである。高波と強風という悪天候から準構造船を守るために行う海岸祭祀が、5～6世紀頃になって一層強化された背景には、百済と高句麗との戦いの激化があったとみられる。この状況で、高句麗に対抗するために、倭国と百済との間で行われていた戦略物資の交易が強化されたことは、やむを得なかった選択であろう。この過程で、戦略物資を大量に運搬する交易船の沈没事故は、高句麗の波状攻撃の阻止という百済と倭国の戦略目標に悪影響を与えたとはいえない。5～6世紀頃、準構造船の航海上の弱点、高句麗の脅威の増加という二つの両国を取り巻く環境的な危機を克服するために、百済の竹幕洞祭祀と倭国の沖ノ島祭祀は、一層、強化されるようになったと評価できる。

4. 倭国と百済との海上交流の拡大に伴って盛大化する海岸祭祀

(1) 沖ノ島祭祀遺跡と竹幕洞祭祀遺跡をつなぐ長距離航海過程で倭国の商人が残した石製模造品

特に、5世紀後葉～6世紀前葉頃になると、竹幕洞祭祀遺跡で行われる海岸祭祀は、以前に比べて盛大化する傾向がみられる。この変化が現れた背景を考える上で、時期的に考慮すべき点は、この時期が、ソウル地域の百済の首都が陥落される前後であることであろう。例えば、百済の首都が陥落された475年前後に、竹幕洞祭祀遺跡では、倭国の使者・商人による倭国様式の祭祀痕跡が顕著になる。これは、倭国では祭祀遺跡の供献品のみならず古墳の副葬品としても使われていた石製模造品が、百済の竹幕洞祭祀遺跡で出土していたことから読み取れる。

竹幕洞祭祀で使われた倭国様式の石製模造品の場合、倭国の使者・商人によって持ち込まれたものであることについて異論の余地はあるまい。しかし、倭国から運ばれたものなのか、あるいは、現地で倭人によって製作されたものなのかについては、今後の研究を待たねばならない。

これらの石製模造品の石材の材質と製作地については、今後、議論すべきであるが、これらを竹幕洞祭祀に供献した人々は倭国の使者・商人であったと推定される。特に、竹幕洞祭祀に参加した倭国の使者・商人の中には、沖ノ島祭祀にも関与していた人々もいたと思われる。この有力な根拠は、竹幕洞祭祀遺跡の石製模造品(図14)と沖ノ島祭祀遺跡の石製模造品(図15)との型式学的な類似性である。竹幕洞祭祀遺跡の出土品は5世紀後葉～6世紀前葉、沖ノ島祭祀遺跡の出土品は5世紀中葉～後葉の事例とみている。時期的にも型式学的にも類似するこれらの事例は、相互の関連性が想定できる資料と評価すべきであろう。これらの祭祀遺物の類似性を偶然の産物とみるよりは、倭国の人々による製作過程と祭祀過程への関与を物語る有力な考古学的資料とみるのが合理的であろう。

百済側が、百済の国家的な祭祀場所で行われる盛大な祭祀に倭人の参加を認めたことは、当時の倭国と百済との親密な関係を反映する資料である。さらに、百済側

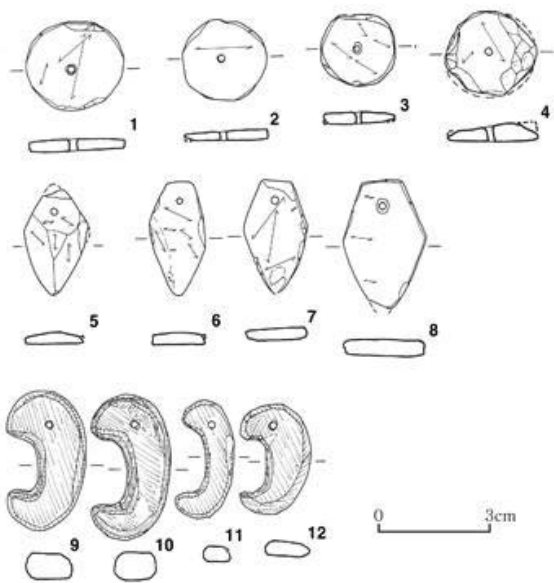


図14：沖ノ島祭祀遺跡の出土品と類似する百済の竹幕洞祭祀遺跡出土の石製模造品（国立全州博物館編1994）

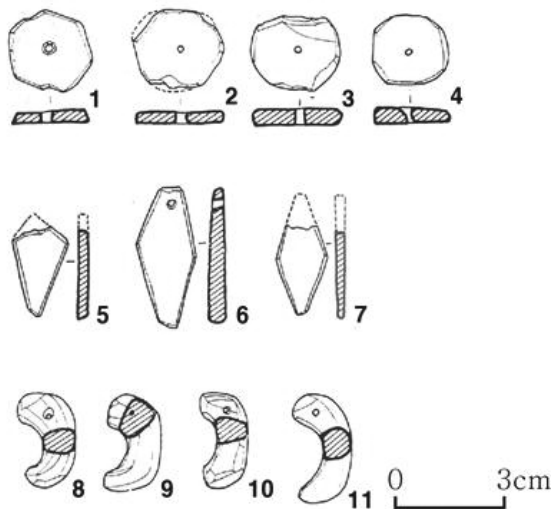


図15：百済の竹幕洞祭祀遺跡の出土品と類似する沖ノ島祭祀遺跡出土の石製模造品（篠原2011）

は倭人の参加のみならず彼らによる倭国様式の祭祀が執り行われることも認めるようになる。古代中国においても、国家的な重要な祭祀に参加できる人数は、選ばれた人々であったことを考慮すれば、倭人による倭国様式の祭祀の挙行が認められたことは、当時の百済側が、倭国との政治的な連帯をもっとも重視していたことを示唆する。もちろん、竹幕洞祭祀遺跡で出土している中国南朝様式の青磁、加耶様式の馬具を考慮すれば、倭国様式の

祭祀のように、中国南朝人と加耶人による中国南朝・加耶様式の祭祀も、ここで一緒に執り行われていた可能性は高い。しかし、中国南朝・加耶様式の祭祀形態は、石製模造品を使う倭国様式の祭祀のように明瞭に確認されなかった。従って、現在、竹幕洞祭祀で行われた祭祀形態の中で、国籍が明瞭に判別できる祭祀形態は、壺に供献物を奉納する百済様式と石製模造品を祭祀に使う倭国様式のみである。

（2）竹幕洞祭祀に参加した倭人の役割

一方、ここで、倭国から百済までの長距離航海過程で、竹幕洞祭祀という百済の国家的な海岸祭祀に参加していた倭国の使者・商人の役割について検討してみたい。竹幕洞祭祀を百済王室の関与が認められる国家的な祭祀と評価できる重要な根拠になる遺物は、ここから出土した蕨手文様の最高級の器台（図16）である。例えば、沖ノ島祭祀を倭国中央の関与が認められる国家的な祭祀と評価できる有力な根拠になる遺物は、ここから出土した三角縁神獸鏡である。三角縁神獸鏡は、倭国中央から地方の有力首長に与えられた威信財の一つと評価される遺物である。すなわち、このことは、沖ノ島祭祀における祭祀遺物の供献に倭国中央の関与を示唆する資料と言える。

百済の竹幕洞祭祀に供献されていた蕨手文様の最高級の器台も、沖ノ島祭祀の三角縁神獸鏡と同様に、百済中央から与えられたものであったと推定される。このことを、裏付ける資料は、武寧王期前後の王宮関連遺跡であった公州公山城遺跡（公州大学校博物館編2016、pp. 486-495）から出土した同じタイプの蕨手文様の器台破片（図17）である。蕨手文様が向かい合っているこのタイプの器台は、恐らく、百済王室で使われた最高の品格を有するタイプのものであったと思われる。さらに、この蕨手文様の器台の隣で‘王’という字を持つ瓦が出土していたことを考慮すれば、このタイプの蕨手文様の器台は、王室で使う特別な高級品であったことを示唆する。このことを重視すれば、これと同じタイプの蕨手文様の器台が竹幕洞祭祀に供献されていたことは、この海岸祭祀に百済王室の積極的な関与があったことを意味する。このことは、竹幕洞祭祀を地方首長による在地的な祭祀と評価するよりは国家的な規模の格式を有する祭祀と評価す

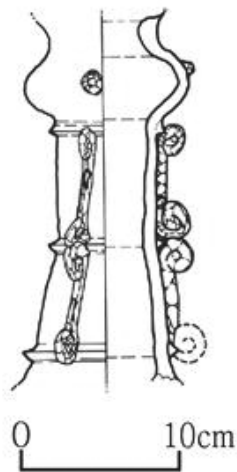


図16：百済の竹幕洞祭祀遺跡から出土した蕨手文様の最高級の器台（国立全州博物館編1994）

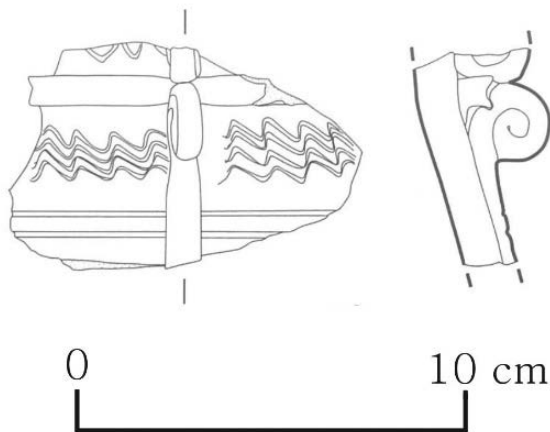


図17：百済の公州公山城遺跡から出土した蕨手文様の最高級の器台の破片（公州大学校博物館編2016）

る理由である。

この百済側のもっとも重要な祭祀に、倭国の使者・商人の参加が認められた背景には、百済側の戦略的な目標があったと思われる。百済側は、百済と倭国を往来する倭国の使者・商人の役割に期待を寄せていたに違いない。彼らを、百済と倭国との間で、交易のみならず両国間の緊密な外交交渉の場で活躍できる重要な担い手としてみなされていたと思われる。実際、彼らの中には、竹幕洞祭祀のみならず沖ノ島祭祀にも参加していた人がいたと思われる。彼らは、両国間の長距離航海を成功させるために努力してきた商人集団と評価すべきであろう。

彼らは、倭国と百済との交流の場のみならず倭国中央と北部九州の在地勢力との間で行われた外交戦略の調整過程においても、中心的な役割を果たしていたとみられる。彼らが朝鮮半島の国々で得た各種の情報は、倭国側が外交戦略を組み立てる過程で骨組みになっていたに違いない。

竹幕洞祭祀に参加した彼らの主な役割は、海上交易を成功させること、倭国と百済との間で緊密な外交交渉を成功させることであつたと評価できる。当時の百済側のみならず倭国側も、倭人による倭国様式の祭祀が竹幕洞祭祀で執り行われていたことを、両国間の深い絆を確認する契機として捉えたに違いない。また、竹幕洞祭祀に参加した倭人は、使者と商人の役割を兼ねていた人物であつたと推定される。古代中国の事例を考慮すれば、竹幕洞祭祀という百済の国家的な祭祀場所で、低い身分の一般の倭人が倭国様式の祭祀を執り行うことは不可能であつたと言える。竹幕洞祭祀遺跡が位置する百済の西海岸航路は、単純な海上交易ルートではなかつた。この航路は、高句麗に対抗する上で、必要な戦争物資の輸送には欠かせない海上ルートであつた。倭国側が鉄など戦略物資を大量に輸入するためにも、金銭になるコウヤマキなど百済が必要とする倭国の特産品を百済の首都まで運ぶ必要があつたと思われる。この過程で活躍していた倭人は、使者と商人の役割を兼ねたスペシャリストであつたと評価できる。沖ノ島祭祀と竹幕洞祭祀との間で、露天祭祀など共通点が多くみられる背景にも、両方の祭祀に参加していた倭国のスペシャリスト集団による情報伝達という役割があつたと思われる。倭国と百済との間で、活躍していた倭国のスペシャリスト集団の一員であつたと推定される人物の墓は、例えば、福岡県福津市の海岸地域に位置するこの地域の最大級前方後円墳である勝浦峯ノ畑古墳である。彼らは、主に北部九州の海岸地域で活躍していた首長級人物によって構成されていたと思われる。直接、朝鮮半島を往来する長距離交易船の運航に関与していた担い手であつたとみられる。彼らのもう一つの重要な役割は、百済王など朝鮮半島諸国の最高位級の人物との信頼関係の構築であつた。勝浦峯ノ畑古墳の副葬品の中に含まれていた百済様式の金銅製冠・冠帽の破片は、百済王から勝浦峯ノ畑古墳の主人公に伝えられた最高級の威信財の存在を物語る証拠であ

ろう。これは、5世紀初め頃、高句麗による金官加耶への大規模侵攻以降、百済との外交関係を強化することによって、新たな交易ルートの確保に乗り出した倭国側の外交戦略が、大成功を収めていたことを意味する資料であろう。勝浦峯ノ畑古墳の主人公は、百済側との外交関係の強化に貢献しながら、倭国側に脅威を与えていた高句麗側との外交関係の維持にも全力を尽くしていた人物であったと思われる。彼の墓室は、基本的には百済様式の横穴式石室によって構成されていたが、石室内部に高句麗様式の石柱が新たに追加されていた。この類例のない墓室構造からは、当時の倭国側が、親百済政策を目指しながらも、高句麗との最小限の外交関係の維持にも努力していた様子がうかがえる。勝浦峯ノ畑古墳の主人公は百済との交渉のみならず高句麗との交渉においても窓口の役割を果たしていた重要な人物であったと評価できる。

おわりに

沖ノ島祭祀遺跡の歴史的な評価を模索する上で、これまで主に注目されていた分野は、航海の安全を祈る大規模な海岸祭祀の登場であった。この祭祀に倭国中央が深く関与していた状況は、三角縁神獸鏡など倭国中央から供献されたとみられる祭祀遺物の出土によって明らかになった。また、社殿建築など律令国家の成立に伴う宗教体制の発展過程を研究する上でも、露天祭祀が行われていた沖ノ島祭祀遺跡の光景は、欠かせない宗教遺産であったと言える。

沖ノ島祭祀遺跡を評価する上で、もう一つの注目すべき分野は、中国・朝鮮半島からの貴重な戦略物資・先進知識を輸入する過程で、沖ノ島祭祀遺跡が果たした貢献である。すなわち、ここで行われた祭祀の主な目的として注目すべき点は、長距離航海の安全確保であったと言える。沖ノ島祭祀遺跡の最盛期には、長距離航海の安全を確保する必要性も高まったと思われる。沖ノ島祭祀遺跡は倭国の政治・外交的な環境の変遷を敏感に反映する歴史的な遺産であったと言える。

ここで行われた祭祀は、単純に航海の安全を祈る祭祀ではなかったとみられる。沖ノ島祭祀が本格化された時期は、4世紀後半頃からである。この時期は、高句麗の

脅威に不安な日々を送りながらも、金官加耶との交易の強化を試みた時期である。鉄素材を確保するために、倭国中央と地方との間で海外取引に関する緊密な連携が必要な時期であった。金官加耶の金海大成洞古墳群から出土している倭国産の碧玉製の石鏃・紡錘車形石製品、青銅製の巴形銅器などは、鉄など戦略物資の確保に倭国中央も積極的に関与していたことを示唆する資料であろう。

5世紀前葉以降になると、倭国の海外取引に関する戦略は大きく修正されるようになる。高句麗の金官加耶への大規模な侵攻以降、倭国は金官加耶に頼る交易政策の維持を諦めるようになる。新たに百済との交易を一層強化する外交戦略を打ち出すことになる。この過程で、航路上に点在する大加耶・小加耶・阿羅加耶など加耶西部地域の政治体との交流強化も試みる。この倭国の危機意識は、5世紀前葉以降の沖ノ島祭祀遺跡からも読み取れる。鉄素材である鉄鋌を出土する5世紀中葉～後葉頃の21号遺跡は、この新たな変化を反映する代表的な遺跡である。

沖ノ島祭祀遺跡の出現と変遷の背景を考える上で、注目すべきもう一つの海岸祭祀遺跡は、朝鮮半島の西海岸航路上に位置する百済の竹幕洞祭祀遺跡である。この遺跡の出現と変遷過程を考慮すれば、ここで行われた祭祀も、沖ノ島祭祀遺跡と同様に、政治情勢の変化に敏感に対応していることが読み取れる。

一方、5世紀後葉～6世紀前葉頃になると、竹幕洞祭祀遺跡では倭人による倭国様式の祭祀痕跡も顕著になる。ほぼ、同時期の沖ノ島祭祀遺跡の7、8号遺跡でも新羅様式の金製指輪、ササン朝ペルシア産のカットグラス破片、黄色・緑色など多くのガラス玉が出土している。この黄色ガラス玉の場合、着色剤として、Pb（鉛）とSn（錫）の検出が特徴的であった点は（村串・加藤・阿部2021, p. 72）、やはり、Pb（鉛）とSn（錫）を多く含む黄色ガラス玉の着色剤の使用が認められる百済の武寧王陵出土品の分析（国立公州博物館編2005, p. 77）に類似する結果である。このことは、これらの黄色ガラス玉が百済からの輸入品であったことを示唆する。すなわち、特に、5世紀後葉～6世紀前葉頃、沖ノ島祭祀遺跡においても朝鮮半島諸国との交流強化を物語る祭祀遺物の出土が顕著になる。これらの国際色豊かな祭祀遺物は、高句

麗による金官加耶への大規模な侵攻以降とソウル地域の百済の首都陥落前後という時期に、金官加耶の国際的な港を経由しながら百済へ向かう倭国の商人集団の複雑な思惑を反映する祭祀遺物と評価したい。すなわち、5世紀後葉～6世紀前葉頃の沖ノ島祭祀遺跡からは、百済との交流強化を目指しながらも新羅など敵対する国との最小限の外交関係の維持も続けていた倭国側の戦略も読み取れる。

参考文献

(韓国語文献)

- 円光大学校馬韓・百済文化研究所編 2016『高敞鳳德里1号墳—石室・甕棺—』円光大学校馬韓・百済文化研究所
- 禹在柄 2017「4～6世紀、倭と加耶・百済との間の外交関係の変化とその背景」『韓国史学報』第69号 高麗史学会
- 禹在柄 2020「5世紀後葉～6世紀前葉 考古学的な資料から見た百済の親倭政策の意味」『先史と古代』64 韓国古代学会
- 韓国考古美術研究所編 1998「義昌茶戸里遺跡発掘進展報告Ⅰ」『考古学誌』第1輯 韓国考古美術研究所
- 韓国文化財調査研究機関協会編 2012『韓半島の製鉄遺跡』韓国文化財調査研究機関協会
- 金海市大成洞古墳博物館編 2016『金海大成洞古墳群—92号墳～94号墳、支石墓』金海市大成洞古墳博物館
- 公州大学校博物館編 2016『公州公山城Ⅰ（本文・図面）』公州大学校博物館
- 国立加耶文化財研究所編 2011『昌寧松峴洞古墳群Ⅰ—本文・図面』国立加耶文化財研究所
- 国立公州博物館編 2005『武寧王陵—出土遺物分析報告書（Ⅰ）—』国立公州博物館
- 国立光州博物館編 1996『光州明花洞古墳』国立光州博物館
- 国立清州博物館編 2019『湖西の馬韓』国立清州博物館
- 国立全州博物館編 1994『扶安竹幕洞祭祀遺跡』国立全州博物館
- 国立中央博物館編 1999『百済』国立中央博物館
- 天理市教育委員会編 2000『西殿塚古墳・東殿塚古墳』天理市教育委員会
- 慶尚北道文化財研究院編 2010『達城坪村里・礼峴里遺跡—本文—』慶尚北道文化財研究院

(日本語文献)

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編 1989『よみがえる古代船と5世紀の大阪』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会
- 篠原祐一 2011「五世紀における石製祭具と沖ノ島の石材」『宗像・沖ノ島と関連遺産群—研究報告Ⅰ』「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議
- 高橋照彦・中久保辰夫編 2014『野中古墳と「倭の五王」の時代』大阪大学出版会
- 福津市教育委員会編 2011『津屋崎古墳群Ⅱ』福津市教育委員会
- 松阪市教育委員会編 2001『松阪宝塚1号墳調査概報』学生社
- 村串まどか・加藤千里・阿部善也 2021「沖ノ島祭祀遺跡出土ガラス製玉類の起源および流通に関する考察」『沖ノ島研究』第七号「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
- 弥栄町教育委員会編 1988「船形埴輪」『ニゴレ古墳』弥栄町教育委員会

(英語文献)

- Woo Jae-Pyoung, 2018, 'INTERACTIONS BETWEEN PAEKCHE AND WA IN THE THIRD TO SIXTH CENTURIES A.D. BASED ON PATTERNS OF TRADE AND EXCHANGE' EARLY KOREA-JAPAN INTERACTIONS, Korea Institute, Harvard University

古墳時代の日朝交渉における海の道 —朝鮮半島南・西海岸地域の倭系資料の分析を中心に—

高田 貫太 国立歴史民俗博物館

要旨:古墳時代の「倭」の社会は、朝鮮半島から多様な文化をさかんに受け入れて、みずからの文化として定着をはかる。当時の倭人たちはさかんに海を渡り、朝鮮半島の百済や新羅、加耶、そして栄山江流域の人びとと交渉を重ねる。

倭から栄山江流域や百済に赴く航路との関連で注目できる考古資料は、5世紀前半頃に朝鮮半島の南・西海岸地域に築かれた「倭系古墳」である。海を望む立地で、北部九州地域における中小古墳の墓制を総体的に採用している。よって、その被葬者はあまり在地化はせず異質な存在として葬られたと考えられ、倭の対百済、栄山江流域の交渉を担った倭系渡来人として評価できる。また、寄港地と関連する集落遺跡も、南・西海岸地域に点在しているため、その寄港地をつたうような航路を復元することが可能である。

当時の南・西海岸地域には、物資、技術、情報、祭祀方式などをやりとりする「地域ネットワーク」とでも呼ぶべき関係網が広がっていた。栄山江流域や百済をめざす倭系集団は、そのネットワークを活用し、寄港地に居を構える地域集団と交流を重ね、時には短期的に「雑居」しながら、円滑な航行を企図したものと考えられる。その中で、航海の途中で死をむかえた人物を「倭系古墳」を造営して葬ったり、航海安全の祭祀を執り行ったり、あるいは一部の人びとが現地に定着するような状況が生じていたようである。

キーワード: 日朝関係史 古墳時代 倭系古墳 祭祀遺跡 石製模造品

はじめに

古墳時代の「倭」の社会は、朝鮮半島から多様な文化をさかんに受け入れ、取捨選択し、変容させ、みずからの文化として定着をはかる。先進の文化を入手するために、倭人たちは、さかんに海を渡り、朝鮮半島の百済や新羅、加耶、そして栄山江流域の人びとと交渉を重ねた。近年の発掘調査、研究の成果によって、朝鮮半島中南部の各地で、倭人たちが、現地の人びととの交流の中できかずいた墓や、実際に暮らした集落、もしくは航海安全を願った祭場などを、具体的に想定することが可能となってきた。

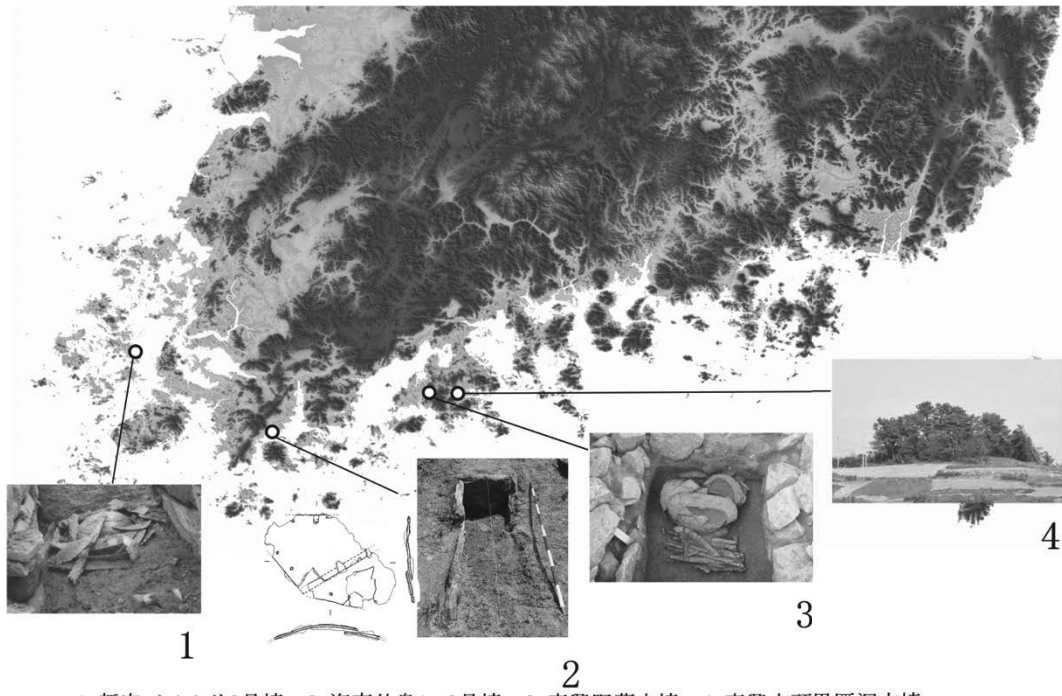
それらの考古資料の中で、当時の航路や寄港地の存在を推定できる事例をいくつか紹介しながら、当時どのような人びとが海を渡り、朝鮮半島の人びととどのように交流を重ねたのか、について考えてみたい。今回は5世紀前半～6世紀初めをひとつの時期としてまとめて、沖ノ島と、それと同様の海洋祭祀の場と評価される扶安竹幕洞祭祀遺跡をつなぐ朝鮮半島南・西海岸地域をつたう航路を具体化してみたい。

1. 5世紀前半の「倭系古墳」を構成する諸属性

近年、朝鮮半島の南・西海岸地域を中心に5世紀前半頃の築造と想定される「倭系古墳」の確認が相次ぎ、研究が進展している（国立羅州文化財研究所2014aなど）。ここでは発掘調査が行われ、その成果が公開された全羅南道高興野幕古墳（国立羅州文化財研究所2014b）、同吉頭里雁洞古墳（全南大学校博物館2011、全南大学校博物館・湖南文化財研究院ほか2015）、海南外島1・2号墳（国立光州博物館・海南郡2001）、新安ベノルリ（매널리）3号墳（東新大学校文化博物館2015）を中心に（図1）、古墳を構成する諸属性や造営時期について概観してみた。

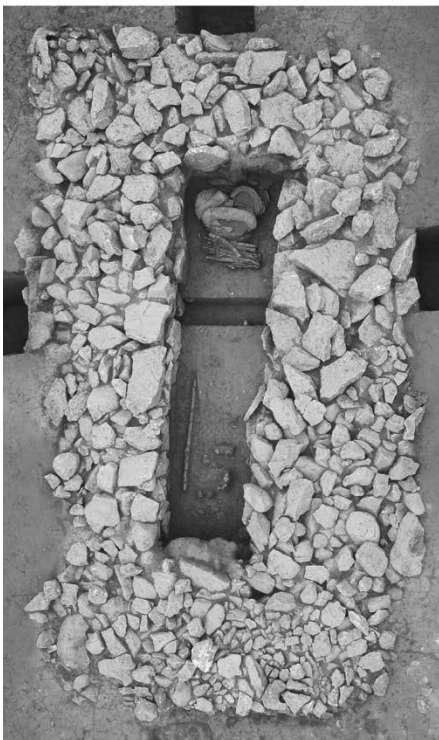
立地

高興野幕古墳は高興湾を眺望できる丘陵の頂部に位置している。丘陵の高さは海拔35m程で、高興湾とその周辺の景観を一望できる良好な立地である。他の古墳もそれぞれ海に面した低丘陵（雁洞）や小島（外島、ベノルリ）に築かれている。いずれの古墳も臨海性が高く独立的に



1:新安ペノルリ3号墳 2:海南外島1・2号墳 3:高興野幕古墳 4:高興吉頭里雁洞古墳

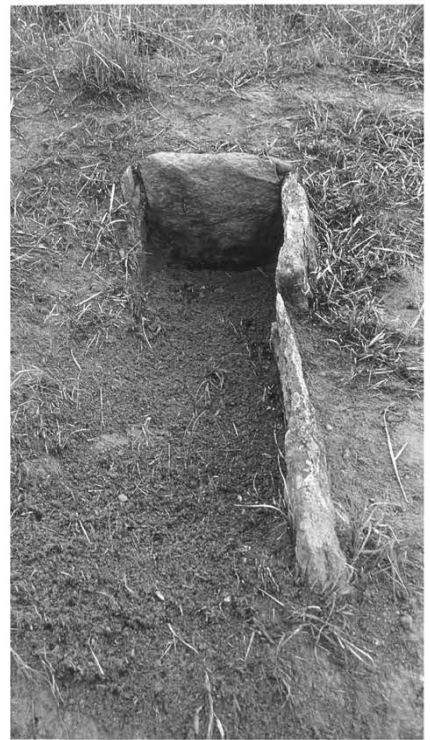
図1 朝鮮半島南・西海岸地域における5世紀前半頃の主な「倭系古墳」



高興野幕古墳
(竪穴式石室)



新安ペノルリ古墳
(石棺系竪穴式石室)



海南外島1号墳
(箱式石棺)

図2 「倭系古墳」の埋葬施設

立地し、その築造を契機として周囲に古墳群が形成されることはない。

墳丘と外表施設

野幕古墳は径22m程の円墳、雁洞古墳は径36m程の円墳、外島1号墳も径23m程の円墳と推定されている。一方で、ベノルリ3号墳は8m×6.4m程の円墳と推定され、他の古墳に比して小型である。また、野幕古墳と雁洞古墳では墳丘に葺石を葺く。

埋葬施設

野幕、ベノルリ3号、外島1・2号の埋葬施設は、北部九州地域に分布する竪穴式石室や箱式石棺との関連を考慮する必要がある(図2 高田2016)。例えば、ベノルリ3号墳の竪穴式石室は両短壁に板石を立てている点、平面形が2m×0.45mと細長方形で直葬の可能性が高い点などから、北部九州地域で盛行した石棺系竪穴式石室の範疇に属するものと判断できる。

また、野幕古墳の埋葬施設も平面細長方形で控え積みの幅が幅広い点などは、北部九州地域の竪穴式石室と類似する。調査報告書では、四壁の石の積み方が粗雑である点、副葬品が床面直上ではなく堆積土の下部から出土した点などから、石室内部に木槨が存在した可能性を想定している(国立羅州文化財研究所2014b)。また、蓋石が確認されず木蓋の可能性(もしくは木製建造物の蓋が石室上面を覆う機能を兼ねていた可能性)が指摘されている点も特徴的である。北部九州地域の竪穴式石室の中にも、例えば福岡県七夕池古墳(志免町教育委員会2001)のように、石室内部に木槨が存在したと推定できる事例はある。そして、墳丘盛土の途中で埋葬施設構築用の作業面を設けた後に、埋葬施設の構築と墳丘の盛土を並行して行うという造営過程についても、野幕と七夕池は共通である。

雁洞古墳の埋葬施設については、平面形がいわゆる「羽子板」形を呈する点、壁面に赤色顔料を塗布する点などに倭(北部九州)系の要素が認められることは確かである。竪穴系横口式石室を意識した埋葬施設である可能性が高い(高田2016)。

副葬品

野幕古墳(三角板革綴短甲、三角板革綴衝角付冑)、雁洞古墳(長方板革綴短甲、小札鋌留眉庇付冑2点)、外島1号墳(三角板革綴短甲)、ベノルリ3号墳(三角板革綴短甲、三角板鋌留衝角付冑)と、いずれの古墳にも倭系の帯金式甲冑が副葬されている点は特筆される。日本における甲冑研究を参考とすれば(鈴木2012・2014、橋本2014など)、いわゆる「鋌留技法導入期」、古墳時代中期中葉頃に対応する資料と評価できる。

また、野幕古墳やベノルリ3号墳で出土した鉄鏃についても鳥舌鏃や短頸片刃鏃などからみて、甲冑と並行する時期に位置付けられるものが主体を占めている。特に、この二古墳から出土した主要な武器・武具類については、一括で倭から移入された可能性が高い。そして、堅櫛や勾玉などの装身具(野幕)、甲冑と鏡の共伴様相(野幕、雁洞、ベノルリ3号 上野2012)、埋葬施設内部に土器を副葬しない点なども倭との共通性が高い。

一方で、雁洞古墳からは百済系の金銅製冠帽や飾履が出土している。すでに詳細な検討がなされ、「百済の金属製装身具の特徴を忠実に備えて」おり、「製作技法やその水準からみれば、百済の王都たる漢城において製作されたもの」として理解されている(李漢祥2011:70頁)。そして、多様な玉類や、儀仗の性格が強い鉄柄の鏝(삼포)なども百済系と把握することができよう。

このように、野幕、雁洞、外島1・2号、ベノルリ3号の諸古墳は、外表施設、埋葬施設、副葬品など倭系の要素が色濃く認められ、総体的に倭の墓制を取り入れたものと判断できる。その築造時期はおおむね5世紀前半頃であろう。特に古墳の全体的な様相が明らかな野幕とベノルリ3号は、北部九州地域における同時期の中小古墳の様相と酷似している。「倭系古墳」として評価される所以である。一方で、雁洞古墳から出土した装身具や儀仗の鏝は、その被葬者や造営集団と百済王権との政治的関係を如実に示している。

2. 「倭系古墳」の立地する地域の性格

海上交通を基盤とする地域集団

これまで整理したような特徴を有する「倭系古墳」の性格は、どのようなものであろうか。この点を明らかに

するためには、直ちに「倭系古墳」の被葬者論を展開するのではなく、まずは、「倭系古墳」が位置する諸地域に経済的基盤を置き、おそらく「倭系古墳」の造営にも関与した地域集団の姿を浮き彫りにすることが重要である。「倭系古墳」の立地や南・西海岸地域の地理的特性については、次のようにまとめることができる。

- ① 「倭系古墳」は南・西海岸地域の海を望む低丘陵の頂きや小島など、海岸を伝う沿岸航路の要衝に立地する。
- ② この地域はリアス式の海岸で海岸線が複雑に入り組んでおり、潮汐の干満差が非常に大きく、それによって発生する潮流は航海の上で障害となる。
- ③ 特に麗水半島から新安郡に至る地域は多島海地域であり、狭い海峡が連続し、非常に強い潮流が発生する。そのために、現在においても航海が難しい地域である。

①～③から推察すれば、すでに指摘のあるように（権宅章2014、金洛中2013など）、南・西海岸地域を伝う沿岸航路を活用する場合、現地の複雑な海上地理や潮流を正確に把握する必要があり、それを最も熟知していたのは西・南海岸の各地に居を構えた地域集団であったと考えられる。したがって、これらの地域集団は西・南海岸沿いの沿岸航路を活用した海上交通を主たる政治経済的な基盤としていた可能性が高い。

地域集団の墓制と集落—高興地域を事例として—

このような沿岸航路の要衝を根拠地とした地域集団は、「倭系古墳」が築かれる5世紀前半頃にどのような墓制や集落を営んでいたのであろうか。ここでは高興地域を事例として取り上げたい。野幕古墳や雁洞古墳が位置する高興半島では他の墳墓の発掘調査はあまり行われていないが、半島の基部にあたる地域ではいくつかの調査事例がある。その中で高興掌德里獐洞遺跡（大韓文化遺産研究センター・高興郡2011）と高興寒泉里新村遺跡（馬韓文化財研究院2011）に注目する。

獐洞遺跡（図3・4）では、周溝をめぐらせ内部に複数の木槨を設置するM1、M2号墳と、単独の木槨墓10基が確認された。調査報告書ではM1、M2号墳の造営時期を5世紀前半頃と想定している。ただ、M2-1号墓で出土した台付把手付壺（図4-2）の型式からみると、もう少しさかのぼる可能性もある。副葬土器や周溝

出土の土器をみると、金海・釜山地域系（台付把手付壺など）、慶南西部地域系（広口壺）、榮山江流域系（蓋杯、口縁部短く外反する椀、両耳付壺など）などが出土し、さらには有孔広口小壺も確認されるなど、非常に多様である。

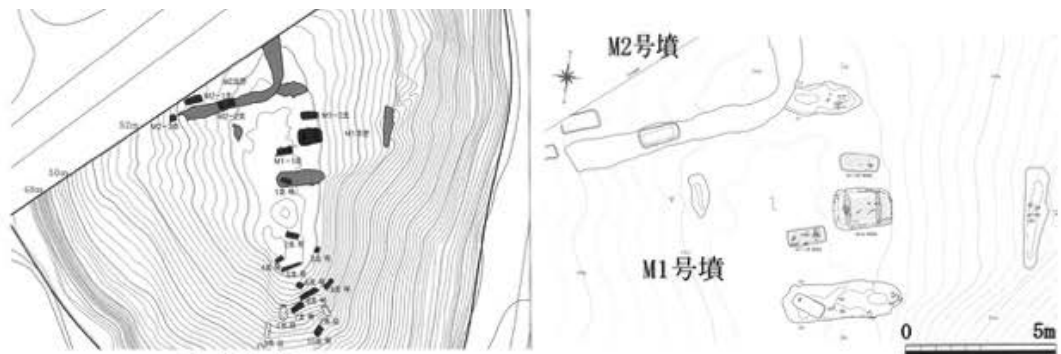
また、新村遺跡は獐洞遺跡の近隣、北へ1.5kmほどに位置しており、獐洞遺跡と同様な墓制が確認されている。やはり副葬された土器の中に外来のものが含まれる点が特徴的で、金海・釜山地域系や咸安地域系のものが確認できる。

高興半島基部の墓制を整理した李暎澈は、獐洞遺跡のM1、M2号墳を「多葬墳丘墓伝統の梯形古墳」と評価し、それが「榮山江流域圏で一般化する墓制の類型」であり、現状ではその分布の東限となることを指摘する（李暎澈2011：218頁）。そして、埋葬施設が単独木槨墓も含めていずれも木槨構造であり、副葬品に加耶系のものが主流を占めている点から、その造営集団は「高興半島一帯においては多少なじみの薄い埋葬風習を有していた集団」（李暎澈2011：218頁）であり、「小加耶や金官加耶をはじめとする加耶地域と活発な交流関係を展開していた」と想定している。氏の見解は妥当性が高く、獐洞遺跡や新村遺跡が汝自湾から内陸へ至る交通路沿いに位置する点も勘案すれば、この地域の集団は、西・南海岸沿いの沿岸航路や内陸部への陸路を活用した「交易」活動を政治経済的な基盤としていたと判断できる。

このような性格を有する地域集団が高興半島の各地に存在した可能性は高い。そのことは集落の状況からうかがえる。実は、野幕古墳の近隣で高興湾に面する微高地状には、4、5世紀代に寒東遺跡（湖南文化財研究院・益山地方国土管理庁2006a）や訪士遺跡（湖南文化財研究院・益山地方国土管理庁2006b）などの集落が営まれたことが確認されている。これらの集落遺跡からは、榮山江流域や諸加耶に系譜を追える土器、倭系の須恵器系土器、子持勾玉などが出土し（図5）、調査報告書の中で、集団の活発な対外活動がすでに指摘されている。

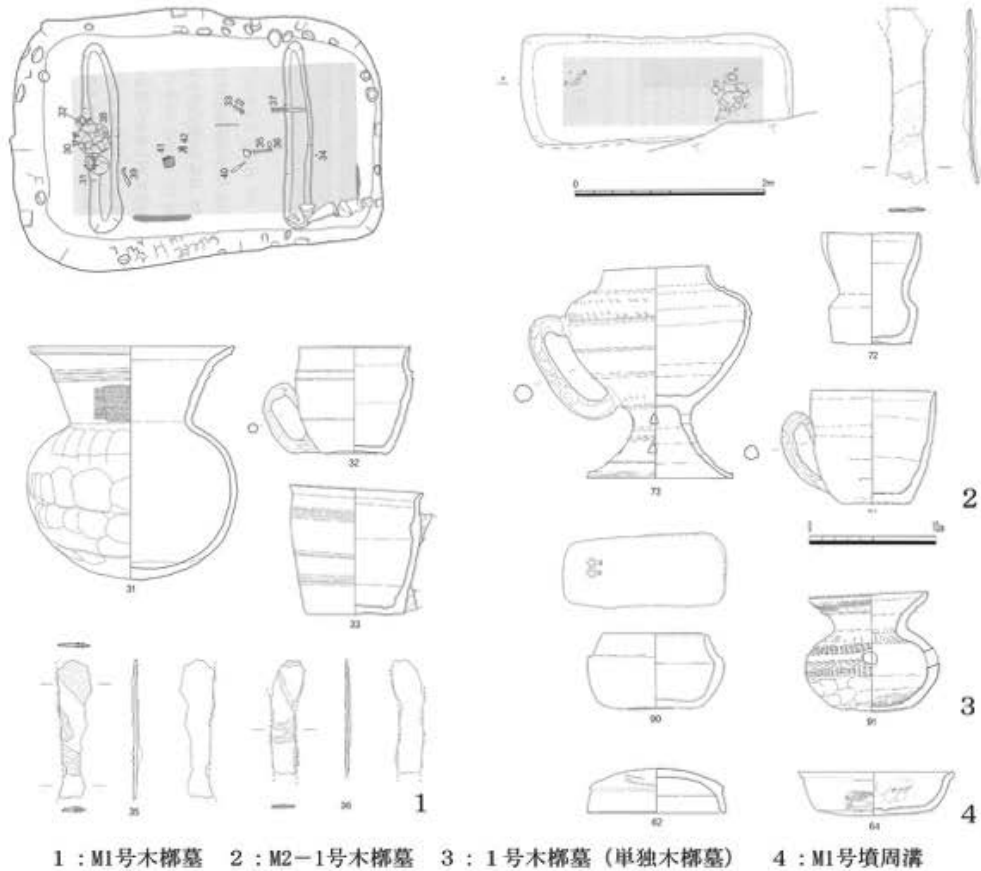
南・西海岸地域に展開する「地域ネットワーク」

詳細は省くが、南・西海岸の他地域でも同様な地域集団の存在を推定でき、海上交通を基盤としていた地域集団が海岸沿いに点在していた可能性が高い。すなわち、



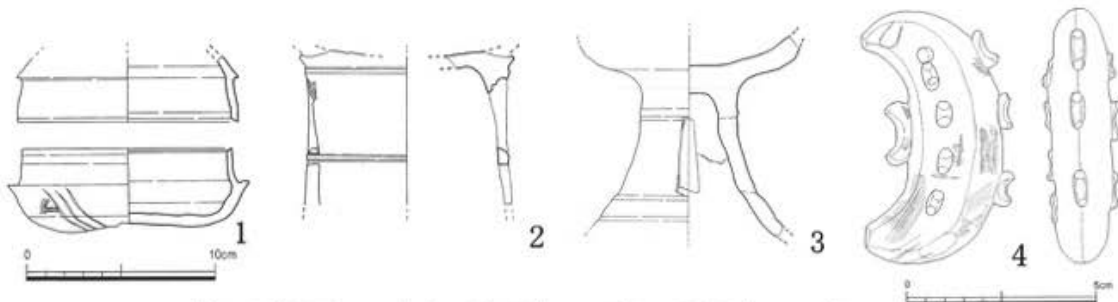
遺構分布図

図3 高興掌德里獐洞遺跡



1: M1号木槨墓 2: M2-1号木槨墓 3: 1号木槨墓(单独木槨墓) 4: M1号墳周溝

図4 獐洞遺跡の埋葬施設と出土遺物



1: 寒東18号住居址 2: 寒東21号住居址 3: 訪士18号住居址 4: 訪士39-4号住居址

図5 高興寒東・訪士遺跡出土遺物

南・西海岸地域には、物資、技術、情報、祭祀方式などをやりとりする「地域ネットワーク」とでも呼ぶべき関係網が形成されていた、と想定できる。

3. 「倭系古墳」造営の背景

「倭系古墳」の被葬者像

次に、これまでの検討に基づいて「倭系古墳」の被葬者像を想定してみたい。「倭系古墳」に認められる倭系、あるいは百済系の属性（雁洞古墳出土の装身具や儀仗用の鍬など）、そして扶安竹幕洞祭祀遺跡や福岡県沖ノ島祭祀遺跡の存在から判断すれば、西・南海岸を伝う沿岸航路が百済や榮山江流域、そして倭の主要な交渉経路であったことは、容易に想定される。具体的には、倭—広義の対馬（大韓・朝鮮）海峡—南・西海岸地北部九州域の島嶼部—漢城百済圏という経路であり、無論、倭—海峡—南海岸の島嶼部—榮山江—榮山江流域社会というような経路も想定できる。

先に述べたように、この経路上の点在する「倭系古墳」は単独的に造営され、その造営を契機に周囲に古墳群が形成されることはない。また、倭、特に北部九州地域における中小古墳の墓制を総体的に採用している。このことから、その被葬者はあまり在地化はせず異質な存在として葬られたと考えられ、倭の対百済、榮山江流域の交渉を実質的に担った倭系渡来人として評価できそうである。

ただし、雁洞古墳の被葬者については、百済系の装身具や鍬が副葬されていることから、出自が倭にあるとしても百済との深い政治的関係を有していたことも確かである。その意味で、倭と百済の政治経済的なつながりを取り結ぶような立場にあった、複属性を備えた人物と考えてみたい。

倭系集団による南・西海岸地域のネットワークへの参画

このように「倭系古墳」の被葬者像を想定した場合、次に問題となるのは、被葬者やそれを取り巻く倭系渡来人集団が、百済や榮山江流域など目的地への航行や、それらとの交渉という任務を、いかにして円滑に遂行しようとしたのか、という点である。これを考古学的に検討することは至極難しい。ただ、南・西海岸地域の地理的

特性を鑑みる時、少なくとも倭系渡来人集団のみでは沿岸航路の航行は至極困難であったことは想像に難くない（権宅章2014、金洛中2013など）。

したがって、円滑な航行には複雑な海上地理と潮流を熟知する地域集団の仲介が不可欠であったろう。おそらく倭系渡来人集団は、南・西海岸地域に形成されていたネットワークへの「参画」を企図し、在地の諸集団との交流を重ねつつ、航路沿いの港口を「寄港地」として活用することや航行の案内を依頼していたのではなかろうか。すなわち、倭の対百済、榮山江流域の交渉は、西・南海岸の諸地域集団との関わりがあって初めて円滑に遂行できた可能性が高い。その場合、倭系渡来人集団が航行上の要衝地に一定期間滞在し、在地の集団と「雑居」していた可能性も十分にあり、そのような状況の中で「倭系古墳」が築かれたと想定する。

4. 朝鮮半島南・西海岸地域における寄港地関連の遺跡

3、4世紀代の日朝交渉において、朝鮮半島側の窓口（関門地）が金海・釜山地域、すなわち「古金海灣」沿岸とその周辺であり、その役割はそれ以降も長く維持される。港関連の遺跡としては、金海官洞里・新文里遺跡（三江文化財研究院2009、東亜細亜文化財研究院2013、한겨레문화재단연구원・慶尚南道2015）などがあり、土師器系土器や須恵器が出土している。

その一方で、4世紀後半以降、朝鮮半島の南・西海岸をつたうように、巨済、鎭海、光陽、高興、羅州、咸平などの各地で土師器系土器が出土するようになる。そのような集落遺跡の中には、海岸沿いや河口近くに位置することから寄港地との関連が想定でき、かつ倭人たちと在地の人びとが「雑居」していた可能性も考えられる事例がある。先ほど紹介した高興寒東遺跡や訪土遺跡もその一例である。ここで他の代表的な事例も紹介することで、南・西海岸地域をつたう航路を具体化したい。

巨済鵝洲洞集落

まず、対馬島との海峡が最もせまくなる巨済島の中央部に位置する鵝洲洞集落がある（우리文化財研究院・巨済市2012、우리文化財研究院・협성建設2017）。搬入品を多く含むおむね北部九州に系譜を追える土師器系高

坏、西南部（全羅道～慶尚南道西部）系統の甑や長胴甕が多数確認された（図6）。それらは堅穴住居において共伴して出土することから、九州北部を中心とした倭系の集団と馬韓系の集団が、おおむね4世紀後半に「雑居」していた可能性が高い。

寺井誠は「（南海岸ルート）の中継地であり、交易の拠点としての役割を果たした遺跡」として評価し、「馬韓と倭が別の勢力（金官国：筆者註）を挟まずに接点を持つために」重要な役割を果たしたと想定している（寺井2014：388頁）。趙晟元も、政治的変動に直接結びつけることに慎重を期しつつも、「金官加耶と近畿の大和勢力の交易関係とは別途に、南海岸勢力と九州勢力の新たな交易ルートが創出され」た可能性を指摘する（趙晟元2017：120頁）。寺井と趙の見解には、巨濟鵝洲洞集落遺跡を、政治勢力に管理された交易拠点とみるか、交易の必要上から営まれた「短期間の臨時的滞在用」の集落とみるかにおいて、違いがある。

ともあれ、鵝洲洞集落遺跡の堅穴住居の大多数は、平面が方形もしくは長方形である。そして西南部地域に特徴的な隅からのびる排水溝も確認できることから、集落を営んだ集団が、半島西南部（慶尚南道西部も含む）系統の集団であった可能性は高い。その目的のひとつには倭との交易があり、それに呼応して倭の人びとも鵝洲洞集落に赴き、両者が「雑居」するような状況が生じたものと考えられる。

光陽龍江里石停遺跡

次に、南海岸のほぼ中央にあたる光陽龍江里石停遺跡（大韓文化財研究院・韓国鉄道施設公団2012）がある。この集落は光陽湾にそそぐ西川の河口東岸に位置し、南海岸をつたう航路の要衝である。4世紀後半～5世紀前半頃に集落が営まれた。その大きな特徴は、やはり現地の土器のほかに百濟、加耶（阿羅加耶）そして倭という実に多様な系譜の土器が、堅穴住居から出土したことにある（図7）。それらは同じ住居（例えば5号住居）から一緒に出土する場合が大半で、狭い調査範囲にもかかわらず、10点近くの土師器系土器が出土している。鵝洲洞集落と同じように、さまざまな地から訪問してきた人びとが、「雑居」し、交易を重ねる港が付近に存在した可能性が高い。

羅州月陽里九陽遺跡

そして近年、榮山江流域でも5世紀前中葉にかけての河港を備えた集落と考えられる遺跡、羅州月陽里九陽遺跡（大韓文化財研究院・全羅南道2017）がみつかった。1917年測量の古地図をみると、「南海湾」と記す一帯から支流の三浦川への入り口の微高地に立地する。調査された面積はそれほど広くないけれども、集落の中を東西に河道が走り、その北に堅穴住居群、南に倉庫群が位置している。また河道に直交するように、栈橋状の施設や轍が無数に走る道路もある。そして、土師器系土器の破片や、須恵器系土器の壺、そして埴輪片など倭の関連する遺物が出土している。倭人と榮山江流域社会の人びとが交易する場のひとつだったと考えてもよい。

このような寄港地関連の集落が南海岸沿いに点在することからみると、ある意味当然のことではあるが、当時の航路が南海岸沿いの寄港地をつたうようなものだったことがうかがえる。また、そこから倭系の土師器を含めた、榮山江流域、百濟、加耶など多様な外来系土器が出土している状況からみても、先に想定した物資、技術、情報、祭祀方式などをやりとりする基層的なネットワークの存在をより具体化できそうである。

5. 竹幕洞祭祀遺跡の概要

そして、朝鮮半島西海岸には沖ノ島と同様の性格を有する竹幕洞祭祀遺跡が位置している。そこでは多様な地からたどりついた人びとが、航海安全のための祭祀を執り行った状況が明らかにされている。本節で、その概要をまとめておく。

遺跡の立地と景観

竹幕洞祭祀遺跡は全羅北道扶安郡邊山面格浦里に位置する。黄海に突き出た邊山半島の突端、赤壁（碧）江とよばれる絶壁と岩盤からなる岩石海岸上のせまい平坦地に遺跡は広がっている。現在でも水聖（城）堂とよばれる祠堂が建ち、裏側には堂窟という海蝕洞窟が迫っている。

遺跡の近海には、蝸島、食島、飛雁島、古群山列島などの島々が点在する。飛雁島東海域では、2002年に3172点もの高麗青磁が引き揚げられ、櫓の部材も確認され

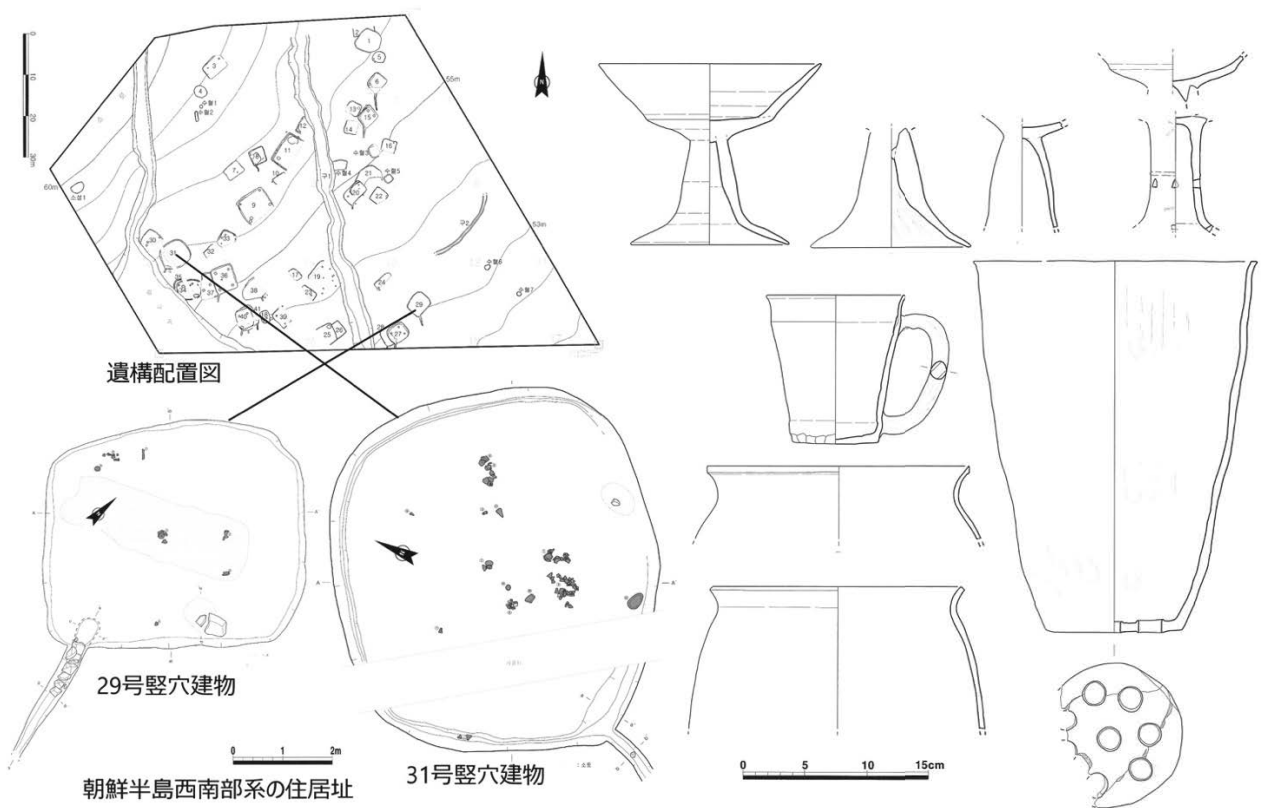


図6 巨濟鵝洲洞遺跡 (1485番地)



図7 光陽龍江里石停遺跡

た。西海岸沿いを航行中に沈没した船の積み荷であったと考えられている。おそらく、先史より朝鮮半島の西海岸をつたう航路の難所のひとつであったと考えられる。

その中で、周辺から認識しやすい邊山半島の突端やその周辺が、航海上の重要な目印や寄港地（現在の格浦里の港も候補となろう）になっていた可能性は高く、そこに祭祀場が設けられたものと推定される。

祭祀の変遷

遺跡の発掘調査は、1992年に国立全州博物館によって行われた。1980年代に海岸警備のため塹壕や鉄柵などの軍関連施設がつけられたことによって、遺跡は大きく破壊されたらしいが、水聖堂背後の8m×9mの平坦地の範囲が祭祀場の中心部分だったことが明らかとなった。この範囲から、壺・甕・器台・高坏・杯蓋・瓶類などの土器類、武器・武具・馬具・鏡などの金属器類、中国陶磁、そして各種の石製模造品など、三国時代の遺物が出土し（図8）、さらに統一新羅、高麗、朝鮮王朝の時代にいたる土器や陶磁器、瓦なども確認された。

祭祀の形態は、平坦地に土器を並べ海（海神）に向かって祈りを捧げる露天祭祀であったと推定されている。ただし、長期間にわたる祭祀がほぼ同一の場所で行われたため、祭祀の時期的な変遷を層位学的に把握することは難しい。それでも、出土土器の時期や遺物の出土状況によって、以下のような大枠の変遷は想定可能である（国立全州博物館1995、大竹2013など）。

3世紀後半～4世紀代

まず、壺を中心とした土器類のみを用いて露天祭祀を執り行った段階である。中心年代は、おおむね3世紀後半～4世紀代と考えられる。土器の器種には、タタキや横沈線を有する短頸壺や直口壺、二重口縁壺、灰色磨研の平底直口壺などがある。いずれも朝鮮半島中西部から西南部にかけて認められる器種ではあるが、詳細にみると系譜を細分してみることができる。

注目すべきは、胴部の上・中半に並行タタキと横沈線文、下半に格子タタキを施した短頸壺（図8-2）の存在である。このような短頸壺は、柴山江流域を中心とした朝鮮半島西南部に確認される器種であり、二重口縁壺（図8-3・4）もまた、分布の中心は西南部にある。

その一方で、灰色磨研の平底直頸壺（図8-1）は、京畿道地域から中西部を中心に分布する土器であり、いわゆる百濟土器の範疇で把握されている。このように、土器の系譜からみると、柴山江流域から京畿道地域にかけての人びとが祭祀に関与していた可能性が考えられる。

5～6世紀前半

次の5世紀代に入ると、祭祀が大規模化し、用いられる土器の器種は多様なものとなる。特に鉢形や筒形の器台などが加わることで大きな特徴である。武器・武具類、馬具、鏡、土製馬、中国陶磁なども祭祀具として用いられる。発掘調査を担当とした兪炳夏の研究成果（兪炳夏1998）を参考としつつ、この時期の祭祀形態とその主体を類型化すれば、以下の3つに区分できそうである。

百濟王権や西南部の地域社会が主体となる祭祀

まず、多種多様な土器類、土製馬、中国陶磁などを用いた祭祀を行う類型である。祭祀が大規模化しており、京畿道～中西部に分布の中心がある筒形器台や瓶形土器が出土している点に注目できる。そして、益山弥勒寺址などに類例がある土製馬、そして百濟王権が中国南朝から入手したと想定し得る青磁四耳付盤口壺や黒褐釉甕、あるいは鉄鏡などの存在を考慮すると、祭祀執行の主体が百濟王権であった可能性は高い。

ただし、鉢形器台や高坏の中には、遺跡の南方、全羅北道の高敞地域系統のものが含まれる（図8-7）。また、半島西南部に分布の中心がある肩部に三角文を連続して押捺する大型甕（図8-6）も存在する。したがって、祭祀に用いられた少なくとも土器が、半島西南部において製作された可能性がうかがえる。このことを傍証するのが、祭祀用に特別に製作されたとされる広口長頸壺（図8-5）である。頸部や胴部に多彩な波状文を施し、把手や突起を複数取り付けの独特な器形で、管見では他に類例を見ない。ただし、そのタタキ技法をみると、胴部の上・中半に並行タタキ、下半に格子目タタキを施している。上述のように、このようなタタキ板の使い分けは西南部地域を中心とした特色である。

付言すれば、竹幕洞から出土した鉢形器台（図8-7など）については、かつて加耶地域に系譜を求める見解が多かった。しかし、典型的な加耶系（大加耶や小加耶系）

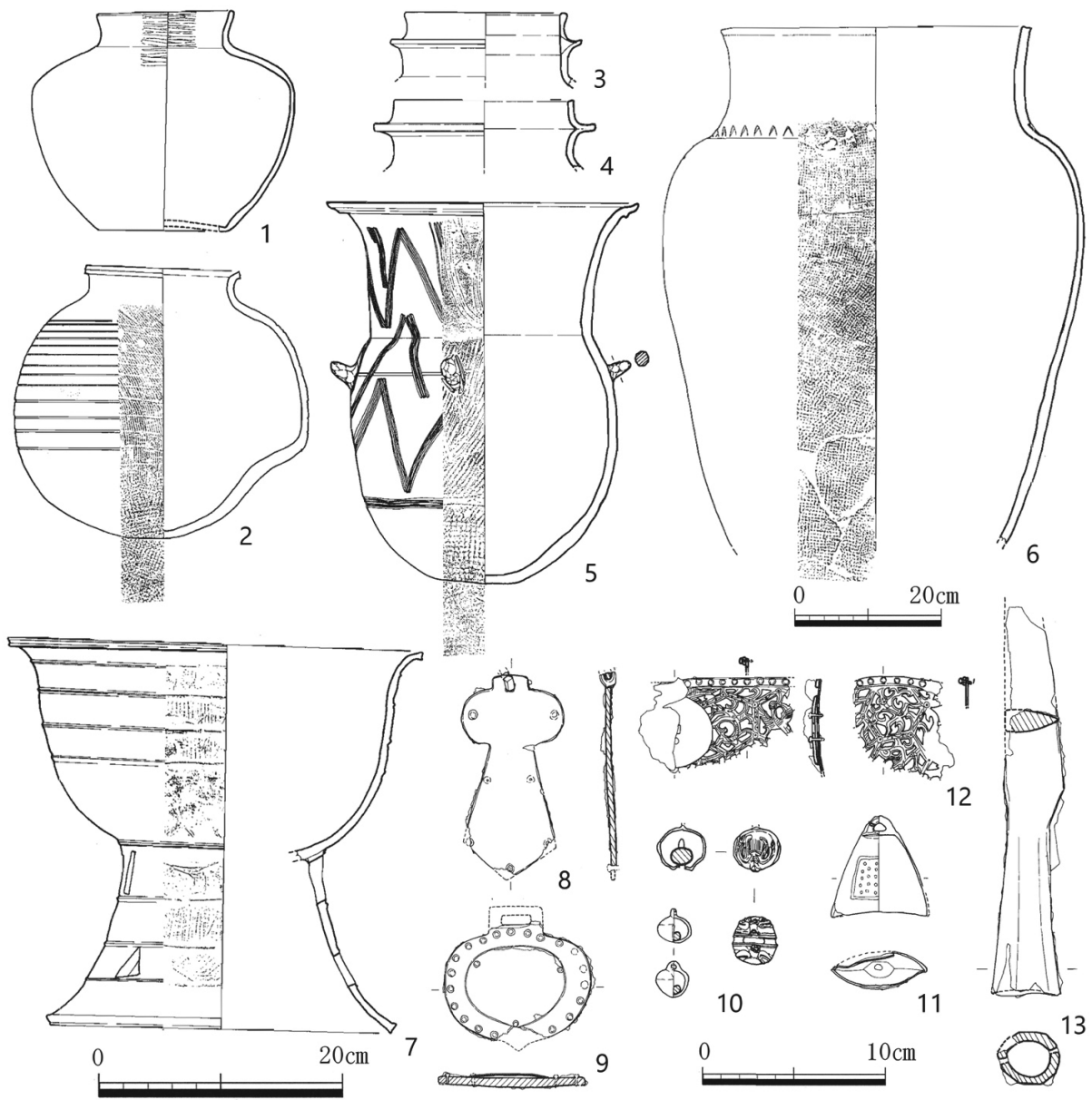


図8 竹幕洞祭祀遺跡の出土遺物

の器台は確認されておらず、加耶地域の器台とは形態的な差異が少なくない点、中西部から西南部地域にかけて形態や文様の類似する鉢形器台の出土例が増加している点を考慮すれば、改めて当該地域の鉢器台の悉皆的な整理の後に、系譜の検討を行う必要がある。筆者はむしろ全羅北道高敞地域との関連性を想定している。

以上の状況を鑑みれば、百済王権主体の国家的な祭祀に、半島西南部の諸地域社会もまた積極的に参与していたと想定するのが妥当であろう。

大加耶や百済が主体となる祭祀

ダ2区の甕3には、武器（鉄鉾12点、鉄剣2点）、馬具（鉄製剣菱形杏葉、馬鈴、環状雲珠、鉸具 図8-8・10）、そして銅鏡が埋納されていた。また、すぐそばから出土した鉄地金銅張心葉形杏葉、銅環、鉄鐸（図8-9・11）なども、同じ甕かあるいは周囲の別の甕に埋納されていた可能性が高い。他にも、亀甲文透彫金銅製鞍金具片（図8-12）や鉄鉾を納めた大甕が確認されており、大甕に武器や馬具、銅鏡などを納めて供献する祭祀の類型を設定できる。

兪炳夏は埋納された馬具などの金属製品を加耶系と判断し、大甕の器形も大加耶圏に類例を見出せることから、この類型の祭祀の主体は、加耶において対外交渉の能力を備えていた支配層であったと判断している（兪炳夏1998）。傾聴すべき見解であり、筆者も加耶系の集団が、祭祀の主体であった可能性は高いと考える。ただし、祭祀の主体を加耶に限定することには躊躇を覚える。

確かに、剣菱形杏葉や針葉形杏葉、馬鈴などの馬具については加耶、特に大加耶系として評価されている（諫早2012など）。一方で、亀甲文透彫鞍金具片については、半島中西部～西南部から出土する金銅製の冠や飾履に同様のモチーフや金工技法が認められ、むしろ百済系と評価できそうである。また、鉄鉾には多角形袋を備えた刀身式鉄鉾（図8-13）が含まれるが、その出土例は、扶安竹幕洞、長水三峰里2号墳、咸陽白川里1号墳、そして百済系墓制の影響を色濃く受けた大阪府高井田山古墳などが確認でき、現状では百済・大加耶系と把握するのが穏当である。そして、大甕の器形も大加耶圏のみ事例があるわけではない。さらに、銅鏡はむしろ倭とのつながりを想定し得る。

したがって、この類型については百済と加耶（そして倭）の相互交渉の中で、両者が主体となった祭祀の形態という程度に把握しておくことがより妥当である。

倭が主体となった祭祀

そして、石製模造品を用いた祭祀をひとつの類型として設定できる。多種多様な石製模造品が3ヶ所程の分布の集中をもって出土している。朝鮮半島では竹幕洞以外に、まとまった数量の石製模造品を祭祀具として用いた遺構は確認されていないこと、竹幕洞では、石製模造品と土器や金属器などの遺物との有機的な関連性はうかがえないことを考慮すれば、石製模造品を用いた祭祀は、倭系集団が祭祀の主体であった可能性は高い。

6世紀後半以降

6世紀後半以降になると、祭祀の規模は大幅に縮小する。統一新羅～朝鮮王朝の時代には、少量の土器や陶磁器による祭祀が主であったようである。ただし、一定量の瓦片が出土しており、ある段階から建物内で祭祀が行われた可能性が指摘されている（国立全州博物館1994）。そして19世紀中頃以降は、水聖堂において航海安全や豊漁などを願う祭祀が執り行われた。

以上のように、竹幕洞祭祀遺跡は遅くとも4世紀以降、航海安全を主な目的とした多様な祭祀が行われた遺跡として評価できる。特に、5世紀代～6世紀前半にかけては、百済の国家的な祭祀場であるとともに、加耶や倭から渡来した集団も当地で祭祀を行っていたようである。

6. 朝鮮半島南・西海岸地域出土の石製模造品をめぐって

百済の国家的な海洋祭祀の場として評価されている竹幕洞祭祀遺跡で、倭の石製模造品がセット（鏡・短甲・鎌・斧・刀子・勾玉・有孔円板・白玉）で出土した。中でも短甲形石製模造品は出土例がきわめて限られ、毛野（栃木県雷電山古墳、群馬県金井東裏遺跡の祭祀場、築瀬二子塚古墳）地域一宗像地域（福岡県下高宮遺跡周辺の中殿山、花田2012）一竹幕洞祭祀遺跡という分布をみせている。

近年、竹幕洞祭祀遺跡以外でも、朝鮮半島西・南海岸地域において石製模造品、特に子持勾玉の出土が相次いでいる(図9)。ここで、その出土遺跡や遺構の様相を整理し、朝鮮半島へ渡海する倭系集団の航路や、それに伴う祭祀の実態を把握の基礎としたい。

石製模造品を出土した遺跡の概要

竹幕洞の他に出土地をおおむね把握できる資料は、管見では、集落遺跡での出土が5点、採集品が2点である。主な事例について紹介する。

泗川勒島遺跡(図9-8 東亜文化財研究院・泗川市2006)では有孔円盤が1点出土している。初期鉄器時代以降の対外交渉関連の遺跡として著名であるが、須恵器や土師器系土器も出土しており、4~5世紀にも寄港地として用いられていた可能性が高い。

光陽龍江里遺跡(図9-7 順天大学校博物館・光陽龍江土地区画整理組合2002)は、光陽湾へと流れる東川の下流域の低丘陵斜面に位置し、平面方形の竪穴建物3棟が確認された。その中の4号建物址から子持勾玉1点が破砕した状態で出土している。3棟の建物は、10~15mの間隔をあけて配置されており、一般的な集落の建物配置とはやや様相を異にしていることや、周囲は主に墓域として用いられていることを考慮すると、あるいは祭祀場としての機能を想定できるかもしれない。また近隣には寄港地関連の遺跡として先に紹介した龍江里石停遺跡が位置している。

高興訪土遺跡(図9-5)も先に紹介した高興湾に面した集落遺跡である。39-4号建物址から子持勾玉が1点出土し、須恵器系土器や加耶系の有蓋鉢と共伴している。

寶城白鶴堤遺跡(図9-4 全南文化財研究院2015)は、周囲を山に囲まれた平坦地に単独で立地しており、竪穴建物址2基、竪穴6基、用途不明の柱穴群などが確認された。1号竪穴で子持勾玉が出土しており、竪穴の規模は7.46m×3.94mと大型である。調査報告者は、遺跡の立地の特異性や1号竪穴の存在から、「祭祀遺跡や特殊な用途の遺跡」(全南文化財研究院2015:100頁)として評価する。

新安地域の押海島(図9-2)においても子持勾玉が採集されたとされる(崔恩珠1987)。詳細は不明だが、

島嶼部での出土で近隣に倭系古墳たる新安ベノルリ3号墳が位置する。

羅州郎洞遺跡(図9-3 全南文化財研究院・羅州市2006)は、榮山江流域における有力集団の墓域である羅州伏岩里古墳群の周辺に位置する集落遺跡であり、剣形品が1点出土した。

分布と性格

以上のような子持勾玉を中心とした石製模造品の分布について注目すると、朝鮮半島の西・南海岸沿いに広がる。東から西へたどると、金海、泗川勒島、順天、光陽、高興、宝城、新安、羅州となる。そして、扶安竹幕洞祭祀遺跡を経て、泗泚期百済の中心たる扶余の軍守里遺跡でも子持勾玉が採集されている。

このように、倭から西・南海岸を伝って榮山江流域や百済圏へ向かう航路に沿うような形で、石製模造品は分布している。特に、臨海性が高く須恵器系土器や土師器、加耶系土器が出土する、いわゆる寄港地と想定し得る遺跡(泗川勒島、光陽龍江里、高興訪土など)や、押海島などの島嶼部、そして祭祀場と推定される遺跡(寶城白鶴堤)から出土している点には注目できる。

想像をたくましくすれば、倭と百済・榮山江流域を往来する倭系集団が、各地の寄港地において風待ちや潮待ちのために短期間滞在する中で、航海安全を願う祭祀を執り行う場合もあったとみることも、あながち無理ではなさそうである。

ただし、各遺跡において石製模造品が他の(倭系の)祭祀具と共伴して出土しているわけではない。実際に祭祀に用いられたのかどうかも含めて、祭祀の具体的な様相については、慎重に検討していく必要がある。資料の増加に期待したい。

おわりにかえて

本発表で提示した南海岸をつたう航路は、東から西へ、古金海湾(洛東江ルートや慶州への陸路)、泗川湾・固城(南江ルート)、そして蟾津江河口(蟾津江ルート)という内陸へ向かう交通の要衝を経由する(高田2017)。大加耶や新羅と倭の交渉にも利用されていた可能性が高い。

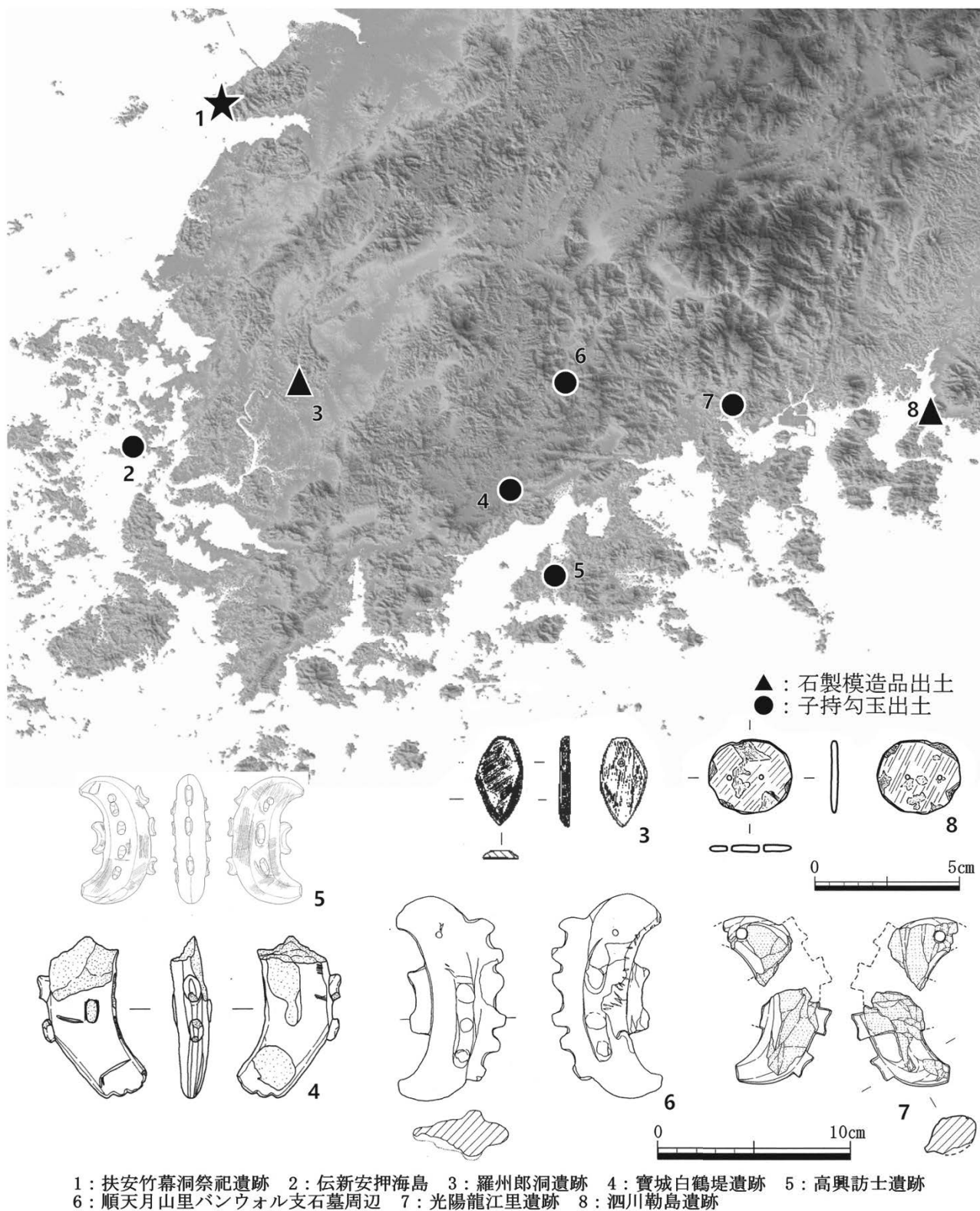


図9 朝鮮半島の石製模造品・子持勾玉

図出典 図1 1: 東新大学校文化博物館2015 2: 国立羅州文化財研究所2014b 3: 国立光州博物館・海南郡2001 筆者撮影 4: 全南大学校博物館・湖南文化財研究院ほか2015 筆者撮影 図2 野幕: 国立羅州文化財研究所2014b ベノルリ: 東新大学校文化博物館 外島: 筆者撮影 図3・4 大韓文化遺産研究センター・高興郡2011 図5 湖南文化財研究院・益山地方国土管理庁2006a・b 図6 우리文化財研究院・巨濟市2012 図7 大韓文化財研究院・韓国鉄道施設公団2012 図8 国立全州博物館1994 図9 1: 国立全州博物館1994 2: 崔恩珠1987 3: 全南文化財研究院・羅州市2006 4: 全南文化財研究院2015 5: 湖南文化財研究院・益山地方国土管理庁2006b 6: 全南大学校博物館・全羅南道1988 7: 順天大学校博物館・光陽龍江土地区画整理組合2002 8: 東亜文化財研究院・泗川市2006

また近年では、巨済島や古金海湾沿岸から東海岸沿いをつたう航路、すなわち新羅との交渉にもちいられた航路を示す考古資料も確認されている。そのひとつに、機張冬柏里遺跡Ⅲ地区の古墳群に属する12号石室墓がある（慶南文化財研究院・機張郡2014）。現在の漁港、冬柏港や七岩港から2kmほどの丘陵に位置する臨海性の高い古墳群である。その古墳群の中で唯一、12号石室墓（竪穴系横口式石室）から、5世紀後半～6世紀前葉に倭から移入された可能性が高い須恵器蓋杯が9点と金銅装の剣菱形杏葉が出土した。倭とのかかわりを有した人物、もしくは倭から渡来して定着した人物を被葬者として想定し得る。付近の海岸に寄港地が存在し、近隣の集団と倭系集団が交渉を重ねていたのであろう。

以上のように、倭と朝鮮半島諸勢力の交渉には、朝鮮半島の南・西海岸、そして東海岸の寄港地をつたう航路が活用されていたと考えられる。百済や榮山江流域社会、加耶、新羅などとの交渉にのぞむ倭系集団は、その航路沿いの要衝地に点在し港を管理する地域集団と密接にかかわり、時には短期的に「雑居」しながら、目的地までの円滑な航行を企図したのであろう。その中で、航海の途中で死をむかえた人物を「倭系古墳」を造営して葬ったり、竹幕洞のような百済が運営する祭祀場で祭祀を執り行ったり、あるいは一部の人びとが現地に定着するような状況が生じていたようである。

主要参考文献

（韓国語文献）

- 慶南文化財研究院・機張郡 2014『機張冬柏里遺跡』
- 権宅章 2014「高興野幕古墳の年代と登場背景についての検討」『古墳を通してみた湖南地域の対外交流と年代観』第1回古代古墳国際学術大会
- 国立光州博物館・海南郡 2001『海南方山里長鼓峰古墳試掘調査報告書』
- 国立羅州文化財研究所 2014a『古墳を通してみた湖南地域の対外交流と年代観』第1回古代古墳国際学術大会
- 国立羅州文化財研究所 2014b『高興野幕古墳発掘調査報告書』
- 国立全州博物館 1994『扶安竹幕洞祭祀遺跡』
- 国立全州博物館 1995『特別展 海と祭祀—扶安竹幕洞祭祀遺跡—』
- 金洛中 2013「5～6世紀南海岸地域の倭系古墳の特性と意義」『湖南考古学報』45 湖南考古学会
- 大韓文化遺産研究センター・高興郡 2011『高興掌德里獐洞遺跡』
- 大韓文化財研究院・韓国鉄道施設公団 2012『光陽龍江里石停遺跡』
- 大韓文化財研究院・全羅南道 2017『羅州月陽里九陽遺跡』
- 東新大学校文化博物館 2015『新安安佐面邑洞・ベノルリ古墳群』
- 東亜文化財研究院・泗川市 2006『泗川勒島進入路開設区間内文化遺蹟発掘調査報告書』
- 東亜細亜文化財研究院 2013『金海望德里・新文里生活遺跡』
- 馬韓文化財研究院 2011『寶城虎東・高興新村遺蹟』
- 三江文化財研究院 2009『金海官洞里三国時代津址』
- 順天大学校博物館・光陽龍江土地区画整理組合 2002『光陽龍江里遺跡Ⅰ』
- 우리文化財研究院・巨済市 2012『巨済鵝洲洞1485遺跡』
- 우리文化財研究院・협성建設 2017『巨済鵝洲洞1540-1番地遺跡』
- 俞炳夏 1998「扶安竹幕洞祭祀遺跡で行われた三国時代の海神祭祀」国立全州博物館『扶安竹幕洞祭祀遺跡研究』
- 李暎澈 2011「高興掌德里獐洞において確認された多葬墳丘墓伝統の梯形古墳の築造背景と課題」『高興掌德里獐洞遺跡』大韓文化遺産研究センター・高興郡
- 李漢祥 2011「高興吉頭里雁洞古墳の金銅冠帽と金銅飾履についての検討」『高興吉頭里雁洞古墳の歴史的 성격』

全南大学校博物館 2011『高興吉頭里雁洞古墳の歴史的な性格』
 全南大学校博物館・全羅南道 1988『住岩ダム水没地域文化遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)』
 全南大学校博物館・湖南文化財研究院・文化財庁・高興郡 2015『高興吉頭里雁洞古墳』
 全南文化財研究院 2015『寶城白鶴堤遺跡』
 全南文化財研究院・羅州市 2006『羅州郎洞遺跡』
 趙晟元 2017「おわりに」『巨濟鵝洲洞1540-1番地遺跡』우리文化財研究院・협성建設
 崔恩珠 1987「我が国の滑石製母子曲玉について」『三佛金元龍教授停年退任記念論叢Ⅰ 考古学篇』一志社
 한겨레문화재단연구원・慶尚南道 2015『金海新文里遺跡』
 湖南文化財研究院 2005『咸平老迪遺跡』
 湖南文化財研究院・益山地方国土管理庁 2006a『高興寒東遺跡』
 湖南文化財研究院・益山地方国土管理庁 2006b『高興訪士遺跡』
 湖南文化財研究院・全羅北道 2003『高敞鳳德里遺跡Ⅰ』

(日本語文献)

諫早直人 2012『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』雄山閣
 上野祥史 2012「帯金式甲冑と鏡の副葬」『国立歴史民俗博物館研究報告』173
 大竹弘之 2013「海峡の祈り」『古墳時代の考古学6 人々の暮らしと社会』同成社
 大野城市教育委員会 1985『笹原古墳』
 岡山大学考古学研究室・天狗山古墳発掘調査団 2014『天狗山古墳』
 酒井清治 2005「韓国榮山江流域の土器生産とその様相—羅州勢力と百濟・倭の関係—」『駒澤考古』駒澤大学考古学研究室
 志免町教育委員会 2001『国指定史跡 七夕池古墳』
 鈴木一有 2012「七観古墳1913年出土遺物の歴史的な位置」『国立歴史民俗博物館研究報告』173
 鈴木一有 2014「七観古墳出土遺物からみた鋳留技法導入期の実相」『七観古墳の研究』七観古墳研究会
 高田貫太 2016「竪穴系横口式石室・竪穴式石室・木槨の構造」『韓日の古墳』「日韓交渉の考古学—古墳時代(三国時代)—」研究会
 高田貫太 2017『海の向こうから見た倭国』講談社現代新書
 高田貫太 2018「5、6世紀朝鮮半島西南部における『倭系古

墳』の造営背景」『国立歴史民俗博物館研究報告』211
 寺井誠 2014「馬韓と倭をつなぐ」『東アジア古文化論攷』1 中国書店
 橋本達也 2014「中期甲冑の表示する同質性と差異性—変形板短甲の意義—」『七観古墳の研究』七観古墳研究会
 花田勝広 2012「中世の宗像神社と鎮国寺」『むなかた電子博物館紀要』4

秦氏と宗像の神—「秦氏本系帳」を手がかりとして—

田中 史生 早稲田大学文学学術院

要旨：10世紀前半の年中行事書『本朝月令』が引く「秦氏本系帳」には、秦氏が「筑紫胸形坐中部大神」を山背(山城)国の松尾神社(松尾社)に招請・奉安したことが記されている。本稿は、この「秦氏本系帳」を手がかりに、山背を拠点とした渡来系氏族の秦氏が、宗像の神を奉祭するに至った経緯や背景を検討した。その結果、秦氏が「筑紫胸形坐中部大神」を山背へ奉祭したのは推古十六年(608)で、この神は大島の姫神とみられること、またその背景には、ミヤケの経営にかかわった豊前の秦氏の活動や、ミヤケ制を基礎に展開した7世紀初頭前後の北部九州における王権の対外的な軍事活動の影響があったことが明らかとなった。これらには、倭王権の対外交流の拠点となった筑紫において、ミヤケ制とそれを基礎とした王権の軍事活動が、地域の社会関係と信仰の在り方に大きな変化をもたらしていたこと、また大島に対する信仰の、沖ノ島ルートに限定されない古代海上交通上の重要性が示されている。

キーワード：本朝月令、秦氏本系帳、秦氏、水沼君、松尾社、筑紫胸形坐中部大神、ヒメコソ、ミヤケ

はじめに

周知のように『日本書紀』(『書紀』)本文や『古事記』は、宗像の三女神を胸肩君(胸形君)等の祭神とする。しかしこれとは別に、『書紀』には以下のように三女神を、筑後川の中・下流域、筑後国三潯郡を本拠とした水沼君等が祀るとするものがある。

【史料①】『書紀』神代紀第六段第三の一書

即以_レ日神所_レ生三女神_一者、使_レ降_レ居于葦原中國之宇佐嶋_一矣。今在_レ海北道中_一。号曰_レ道主貴_一。此筑紫水沼君等祭神是也。

この史料と関連し、近年、沖ノ島の王権祭祀が4世紀後半に始まる一方、宗像勢力のそれへの関与は5世紀半ば頃から深まることに着目し、5世紀以前の沖ノ島祭祀は筑後川中・下流域、筑後国三潯郡を本拠とした水沼君のような有明沿岸部勢力も重要な役割を果たしていたとする推定が、考古学・文献史学の双方から示されている⁽¹⁾。また、沖ノ島の王権祭祀の開始期に、西新町遺跡などの博多湾岸の国際交易拠点の遺跡が衰退することなどから、宗像—沖ノ島ルートを、博多湾交易を否定する、もしくは従来の北部九州勢力に依拠した博多—壱岐ルートに対峙しうる、王権の自立的なルートと評価する見方もある⁽²⁾。こうした見解に対し、筆者は以前、水沼君と宗像の神との関係には、6世紀半ば以降のミヤケ制を契機に九州で形成された新たな社会関係が反映されており、宗像の重

要性は、周防灘・響灘と博多湾—壱岐をつなぐ地理的条件からももたらされていたことを指摘した。そしてその際に分析した文献史料や考古資料に7世紀初頭前後を画期とするものが少なくないことから、筑紫の社会変動には、ミヤケ制を基礎に展開した7世紀初頭前後の倭王権の当地での軍事行動も影響を与えていたのではないかとの見通しを示したことがある⁽³⁾。本稿は、こうした見解を別の角度からあらためて検証するとともに、見通し的に示した課題に具体的な分析を加えるものである。

ここで本稿が特に注目するのは、10世紀前半の年中行事書『本朝月令』が引く「秦氏本系帳」である。本史料は、秦氏が「筑紫胸形坐中部大神」を山背(山城)国松尾神社(松尾社)に招請・奉安したことを記し、宗像の神の宗像地域以外の受容を具体的に記述した貴重な古代史料と評価しうる。ただし、山背の秦氏が宗像の神と結びついた時期や背景については諸説あり、本史料の解釈はいまだ定まらない。そこで、まずはその研究史から本史料の抱える問題点を確認した上で、あらためて宗像の神と秦氏の関係を探り、上記の課題に具体的に応えたいと思う。

1. 山背の秦氏と宗像の神をめぐる

—研究史の整理と課題—

周知のように、宗像・沖ノ島からは渡来文化の様相の濃い出土遺物が少なからず確認されている。文献史学で

は従来、これを秦氏と関連づけて解釈する説が提起されてきた。前述の「秦氏本系帳」に秦氏が「筑紫胸形坐中部大神」を山城国松尾神社(松尾社)に招請・奉安したとあることや、これと対応するように山背(山城)において宗像族と秦氏の交錯した居住が認められること、また豊前国の大宝二年戸籍において秦部や秦系の勝部と宗形部との族的結合がみられることなどが、その主な根拠である。

ここで研究史を簡単に振り返ると、深溝徳味は、秦氏が山背の葛野に広がった際、既に移住していた宗像族が宗像神を祭っていたとし、大陸と特殊な関係にあった秦氏もこの宗像神を「道主貴」として信奉するようになったと説いた⁽⁴⁾。次いで、この見解を踏襲した井上辰雄は、当時大陸との交渉が最も盛んであったのは倭王武の時代であるとの認識のもと、山背に宗像の神が招請されたのは雄略の頃とした⁽⁵⁾。上記の問題を、宗像・沖ノ島の考古遺物と直接結びつけて論じたのが平野邦雄である。平野は、秦氏の木工・金銅製馬具製作・鍛冶技術が5世紀初め頃に渡来した新羅の技術に由来するとして上で、沖ノ島の馬具を含む新羅系金属製品にも倭国制を含むものがあるとし、そこに新羅系である秦系の技術の影響を想定した⁽⁶⁾。その後、正木喜三郎がこれらの研究を支持した上で、宗像神が新羅と深くかかわってきたことにも注目した⁽⁷⁾。

以後、文献史学においてこの問題は、宗像の神を、大山咋神とともに祭った松尾社をめぐる問題としてより深く議論されるようになる。すなわち大和岩雄は、山背の葛野の秦氏による宗像神奉祭に関し、もともと松尾社の第一摂社である葛野坐月読神社(月読社)の祭祀氏族で宗像社とも関係のある壱岐氏が、欽明・敏達期頃、中央に祭官として出仕した際に、壱岐で祀っていた月神を山背に移すとともに宗像神を松尾山山頂に招請したとし、これが大宝元年(701)の中臣氏の神祇政策に基づいて秦氏の祀るものとなったとした⁽⁸⁾。この説は、「秦氏本系帳」に、「松埜日尾」に降臨した宗像の神を秦都理が大宝元年に松尾へ招請したとあることと、『続日本紀』(以下『続紀』と略す)大宝元年四月丙午条が掲載する、山背国葛野郡月読神・権井神・木嶋神・波都賀志神等の「神稻」を以後中臣氏に給うと命じた勅を関連づけたものである。ただし「秦氏本系帳」は、宗像の神の「松埜日尾」

の降臨を「戊辰年三月三日」と明記する。大和はこれを天智七年(668)にあたるとしながら、その意味については追求していない。従来留意されていた豊前の秦氏と宗像氏の氏族的結びつきもほとんど考慮されていない。

これに対し中村修也は、大和の指摘した大宝元年勅との関連は認めつつも、摂社の奉祭氏族によって本社の祭神が変化するとは考えがたいとし、もともと大山咋神を祀る松尾の秦氏は宗像神の信仰を持つ豊前の秦氏となんらかの関係を持っていたが、大宝元年の中央による地方神社行政への介入策のなかで、松尾において秦都理に宗像神を祀る社殿を新たに建立させ、主神を二つとすることで、松尾の秦氏勢力を二分させたのではないかとした⁽⁹⁾。ただし、松尾の秦氏と豊前の秦氏との関係がいかなるものか、またもともと松尾の秦氏ではなく豊前の秦氏だけが宗像の神を奉祭していたのはなぜかなどについては明確ではない。また「戊辰年三月三日」についてもほとんど言及がない。

一方、これらの研究を批判的に継承した北條勝貴は、松尾において宗像神と大山咋神の祭祀が別々の集団に担われたことを示す史料はないとして中村説を退けるとともに、大和説も大山咋神の存在が考慮されておらず、壱岐氏が月読神社の他に宗像神も招請・奉安した必然性や、秦氏の主体性が不明だと批判した。そして月読社だけでなく、木嶋坐天照御魂神社(木嶋社)にも注目し、両社は玄界灘の海人族が5世紀後半の葛野移動にともない分祀したものとし、松尾社もこれらと関連付けて、秦氏が、渡来経路上の海人族を統率する宗像氏と密接な紐帯を結び、5世紀後半から6世紀頃に葛野へ定着した際、大山咋神を祀る松尾山に沖ノ島の市杵嶋姫命を合祀したとした⁽¹⁰⁾。この説によって、山背の秦氏と宗像神との関係を大宝元年に求める従来説は批判的に捉え直され、深溝以来想定されてきたように古墳時代に遡る可能性があらためて高まった。けれどもここでも、「戊辰年三月三日」の位置づけは明確でない。北條は、これが大宝元年以前に宗像社から山背の秦氏の拠点のある松尾山頂に神が分祠されたことを指しているとし、その年紀は天智七年(668)であろうとしながら、そこに積極的な意味を見出しはしていない。

以上のように、古代における秦氏と宗像神や宗像氏との関係は、山背の秦氏も含め、大宝元年以前に遡りうる

とするのが、現在の有力な見方である。けれども、その史的背景の説明については、依然曖昧な部分が多い。特に、倭国時代に遡って秦氏と宗像氏・宗像の神との関係を認める諸説は、秦氏の渡来ルートや大陸との関係が、沖ノ島を介し朝鮮半島ともつながる宗像氏の性格と重なるとの前提のもとに、秦氏と宗像神・宗像氏との関係を読み解こうとする。けれども、実際にその重なりや、秦氏の「大陸との特殊な関係」を確認できる史料はほとんどない。中村が「秦氏が渡来系氏族であるから、海外交通に長けていたと単純に結びつける説には疑問を感じる」と指摘するのはそのとおりであろう⁽¹¹⁾。しかも対外交渉にかかわる渡来系氏族は少なくないのだから、渡来系の要素に注目するだけでは、渡来系氏族の中でなぜ秦氏のみが宗像の神と結びついたのかという疑問を生じさせることになる。

また、山背の秦氏が宗像神を奉祭する時期についても、大和・中村の大宝元年説以外は、5世紀後半に遡りうるとするが、その根拠は明確でない。そもそも秦氏は、王権が5世紀以前から有力首長層のもとにあった渡来系の人々をも取り込んで編成した複合的な氏族⁽¹²⁾、5世紀後半の渡来者だけで構成されたわけではない。加えて、平野が5世紀初頭から6世紀前半までのものとして注目した沖ノ島出土の馬具は、現在、6世紀中葉から7世紀中葉に収まるとされている⁽¹³⁾。秦氏が、5世紀後半に宗像地域にかかわったことを裏付ける史資料は乏しいのである。

上記の曖昧さは、「秦氏本系帳」が歴史的・時系列的に語った秦氏と宗像神との関係について、その解釈に定まらない部分を残したまま議論が進められていることも影響しているように思われる。特に諸説は、「秦氏本系帳」が宗像神の「松崎日尾」への降臨を「戊辰年三月三日」とすることについて、ほとんど検討を加えていない。けれどもこれは、「秦氏本系帳」が、山背の秦氏と宗像神の関係の出発点とした時点である。「秦氏本系帳」に基づき秦氏と宗像神との関係を論じながら、そこに明記された「戊辰年」の意味を検討せぬまま、これを無視して他の時点を探ることに、方法論的な問題を感じる。したがって以下では、「戊辰年」の年紀を明らかにすることから具体的な分析を始めたいと思う。

2. 宗像の神の山背降臨の年紀について

まず以下に、『本朝月令』が引く「秦氏本系帳」の、秦氏と宗像の神との関係を示す部分を掲げる。なおここで用いる史料は、従来の研究が依拠した群書類従本の『本朝月令』ではなく、清水潔編『新校 本朝月令』とする⁽¹⁴⁾。これは板本群書類従本を底本に、鎌倉時代書写の宮内庁所蔵九条家旧蔵本、建武年間頃抄出書写とされる尊経閣文庫所蔵金沢文庫旧蔵本を副本に、近世の写本も参照して校訂されたものである。本稿が群書類従本ではなく『新校 本朝月令』を用いるのは、同書凡例が指摘するように、刊本で流布する群書類従本に現存古写本のいずれとも異なる字句があるだけでなく、群書類従本の底本の板本群書類従本が底本とした奈佐勝皇本はその親本の存在とともに不詳で、どのような校訂を経て群書類従本となっているかを確認できないからである。

【史料②】『本朝月令』「同日松尾祭事」所引「秦氏本系帳」

秦氏本系帳云。正一位勲一等松尾大神御社者、筑紫智形坐中部大神、戊辰年三月三日、天下坐_二松崎日尾_一。又云_二日尾_一。大寶元年、川邊腹男、秦忌寸都理、自_二日崎岑_一更奉_レ請_二松尾_一。又田口腹女、秦忌寸知麻留女、始立_二御阿禮_一畢。知麻留女之子、秦忌寸都駕布、自_二戊午年_一爲_レ祝、子孫相承、祈_二祭大神_一。自_二其以降、至_二于元慶三年_一、二百卅四年。

以上には、次のようなことが記されている。筑紫の胸形にあった「中部大神」が、戊辰年三月三日に松崎の日尾（日崎岑）に降臨し、大宝元年(701)、川辺腹の秦都理がこの神を松尾へ招請・奉安した。また、田口腹の秦知麻留女が始めて御阿礼を立て、その子の秦都駕布が戊午年より祝となり、これを子孫が継承して大神を祈り祭った。それより以降、元慶三年(879)まで、244年を経過した。

このうち、「筑紫智形坐中部大神」の降臨した「松崎日尾」の場所については諸説あるが、北條勝貴が指摘するように松尾山山頂説をとるのが妥当だろう。松尾社はこの松尾山の麓に鎮座する。

また史料②の「秦氏本系帳」の時期については、『本朝月令』の成立が延長八年(930)から天慶九年(946)の朱雀朝とみられるから⁽¹⁵⁾、それ以前となる。したがってこ

れまでも以下の史料との関連性が注目されてきた。

【史料③】『日本三代実録』元慶五年三月二十六日甲戌条

是日制。令五畿七道諸国諸神社祝部氏人、本系帳三年一進。

これは諸国諸神社の祝部氏人に関する「本系帳」の「三年一進」を定めたもので、内容的にも確かに史料②と矛盾がないようにみえる⁽¹⁶⁾。このため西田長男は、②の「元慶三年」を「元慶五年」の誤写とみる⁽¹⁷⁾。ただし西田も指摘するように、史料③は同日の次の太政官符とも関連する可能性が高い。

【史料④】『類聚三代格』卷一・元慶五年三月二十六日太政官符

応三年一進諸神祝部氏人帳事

右得伊予国解僞。檢案内、太政官去貞観十年九月十四日下当道諸国符僞。貞観八年四月十一日符僞。去年五月廿五日符僞。右大臣宣。諸社祝部、停補白丁、扱八位以上及六十以上堪祭事者、令補之。自今以後立為恒例。但先是置者令終其身者。今諸国所行、專忘本符、偏僞氏人并神戸悉擬補課丁。論之政途、事乖公平。大納言正三位藤原朝臣氏宗宣。雖是氏人并神戸百姓、而先尽八位已上及六十已上堪事者。若無其人、乃擬年少。但至称氏人、無蹠實。仍須神主称宜祝部等氏、毎社令勘申細由、国司覆檢造、帳申送、永備計会上者。国随符旨、六位以上社祝部氏人帳、毎年勘造附朝集使進官。今件帳期限無程、煩頻勘造、尋其勘抛於公無益。望請官裁准郡司譜図、一紀一進以備勘会。謹請官裁者。從二位行大納言兼左近衛大将源朝臣多宣。奉勅、宜三年一進。諸国准此。

元慶五年三月廿六日

この官符は伊予国が毎年作成していた「祝部氏人帳」の煩雑さの改善要求に中央が応えたもので⁽¹⁸⁾、官符の最後には「奉勅、宜三年一進。諸国准此。」とある。この「祝部氏人帳」が③の「本系帳」と関連するものであれば、元慶五年以前、「本系帳」が毎年提出されていたと考えられなくもない。ただ「祝部氏人帳」作成の目的は、祝となって課役を逃れる抜け道を防止するために非課税対象者の祝選任を徹底するためのものであったと

される⁽¹⁹⁾。③の「本系帳」が「祝部氏人帳」と関連するもので、「秦氏本系帳」も③の「本系帳」にあたるかとなると、情報更新がほとんどないこのような由来文書までなぜ毎年、あるいは三年に一度提出させるのかという疑問が生じる。けれども②の主眼が「自戊午年為祝、子孫相承、祈祭大神」にあるとみると、祝選任徹底の政策趣旨とは対応することになる。したがって時期的重なりからみても、「秦氏本系帳」が「祝部氏人帳」の提出と関連して作成された可能性は高いとすべきだろう。あるいは③の「本系帳」のもととなる史料として整理・作成されたものかもしれない。しかし「祝部氏人帳」は④以前は毎年提出されていたのだから、③④によっても「元慶三年」を「元慶五年」の誤写と推断するにはいたらない。

さて、この「秦氏本系帳」の解釈においてまず問題となるのは、「至于元慶三年、二百卅四年」の部分である。群書類従本は、これを「二百三十四年」とし、十年少なく伝えている。この部分は、宗像の神が松崎日尾に降臨した戊辰年、もしくは秦都理がこの神を松尾に奉安した大宝元年、あるいは秦都駕布が祝となった戊午年から起算した年数を述べているようにも読める。従来の研究は、その解釈を群書類従本に基づいて行ってきた。けれども、元慶三年から二三年遡ると大化元年(645)で、乙巳年となり、戊辰年とも大宝元年とも戊午年とも合致しない。このため複数の文字に誤写を想定して「至于元慶五年、一百六十四年」とみなし、戊午年に近い年紀を割り出す説や⁽²⁰⁾、「大寶元年」の「寶」を画数や字形では類似しない「化」の誤写としたりする説などが出されている⁽²¹⁾。しかし清水潔編『新校 本朝月令』が、「三十」を「卅」と校訂し、その頭注において最古写本の九条家旧蔵本や金沢文庫旧蔵本だけでなくその他写本も「卅」とすることを指摘するように、これは「卅」であった可能性が極めて高い。つまり、群書類従本の現存古写本に対する優位性を説明し得ない状況において、群書類従本の「二百三十四年」を前提とした従来の議論は成り立ちがたいと思われるのである。

ところが『新校 本朝月令』頭注がこれに続けて「戊午ノ年ヨリ元慶三年マデ二百四十四年トハ不審」と記すように、実は「卅」でも問題は解決しない。元慶三年から二四四年を遡っても乙未(舒明七年・635)となるから

である。

しかし「秦氏本系帳」が、「戊辰年三月三日」に「筑紫胸形坐中部大神」が「松崎日尾」に天下り、「大宝元年」に川辺腹の秦忌寸都理がこれを松尾に招請したこと、また田口腹の秦忌寸知麻留女が始めて「御阿礼」を立て、その子の秦忌寸都駕布が「戊午年」より「祝」となって、これを子孫が受け継いでいると記したことは、それ以前の何らかの伝承・記録類に基づくものとみなければならない。

ここで問題とすべきは、「大宝元年」と「戊午年」の前後関係である。「本系帳」の話の順序は、切れ目の無い一連の出来事が時系列順に並べられていると理解するならば、「戊辰年」→「大宝元年」→「戊午年」となる。西田はこの考えのもと、「戊辰年」を大宝元年の前で最も近い戊辰年の天智七年(668)、「戊午年」を大宝元年の後で最も近い養老二年(718)にそれぞれ置き、「至于元慶三年、二百三十四年」を「至于元慶五年、一百六十四年」の誤写とした。そうすれば元慶五年の一三四年前は養老元年(丁巳)で、戊午の養老二年に近づくからである。しかしこの説では、五文字の間に三文字もの誤写を想定しなければならず、しかも前述のように群書類従本の「二百三十四年」を前提とした議論だから、従えない。

留意したいのは、「秦氏本系帳」がこの期間の出来事に、干支年と元号年紀を混在させることである。このうち神が松崎日尾に天下った「戊辰年」は、その神を松尾に奉請した「大宝元年」より前であることは確実だから、天智七年(668)以前となる。つまり「戊辰年」は、元号の存在しない時代の年紀表記として用いられたものである。一方、「大宝元年」「元慶三年」は元号のある時代で、それをそのまま表記している。にもかかわらず「戊午年」だけ元号のある時代の年紀表記として用いるのは不自然で、「戊辰年」同様、元号の無い時代の年紀表記の可能性が疑われる。しかも「戊午年」を大宝元年から元慶三年までの間に置くと、養老二年(718)、宝亀九年(778)、承和五年(838)と3回もあり、年紀が特定できない。元号があるにもかかわらず、ここだけ敢えて干支年で曖昧に表記することも不審である。

けれども「大宝元年」から「戊午年」への展開を示唆する史料は他にある。『本朝月令』のすぐ後の天曆三年(949)の「神祇官勘文」(『平安遺文』4905)に、松尾社に

ついて「旧記云、大宝元年秦都理始造_二神殿_一、立_二阿礼_一居_二齋子_一供奉、天平二年預_二大社_一者」とあることである。この「神祇官勘文」は、村上天皇の勅旨を受けて神祇官が回答した文書で、そこに引かれた「旧記」が、後の『年中行事秘抄』や十卷本『色葉字類抄』(『伊呂波字類抄』)の「松尾」の項が掲げる同文の注記のもととなった⁽²²⁾。この「旧記」には、大宝元年に秦都理によって神殿が成立し、御阿礼を立てて「齋子」が置かれるようになり、天平二年(730)には大社に預かったという歴史的経緯が簡略に記されていたように読める。秦都駕布が「祝」となる「戊午年」は、「御阿礼」を立てた後の年紀だから、『本朝月令』と同時代の「神祇官勘文」が引く「旧記」によっても、「戊午年」は「大宝元年」の後の出来事であったようにみえる。

しかしこの「旧記」は、「秦氏本系帳」の内容を解釈する根拠たりえない。「旧記」は、「天平二年預_二大社_一」以外、「秦氏本系帳」の内容を踏み出すものではなく、基本的に「秦氏本系帳」の大幅な要約文とすべきことがすでに指摘されているからである⁽²³⁾。つまり「旧記云」として「大宝元年秦都理始造_二神殿_一」に続けて「立_二阿礼_一居_二齋子_一供奉」と記したのは、「秦氏本系帳」に基づく可能性が極めて高い⁽²⁴⁾。したがってこれに続く「天平二年預_二大社_一」も「秦氏本系帳」の現在は伝わらない部分にみえていた可能性が考えられる。あるいは、この部分が他の史料に基づくものだとしても、「旧記」は神祇官で整理された古伝記録の総称にすぎないから⁽²⁵⁾、その根拠史料が「秦氏本系帳」とともに「旧記云」とされ、それぞれの内容がつけられたとみることもできる。

そこであらためて「秦氏本系帳」に立ち戻るならば、ここでは「中部大神」の「松崎日尾」降臨から川辺腹の秦都理による「松尾」への奉請までの経緯が記された後に、「又」として、田口腹の秦知麻留女が最初に「御阿礼」を立て、その子の都駕布が祝となり、これを子孫が継承する話がつがれている。このうち前者は、「正一位勲一等松尾大神御社者」で始まり、「更奉_二請_二松尾_一」で終わる。これを「旧記」が「秦都理始造_二神殿_一」と要約したように、川辺腹の秦氏による松尾社成立の経緯を記したものである。一方後者は、田口腹の秦氏による祝継承の経緯を記したもので、社殿成立の経緯とは別の話である。つまりこれらは、「又」を挟んで二つの歴史的経

緯に分けられる。したがって、松尾社殿成立の歴史とかかわる「戊辰年三月三日」→「大宝元年」と、秦氏の祝継承の歴史とかかわる「戊午年」は、いったん切り離して理解しても、文章上の矛盾は生じない。

さらに以上のように「又」の前後で話の筋を区切ると、これまで無理な誤写説をとらないかぎり解釈が困難であった「自_レ其以降、至_二于元慶三年_一、二百卅四年」についても、矛盾が解消する。この部分は、「又」の後の、秦氏が祝を伝承する経緯に関する部分に接合し、かつ「祝部氏人帳」ともかかわる秦氏の祝選任の正統性を主張するためのものでもあろうから、ここでの「二百卅四年」は、その歴史的起点からの換算年数でなければならない。ならば祝を継承した秦氏の系譜上の起点は田口腹の秦知麻留女なのだから、「二百卅四年」も秦知麻留女が「始」めて御阿礼を「立」てた時点からの換算とみて十分に意味が通る。また「自_レ其以降、至于元慶三年」の起点「其」をそう解すならば、御阿礼を「始立」と表現した意味も明確となる。その時点は635年(乙未・舒明七年)となるが、「元慶三年」が「元慶五年」の誤写であれば637年(丁酉)となる。いずれにしても、そこから大宝元年までの「戊午年」は658年(斉明四年)しかない。これが知麻留女の子の都賀布が祝となった年紀とみて不自然ではない。

このように考えると「秦氏本系帳」は、まず松尾社の成立に関し、「戊辰年三月三日」に松尾日尾に降臨した「中部大神」を「大宝元年」に松尾に奉請したのが川邊腹の秦氏であると説明した上で、その神に対して舒明の時代に田口腹の秦知麻留女が初めて御阿礼を立て、その子が「戊午年」(658)に「祝」となり、この系譜の秦氏が代々「祝」をついで現在(元慶期)に至ることを語ったものと解釈できる。この場合の「腹」は、『新撰姓氏録』山城国諸蕃上の秦忌寸に「秦氏等一祖子孫、或就_レ居住_一、或依_レ行事_一、別為_レ教腹_一」とあるように、居所や職掌によって複数に分けられる秦氏の系統のことを指すと理解すべきだから⁽²⁶⁾、「秦氏本系帳」は、こうした秦氏各系統の記録・伝承を基礎に作成されたものだろう。つまり「二百卅四年」は、祝を出す田口腹の秦氏の正統性を強調することを意図した記述であったと考えられる。

以上のように理解するならば、「中部大神」の「松崎日尾」降臨の時期として伝わる「戊辰年三月三日」は、

舒明の時代以前に求めなければならない。その最も近い年紀は608年(推古十六年)である。それは『書紀』推古十年(602)十月条が記す、百済僧觀勒が天文地理書や遁甲方術書とともに暦本をもたらし、その技能を倭国の書生が学んだ後で、この時期の倭国中央部では、クラの出納などを干支年で表記し物流を管理する方法も行われるようになっていた⁽²⁷⁾。クラの出納にかかわる職掌伝承も持つ秦氏が(『古語拾遺』など)、神の降臨を干支年によって伝える時期としてもふさわしい。けれどもこれより前の戊辰年は548年の欽明の時代で、『書紀』欽明十五年(554)二月条が記す百済の暦博士の渡来をさらに遡る。

もちろん、原伝承が後世に取り込まれる際に、具体的な年紀が造作されることはありうる。しかし『本朝月令』「四月中西賀茂祭事」が引く「秦氏本系帳」は、加茂の祭日の乗馬に関する由来伝承において、風雨が続くので卜部に占わせたところ賀茂神の祟りであることが示されたとし、その時期を「志貴島宮御宇天皇之御世」(欽明天皇の時代)とだけ記す。これは『書紀』欽明二十八年条の「郡国大水飢」と関連するとみられるが、記事自体は『山城国風土記』からの文とする理解があり⁽²⁸⁾、秦氏の本来の伝承ではなかった可能性がある。しかしそれを組みこむ場合も、原伝をそのまま取り込んだとみられる。

以上のことから、「秦氏本系帳」の天皇代も明示しない干支年だけの年紀表記は、元号を用いる以前の暦の使用状況が反映された伝承・記録類に基づく具体的な年紀で、「戊辰年」は608年(推古十六年)とするのが妥当と考える⁽²⁹⁾。また以後は元慶三年の244年前(635)→「戊午年」(658)→「大宝元年」(701)→「元慶三年」(879)という流れとなる。この間に「戊辰年」「戊午年」に対応する別の年紀が入る余地はない。また「秦氏本系帳」が祝選任の徹底を求める政策の趣旨をふまえたものであるならば、祝としての秦氏の伝統を証明する干支年が、60年のズレを生じさせる曖昧な年紀であるはずはなく、明確な年紀として理解されるべきものだったはずである。

3. 宗像と水沼君と機織

宗像神の松尾山頂への降臨の年紀が、「秦氏本系帳」以前から「戊辰年」、すなわち推古十六年(608)として伝えられていたとすれば、秦氏と宗像の神が結びつく背景

の検討も、まずはこの年紀の意味を捉え直すことから始めなければなるまい。

宗像神に対する信仰は、『延喜式』や六国史によって、山背以外にも下野、尾張、大和、伯耆、備前、安芸、肥前、長門などで受容されていたことが知られる⁽³⁰⁾。このうち、大和と尾張については天武系との関連が想定され、それ以外の西日本のものは海上交通との関連性が想定されている⁽³¹⁾。ただし北條は、宗像氏の東遷で各地に創祀されたとみられる「宗像神社」が基本的に三女神を奉祀しているのに対し、松尾社は「筑紫曾形坐中部大神」の一神のみを奉祭する点に、秦氏の主体性を読み取るべきとする。従うべき見解で、「秦氏本系帳」の「戊辰年」の年紀は、宗像氏東遷の問題と直ちに結びつくものではないだろう。けれども秦氏の場合、前述のように豊前においては宗像氏との氏族的結合がみられる。そこで留意されるのは、史料①が、水沼君等の祀る「海北道中」の「三女神」を、最初に「宇佐嶋」に降臨した神とし、間接的ながら豊前と宗像の神とのつながりを伝えていることである。この史料①は、次の『肥前国風土記』の史料とも関連するものとみられている。

【史料⑤】『肥前国風土記』基肄郡姫社郷条

姫社郷。此郷之中有_レ川。名曰_二山道川_一。其源出_二郡北山_一、南流而会_二御井大川_一。昔者、此川之西有_二荒神_一、行路之人多被_二殺害_一、半凌半殺。于_レ時、卜_二求崇由_一、兆云、「令_二筑前国宗像郡人、珂是古、祭_二吾社_一。若合_レ願者、不_レ起_二荒心_一。」覓_二珂是古_一、令_レ祭_二神社_一。珂是古、即捧_二幡祈禱云、「誠有_レ欲_二吾祀_一者、此幡順_レ風飛往、墮_二願_レ吾之神辺_一。」便即举_二幡_一、順_レ風放遣。于_レ時、其幡飛往、墮_二於御原郡姫社之社_一、更還飛来、落_二此山道川辺_一之。因_レ此、珂是古、自知_二神之在処_一。其夜、夢見_二臥機謂_二久都利_一・絡塚謂_二多々利_一。舞遊出来、壓_二驚珂是古_一。於_レ是亦識_二女神_一。即立_レ社祭之。自_レ爾已来、行_レ路之人、不_レ被_二殺害_一。因曰_二姫社_一、今以為_二郷名_一。

これは肥前国基肄郡の姫社郷の地名の由来に関するもので、水沼君の本拠地の近接地域の話である。

それによると、郷内で交通妨害をする女神が「筑前国宗像郡の人、珂是古をして吾が社を祭らしめよ」と要求したので、珂是古が幡を捧げて祈禱すると、幡は風に乗って御原郡の「姫社之社」に落ち、さらに飛んで山道川の

辺に落ちたので、珂是古は神の所在を知った。また珂是古の夢に臥機(クツビキ)と絡塚(タタリ)が登場し、この神が女神であることを知った。そしてここに社を建て祭り姫社(ヒメコソ)といたので、それが郷名となったという。

以上の社うち、基肄郡姫社郷のヒメコソの社は佐賀県鳥栖市姫方の姫古曾神社付近に、途中で幡の落ちた筑後国御原郡の「姫社之社」は福岡県小郡市大崎の媛社神社に、それぞれ比定されている。

この史料⑤が史料①とも関連すると解して、これらを宗像と結びつけた水沼君の当地における展開の反映と捉えたのが井上辰雄である⁽³²⁾。『書紀』雄略十年九月条には、身狭村主青等が呉から筑紫に帰着した際、彼らのもたらした鵝を、水沼君の犬がかみ殺したため、水沼君はその贖罪として朝廷に養鳥人を奉ったとする伝承がある。井上は、これが『肥前国風土記』養父郡鳥櫛郷条に、「鳥屋」を造り種々の鳥を飼って応神天皇の朝廷に献上したとある伝承とも関連するとして、史料⑤の伝承地域に水沼君の影響が及んでいたことを確認した。さらに史料⑤が宗像と機織の関係として語られることについて、「臥機」や「絡塚」といった大陸系の機具・織物技術との関連が想定されること、『延喜式』神名式下の筑前国宗像郡に宗像神社とともに織幡神社が記されていることにも注目した。そしてこれらを、次の『書紀』の記述と関連づけた。

【史料⑥】『書紀』応神四十一年二月是月条

阿知使主等、自_レ呉至_二筑紫_一。時胸形大神、有_レ乞_二工女等_一、故以_二兄媛_一奉_二於胸形大神_一。是則今在_二筑紫国_一、御使君之祖也。即而率_二其三婦女_一、以至_二津国_一、及_二于武庫_一、而天皇崩之。不_レ及。即献_二于大鷦鷯尊_一。是女人等之後、今呉衣縫・蚊屋衣縫是也。

史料⑥は、東漢氏の祖の阿知使主等が、呉から衣縫の工女四人を連れて筑紫に到った際、そのうちの兄媛を胸形大神の求めに応じて奉り、これが御使君の祖となり、他の三人が呉衣縫・蚊屋衣縫となったとするものである。ここから井上は、これらが5世紀前半の中国南朝との交渉において絹織技術が導入された時代を背景につくられた説話であることや、水沼君が宗像氏を介して機織りなどの大陸文化の輸入に当たっていたことなどを推定した。こうした史的背景のもとに史料①にあるような水

沼君による宗像三女神の奉祭も行われたとしたのである。

史料①⑤⑥を宗像の織幡神社の存在と結びつけて読み解いたのは卓見というべきで、水沼君と宗像や宗像の神が、機織をキーワードに結びついていることは、認めてよいと思われる。

けれども、水沼君と宗像と機織の結びつきを、史料⑥だけに依拠して5世紀前半の南朝(対宋)外交とも関連させて解釈することには疑問がある。史料⑥を「直ちに史実とは見做し難いが」としながら、そこに史料批判をほとんど加えないまま「このような説話が成立する背景には、大陸系の織物技術が5世紀代に輸入され、その織女集団が朝廷の部民とされ、倭漢氏(蚊屋氏)の統率下に入った事や、またその一部が大和の最高神を誇る三輪神社や、大陸交渉ルートの門戸に位置した宗像神に献ぜられた事実があったと考えてよいと思う」と結論付けるからである。また井上説とは別に、水沼君が宗像・宗像神祭祀と結びつく時期を5世紀後半とする説⁽³³⁾、6世紀前半の磐井の乱平定に求める見方⁽³⁴⁾などもあるが、いずれも九州における支配秩序、王権支配の画期がその時期にあるとする理解から導かれた類推で、文献史料・考古資料の裏付けを持たない。

一方、文献史料と考古資料の両面から史料⑥の時代背景を大きく下げたのが井上光貞である。すなわち井上光貞は、沖ノ島出土の7世紀の金属製ミニチュア紡織具と伊勢神宮神宝の紡織具との関連性を、宗像神が女神であることと記紀神話でアマテラス大神が機を織る女神とすることとの関連性から読み解いた。そして『書紀』は「それを証するかのよう」に史料⑥を配しているとして、これらが推古朝前後の「律令的祭祀形態」の発現期の問題とかかわるとしたのである⁽³⁵⁾。「律令的祭祀形態」の発現期を7世紀初頭前後に置く理解は、沖ノ島の遺跡の7世紀前後の変化を説明する視角として、現在も大きな影響力を持つ⁽³⁶⁾。また史料⑤の時期についても、同様に幡と沖ノ島出土の紡織具、幡竿の金銅製竜頭との関連性を指摘して、その時期を探る試みがある⁽³⁷⁾。

けれどもこうした理解に対して笹生衛は、紡織具を含む金銅製模造品の品目自体は沖ノ島以外の祭祀遺跡・遺物においては7世紀以前から認められるとして、7世紀の沖ノ島の金銅製ミニチュア紡織具も「五世紀以来の伝

統」を引き継ぐものと評価すべきこと、織具や琴などの金銅製模造品が加わる令制祭祀を反映した遺物組成は7世紀中頃を画期とするが、史料⑥はこれを遡る「伝統」とかかわるものと位置づける⁽³⁸⁾。しかし、多様な祭祀具の一つとして紡織具が含まれることと、史料⑤⑥のように、そのなかでも機織の要素が殊更強調されることは、同一次元では捉えられないのではなかろうか。いずれにしても、史料⑥(や史料⑤)を沖ノ島の考古資料と結びつけて解釈しようとしても、それがどの段階の反映であるかは、決め手に欠くように思われる。

そこで考古学の評価から一旦離れ、史料⑥が東漢氏や筑紫の御使君の祖の伝承と結びついてみえることに注目してみたい。

御使君は史料⑥以外にみえないが、篠川賢は、全国的に設置された御使部(三使部)の筑紫における地方伴造で、「御使」の名や宗像神に奉られた兄媛を祖と伝えることから、宗像神の祭祀のために王権から派遣された使者を接待する部を管掌していたのではないかとし、また君のカバネを称することから宗像氏と同系のウヂの可能性が高いことを指摘する⁽³⁹⁾。

しかもよく知られているように、史料⑥の類話は『書紀』の雄略紀にも次のようにある。

【史料⑦】『書紀』雄略十四年正月戊寅条

身狭村主青等、共_一吳国使_一、将_一吳所_一献手末才伎、漢織・吳織及衣縫兄媛・弟媛等_一、泊_一於住吉津_一。

【史料⑧】『書紀』雄略十四年三月条

命_一臣連_一迎_一吳使_一。即安_一置_一吳人於陰隈野_一。因名_一吳原_一。以_一衣縫兄媛_一、奉_一大三輪神_一。以_一弟媛_一為_一漢衣縫部_一也。漢織・吳織衣縫、是飛鳥衣縫部・伊勢衣縫之先也。

史料⑦の身狭村主青は東漢氏系で、呉から連れ帰った機織技能者のうち兄媛が大三輪神に奉られるなど、宗像神が大三輪神となる他は、内容が史料⑥とほぼ重なる。またここでは、その伝承が、飛鳥衣縫部・伊勢衣縫の祖先伝承に組み込まれていることもわかる。つまり各氏族の祖先伝承に組み込まれた⑥の応神紀の〈阿知使主(東漢氏)―呉―兄媛―胸形大神〉と⑦⑧の雄略紀の〈身狭村主青(東漢氏)―呉―兄媛―大三輪神〉は、東漢氏の祖が呉に派遣され連れ帰った兄媛を神に献げたとする話を基本とする同型伝承である。こうした応神紀と雄略紀の

工人招聘伝承の類似は他にもみられるもので、これらには雄略紀の人物を応神紀に混入したとみられるものがあり、雄略紀が本来的なものとしてされている⁽⁴⁰⁾。

この渡来工人をめぐる応神紀と雄略紀の類似性のうち、本稿とかかわり特に留意したいのは、「呉」の表記と、その「呉」との外交にあたった人物である。

応神紀の⑥で「呉」の外交にあたった阿知使主は、東漢氏の実質的な祖とされていた雄略時代の都賀使主(東漢直掬)を、さらに後世に加上して古く遡らせた、実在性の強く疑われる伝承上の人物である⁽⁴¹⁾。しかし、雄略紀の⑦で「呉」の外交にあたった身狭村主青は、6世紀に入って成立する姓「身狭村主」が付加されているものの、青といった中国的な名やその活躍伝承は、実際に5世紀に大王に近侍し、「呉」すなわち中国南朝(宋)との外交にかかわった実在の中国系府官層の記憶に基づき、その子孫が6世紀以降東漢氏に包摂されて、このような伝承としてあらわれたと考えられる⁽⁴²⁾。

一方、⑥⑦に共通する「呉」の献じた女性機織技術者を宋からの渡来人とするのは無理で、『書紀』応神十四年二月条に來目衣縫の祖としてみえる百濟渡来の縫衣工女の伝承や、『書紀』雄略七年是歲条所引「或本」のいう百濟渡来の衣縫部の伝承、『古事記』応神段の百濟渡来の呉服の西素の伝承のように、朝鮮半島からの渡来が実態であろう。衣縫の「呉」についても、『播磨国風土記』揖保郡大田里条に「韓国」から紀伊国那草郡に渡来した呉勝がみえるように、加耶の久礼にちなむ「韓国」出身者を意味する可能性が高いことが指摘されている⁽⁴³⁾。史料⑥や⑧は、これら朝鮮半島の「呉」から渡来した機織技術者の系譜を引く人々が王権祭祀ともかかわった実態が踏まえられた伝承とみられる。しかも史料⑧に「以弟媛為漢衣縫部也」とあるように「呉」渡来の機織技術者も、中国系府官層と同様に東漢氏に取り込まれていて、こちらは令制では大蔵省被官の織部司の品部雑戸となる⁽⁴⁴⁾。

以上を踏まえると、史料⑦⑧は、5世紀に中国南朝の「呉」との交渉にかかわった中国系府官層をモデルとした身狭村主青の活躍伝承と、朝鮮半島の「呉」の機織技術者の渡来伝承が、いずれも東漢氏に取り込まれたことによって、「呉」を媒介に接合されたものと理解しうる。一方、身狭村主青が実在性の乏しい阿知使主に置きか

わった史料⑥は、こうして「呉」渡来の機織技術者と結びついた身狭村主青の伝承を、さらに東漢氏の伝承上の祖である阿知使主の活躍の物語に改変し、時代を遡らせたものとみるべきであろう。実際、史料⑥は呉衣縫・蚊屋衣縫の祖先伝承としての側面も持つが、これは東漢氏の管理下にあったものとみられる⁽⁴⁵⁾。つまり御使君の祖先伝承でもある史料⑥の形成には、東漢氏が大きく関与していたとみなされる。その時期は、阿知使主が雄略の時代に置かれる実質的な祖(都賀使主)に加上された人物とみられること、史料⑥も雄略の時代の伝承として形成された史料⑦⑧のさらなる改変とみられることから、雄略の時代(5世紀後半)よりも後の時代、おそらくは6世紀以降としなければなるまい。

ただし宗像地域では、考古学的に5世紀前半に遡る渡来人の痕跡が少なからず確認されている⁽⁴⁶⁾。したがって、「御使君」以前から王権祭祀とかかわる神を祀っていた宗像系集団が、その職掌と関連した、渡来技能者に関する伝承をすでに持っていた可能性はある。これが6世紀以降に東漢氏の祖先伝承と結びつく背景となったことは考えられてよいだろう。

けれども、これを御使君の立場から捉えるならば、そうした5世紀に遡りうる伝承が仮にあったとしても、その内容が史料⑥のように宗像の神と機織工人との関係を示すものであったとは考え難い。史料⑧の三輪大神にまつわる話は、飛鳥衣縫部・伊勢衣縫の職掌と直接結びつく。しかしこの⑧と内容の類似する史料⑥は、東漢氏系の呉衣縫・蚊屋衣縫の職掌とは結びついて、御使君の「御使」の職掌と直接結びつく内容を取り出せない。御使君にとってこの伝承は、胸形大神と機織との関係に自身の祖がかかわっていたことを示すものでしかないのである。それが御使君のもともとの5世紀の姿に通ずるものであったならば、彼らが三輪大神をめぐる伝承をほぼそのまま借りて、宗像の神と機織の関係を説明する必要など無かったであろう。

この東漢氏とかかわる問題は、水沼君にも及ぶ。呉に派遣された身狭村主青にかかわる話は、前述のように、水沼君の養鳥人伝承とも結びついているからである。井上辰雄は、天平十年度筑後国正税帳や周防国正税帳に筑後国の鷹養人と調練した鷹や犬が大宰府を介して兵部省に送られていることに注目し、水沼君の養鳥人・鳥取部

を介した中央との関係が、令制の兵部省被官の主鷹司にも引き継がれていると推測している⁽⁴⁷⁾。この主鷹司の品部の鷹甘部は『書紀』仁徳四十三年九月庚子朔条に百済王族の酒君とかかわる伝承としてみえ、東漢氏系の可能性も示唆されているが⁽⁴⁸⁾、それを裏付ける明確な史料はない。けれども『日本後紀』弘仁二年(811)五月丙辰条の坂上田村麻呂薨伝に「家世尚武、調鷹相馬。子孫伝業、相次不絶。」とあるのは、このこととも関連しよう。少なくとも水沼君の養鳥人伝承は、「身狭村主青等」が呉からもたらした鵜とかかわる伝承としてあるのだから、水沼君にも東漢氏と結びつく背景があったと考えべきである。

すなわち、これまでみた水沼君や宗像の伝承には、6世紀以降のある段階の、筑紫における東漢氏の展開の影響を考えねばならないのである。

4. 信仰の共有・複合と筑紫駐留軍

一方、史料⑥との関連性が指摘される史料⑤に関して、これがヒメコソの社に対するものであることに注目すると、古代史料には他にもヒメコソの社に関する伝承が存在する。すなわち、難波の比売碁曾社のものとして、『古事記』応神段に新羅国王子のアメノヒボコ(天之日矛)から逃れて渡来する妻の話がある。またこの難波の比売碁曾社と、豊後国国前郡の比売語曾社に関するものとして、『書紀』垂仁二年是歳条が引く「一云」に加羅国王子のツヌガアラシト(都怒我阿羅斯等)から逃れる妻の話や、『万葉集註釈』巻第二が引く『撰津国風土記』逸文に応神天皇の時代に夫から逃れて新羅から渡来した女神の話がある。これらのヒメコソの神の伝承や神社を詳細に検討した瀧川政次郎は、難波(撰津)のヒメコソの社は撰津国東生郡の比売許曾神社に、豊国のヒメコソの社は豊後国国前郡の姫島の比売許曾神社に、それぞれあたるとした。また、他にも『延喜式』神名式上の撰津国住吉郡赤売比売神社がその神名などからヒメコソの社と考えられること、筑前国怡土郡の高祖神社がヒメコソのコソに基づくものと考えられること、『豊前国風土記』逸文の新羅から渡来したという田河郡の鹿原(香春)神もヒメコソの神であるとして、これらを西からつないだ線が、「近畿の帰化人が博多湾の糸島水道に上陸して

から、近畿の各地に移っていった行程を示すものではないか」とした⁽⁴⁹⁾。

ところが瀧川は、『肥前国風土記』のヒメコソの社については触れていない。史料⑤には、他のヒメコソ伝承のような渡来の女神の話がみえないからだろう。今井啓一も、伊予の大三島の和多志大神を加えて、これら神社の分布に「帰化人来化」のルートが反映されているとの見解を示すが、史料⑤については留意しながらも、「但し渡来神としては語られていない」として、これを積極的に評価することを避けている⁽⁵⁰⁾。一方、松前健は、史料⑤が宗像の織幡神社の系統だとすると、応神紀の史料⑥とも関連し、この女神にももとは渡来伝承があったであろうとする⁽⁵¹⁾。松前は井上辰雄の説に触れないが、井上説を踏まえれば松前のような解釈も成り立つだろう。しかし、前述のように史料⑥の扱いは注意を要する。

むしろこの点に関して注目されるのは、三品彰英が、付記の形でごく簡単にではあるが、史料⑤を宇佐の八幡神との関係から捉えて、渡来信仰の影響を指摘したことだろう⁽⁵²⁾。三品は、宇佐の八幡神奉祭では、大神氏とともに渡来系の辛嶋勝氏が重要な役割を果たしたことなどに着目し、八幡信仰にも渡来の要素が認められるとする。また、史料⑤の交通妨害を鎮める話は宇佐の八幡縁起にも同類型のものがあり、幡が空中を飛来し神の来臨を啓示することも八幡伝説的であるにもかかわらず、史料⑤が八幡神ではなくヒメコソの神として語られるところに、渡来系の要素を残した八幡化以前の姿を見出した。ヒメコソの「コソ」が「在ます」に語源する朝鮮語の敬称であることも三品の指摘がある⁽⁵³⁾。史料①には三女神が「海北道中」に鎮座する前に「宇佐嶋」に降り立ったとあるように、水沼君の宗像の神に関する信仰は宇佐とも結びついていたとみられるから、この三品の指摘は軽視できない。

宇佐八幡宮の成立について詳細な検討を行った遠日出版によれば、豊前では5世紀初頭前後に香春に定着した「新羅国神」を祭る秦系を中心とした新羅出身の渡来集団が、さらに東進し、5世紀末には秦系の辛嶋氏が「宇佐郡辛国」を形成して、「新羅国神」を奉祭するようになった。次いで、大和で大三輪神を奉祭していた三輪君につらなる大神氏が6世紀後半に宇佐に入り、応神霊を辛嶋氏の奉祀する神に付与して、新たに八幡神が誕生す

る⁽⁵⁴⁾。ここで遠が大神氏(三輪君)の宇佐進出を6世紀後半としたのは、宇佐で最初に八幡神を祀り、和銅五年(712)に社殿が建立されたとみられる鷹居社に関し、『宇佐八幡宮弥勒寺建立縁起』(以下『建立縁起』と略す)の一部に一定の史実を認めるからである。そこでは、宇佐の馬城嶺に顕示した大御神が酒井泉社(泉社)、宇佐河渡有社(瀬社)の地へ移り、さらに鷹居社に移ったとし、次のように記している。

【史料⑨】『建立縁起』(『大日本古文書』家わけ第四一四〇三)

從_レ彼鷹居社移坐。爾時大御神於_レ其處_レ化_レ成鷹_レ御心荒畏坐、五人行三人殺二人生、十人行五人殺五人生給。爰辛嶋勝乙日、倉橋宮御宇天皇御世、自_レ庚戌_レ迄_レ壬子_レ并三歳之間、祈祷和_レ大御神心命_レ、立_レ宮柱_レ奉_レ齋敬_レ。因以名_レ鷹居社_レ。辛嶋勝乙日即為_レ其祝_レ焉、同時以_レ辛嶋勝意布壳_レ為_レ禰宜_レ也。

なお、『建立縁起』は承和十一年(844)六月十一日の日付を持つが、平野博之は、実際は辛嶋氏によって寛平元年(889)から寛弘六年(1009)の間に作成されたものと推定する⁽⁵⁵⁾。いずれにしても、宇佐の八幡信仰の縁起としては、平安中期以前に遡る最古のものに属する。しかも史料⑨は「弘仁五年二月廿三日符詞」という注記のある部分で、これに基づく辛嶋氏の伝承・記録に基づくものとみられる。それによれば、鷹居社の地に移った大御神は、鷹に化身し交通妨害をする神となり、倉橋宮御宇天皇(崇峻天皇)の時代に、辛嶋勝乙日がこれを鷹居に創祀したとする。この交通妨害をする神の話は鎌倉期の『八幡宇佐宮御託宣集』(以下『託宣集』)巻五では辛嶋勝だけでなく大神比義が祀るものとしても別の形で取り込まれている。三品の指摘するように、この神が、『肥前国風土記』のヒメコソの神とも共通する「半凌半殺」の型を以てもともと信仰されていたことは確かである。

遠は、この大神比義が他の伝承史料にも様々に登場し、6世紀末から7世紀前半に宇佐で活躍した人物とみられること⁽⁵⁶⁾、そしてそれが史料⑨で崇峻天皇の時代に鷹居を創祀したとすることとも対応することに、鷹居社創祀の一定の史実が反映されているとした。さらに『託宣集』巻五が、敏達天皇の時代から靈験はあっても社殿が無かったと伝えることにも注目し、大神氏が宇佐の地に入り八幡神を馬城嶺に顕現させたのは敏達朝(572～

585)のある時期としたのである⁽⁵⁷⁾。

以上のうち、鷹居社の創祀を6世紀末から7世紀前半の大神比義の活動期から捉え、史料⑨に一定の史実を認める議論は従いうる。けれども、大神比義以前の宇佐での大神氏の活動は明確でなく、鎌倉期の『託宣集』の伝承に依拠して八幡信仰の起源をさらに敏達朝まで遡らせることには疑問が残る。

一方、これと全く別の角度から、三輪君の宇佐を含む西海道への進出を7世紀初頭に置くのが新川登亀男である⁽⁵⁸⁾。新川がまず注目したのは、『書紀』に次のようにあることである。

【史料⑩】『書紀』推古十年二月己酉朔条

来目皇子為_レ擊新羅將軍_レ、授_レ諸神部及国造・伴造等、并軍衆二万五千人。

【史料⑪】『書紀』推古十年四月甲申朔条

將軍来目皇子、到_レ于筑紫_レ。乃進屯_レ嶋郡_レ、而聚_レ船舶_レ運_レ軍糧_レ。

これによって、推古十年(602)に撃新羅將軍の来目皇子が「諸神部及国造・伴造等、并軍衆二万五千人」を率いて筑前国の嶋郡に駐留したことが判明するが、新川は、大宝二年の筑前国嶋郡川辺里戸籍に大神部が目立ち、これが来目皇子の率いた「神部」とも関連するとみられること、また筑前国夜須郡に式内社の於保奈牟智神社が存在することなどから、7世紀初頭に来目皇子に従う三輪君とその神部が、豊前―筑前国夜須郡―嶋郡のルートで進出し、その途次の宇佐において「宇佐の地主の神」の比売神と接して、新たに八幡神が生み出されたとした。これは、遠の注目した大神比義の宇佐での活動時期とも一致し、三輪君の西海道進出の背景に古代史料から直接的な根拠を与えうるものと評価しうる。『日本書紀』神功撰政前紀仲哀九年九月条や『筑前国風土記』逸文(『积日本紀』巻十一)が、筑前於保奈牟智神社(大三輪社)の成立を、神功皇后の新羅征討伝承と結びつけるのは、本社と征新羅との関係を神功伝承に結びつけて古く遡らせたものだろう。

ただし、来目皇子の筑紫駐留は推古期のことだから、史料⑨が鷹居社創祀を崇峻天皇の時代とすることはズレが生じる。ここで注目されるのは、『書紀』の崇峻紀に次のようにあることである。

【史料⑫】『書紀』崇峻四年十一月壬午条

差紀男麻呂宿禰・巨勢猿巨・大伴嚙連・葛城烏奈良臣、為大將軍。率氏々臣連、為裨將部隊、領二万余軍、出居筑紫。遣吉士金於新羅、遣吉士木蓮子於任那、問任那事。

これは、筑紫に大軍を駐留させて、「任那事」を問いたず使者を新羅に派遣したとするもので、新羅からの「任那の調」の進上方式をめぐる倭国と新羅の交渉において、倭国が圧力を強めたことを示す史料である⁽⁵⁹⁾。『書紀』によれば、この軍は推古三年(595)まで筑紫に駐留し続けた(同七月条)。すなわち倭王権は、来目皇子の少し前にも崇峻四年(591)からの四年間、それとほぼ同規模の軍を筑紫に駐留させたのである。推古期に筑紫に駐留した「軍衆二万五千人」に三輪君が神部とともに従っていたとすれば、史料⑫の崇峻期の「二万余軍」においても同様のことが想定されてよい。史料⑨が鷹居社創祀を崇峻期に置くのは、むしろこちらとの関係を考えた方がよいように思われる。

以上の、6世紀末から7世紀初頭の軍隊駐留が宇佐の信仰に与えた影響は、宗像の神に関する史料⑥の問題を考える上でも重要であろう。前述のように、史料⑥は東漢氏系の三輪大神にまつわる伝承の影響を受けているとみられるが、この三輪大神を祀った勢力こそ、宇佐に八幡神の信仰を生み出して玄界灘沿岸部にも進出した三輪君だからである。しかも軽視できないのは、『肥前国風土記』に来目皇子の九州への進軍に関して、東漢氏とかかわる次の話もあることである。

【史料⑬】『肥前国風土記』三根郡漢部郷条

漢部郷。在_北郡昔者、来目皇子、為征伐新羅、勒忍海漢人、将来居此村、令造兵器。因曰漢部郷。

この忍海漢人は、令制では造兵司の雑戸にも組みこまれた東漢氏系の技術民である⁽⁶⁰⁾。すなわち、来目皇子は、三輪君とかかわる神部だけでなく、東漢氏系の武器・武器製作技術者も率いて筑紫に入っていた。したがって三輪君と同様、これが崇峻期の軍駐留時にもあった可能性は考えられる。いずれにしても、筑紫に大軍が駐留した6世紀末から7世紀初頭には、宗像の神を奉祭する宗像勢力が、東漢氏・大三輪神と機織技術者をめぐる伝承に触れ、またこれと結びつく可能性の高い時期として、極め

て有力な時点となりうる。それは、井上光貞が推古朝前後を「律令的祭祀形態」の発現期としたことと、時期的には一致することになる。

上記のことは、水沼君をめぐる問題にも影響する。宗像や機織との関係を強調する史料⑤の女神には史料⑥との関係が指摘されてきたが、史料⑥が7世紀初頭前後に整えられた姿としてあるならば、史料⑤の女神の宗像と機織との関係も、それを大きく遡らせることが難しくなるからである。しかも水沼君の養鳥人伝承も東漢氏との関係が想定しうることは先にみたが、鳥を貢上する「鳥屋」が置かれた肥前国養父郡は、まさに7世紀初頭に東漢氏系技術者がやってきた漢部郷のある三根郡に接する。すなわち肥前国では、筑後川中流域から下流域の北岸地域の官道に沿うように、其肄郡姫社郷、養父郡鳥櫛郷、三根郡漢部郷が並んでいる。雄略紀の水沼君の養鳥人の献上が5世紀の養鳥人の上番にかかわる史実を踏まえたものであっても⁽⁶¹⁾、その話が東漢氏の伝承と結びつく時期は、7世紀初頭であったと考えられるのである。

一方、水沼君と宇佐との関係については、「姫社之社」の所在した筑前国御原郡に関し、当郡に位置する福岡県小郡市井上薬師堂遺跡において「丙家搗米宅津十丙ア里人大津夜津評人」と記した1号木簡が出土し、7世紀段階は於保奈牟智神社のあった夜須評(郡)と一体的な関係にあったことが判明したことが重要である⁽⁶²⁾。つまり、6世紀末から7世紀初頭、宇佐から西海道に進出した三輪君の影響は、「姫社之社」の周囲にも確実に及んでいた。

この点を踏まえれば、井上辰雄が、『先代旧事本紀』天孫本紀で物部阿遲古連公を「水間君等祖」とすることや、養鳥人・鳥取部と物部氏との関連性に注目して指摘した、水沼君と物部氏との結びつきにも⁽⁶³⁾、以上の問題がかかわる可能性が高い。『肥前国風土記』三根郡条は、漢部郷に続けて、物部郷も来目皇子の引き連れた物部若宮部が物部経津主之神を祀る社を立てたことを郷名の由来とする。物部氏に属し物部氏の奉祭する神を祀って社を置いた若宮部は、史料⑩の「諸神部」に含まれるのであろうから、ここからは、来目皇子の「諸神部」を引き連れた筑紫(九州)進出が、以後の地域の祭祀や社の展開に大きなインパクトを与えていたことが知られる。しかもその範囲は、来目皇子の駐留した玄界灘海域だけでな

く、『肥前国風土記』が伝える東漢氏系、物部系諸部の配置からみて、筑後川水系にまで及んでいたとしなければならない。これは有明海海域を意識したものであろう。水沼君の養鳥人・鳥取部を介した物部氏との関係自体は、井上辰雄の説くように6世紀以前に遡りうるとしても、筑後川中流域を本拠とし、東漢氏系の伝承と結びつき、しかも物部系を称した水沼君が、漢部郷・物部郷の存在の影響を受けていないはずはないのである。

以上のように捉えるならば、『本朝月令』が引く史料②の「秦氏本系帳」が、宗像の神の松尾山降臨を「戊辰年」、すなわちこれらと時期の重なる推古十六年(608)の年紀として伝えることにも、重要な歴史的意味があるとしなければなるまい。6世紀末から7世紀初頭、新羅を牽制する大軍が神部や渡来系技術者をとめない筑紫に駐留したことを契機に、中央と宇佐・筑後平野・宗像をつなぐ諸関係は強化され、信仰の共有・複合も進行したことは間違いない。そして、豊前では秦氏と宗像氏の民族的結合がみられることも前述のとおりで、宇佐の八幡信仰を担った辛嶋勝も秦系とみられる⁽⁶⁴⁾。ならば、推古十六年に宗像の神を山背の秦氏の拠点に降臨させたとする史料②には、上記の諸関係のなかで山背の秦氏も宇佐を介して一定の役割を果たしていたことが反映されていると考えるのが妥当であろう。山背の秦氏が宗像神とつながる起点を「戊辰年」に置く「秦氏本系帳」は、来目皇子の時期に王権と筑紫の関係が新たな段階に至ったことを示す史料としても評価しうるものなのである。

そうすると、この二年後の推古十八年(610)に、秦河勝が対新羅外交で活躍することも、上記のことと無関係とは思われない。『書紀』によれば、同二年七月、新羅使人が任那使人とともに筑紫に到着し、九月、入京が許された。この新羅使に関し、同年十月丁酉条は、秦造河勝と土部(土師)連菟を、小墾田宮の朝廷に使人を導く「導者」としたとある。ここで、それまでの経緯を『書紀』から少したどってみると、推古十一年(603)二月、嶋郡に駐留していた来目皇子が、筑紫で没してしまう(丙子条)。同年四月、来目皇子の兄の當摩皇子が征新羅將軍として筑紫に派遣されることになったが(壬辰朔条)、七月に皇子が播磨に到った際、随伴の妻が亡くなり、皇子は大和に戻って新羅攻撃計画自体が頓挫してしまう(丙午条)。しかし計画が停止しても、新羅を取り巻く国際

環境は悪化傾向にあり、このため新羅は、推古十八年に「任那使」をともなう使者を派遣して、倭王権との外交関係の回復をはかっているとみられている⁽⁶⁵⁾。要するに推古十八年の新羅使人・任那使人の来倭は、撃新羅將軍来目皇子の派遣に始まる倭国と新羅の対立関係の延長線上に位置づけられる。そこにおいて、新羅使人の「導者」に、山背を拠点とし、かつ来目や當摩の兄弟である厩戸皇子に仕える秦河勝が選ばれたことは⁽⁶⁶⁾、上記の一連の倭王権の対新羅政策に、山背の秦氏の関与があったことを背景としたものだろう。この点において、筑紫で没した来目皇子の殯を掌ったのが、河勝とともに新羅使人の「導者」となった土部連菟と同じ土師連出身の猪手であったことは示唆的である⁽⁶⁷⁾。

5. 豊前の秦氏と「筑紫曾形坐中部大神」

ただし、三輪君進出以前の宇佐では秦系の辛嶋勝が信仰の中心を担っていたのだから、秦氏の豊前への進出自体は6世紀末をさらに遡る。前述のように達は、「新羅国神」を祭る秦系を中心とした新羅出身の渡来集団が5世紀初頭前後に香春に定着し、それが東進して、5世紀末には「宇佐郡辛国」の秦系の辛嶋氏となったとした。この「新羅国神」は、『託宣集』が引く『豊前国風土記』逸文に次のように登場する神のことである。

【史料⑭】『豊前国風土記』逸文田河郡鹿春郷条

昔者、新羅国神、自度到来、住_レ此河原_一。便即、名曰_レ鹿春神_一。又、郷北有_レ峯。頂有_レ沼。周地六歩許。黄楊樹生、兼、有_レ龍骨_一。第二峯有_レ銅并黄楊龍骨等_一。第三峯有_レ龍骨_一。

ここには香春岳の産銅のことも記されているが、「新羅国神」は豊前の秦氏が奉祭する産銅神で、香春岳山麓におかれた「採銅所」にも秦系集団がかかわったことは平野邦雄の研究がある⁽⁶⁸⁾。この神は『延喜式』神名式に同郡の辛国息長大姫大目命神社、『日本三代実録』貞観七年二月二十七条に辛国息長比咩神とあるように女性神であった。

ならばここであらためて、辛嶋勝の信仰地宇佐に近接する国東の姫島にも、新羅渡来の姫神がヒメコソの神として祀られていたこと、辛嶋勝の信仰する神には『肥前国風土記』のヒメコソの神と同様の「半凌半殺」の型が

ともなっていたことを想起すべきである。前述のようにヒメコソの「コソ」は「在ます」に語源する朝鮮語の敬称とみられるが⁽⁶⁹⁾、水沼君の「三女神」信仰の宇佐とのつながりを踏まえても、筑後平野のヒメコソの神の信仰には、宇佐地域における秦系の渡来の姫神への信仰との関係を認めるべきだろう。したがって三品が指摘したように、八幡神としてはみえない『肥前国風土記』のヒメコソの神は、八幡化する前の宇佐の信仰との関係の反映と理解すべきものであって、史料①や史料⑤の信仰を介して浮かび上がる筑後平野と宇佐のつながり自体は、三輪君の宇佐進出以前のものとしなければならない。すなわち、6世紀末から7世紀初頭の倭軍の筑紫駐留が中央と宇佐・筑後平野・宗像をつなぐ諸関係を強化したといっても、その関係には6世紀末を遡る前史があるとしなければならないのである。

けれども、達がこの「新羅国神」を奉祭する秦系集団の渡来を5世紀初頭前後においたのは「その後の渡来人の動向や八幡神の成立過程から考えて」という程度で⁽⁷⁰⁾、特に明確な根拠があるわけではない。ただし考古学を参照するならば、豊前への渡来人の移住は確かに5世紀前半に遡りそうである⁽⁷¹⁾。しかし前述のように、中央の山背の秦氏ですらその出発点は5世紀後半以降とすべきで、豊前の秦氏も、もともと渡来人の移住があった地域に、後から秦氏の影響が及んで再編されたものとしなければならない。

この問題に関しては、1950年代の井上辰雄や平野邦雄の研究に重要な指摘がある。大宝二年の豊前国戸籍に秦部や秦系の「某勝」が多いことに注目した井上は、『書紀』雄略十五年条に「詔聚_一秦民_一、賜_一於秦酒公_一。々仍領_一率百八十種勝_一、奉_一獻庸調絹縑_一、充_一積朝廷_一」とあることや、記紀などで秦氏とミヤケ（屯倉）との関連性が確認できること、さらに『書紀』安閑二年五月甲寅条で豊前に勝碕・桑原・肝等・大抜・我鹿の五ヶ所のミヤケを置いたとあることなどから、豊前に5世紀後半頃に秦氏の部民が設定され、この地に置かれたミヤケを拠点に彼らによる豊前平野の開発が行われたとした⁽⁷²⁾。次いで、この説を基本的に支持した平野も、豊前でミヤケの設置と管理に秦氏が関与し、その開発に秦部の技術と労働力が用いられたとし、5世紀末頃までには官司制的組織による支配が豊前にも及んだとした⁽⁷³⁾。部民やミヤ

ケの設置を5世紀後半とみるのは、5世紀以前に部民や「前期的ミヤケ」が全国展開したとする井上辰雄の理解を前提とするが⁽⁷⁴⁾、『書紀』自体が豊国のミヤケ設置を6世紀半ばの安閑期と伝えていることからみても、現在の研究では、それを大きく遡らせる井上辰雄の年代観をそのまま認めることはできない。けれども秦氏の豊前進出が、当地のミヤケ制の展開とかかわるとする井上や平野の説は認められるべきで、ミヤケの位置と秦氏の分布をあらためて確認しつつこれらの説を踏襲し、秦系集団が豊前のミヤケにおいて農業経営だけでなく銅生産にもかかわったとして、その時期を6～7世紀とした加藤謙吉の説を妥当とすべきだろう⁽⁷⁵⁾。より具体的には、安閑紀の豊前を含む各地へのミヤケの設定は磐井の乱後に展開したとされること⁽⁷⁶⁾、また辛嶋勝が三輪君の宇佐進出以前に当地の祭祀の中心を担っていたとみられることから、6世紀半ばから後半のある段階とするのがよい。

しかし以上の検討によっても、豊前の秦氏と宗像氏との氏族的紐帯がいつどのようにして形成されたかは明らかとし得ない。ただしこれについても、少なくとも秦氏が山背に宗像神を招請する前、すなわち7世紀初頭より前とすることはできるだろう。山背の秦氏が宗像の神と結びつく前提には、宗像氏とも氏族的紐帯を築いた豊前の秦氏の存在があったとみられるからである。また、豊前の宗像との関係については、宇佐・宗像と信仰上の関係を築いた水沼君のような筑後平野勢力の関与を疑う余地もあるが、豊前における宗像の影響は、水沼君の場合のように宗像の神への信仰としてではなく、宗像氏の存在として確認されるという違いが無視できない。瀬戸内海地域に展開する宗像神社が宗像氏の東遷とかかわるものだとするならば、豊前と宗像の関係も、むしろ瀬戸内海と響灘をつなぐ海上交通の問題として理解すべき可能性が浮かびあがる。

築後の水沼君と山背の秦氏それぞれの、宗像の神とのつながりを、同時・同一的な展開として重ねて理解できないのは、両者の宗像の神に対する信仰の在り方の違いからも明らかである。史料①にあるように、水沼君が「道主貴」として奉祭していた宗像の神は、「今在海北道中」とする「三女神」である。「三女神」は沖ノ島の沖津宮、大島の中津宮、宗像市田島の辺津宮にそれぞれあるのだから、「在海北道中」とは沖ノ島だけを指すのではなく、

辺津宮から沖津宮へ至る、いわゆる沖ノ島ルートを目指す。そして「海北」は、筑紫を起点とする朝鮮半島を意識した方位観であるから⁽⁷⁷⁾、「海北道中」とは朝鮮半島へ至るルート上という意味である。けれども史料②によれば、山背の秦氏が結びついた宗像の神は「三女神」の全てではない。その中の一神「筑紫胷形坐中部大神」に限定されている。一般に、この神は中津宮の市杵島姫命とされている。

しかし北條が指摘するように、「中部大神」を中津宮の市杵嶋姫命とするのは『先代旧事本紀』地神本紀の「次市杵嶋姫命、亦名佐依姫命、亦云_二中津嶋姫命_一、坐_二宗像中津宮_一」とあることに基づくものと思われ、「秦氏本系帳」も同様の認識だったかどうかは分からない。沖津宮、中津宮、辺津宮の三宮それぞれ配した三女神は、史料や時期によって異同があるからである。この点に検討を加えた北條は、9世紀までは『書紀』本文の配列が、その後は『古事記』や『先代旧事本紀』の配列が優勢とし、元慶以前の「秦氏本系帳」の「中部大神」は『書紀』本文に基づき中津宮の湍津姫命を指す可能性があるとしつつも、「島嶼を経由して航海の安全を祈願して回った渡来人や海人族」にとっては、潮流の激しい対馬暖流を神格化した湍津姫よりも、島嶼祭祀の象徴である沖ノ島を神格化した市杵嶋姫命の方が身近で重要な存在のはずで、本来は湍津姫命より市杵嶋姫命の方がふさわしいとする。このことから、秦氏の信仰はもともと市杵嶋姫命を指す「沖部(都)大神」であったとみて、これが単に「沖」のさんずいが脱落したか、「秦氏本系帳」の提出時に『古事記』や『先代旧事本紀』が市杵嶋姫命を中津宮にあるとすることに基づき、「中部大神」と書き改めたかの、どちらかだと結論付けた。

けれどもこの説は、「島嶼を経由して航海の安全を祈願して回った渡来人」との前提で秦氏を性格づける史料の根拠が弱く、そこからさらに彼らの祀った神を三女神のなかでも沖ノ島の市杵嶋姫命がふさわしいと解するのは恣意的であろう。「沖」字のさんずいが脱落した可能性も低いと考える。古代史料で「沖」に該当する表記は「瀛津」(『書紀』『先代旧事本紀』)、「遠瀛」(『書紀』)、「奥津」(『書紀』『古事記』『先代旧事本紀』『西海道風土記』逸文)などで、もともと「沖」字を用いないからである。「沖」の字も用いられるようになるのは近世頃であったようで

ある⁽⁷⁸⁾。しかし「中部」は『古事記』『先代旧事本紀』『西海道風土記』逸文に「中津」とみえる他、「中瀛」(『書紀』)、「中嶋」(『先代旧事本紀』)などの表記もある。秦氏が松尾社で信仰した神が沖ノ島の神でなければならぬ理由、「中部大神」であることを疑うべき理由、根拠が見当たらない以上、山背の秦氏の信仰は「中部」(中都)、すなわち大島の姫神への信仰とみるべきである。

ここで留意されるのは、史料⑩に、来目皇子が嶋郡に駐留すると、船舶を集めて軍糧を運んだとあることである。この布陣は、『魏志』倭人伝で朝鮮半島から対馬・壱岐を経由し唐津湾から伊都国に入った帯方郡の使者のルートと逆で、壱岐・対馬ルートを意識したものである。要するに、沖ノ島を経由するルートではない。けれども、糸島に船を集め軍糧を運ばせたとあることは、大島海域とは直接関係する問題となる。『書紀』仲哀八年正月壬午条や『新日本紀』卷十所引『筑前国風土記』逸文怡土郡条に、伊観(怡土)県主の祖が、筑紫を訪れる仲哀天皇を船で穴門の引嶋に迎えたとあるように、瀬戸内海・響灘から糸島に向かう船は、必ず大島の南方海域を通過せねばならないからである。このルートは、6世紀前半に磐井により進行が阻止された倭の水軍の用いたルートであり、磐井の乱後に対外交渉の拠点として博多湾に設定された那津官家に河内の茨田郡屯倉から稲穀を運び込んだ船のルートでもある⁽⁷⁹⁾。しかも、その那津官家への稲穀運搬を伝える史料には別に次のようにある。

【史料⑮】『書紀』宣化元年五月辛丑朔条

又其筑紫・肥・豊、三国屯倉、散在_二縣隔_一。運輸阻。儻如須要、難_二以備_一率。亦宜_二課_一諸郡_一分移、聚_二建那津之口_一、以備_二非常_一、永為_二民命_一。

これは、筑紫・肥・豊の三国に分散するミヤケの物資を、一部割き分けて那津官家に集めることにしたと読める。したがって笹川進二郎が、本史料を以て、九州各地のミヤケの交通形態が那津への求心力を強め、那津官家の統監のもとに北部九州諸地域勢力の独自の対外交渉機能も王権の統括下に置かれるようになったとし、来目皇子の嶋郡での船舶・軍糧の集積でも那津官家への地域勢力の奉仕形態を基盤としたであろうと指摘したことは⁽⁸⁰⁾、正しいとすべきである。つまり、豊前のミヤケの経営にかかわる秦氏は、来目皇子以前から、那津官家への物資運搬も担っていたとみなければならないし、来目皇子の

時も、その役割を果たしていたと考えられる。この点において、大宝二年の筑前国嶋郡川辺里戸籍に秦部の存在が確認できること、さらには豊前同様、宗形部の存在も確認できることは注目される。

そこで前述の安閑紀にある豊国の五つのミヤケをみると、桑原屯倉は現福岡県田川郡大任町今任原に、我鹿屯倉については同郡赤村に、大抜屯倉については小倉南区貫に求められそうだから⁽⁸¹⁾、関門海峡に近い沿岸部にある大抜屯倉の物資は、海上から博多湾側へ運ばれたと推定できる。また桑原屯倉と我鹿屯倉も遠賀川上流域にあるから、その物資は遠賀川を利用して那津官家へ運ばれていたであろう。この河口部は宗像勢力の拠点と接している。そしていずれも、那津官家との往還において鐘崎、神湊と大島、地島、勝島に囲まれた海域を通過しなければならない。しかも『万葉集』巻七の1230に「ちはやぶる金の岬を過ぎぬともわれは忘れじ志賀の皇神」とあるように、響灘と玄界灘を往来する古代船にとって、鐘崎沖は厳しい難所であった。ここに、豊前の秦氏が宗像氏や大島の姫神信仰と結びつく契機を見出すことができる。

すなわち、豊前では、磐井の乱後に設置されたミヤケの経営に、秦系の渡来系集団がかかわり、これらの物資を那津官家へ運んでいたと考えられる。その物資運搬において、彼らは難所のある大島南方海域を頻繁に通過する必要があり、宗像地域・宗像氏や大島の姫神信仰との関係を深めたとみられるのである。また、こうした筑紫の那津官家を軸としたミヤケ制の基盤の上に、6世紀末から7世紀初頭、対新羅関係を睨んだ倭軍の駐留が展開し、筑紫諸勢力に対する中央諸氏の影響がさらに高まって、中央とつながる筑紫の社会関係がさらに強化されたと考えられる。史料⑤⑥とも関連する織幡神社が海上交通の要地鐘崎に立地することも、こうしたことと無関係ではあるまい。そしてその社会関係に、山背の秦氏も豊前の秦氏を介して関与していたため、推古十六年(608)にあたる「戊辰年」に、松尾への「筑紫智形坐中部大神」の招請・奉安が起こったと考えられるのである。

ところで、『書紀』によれば、宗像の神が松尾に招請される前年の冬、大和・山背・河内で池溝開発が行われ、諸国に屯倉を置いたとする記事がある(推古十五年是歳条)。この時、ミヤケとかかわる大規模開発が実際に行

われたとする有力な見方に基づけば⁽⁸²⁾、豊前だけでなく、各地のミヤケ経営にかかわる秦氏にとっても一つの画期となる時期であったと考えられる。山背の秦氏が宗像の「中部大神」と結びつく背景は上記のとおりだが、それが「戊辰年」であったのは、こうしたことも影響していた可能性は考えられるだろう。

むすび

以上、「秦氏本系帳」の「筑紫智形坐中部大神」が大島の姫神で、その山背への招請・奉安は推古十六年(608)であったこと、この背景には、ミヤケの経営にかかわった豊前の秦氏と那津官家との社会・交通関係や、ミヤケ制を基盤に筑紫で展開した7世紀初頭前後の王権の対外的な軍事活動の影響があったことをみた。倭王権の対外交渉の拠点となった筑紫では、ミヤケ制とそれを基礎とした軍事的な展開が、地域の社会関係と信仰の在り方に大きな変化を与えていたのである。

また本稿によって、大島に対する信仰の、沖ノ島ルートに限定されない古代海上交通上の重要性も浮き彫りとなったが、このことは、宗像の位置づけを考える上でも重要な示唆を与えるだろう。筆者は以前、磐井の乱において磐井が糟屋海域を封鎖すると、倭王権と朝鮮半島諸国との交流が困難になったことを踏まえ、王権にとって沖ノ島ルートが壱岐・対馬ルートに対置しうるほどの実質的な交流ルートの性格を有していなかったこと、古代宗像の重要性は、本州側の周防灘・響灘と、九州の博多湾以西海域とを接合する地理的条件からもたらされていたことを指摘した⁽⁸³⁾。本稿の分析からも、同様のことが確認された。あわせて、豊前と玄界灘海域とのつながりにおいても宗像が重要な役割を果たしていたことを確認できた。

しかし以上のことと、月読神や木嶋神が壱岐・対馬から山背へ分祀されていることとの関係性については、現段階においては明確な説明ができない。その関連記事は『書紀』顕宗三年二月丁巳条・四月庚申条にある。この年紀にそのまま信を置くことはできないが、両神の分祀を、松尾への宗像神の招請・奉安と同時期とする必要もない。なお近年は堀江潔が、これを継体期の史実の反映と解すべきとして、当該期の壱岐・対馬ルートの対外交

渉とかかわるものとの説を提示している⁽⁸⁴⁾。本稿はこの問題に立ち入る準備はないが、今後あらためて検討すべき課題だと思う。

注

- (1) 白石太一郎 2011「ヤマト王権と沖ノ島祭祀」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告』I「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議編、森公章 2013「交流史から見た沖ノ島祭祀」(同上III)。
- (2) 細井浩志 2012「総論 古代老岐島の世界」同編『古代老岐島の世界』高志書院、菱田哲郎 2013「古墳時代の社会と豪族」『岩波講座 日本歴史』第1巻、など。
- (3) 田中史生 2018「磐井の乱前後の北部九州と倭王権」新川登亀男編『日本古代史の方法と意義』勉誠出版。
- (4) 深溝徳味 1952「古代ムナカタ神の起源について」『西日本史学』10。
- (5) 井上辰雄 1954「大宝二年の豊前国戸籍をめぐる諸問題」『日本史研究』22。
- (6) 平野邦雄 1961「秦氏の研究」『史学雑誌』70-3・4、同1969「品部と雑戸」『大化前代社会組織の研究』吉川弘文館。
- (7) 正木喜三郎 1988「宗像三女神と記紀神話」小田富士雄編『古代を考える 沖ノ島と古代祭祀』吉川弘文館。
- (8) 大和岩雄 1993「松尾大社—秦氏女子の水辺祭祀と賀茂の御阿礼祭」『秦氏の研究』大和書房。
- (9) 中村修也 1994『秦氏とカモ氏—平安京以前の京都—』臨川選書。
- (10) 北條勝貴 1997「松尾大社における市杵嶋姫命の鎮座について—主に秦氏の渡来と葛野坐月読神社・木嶋坐天照御魂神社の創祀に関連して」『国立歴史民俗博物館研究報告』72。以下北條の説はこれに基づく。
- (11) 中村修也前掲注(9)書、159頁。
- (12) 田中史生 2005『倭国と渡来人—交錯する「内」と「外」』吉川弘文館、同 2015「倭王権の渡来人政策」広瀬和雄編『中期古墳とその時代—5世紀の倭王権を考える』『季刊考古学・別冊』22] 雄山閣。
- (13) 桃崎祐輔 2018「沖ノ島の馬具」春成秀爾編『世界のなかの沖ノ島』『季刊考古学・別冊』27] 雄山閣。
- (14) 清水潔編 2002『新校 本朝月令』(神道資料叢刊 八) 皇學館大學神道研究所。なお句点や返り点については適宜改めた。
- (15) 清水潔 2001「本朝月令の成立」『皇學館大學神道研究所紀

要』17。

- (16) 北條勝貴前掲注(10)論文。
- (17) 西田長男 1978「日本神話の成立年代」『日本神道史研究』10(古典編)講談社。以下、西田の論はこれによる。
- (18) 加瀬直弥 2015「文徳朝・清和朝における神階奉授の意義」『平安時代の神社と神職』吉川弘文館。
- (19) 川原秀夫 1997「神階社考」『古代文化』49-2。
- (20) 西田長男前掲注(17)論文。
- (21) 大山喬平 2011「葛野大堰と今井用水—地域史への試み—」東寺文書研究会編『東寺文書と中世の諸相』思文閣出版。
- (22) 所功 1985「『天曆神祇官勘文』の紹介」『平安朝儀式書成立史の研究』国書刊行会。なお群書類従本『年中行事秘抄』は四月の「松尾神」の項に「旧記云、大宝元年秦都理始造_一立神殿_一、立_一河紀_一居_一齋子_一供奉、天平二年預_一大社_一者。」とあり、十卷本『色葉字類抄』(『伊呂波字類抄』)は「松尾」の項に「本朝文集云、大宝元年秦都理始建_一立神殿_一、立_一阿礼_一居_一齋子_一供奉、天平二年預_一大社_一者。」とある。しかし『色葉字類抄』の三卷本にこの注記はない。平安末期に成立した『色葉字類抄』は、写本から三卷本が鎌倉初期以前に、十卷本が鎌倉中期頃にその原初があらわれていることが知られるが、十卷本は内容上の増補が著しく〔中田祝夫・峯岸明 1977「三卷本色葉字類抄解説」『色葉字類抄研究並びに総合索引 黒川本・影印編』風間書房〕、十卷本の「本朝文集」による注記も、中世以降の増補とみるべきだろう。
- (23) 清水潔前掲注(15)論文、所功前掲注(22)論文。
- (24) なお「旧記」は、「秦氏本系帳」における大宝元年の秦都理による「中部大神」の「松尾」への奉請を、同年の秦都理による神殿成立と簡略的に解釈している。これが『本朝月例』に近い時期のものである以上、『本朝月令』の引く「秦氏本系帳」の「大宝元年」に『本朝月令』の誤写を疑う説は、成り立たない。
- (25) 所功前掲注(22)論文。
- (26) 秦都理の川辺腹については、佐伯有清『新撰姓氏録の研究』考証編第五(吉川弘文館、1983年)が、山城国葛の郡川辺郷を本拠としたことによることを明らかにしている。また加藤謙吉『秦氏とその民』(白水社、1998年)pp.36-38は、「腹」について、異質な渡来系集団を一つの巨大な同族組織にまとめあげるための二次的概念として形成され機能したと考えるべきことを指摘する。なお西田長男前掲注(17)論文は「川辺腹男、秦忌寸都理」と「田口腹男、秦忌寸知麻留女」を、川辺氏を母に持つ都理と田口氏を母に持つ知麻留女は父を同じくする異母兄妹であろう

とし、両者を同時代の人物とみなすが、この解釈は困難であろう。

(27) 田中史生 2019「屯倉と韓国木簡—倭国史における韓国木簡の可能性—」韓国木簡学会『木簡と文字』22(韓国語)。なお法隆寺釈迦三尊像台座銘には「辛巳年八月九月作」とあり、これは推古二十一年(621)の年紀である。

(28)「秦氏本系帳」は、加茂の祭日の乗馬に関する伝承の前に加茂社の由来譚を記すが、同文が『新日本紀』巻九にも「山城国風土記曰」としてみえる。このため秋元吉郎校注 1958『風土記』(日本古典文学大系2) 岩波書店はこの両伝承を一連のものとし、いずれも『山城国風土記』逸文とする(416頁)。一方、植垣節也校注・訳 1997『風土記』(新編古典文学全集) 小学館は加茂社由来譚を『山城国風土記』逸文として認めるが、乗馬に関する伝承は「参考」にとどめる。

(29)ただし「戊辰年三月三日」の「三月三日」が原伝に遡るかどうかは分からない。おそらくこれは、養老雜令諸節日条も規定する三月三日の上巳節会と関連するであろうが、『書紀』持統五年三月戊戌(三日)条の宴がその初例かとされる以外、これがどこまで遡るかは不明である。「三月三日」については、後に三月三日が節日となったことにあわせて整えられたものかもしれない。

(30)新川登亀男 1988「海の民」上田正昭編『住吉と宗像の神—海神の軌跡—』筑摩書房、北條勝貴注(10)論文。

(31)森公章前掲注(1)論文。

(32)井上辰雄 1971「地方豪族の歴史的格—水間君をめぐる諸問題—」『日本歴史』280。

(33)古市晃 2019「国家形成期の王権と地域社会—瀬戸内沿岸・北部九州を中心に—」『国家形成期の王宮と地域社会—記紀・風土記の再解釈—』塙書房。

(34)亀井輝一郎 2011「古代の宗像氏と宗像信仰」『「宗像・沖ノ島と関連遺跡群」研究報告』I。

(35)井上光貞 1984「古代沖の島の祭祀」『日本古代の王権と祭祀』東京大学出版会。

(36)新谷尚紀 2012「日本民俗学(伝承分析学・traditionology)からみる沖ノ島—日本古代の神祇祭祀の形成と展開」『「宗像・沖ノ島と関連遺跡群」研究報告』II-1、大高広和 2014「沖ノ島研究の現在」『歴史評論』776。

(37)新川登亀男前掲注(30)論文。

(38)笹生衛 2012「宗像沖ノ島祭祀遺跡における遺物組成と祭祀構造—鉄製品・金属製模造品の分析を中心に—」『日本古代

の祭祀考古学』吉川弘文館。

(39)篠川賢 2013「古代宗像氏の氏族的展開」『「宗像・沖ノ島と関連遺跡群」研究報告』III。

(40)平野邦雄「今来漢人」(同前掲注(6)書)。

(41)関晃 1956『帰化人』至文堂、上田正昭 1965『帰化人』中公新書、加藤謙吉 1991「東漢氏の氏族組織の成立」『大和政権と古代氏族』吉川弘文館。

(42)田中史生 2019『渡来人と帰化人』角川選書 pp.65-79。

(43)李永植 1993「古代人名からみた「呉」」『加耶諸国と任那日本府』吉川弘文館。

(44)平野邦雄前掲注(6)「品部と雑戸」。

(45)坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注 1967『日本書紀』上(日本古典文学大系67) 岩波書店 p.381頭注。

(46)亀田修一 2013「古代宗像の渡来人」『「宗像・沖ノ島と関連遺跡群」研究報告』III。

(47)井上辰雄前掲注(32)論文。

(48)平野邦雄前掲注(6)「品部と雑戸」。

(49)瀧川政次郎 1961「比賣許曾の神について—日鮮交通史の一考察—」『國學院大學日本文化研究所紀要』9。

(50)今井啓一 1969「比賣許曾ノ神・姫島をめぐる—帰化人來化の交通路線を考える—」『帰化人と社寺』綜芸舎。

(51)松前健 1997「記・紀のヒメコソ縁起の成立」『松前健著作集』第3巻、おうふう。

(52)三品彰英 1972「応神天皇と神功皇后」『三品彰英論文集』第4巻 増補日鮮神話伝説の研究』平凡社。

(53)三品彰英「アメノヒボコの伝説」(同前掲注(52)書)。

(54)達日出典 2003『八幡宮寺成立史の研究』続群書類従完成会。

(55)平野博之 1968「承和—一年の宇佐八幡宮弥勒寺建立縁起について」竹内理三編『九州史研究』お茶の水書房。

(56)達日出典「辛嶋氏系八幡神顕現伝承に見る大和神幸—応神靈の付与をめぐる—」(同前掲注(54)書)。

(57)達日出典「八幡神鷹居社創祀とその背景—大神・辛嶋両氏合同祭祀の実現—」(同前掲注(54)書)。

(58)新川登亀男 1991「宗像と宇佐」(坪井清足・平野邦雄監修『新版「古代の日本」』第三巻(九州・沖縄) 角川書店)。

(59)熊谷公男 2018「「任那復興策」と「任那の調」」『東北学院大学論集 歴史と文化』57。

(60)平野邦雄前掲注(6)「品部と雑戸」。

(61)平石充 2015「人制再考」『前方後方墳と東西出雲の成立に

- 関する研究』『島根県古代文化センター研究論集』第一四集)。 志書院。
- (62) 平川南 2003 「令制成立期前後の出挙木簡—福岡県小郡市井上薬師堂遺跡」『古代地方木簡の研究』吉川弘文館。
- (63) 井上辰雄前掲注(32)論文。
- (64) 加藤謙吉前掲注(26)書pp. 88-96・109-119。
- (65) 鈴木英夫1996 「「任那の調」の起源と性格」『古代の倭国と朝鮮諸国』青木書店。
- (66) 井上満郎 2011 『秦河勝』吉川弘文館。
- (67) 『書紀』推古十一年二月丙子条。
- (68) 平野邦雄 1958 「豊前の条里と国府」『九州工業大学研究報告』〈人文・社会科学〉6。
- (69) 三品彰英前掲注(53)論文。
- (70) 遠日出典 「豊国に於ける新羅神の東進—香春神から「ヤハタ」神へ—」(同著前掲(54)書)。
- (71) 亀田修一 2005 「地域における渡来人の認定方法—豊前上毛郡地域を例として」『第8回九州前方後円墳研究会資料集』九州前方後円墳研究会、田中裕介 「豊前・豊後地域(大分県)における渡来人の受容と展開」(同上)。
- (72) 井上辰雄前掲注(5)論文。
- (73) 平野邦雄前掲注(68)論文。
- (74) 井上辰雄 1954 「『ミヤケ制の政治史的意義』序説」『歴史学研究』168。
- (75) 加藤謙吉注(64)。
- (76) 館野和己 1978 「屯倉制の成立」『日本史研究』190、仁藤敦史 2012 「古代王権とミヤケ制」「古代王権と「後期ミヤケ」」『古代王権と支配構造』吉川弘文館など。
- (77) 森公章 2008 「「海北」から「西」へ—倭国の朝鮮諸国認識と国家体制の転換—」『遣唐使と古代日本の対外政策』吉川弘文館。
- (78) 宗像神社復興期成会編 1961 『宗像神社史』上巻 精興社第三章社名参照。
- (79) 田中史生注(3)論文。
- (80) 笹川進二郎 1985 「「糟屋屯倉」献上の政治史的考察—ミヤケ論研究序説—」『歴史学研究』546。
- (81) 加藤謙吉前掲注(26)書 p. 116。
- (82) 館野和己前掲注(76)論文。広瀬和雄 1983 「古代の開発」『考古学研究』30-2も参照。
- (83) 田中史生前掲注(3)論文。
- (84) 堀江潔 2012 「継体朝の対外交渉と壱岐島—壱岐島の月神の山背遷祀をめぐって—」細井浩志編『古代壱岐島の世界』高

宗像・沖ノ島における古代祭祀の意味と中世への変容 —人間の認知機能と環境変化の視点から—

笹生 衛 國學院大学教授

要旨：本論文では、宗像における古代祭祀と神観について再検討するとともに中世への変容について考察を行った。

古代の沖ノ島祭祀については、従来、祭祀遺跡の巨岩を磐座として祭祀の復元されてきた。しかし、近年の認知宗教学が示す、特定の働きにその行為者（神）を直観するという人間の認知機能にもとづいて考えると、沖津宮（沖ノ島）・中津宮（大島）に坐す神々については、航海上の海上目標としての働き、辺津宮（釣川河口）に坐す神は港湾に適した潟湖の働きに神観の基礎があると推定できる。特に、沖ノ島においては、海上から遠望できる最高峰の一ノ岳の働きが重要で、これが祭祀対象となっていた可能性を指摘できる。

その古代祭祀は、7世紀後半を画期として、須恵器を神饌の食器として、滑石製形代を幣として多用する形に変化した。この背景には、神郡の宗像郡の成立と、そこでの伝統的な集落を基盤とした神戸の編成・成立があり、「記紀」にみえる宗像三女神の神格も、「記紀」編纂と並行して成立したと考えられる。

宗像三女神の神観と祭祀は、9世紀後半から10世紀における国内外の緊張関係と環境変化を受けて変質した。天慶の乱を契機に、宗像神に菩薩位が捧授され祭祀は仏教的な性格が顕著となった。また、10世紀以降、釣川河口に新たな浜堤が形成され、釣川河口、辺津宮が面する潟湖の港湾機能は減退したと考えられる。他方、宗像社辺津宮の西、津屋崎干潟の港湾機能は明確となり、宗像社大宮司の宗像氏が関与する日宋貿易の拠点となった。この過程で宗像三女神には仏教の勧請の考え方を適応し、辺津宮には沖津宮・中津宮の神々を併せ祀る三神合祭の境内景観が成立した。特に辺津宮の第一宮は中核となり、「惣社三所」と称された。一方、沖津宮（沖ノ島）は、日宋貿易の主要な航海ルートからは外れ、古代以来の神の存在を象徴する聖域として、その後に信仰を伝えていくこととなった。

キーワード：自然環境の働き・人間の認知機能・神観・祭祀と祭具・環境変化・三神合祭・日宋貿易

1. はじめに

神宿る島、宗像・沖ノ島と関連遺産群が世界遺産に登録された際、その古代祭祀の性格や歴史的な意味については、宗像・沖ノ島祭祀遺跡の発掘調査の成果、特に昭和54年（1979）刊行の発掘調査報告書にそって説明がなされている⁽¹⁾。ただし、そこには細かな分析・考察がなされなかったり、その後の研究で新たな視点が加えられたりして、幾つかの課題が残っている。そのような課題として、以下の二点をあげることができる。

課題の一つが、宗像・沖ノ島祭祀における神の考え方（神観）をいかにとらえ、それは祭祀の性格と、どのように関係するのかという点である。これまで、宗像三女神の性格については、「記紀」の記載と、大場磐雄が提唱した神道考古学の解釈を下敷きとして、神観を考えてきた。それは、2001年以降の研究においても同様である。

例えば、広瀬和雄氏は、大場の「神は天や山に所在し、招くと臨時に降り、まつりを享け、天や山へ帰る」という神・祭祀観を引用し、宗像・沖ノ島における祭祀について「海に浮遊しているカミを巨岩に憑依させ、鏡や武器などの祭具を奉獻」するとのイメージを示している。また、その神観については「カミは、そのつど、一定期間、踏襲された場所に勧請され、巨岩などの依代に憑依した」とする⁽²⁾。ここでは民俗学の折口信夫が提唱した「依代」の考え方や、仏経用語の「勧請」を使用しており、そのまま古代の神観や祭祀と結びつけるのは難しいと考えられる。

一方で、20世紀末期から宗教学研究において、人間の脳の認知機能と神・霊の考え方との関係を分析する認知宗教学の研究が進んでいる。この視点を、宗像・沖ノ島の古代祭祀の研究へと導入すると、なぜ玄界灘の島と釣川の河口で神を感じて聖域化し、祭祀を行ったのかとい

う、基本的な問題へ新たな視点でアプローチが可能になる。さらに、認知宗教学は、人間（現生人類）の脳の認知機能に基づくので、宗像・沖ノ島における神の考え方（神観）や祭祀の構造・意味を、古代日本や東アジアの問題だけではなく、広く人類史のなかに位置付けることができ、それは世界遺産としての宗像・沖ノ島において重要な意味を持つと考える。

もう一つの課題が、なぜ宗像・沖ノ島の古代祭祀は10世紀を境に終焉したのか、という問題である。10世紀以降の祭祀の変容と中世への移行状況、その歴史的な背景を、どのように考えるべきなのか。これまで古代祭祀の終焉は、遣唐使の廃止が大きな契機となったと考えられてきた。しかし、原因は、それだけではないだろう。これまでの日本の宗教史研究では、10世紀は大きな変換期であったとの指摘は多い⁽³⁾。それは、神祇信仰においても同様で、10世紀は古代祭祀が変質して中世の祭祀・信仰へと変容する大きな画期であったことは間違いない⁽⁴⁾。宗像・沖ノ島祭祀も例外ではないだろう。古代の沖ノ島祭祀の終焉を、遣唐使のような国家的な対外交渉との問題に限定せず、日本宗教史全体の中に位置付けて考え直す必要がある。

そこで、ここでは、まず認知宗教学の視点から宗像・沖ノ島祭祀の神観について再検討する。あわせて、神観に対応する祭祀の性格、特に年代的な変遷に焦点を当て考察する。これを受けて、宗像・沖ノ島の祭祀が、10世紀に終焉した背景と中世への移行状況について、環境変化や仏教との関係を視野に入れて考えてみたい。

2. 人間の認知機能と宗像・沖ノ島祭祀の神観・祭祀

(1) 認知機能と神観

人間（現生人類）の脳の認知機能は、近年の研究によると約4万年前には備わったとされている⁽⁵⁾。その認知機能が宗教と関係する特徴として、ダニエル・C・デネット氏は「動きがあればどこでも行為主体（agents）を探すという私たちの過敏な傾向性」をあげる⁽⁶⁾。また、人間は、予測できない自由な動きをするもの（無生物も含む）に意志があると直観する傾向があり、ジェシー・ベリング氏は「心の理論」とする⁽⁷⁾。パスカル・ボイヤー氏は「まわりにあるあらゆる種類の手がかり（現象）を、

なんらかの存在（行為者・agents）の行為の結果として解釈するのは、私たち（人間）のふつうの認知のはたらき」とであると指摘し、さらに「意図をもって（自ら）動くどんな物体を」見ても「意図をもって生きている」と直観するとする。パスカル・ボイヤー氏は、この脳の認知機能を有生性システム(animacy system)と名付けている⁽⁸⁾。

この認知機能によれば、特定の現象「動き・働き」に行為者（行為主体）と意志を想定することで、自分と現象を起こしている行為者との関係を考え、次の動き・働きを推論できる。従来、「アニミズム」と呼んできた現象の基礎には、この認知機能があったとよいだろう。これは、人類が食料を入手し捕食獣から身を守るなど、自らの生命を維持するうえで有利に作用した。以上の認知機能が前提となり、人間は特定の現象「動き・働き」の背後に、その現象を起こし司る「行為者（agents）」を直観することとなる。さらに、その行為者を自らと同様に人格化して考える。スチュアート・E・ガスリー氏は、これも人間の脳の認知機能として位置付けている⁽⁹⁾。

一方で人類（人間）はアフリカから地球上に広く拡散して、様々な自然環境の中で生活し、多様な文化・社会を形成してきた。それは、約4万年前に備わった人類の脳の認知機能と各地の自然環境との相互作用において、合理的で有利な選択を繰り返したことにより育まれたものであった。日本列島の場合も、環境と人間の認知機能との関係から、文化・社会が形成され、それを特徴づけるのが、日本列島の自然環境に根ざす神・霊魂観であったと考えられる。

(2) 日本列島の神観と祭祀

日本列島は、北半球の中緯度にあり、複数のプレート境界の上に位置するので、太平洋・日本海の海域に面して3,000m級の急峻な山岳が屹立する。このため、四季が明瞭で豊かな水源や森林・海洋資源に恵まれる反面、台風などの風水害や火山活動に伴う災害が頻繁に発生する。その意味で、日本列島の自然環境の働きは、大きな「恵み」と深刻な「災い」を同時にもたらすという特徴がある。この自然環境の働きは、日本列島に暮らしてきた人々にとって、生命を維持するうえで最も重要な問題となる。

これを認知宗教学の視点からみると、自然環境の働きに「行為者」を直観し、人格化することで、自然環境の

働きに根ざす「神」となる。特定の現象・働きが顕われる場に、その行為者（神）が居るという「～に坐す（居られる）神」の神観である。それは「記紀」⁽¹⁰⁾や『延喜式』⁽¹¹⁾の祝詞などが記す神々である。例えば、水源の山の上の「水分に坐す神」、山麓で平野に水を押し流す「山口に坐す神」は、この典型である。「記紀」で「島・海濱に居（坐）す」とされる宗像三神も基本的に、この神観に当てはまる。そして、行為者（神）は人格化されるので、人間と人格化した行為者（神）との間には、人間同士の交換の原理が適応される。人間が神へと貴重な品々（幣帛）を捧げ、美味しい食膳（神饌）を供え提供すれば、神は人々が願う働きを返すと直観し「祭祀」は成立する。祭祀は、人間と行為者（神）との交換という位置づけが可能となる。そして、宗像の神の人格化は人間の脳の認知機能に由来するので、それは初期の祭祀の段階から行われていたと考えられる。

また、行為者（神）を人格化するので、祭祀において非礼な作法があったり、汚れた品々を捧げたりすれば、行為者（神）は怒って祟り、災いにつながると直観する。だから古代祭祀では、延暦23年（804）に成立した『皇太神宮儀式帳』（以後、『内宮儀式帳』）が記すように、厳重に清浄性を確保し、厳格な祭式（祭祀の構成）と作法の厳守が必要であった⁽¹²⁾。宗像・沖ノ島祭祀における厳格な潔斎の必要性は、ここに由来する。

（3）島の神の働き

このように古代日本の神観と祭祀を考えると、古代の宗像・沖ノ島祭祀における神観の基礎には、玄界灘や宗像における、特別な自然環境の働きを考えなければならない。では、その働きとは何か。

「記紀」で宗像三女神が坐すとされる「沖津宮（沖ノ島）」「中津宮（大島）」「辺津宮（釣川河口）」の自然環境は、それぞれに特徴的な働きを示す。

まず、沖ノ島は、対馬と九州本土のほぼ中間地点、流れが速い対馬海流の只中にあり、真水が湧くという働きがある。さらに島の中央には白い白色凝灰岩の一ノ岳が聳え、玄界灘の海上で遠くから望むことができ、対馬からも遠望できる。沖ノ島の神については、この働きが大きな意味を持つのではないだろうか（図1）。

例えば、対馬から九州本土へ渡海する場合、最初は、

沖ノ島の一ノ岳を目標に船を進める。沖ノ島を通過すると、今度は背後に沖ノ島を望みながら、さらに進めば、正面に大島を視認することができるようになる。沖ノ島・大島間の海域では、両島を常に視界に入れて大島方向へ進むことで、海流の流れの速い玄界灘を最短距離で、しかも確実に九州本土へ向かうことができるのである。沖ノ島・大島は、この海域で船の位置を知るのに欠くことのできない役割を果たしていたといつてよいだろう。これは島や山を視認し、船や漁場の位置を割り出す「ヤマアテ・シマアテ」と共通する航海技術である⁽¹³⁾。この島の役割を象徴的に示すのが、島そのものを人格化し神とする「オキツシマヒメ」「イチキシマヒメ」の神名であり、海流の速さ・激しさを示す「タギツヒメ」の神名とともに信仰されることとなったと考えられる。

（4）沖ノ島祭祀遺跡の性格

こう整理すると、沖ノ島における祭祀対象についても再検討が必要となる。これまで、祭祀遺跡が残る沖ノ島南斜面の巨岩群を「磐座」として祭祀の対象とてきた。しかし、沖ノ島のなかで、海上交通の目標という意味では、遠くから視認できる一ノ岳の存在と働きが極めて重要となる。沖ノ島の最高峰である一ノ岳そのものが、沖ノ島に居します神を直観させるといってよい。そうすると、沖ノ島の南斜面に位置する祭祀遺跡の性格について、従来とは異なる理解が可能となる。初期の祭祀遺跡（岩上祭祀遺跡）がある、I号巨岩とF号巨岩からは、真上に一ノ岳を見上げることができる。また、祭祀遺跡は、沖ノ島南西部の平坦面で最も一ノ岳に近い位置に立



図1 沖ノ島遠景

地しており、やはり祭祀遺跡と一ノ岳との密接な関係がうかがえる(図2)。沖ノ島祭祀の神観を、人間の認知機能という視点で考えると、一ノ岳との関係で、最古の祭祀遺跡がI・F号巨岩上に残されたのは必然であったといえるだろう。その神観は、神は天から降るのではなく、波荒い玄界灘を航海するのに欠くことができない沖ノ島一ノ岳の働きに神を感じ、そこに神は坐すと認識していたと考えられる。この一ノ岳を対象に、初期の本格的な祭祀は巨岩の上で始められたのではないだろうか。

(5) 浜宮貝塚の遺構・遺物

他方、九州本土、釣川河口の辺津宮の神は、『日本書紀』では「湍津姫命と号く。是は海浜に居します者(神)なり」(『紀』第6段一書第2)とあり、古代の海浜の働きに神を直観して信仰の対象とされたと考えられる。この場合、古代の釣川河口の環境を復元しなければ、辺津宮の神の働きを正確には理解できない。

ここで参考となるのが、釣川河口の浜堤上に立地する浜宮貝塚の発掘調査成果である。浜宮貝塚では昭和46年に発掘調査を実施、平成30年度から令和4年度にかけて発掘調査と整理作業を行い、5世紀後半から7世紀代にかけての遺構・遺物を確認した⁽¹⁴⁾。遺構には5世紀後半の堅穴建物があり、出土遺物には玄界灘式製塩土器が含まれ、表面採集の遺物であるが、特殊器台と滑石製白玉

がある。加えて魚類・貝類の動物遺存体が出土した。魚類ではサメ・マダイが多く、フグ・クロダイ・スズキ・カツオ・エイがある。貝類ではサザエ・アワビ・ハマグリ・ヤマトシジミ・タニシがあり、海の岩礁や内湾のみならず汽水域に生息する種類が含まれている点に特徴がある。以上の遺構・遺物の状況から、浜宮貝塚には活発な漁撈活動を展開し製塩を行った漁撈集落が存在していたと考えられる。ここでの漁撈活動は、つづく奈良時代(8世紀代)、浜宮貝塚北西の海浜に立地する新波止貝塚へと受け継がれた⁽¹⁵⁾。

浜宮貝塚での活発な漁撈活動と製塩を根拠に、5世紀から7世紀には、この遺跡が海浜に立地していたと判断でき、浜宮貝塚が立地する浜堤の北側縁辺部が、当時の海浜汀線であったと推定できる。その地点の標高を基準に、釣川河口から宗像大社辺津宮の周辺に推定汀線を延ばしていくと、図3のように、釣川河口付近には巨大な潟湖(ラグーン)を復元できる。この推定は、浜宮貝塚から汽水域に生息するスズキ・シジミといった魚種・貝類が出土したと整合する。そして、この潟湖に面して辺津宮の鎮座地は位置するのである。

(6) 潟湖の働きと神

辺津宮の境内や周辺では、8・9世紀代の滑石製形代が多く採集されており、5世紀代の短甲形の滑石製模造品が含まれる。ここでの祭祀は、確実に古代には行われており、古墳時代まで遡る可能性は高い⁽¹⁶⁾。古代には、釣川河口の広い潟湖に面して鎮座する辺津宮の景観が復元できる。それは、まさに『日本書紀』の「海浜に居します者(神)」という表現と一致する。

釣川河口に復元できる古代の潟湖は、浜宮貝塚の集落がある浜堤で海と区画され、海の風波から停泊する船を守ってくれる働きをもつ。この潟湖の働きに神(行為者)を直観し祀ったのが辺津宮の神であったといえるだろう。

宗像の神々の神観の基礎には、九州北部と朝鮮半島とを結ぶ海上交通で有用な自然環境の働きがあり、これに4世紀後半から9世紀、ヤマト王権と律令政府の対外政策上の重要度が加わり、祭祀と祭祀の場が整えられていったと考えてよいだろう⁽¹⁷⁾。

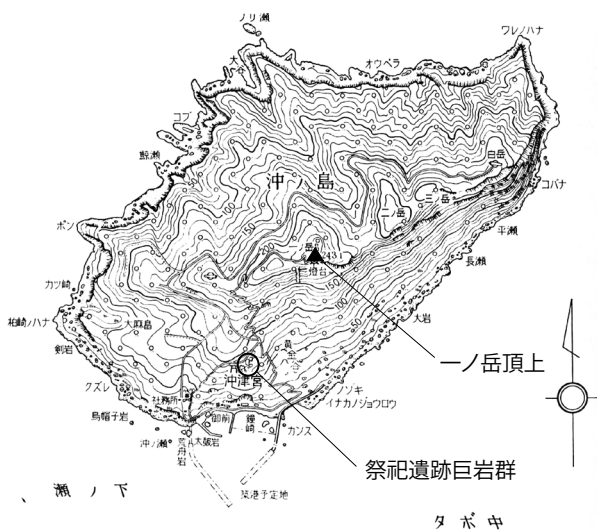


図2 沖ノ島祭祀遺跡位置図
(『沖ノ島』(1958)の図面に加筆)



図3 宗像・釣川河口周辺の古代汀線推定図

(7) 神格の形成

ただ、脳の認知機能にもとづく神（行為者）の人格化と、「記紀」が記すスサノオノミコトの娘としての宗像三女神の神格の成立は、別途に考える必要がある。沖ノ島・大島、そして釣川河口の潟湖の働きに根ざし、人格化した神の存在は、玄界灘を航路とする海上交通において古くから存在した可能性は高い。これに対して島と潟湖の3箇所に住す神々に、天照大神・スサノオノミコトの誓約で誕生する三女神という神格が加わるには、ヤマト王権と宗像の神々の関係を物語る「記紀」編纂が一つの契機となっていたことは間違いない。

それでも『古事記』と『日本書紀』で、また『紀』の本書と一書の間で、沖・中・辺津宮に祀る神名は一定しておらず、「記紀」編纂が始まった7世紀後半には、すでに神名に混乱が生じていたことがうかがえる。このため、宗像三女神の神名は、すでに成立してから一定の時間が経過していたと推定できる。

「記紀」が記す神名と神格が成立する具体的な時期を特定することは難しい。それでも、宗像・沖ノ島祭祀遺

跡の状況を見ると、多量の豪華な奉獻品が出土した7号・8号遺跡の年代、6世紀後半から末期の時期が一つの可能性として考えられる。特に7号遺跡では、装飾性が高い倭系大刀（剣）・胡籥・盾といった、神宮神宝に通じる品々が出土している。この時代、欽明朝から推古朝にかけての時期に、ヤマト王権との関係のなかで語られる宗像三女神の神格（イメージ）が形成され始めたのではないか。その背景には、宗像・玄界灘を通じて朝鮮半島・中国大陸と積極的に交流しなければならないヤマト王権側の事情が作用していたのだろう。

3. 古代宗像・沖ノ島祭祀の質的变化

(1) 沖ノ島祭祀の画期

宗像・沖ノ島における祭祀は、7世紀を境に大きく変化した。4世紀後半から5世紀中頃にかけての17号・18号・21号遺跡（岩上祭祀）、その後の6世紀後半の7号・8号遺跡など（岩陰祭祀）では、古墳の副葬品と共通する品々を岩上・岩陰へと奉獻する、もしくは納める形態

となっている⁽¹⁸⁾。

それが、7世紀代と考えられる22号遺跡（岩陰祭祀）、7世紀後半から8世紀代の5号遺跡（半岩陰・半露天祭祀）で大きく変化した。まず、紡織具や琴、食器類などの金銅製雛形が出現する。この変化については、夙に井上光貞が律令祭祀への移行を示すものであると指摘している⁽¹⁹⁾。これに加えて、5号遺跡で顕著のように須恵器を中心とする食器類が多く使用されるようになる。5号遺跡では、須恵器の大甕・長頸壺・大小の器台・小形高坏と玄界灘式製塩土器が、まとまって出土した。これらの食器類は神饌の容器として使用したと考えられ、大形器台に大甕、小形器台に製塩土器を載せ、長頸壺と高坏を添える形式で神饌を供えていたと推定できる。

この食器の組成は、広口壺・中形甕を加えて8・9世紀代の1号遺跡に受け継がれた。また、蓋坏、坏、高台付の坏・埴といった供膳具が多く含まれ、小形の坏・鉢の胴部に孔を開けた有孔土器が加わり、器種は多様化する。供膳具の増加は、神饌を種類ごとに盛り供える祭祀の形式（祭式）が整備されたことを示す。沖ノ島祭祀遺跡では、5号遺跡が明確となる7世紀後半頃を画期として、神饌供献の祭式が大きく変化したことは間違いないだろう。

（2）祭具・神饌の供給

この神饌供献の変化と関連するのが、有孔土器の存在である。この土器の用途については、現時点では明確にできない。しかし、その製作上の特徴は、体部への穿孔を焼成前に行っていることである。体部に穿孔する特殊な土器は、日常的ではない特殊な用途、具体的には祭祀での使用を想定できる。この種の土器の出土は、現状では祭祀の場に限られるので、その蓋然性は高く、当初から祭祀用として製作されていたと考えられる。同じ須恵器を中心とした神饌用の甕・坏などの食器類についても祭祀を目的に、特別に製作されていた可能性が高い。

また、土器類とともに出土した玄界灘式製塩土器には、未使用のものがある。これは製塩の場から祭祀の場へと塩を直接持ち込んでいたことを示唆し、やはり祭祀を目的とした製塩が行われていたと推定できる。

沖ノ島の5号・1号遺跡と並行するのが、宗像大島の御嶽山頂に残る大島御嶽山遺跡である。ここでも沖ノ島

1号遺跡と同様の須恵器の器種、玄界灘式製塩土器が出土しており、同じ土器の供給体制のなかで祭祀を執行していたと考えられる⁽²⁰⁾。その須恵器の供給元については、現時点では明確となっていない。それでも宗像地域には、釣川中流右岸の宗像市大字「河東・須恵・稲元・山田・三郎丸」に立地する宗像窯跡群がある。特に大島御嶽山遺跡から出土する須恵器大甕の波状文やハケ目文様は、宗像窯跡群の三郎丸堂ノ上C遺跡3号窯などの製品と類似し、大島御嶽山遺跡の須恵器甕・壺類は、宗像窯跡群から供給された可能性が指摘されている⁽²¹⁾。ただし、三郎丸堂ノ上C遺跡3号窯の操業は、6世紀末期まで遡り、7世紀後半の沖ノ島祭祀の変化よりも先行する⁽²²⁾。

（3）神宮との比較

このように宗像・沖ノ島の祭祀では、7世紀後半、5号遺跡の時期を明確な画期として、神へと神饌を供する食器、神饌の塩を、祭祀用に特別に製作する組織が編成されていた可能性が高い。類似する体制・組織は『内宮儀式帳』で確認できる。『内宮儀式帳』によると、神宮の祭祀の中核には三節祭（6月・12月の月次祭、神嘗祭）があり、その祭式の中心は、御前（神前）への夕御饌・朝御饌（神饌）の供饌である。そこで使用する食器類の製作は土師器作物忌・父、御筭作内人、忌鍛冶内人、陶器作内人が担当し、御饌として供える神酒の醸造は、酒作物忌・父、清酒作物忌・父が、塩の生産には御鹽焼物忌・父が携わった。あわせて、彼女・彼らは「後家の雑罪事、祓い清め」に従事すると記されている。特別に潔斎をしたうえで、祭具や神饌を準備しており、この体制は厳格な祭祀の執行に必要であった。宗像・沖ノ島の古代祭祀においても、祭祀用の土器や製塩土器の存在から、神宮と類似した祭祀への食器・神饌の生産・供給体制が整えられていたと考えられる。

神宮では、『内宮儀式帳』『神郡本記行事』によると孝徳朝に神郡を設置し、「神寺を造りて雑神政所と為て仕へ奉りき」とあり、神宮祭祀の体制は、7世紀中頃に神郡（神評）の設置とともに整えられたと考えてよい。さらに、『内宮儀式帳』が記す神宮へ土器を供給する土師器作物忌の伝統は、三重県明和町（多気郡内）の北野遺跡で土器焼成土坑が出現する6世紀後半まではさかのぼる⁽²³⁾。

宗像郡は養老4年(723)以前に神郡となっており⁽²⁴⁾、神宮と同様、神郡の設置と前後して祭具と神饌の供給体制が整えられた可能性が高い。7世紀後半、5号遺跡に見られる変化は、神郡の宗像郡の設置と対応して、祭祀の実施体制が整えられたことに呼応していたのだろう。

(4) 祭式の変化

これに伴い、祭祀の構成、祭式は多量の土器(須恵器)を供える形へ変化した。5号遺跡・1号遺跡における須恵器の組成は大甕、壺、器台を中心に、1号遺跡では坏類が多く加わる。なかでも大甕は、『内宮儀式帳』や9世紀後半の『儀式』の大嘗祭の祭式⁽²⁵⁾を参照すると、酒類の醸造・運搬・供献に使われたと考えられ、宗像・沖ノ島祭祀では器台とセットとなっていたと推定できる。また、大嘗祭では鰯の鮓など、海産物の発酵食品を壺(埴)に入れて供えており、1号遺跡で出土する広口壺については、このような食材を入れて供えた可能性が考えられる。『内宮儀式帳』や『儀式』の祭式との比較から、御飯、酒、魚介類などを食材ごとに坏・埴・壺(埴)などに盛り、酒類は器台に据えた大甕から小形の壺に取り分け、坏に注いで神前(巨岩群)へ供えるといった神饌供献の祭式を復元でき、祭祀の作法・祭式は他の神郡の神宮・神社の祭祀と歩調を合わせて、大きく変化したと考えられる。そのような祭祀で使用した祭具・土器を祭祀後に集積したのが8・9世紀代の1号遺跡であり、多量に出土する土器類は、祭式の変化を象徴的に示しているといっていよう。また、大島御嶽山遺跡においても出土遺物は、須恵器の大甕と器台・壺が中心となっており、沖ノ島5号・1号遺跡を残した祭祀と同じ祭式で祭祀を行ったと考えられる。

(5) 滑石製形代の組成

これと並行して、7世紀後半に祭具として滑石製形代類が出現する。1号祭祀遺跡からまとまって出土し、土器類とともに8・9世紀の祭祀を特徴づける。宗像・沖ノ島1号遺跡から出土した滑石製形代は、報告書に記載された数量で合計1,356点に及び、その組成は人形68点、馬形40点、舟形108点、勾玉形28点、有孔円板37点、無孔円板89点、未製円板153点、棒状製品238点、その他(白玉・平玉含む)595点となる。1号遺跡の遺物は、まだ現地

に多く残り、報告書の遺物量は全てではない。それでも1,000点以上の数量からは、組成の一定の傾向を示していると考えられる。形代の種類では未製円板と棒状品が多数を占めるものの、性格が特定できる例では船形が最も多く、次いで人形、馬形の順となる。

沖ノ島の5号・1号遺跡と同年代の大島御嶽山遺跡でも、滑石製形代がまとまって出土した。有孔円板24点、無孔円板80点、白玉300点、人形10点、馬形6点、舟形14点、勾玉形3点である。有孔・無孔円板と白玉を除くと、確認できた数量は舟形、人形、馬形の順となり、沖ノ島1号遺跡の傾向と一致する。沖ノ島1号遺跡と大島御嶽山遺跡を残した祭祀では、滑石製の舟形・人形・馬形の組み合わせが重要な意味を持っており、海上交通との関係から特に舟形が重要であったのかもしれない。

(6) 形代の性格

同年代で類似した組成の形代(模造品)群が出土した遺跡に、鳥取県の青谷横木遺跡がある⁽²⁶⁾。ここでは山陽道の官道遺構を確認しており、官道に沿った溝や河道から多量の木製形代が出土し、総数は約22,500点に及ぶ。主な種類は、人形748点、馬形1,747点、舟形72点があり、その他に牛形、刀・剣形、工具・農具形、勾玉形、琴柱、斎串がある。木製形代の年代は、7世紀後半から10世紀代である。

青谷横木遺跡で形代類が出土した地点は、日置川の右岸、官道の渡河地点に近い。日置川の左岸の善田榜示ヶ崎遺跡でも8・9世紀の木製人形・馬形が多数出土している⁽²⁷⁾。これら木製形代の性格は、『肥前国風土記』佐嘉郡条で佐嘉川上の荒ぶる神へ捧げた土製の人形・馬形⁽²⁸⁾と一致し、官道の渡河地点で川の神などに捧げた「幣」として考えるべきだろう。7世紀後半から8・9世紀代の木製の人形・馬形については、金子裕之が大祓との関係を指摘している⁽²⁹⁾。しかし、そこで示された平安期の陰陽道祓と奈良時代の大祓を直結させる理解には問題があり、全てを祓との関係で理解はできず、人形には道教的な祓具の他に伝統的な捧げ物としての性格がある⁽³⁰⁾。沖ノ島1号遺跡・大島御嶽山遺跡における滑石製形代は、祭祀の場の近くに集積されたと推定でき、金子が指摘したように祓具とは考えにくい。むしろ、青谷横木遺跡の形代や『肥前国風土記』の土製人形・馬形と同様、

交通路の神へと捧げた「幣」として考えるべきだろう。

(7) 神戸集落の形成

以上の須恵器の祭具・製塩土器、滑石製形代の供給元を考えると、先に触れた浜宮貝塚の発掘調査成果が重要な意味を持つ。浜宮貝塚からは、沖ノ島祭祀遺跡や大島御嶽山遺跡で使用される、須恵器の特殊器台と滑石製白玉が採集されている。また、沖ノ島の5号・1号遺跡、大島御嶽山遺跡で確認できる玄界灘式製塩土器も出土している。少なくとも、7世紀後半以降の沖ノ島祭祀遺跡・大島御嶽山遺跡の祭祀と浜宮貝塚は密接に関係していたと考えられる。

これと関連して浜宮貝塚から、マダイ・カツオ、アワビ・サザエといった魚介類の遺存体が出土している点に注目したい。神宮や『延喜式』神祇式から判明する、古代祭祀の神饌には鰯・鰹などの魚介類が多用されている。また、沖ノ島の7号・8号・9号・22号・23号遺跡からは、アワビ殻を加工した垂飾品と考えられる有孔円板が出土しており、祭祀の場にアワビ殻が持ち込まれていた。宗像・沖ノ島や大島における古代祭祀においてもアワビやタイ、カツオなどの海産物を神饌として供えていた可能性は極めて高い。

さらにもう一点、浜宮貝塚での集落の形成が5世紀後半であることは、重要な意味をもつ。宗像郡と同様、神郡の香島（鹿島）郡が設置された鹿島神宮の周辺では、5世紀後半に祭祀集団の集落遺跡、厨台遺跡群が成立する。ここでは7世紀代に集落規模が拡大し、大形の滑石製の有孔円板、鎌形、斧形などの祭具が一時的に復活する。また、7世紀代の集落規模の拡大（竪穴建物数の増加）は、『常陸国風土記』香島郡条が伝える、孝徳朝における神郡設置・神戸加増と一致し、鹿島（香島）神宮に隣接するという位置関係からも、この集落が神戸集落へと直接つながると考えられる⁽³¹⁾。

このような鹿島神宮周辺の集落遺跡の年代的な傾向と比較すると、同時期に成立する浜宮貝塚の漁撈集落は、神戸の原形となる集落の一部であったと推定でき、宗像の神々の祭祀に神饌となる魚介類や塩を供給していた可能性は高いだろう。

同様に考えられるのが、富地原神屋埼遺跡の集落である。この遺跡は、釣川の上流域、宗像大社の辺津宮から

南東へ約8.8kmの地点に位置し、発掘調査で竪穴建物19棟、掘立柱建物3棟を確認している。年代の中心は、5世紀後半から6世紀で、陶器編年TK23・47型式の須恵器を伴い、滑石製白玉の生産を行っていた⁽³²⁾。この白玉が宗像沖ノ島祭祀に直結するかは明言できないものの、5世紀後半の時点で北九州の三郡山地から滑石の原石を持ち込み⁽³³⁾、ここで白玉に加工していた事実は重要で、すでに宗像地域において祭祀用の滑石製品を生産する体制の萌芽が認められる。この延長線上に7世紀後半以降の滑石製形代の生産は行われたのではないだろうか。

以上のように祭具・神饌の供給体制を考えると、5世紀後半から宗像の神々を祀る体制が段階的に整えられ、最終的に7世紀後半、神郡である宗像郡（評）の祭祀体制が成立したと推定できる。同時期に「記紀」編纂が始まり、そこで語られる宗像三女神の神格の最終的な確立と、神郡の祭祀体制の編成は対応関係にあったのだろう。

(8) 古代祭祀の変質

宗像・沖ノ島における4世紀後半から6世紀の祭祀は、古墳の副葬品と同様の貴重な品々を捧げ、年代は4世紀後半から末期（17・18・19号遺跡）、5世紀中頃（21号遺跡）、6世紀後半（7・8号遺跡）に明確な遺跡が残され、国家的な対外的なイベントに対応したと考えられる。それは、ヤマト王権が朝鮮半島諸国や中国大陸の王朝と活発な交通・交渉を行った時期に相当する。

ところが7世紀の22号遺跡を経て、7世紀後半から8世紀代の5号遺跡を画期として、8世紀には大量の祭具を集積する1号遺跡が成立した。そこでは、特に多量の須恵器と滑石製形代を使用しているため、神郡の祭具・祭料の供給体制に支えられた、恒例祭祀という性格へと変化していた可能性があり、その性格には国家的な祭祀に加え、地域の海上交通の祭祀という側面が明確になっていたのではないだろうか。

4. 古代祭祀の終焉と中世への移行

(1) 9・10世紀の宗像神

宗像・沖ノ島の古代祭祀が終焉を迎える9世紀から10世紀においても、宗像神への信仰と祭祀は、確実な史料で確認できる。『日本三代実録』貞観12年(870)2月15日、

新羅賊船二艘による筑前国での掠奪行為などに対処するため八幡大菩薩宮・香椎廟・宗像大神・甘南備神に奉幣している。その告文には「然るに我が日本朝は、神明の国なり。神明の助け護り賜はば、何の兵寇の近來すべき」とあり、祭祀は国家守護を目的としていた。

つづく10世紀、宗形朝臣氏能を宗像宮大宮司に補任する天元2年(979)2月14日付けの官符(『類聚符宣抄』第一、諸神宮司補任)には、宗像神と祭祀に関して次の一節がある。

謹みて旧例を検するに、去んぬる天慶年中よりこのかたの宮司を置かず、ただ神主職をもって雑々の執行の長となす。その時年慶度々の祭は、ただ山海に臨み漁獵を先となす。而して藤原純友の凶乱和平の後、正一位勲一等の階に登り坐す。ここに源清平朝臣、かの時大式たるの間、公家に言上し菩薩位を捧げ奉るべきの由、託宣頻りにし了ぬ。仍って、且つは託宣の旨を注し解文を言上し、且つは少式藤原朝臣惟遠を使となし菩薩位を授け奉る。しかよりこのかた、長く獵山・漁海の祠祀を停め、法施登覺の善根を修す。年首・歳末ならびに香花を薫じ、或は五日、或は三夜、僧侶を囁して法味を唱へ、かの田獵の料を移し、この功德の施に充つ⁽³⁴⁾。

天慶の乱が鎮定された後、宗像神には正一位・勲一等が送られた。この時に大宰大式であった源清平に大菩薩位を望む宗像神の託宣があり、大菩薩位が授けられた。これ以降、宗像神への祭祀は伝統的な「獵山・漁海の祠祀」から仏教法会となったという。宗像神は八幡大菩薩とともに、新羅賊船や天慶の乱に対処する国家守護の役割をはたしており、このため八幡神と同じ大菩薩位を望み授けられたと考えられる。これを契機に祭祀は仏教法会へと変化した。10世紀を画期として、宗像神への信仰・祭祀には明確に仏教的な要素が加わり、宗像神の古代的な神観と祭祀は大きく変化したのである。さらに、宗像神社(宗像宮)に大宮司が補任された意味は大きく、大宮司を頂点とする中世へ続く祭祀組織の起点となった。

(2) 浜堤の形成

この10世紀頃、辺津宮周辺的环境も大きく変化していた可能性が高い。古代の釣川河口には広い潟湖が存在し、当時の海岸線は、浜宮貝塚が立地する浜堤の北縁と

推定できた。現在、この浜堤の北、海までの間には2条の浜堤があり、現状の釣川河口は、この2条の浜堤を切断している。現状は、寛政3年(1791)に掛かり切郡奉行の富永軍次郎が行った「釣川浚え」の結果で、海浜の浜堤を開削して河口とした⁽³⁵⁾。それ以前の河道は、2条の浜堤に阻まれ、大きく東へ蛇行し玄界灘に流れ込んでいた。その旧河道は現在でも確認できる。

海浜の2条の浜堤が形成されると、釣川の流れが河口で阻まれ潟湖内での土砂堆積が進み、港湾に適した働きは著しく減退、もしくは失われることになったと予想できる。そこで問題となるのが、浜宮貝塚北側の浜堤の形成年代である。浜宮貝塚の漁撈集落が7世紀までは機能し、海浜の浜堤の開削が18世紀なので、形成年代は8世紀から18世紀までの間となる。

(3) 列島内の地形変化

釣川河口の浜堤の形成年代を、他地域の状況と比較して推定してみよう。

日本海沿岸では、10世紀以降、海浜の砂丘・浜堤が新たに形成される事例を複数確認できる。石川県羽咋市の寺家遺跡では、10世紀初頭に大規模な砂丘の移動があり、気多神社の神戸集落と考えられる寺家遺跡が短期間で埋没、11世紀には溝で区画された中世につながる屋敷群が成立し、15世紀に再び砂丘の移動で埋没している⁽³⁶⁾。この砂丘は、白山を給源とする土砂が手取川から日本海に流出し、風で海浜に吹き寄せられ形成されており、砂丘が移動した時期に、日本海への多量の土砂供給があったと考えられる。

福井県の敦賀でも10世紀以降に東西方向の浜堤が形成されたと考えられる。現在、敦賀湾に面する敦賀の海浜では浜堤が少なくとも4条は確認でき、最も南の浜堤には9世紀の櫛川・松島製塩遺跡と別宮遺跡祭祀遺構が立地し⁽³⁷⁾、この東側、笹の川の対岸に気比神宮は鎮座する。製塩遺跡の位置から、この浜堤の北縁が9世紀当時の海岸汀線と考えられ、その東に鎮座する気比神宮は海浜に鎮座していたことになる。こう推定すると、北側の浜堤は、10世紀以降に形成されたと判断できる。そして、正安3年(1301)、時宗の他阿真教は、気比神宮の西参道がぬかるみ人々が難渋していたので、海浜から砂を運び改修する「お砂持ち」を行った⁽³⁸⁾。これは、9世紀以前

は海浜にあった気比神宮の北側に、10世紀以降、新たに浜堤が形成され、気比神宮の西参道が後背低地となったためと推定でき、「お砂持ち」の砂は、その浜堤から運び込まれた。したがって、新たな浜堤の形成年代は、10世紀から13世紀までの間となる。

敦賀から南、深坂峠を越えた琵琶湖北岸の塩津港遺跡（滋賀県長浜市）では、9世紀後半から10世紀、琵琶湖の水位が上昇し一時的に水没していたことが発掘調査で確認されている⁽³⁹⁾。さらに、平安京に隣接する鴨川の河床面は10世紀に浸食で低下し、川岸には高さ2mの段丘崖が形成され、対照的に15世紀以降、鴨川周辺の氾濫原は土砂で埋没する。洪水などによる土砂堆積が進んだためと考えられる⁽⁴⁰⁾。

南関東の東京湾沿岸でも、10世紀以降と15世紀以降に海浜で浜堤が形成され、河川中流域で河床面の低下がおこっていた。東京湾東岸の浜堤上の千葉県富津市の狐塚遺跡では、7世紀から9世紀まで続いた集落が、10世紀から14世紀までの間に砂層で埋没、15世紀から17世紀までに再び砂層が堆積した。遺跡の北にある小糸川河口から吐出した土砂量が増加したためと考えられる。海浜の砂層堆積に対応するように、小糸川中流域の常代遺跡では、用水路の大溝が9世紀に機能を停止して埋没、隣接する郡遺跡で確認した小糸川支流の旧河道が10世紀と15世紀頃に埋没し移動している。また、東京湾奥の干潟に面する千葉県千葉市の居寒台遺跡では、7世紀後半から9世紀まで存続した集落が厚さ2mの多量の砂層に埋没しており、やはり10世紀以降に海浜で砂丘・浜堤が発達したと考えられる⁽⁴¹⁾。

（４）気象変動と環境変化

以上の状況から、8世紀から18世紀までの間の2時期に、日本列島では海浜や河川周辺の地形が大きく変化したと考えられる。一つは9世紀後半から10世紀頃であり、もう一つが15世紀から17世紀頃である。宗像の釣川河口に形成された2条の浜堤は、上記の2時期、具体的には10世紀頃と15世紀から17世紀頃に形成された可能性が高いだろう。

この地形変化の要因としては、突発的な出水（洪水）による河川の浸食と多量の土砂の海への流出が考えられる。近年、これに関連する気候変動のデータが明らかに

されている。中塚武氏が復元した「樹木年輪セルロース酸素同位体比による降水量変動の復元データ」（以後、「年輪による年別降雨量傾向」）で、樹木の年輪が形成される夏季の湿潤・乾燥の傾向が、過去2,600年間にわたり一年単位で明らかとなった⁽⁴²⁾。この「年輪による年別降雨量傾向」（表1）を見ると、9世紀後半から10世紀にかけては、顕著な乾燥傾向となる一方で極端に湿潤となる年があり、早魃が続くなかで突発的な出水（洪水）が発生していたと考えられる。また、15世紀から17世紀にかけては急激な湿潤化の傾向が認められる。

（５）災害と宗教・祭祀

特に、10世紀の年別の降雨量傾向を細かく見てみると、それは『日本紀略』などが記す9世紀末期から10世紀代の早魃・洪水記事との整合性は高い（表2）。例えば、10世紀の延喜10年（910）・天曆2年（948）・同8年（954）・天禄2年（971）・永延元年（987）は乾燥傾向を示す。『日本紀略』には、記録が残らない天曆8年を除き炎旱・祈雨の記事がある。特に前後の数百年にない強い乾燥傾向を示すのが天曆2年で、『日本紀略』によると5月から7月まで長期の早魃が続いていた。

一方で、9世紀後半の貞観9年（867）・寛平8年（896）、10世紀の延喜13年（913）・康保2年（965）と正暦3年（992）は極端な湿潤傾向を示す。『日本三代実録』によると貞観9年は4月から5月にかけて霖雨が止まず、5月4日には「大雨洪水、往還通じ難し」とあり、平安京中で大規模な洪水が発生していた。続いて『日本紀略』をみると、寛平8年は洪水・霖雨、延喜13年は諸国不堪と風水の損を記し、天元2年・正暦3年は大雨・洪水の記事が並び、康保2年は大風による洪水を記録する。10世紀の自然災害は、頻発・激甚化する傾向があり、その影響は農業生産に大きなダメージを与え飢饉が発生、平安京への人口流入がおこっていた可能性が高い。その結果、京内では早魃・洪水・飢饉と連動して感染症が蔓延しており、災害の連鎖が発生していた⁽⁴³⁾。

このような災害に対して、朝廷は積極的に宗教的な対応を行っている。その典型が、祈雨・止雨を目的とした主要な神社への奉幣であり、この過程で十六社奉幣・二十二社奉幣という中世へと続く新たな祭祀制度が成立した⁽⁴⁴⁾。もう一つが、仏教的な対応である。護国経典で

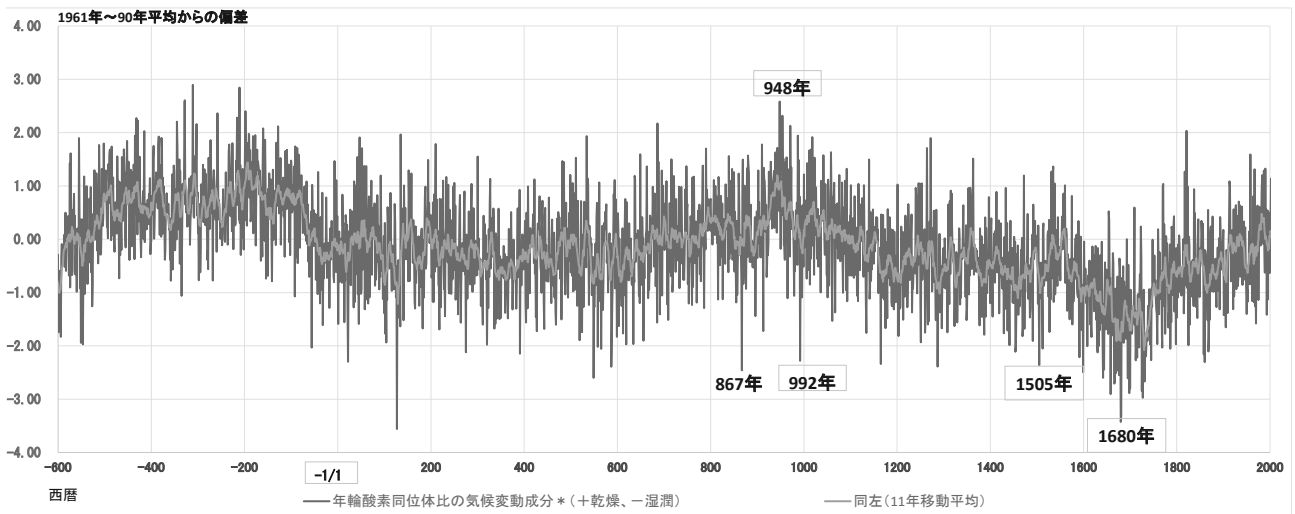
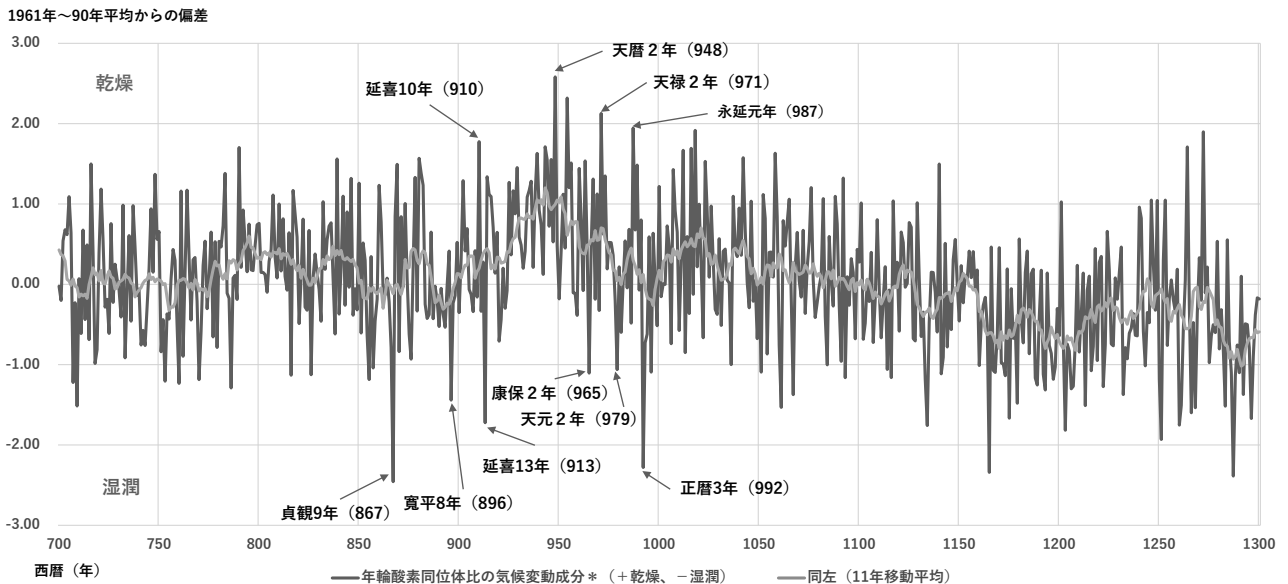


表1 年輪による年別降雨量傾向



夏期の降雨量の指標となる年輪セルロース酸素同位体比の気候成分の変動。中塚武「第1章 中世における気候変動の概要」『気候変動から読みなおす日本史4 気候変動と中世社会』（臨川書店、2020）による。

表2 8世紀～13世紀の年輪による年別降雨量傾向

ある『大般若経（『大般若波羅蜜多経』）』と『仁王経（『仁王護国般若波羅蜜多経』）』の読誦・転読である。なかでも『仁王経』は、9世紀前半に空海が不空の重訳経を将来し、これにもとづき、天長2年（825）には、大嘗祭と対をなし国内の平安を祈る「一代一度の大仁王会」が始まった⁽⁴⁵⁾。

(6) 『仁王経』と日本の神祇

朝廷は頻発する災害（旱魃・霖雨・疫病蔓延）に対処

するため、『仁王経』の護国品にもとづき、日本の神々へ同経を転読し聞かせて、神々を国家の守護神とする対応をとるようになる。『仁王経』の該当部分は、以下のとおりである。

時に世尊、波斯匿王等諸大国王にのりたまはく。諦かに聴き、諦かに聴け。我汝等のために護国の法を説かん。一切国土もし乱れんとする時、諸の災難あり賊来りて破壊せん。汝等諸王まさに此の般若波羅蜜多を受持・読誦し、道場を嚴飾し、百仏像・百菩



図4 釣川河口・津屋崎干潟の古代末期以降の地形復元図

薩像・百師子座を置き、百法師を請ひ此の経を解説せよ。諸座の前に種種の香を焼き、諸雑花を散じ、衣服・臥具・飲食・湯薬・房舎・床座一切の供事を広大供養せよ。日ごとに二時、此の経を講読せよ。もし王・大臣・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、聴受・誦誦し如法に修行せば災難は即滅せん。大王諸国土中に無量鬼神あり。一一また無量眷属あり。もし是の経を聞けば汝の国土を護らん。もし国乱れんとすれば鬼神まづ乱る。鬼神乱るが故に即ち万人乱る。まさに盜賊起こりて百姓喪亡することあるべし。国王・太子・王子・百官、相互に是非し、天地、変怪し、日月・衆星、時を失ひ度を失ひ、大火・大水及び大風等あらん。是の諸難起こらば、まさに皆、此の般若波羅蜜多を受持・講説すべし。もし是の経を受持・誦誦せば、一切所求の官位・富饒・男女・慧解・行来は随意にして、人天の果報、皆満足を得て、疾疫・厄難、即ち除愈することを得る⁽⁴⁶⁾。

下線部の「大王」に天皇を当てれば、「諸国土中の無量

鬼神・無量眷属」は日本の国土の神祇に相当する。この内容に、直接対応すると考えられるのが、『日本紀略』の次の記事である。

◎延喜二十二年、五月二十九日、名僧を十一社に請ひて三箇日を限り仁王経を転読せしむ。京中の病厄を消さんがためなり。

◎天曆二年、六月二日、七社において今日より三箇日を限りて仁王経を転読せしむ。雨を祈るなり。五日、この日、諸社・龍穴・東大寺において、今日より三箇日を限りて、仁王経を転読せしむ。甘雨を祈るなり。

ここでは、明確に疫病の防除・鎮静化と旱魃の収束を目的に、主要な神社で『仁王経』を転読しており、『仁王経』の仏教論理で日本の神々に国土守護を願っていたのである⁽⁴⁷⁾。

(7) 勧請される神々

続く11世紀には日本の神々を法会の場に招く「勧請」

を行うようになる。この最古の例を、上島亨氏は長保4年(1002)に始まる「最勝講」とし、「王城鎮守諸大明神」として伊勢・石清水八幡宮・賀茂社・松尾社など二十一社の神々を勧請した⁽⁴⁸⁾。「勧請」は仏教用語であり、本来は仏に説法を請い、世に永久に住み人々を救済することを請願する意味で、法会の道場に仏・菩薩の来臨を請願することも含まれる⁽⁴⁹⁾。日本の神々が勧請の対象となったことは、仏教の天部と同様、名を唱えることで神霊が来臨する(神霊を招くことができる)という性格が、日本の神々の神観に加わったことを示している。

古代日本の神観の基礎には、環境の働きにもとづくという性格があった。しかし、10世紀の自然災害の頻発・激甚化により、古代の環境そのものが大きく変化し、そこに人々は『仁王経』が説く神々(鬼神)の乱れを実感したのである。このため神へと『仁王経』を転読し、国土の守護神としての働きを願ったのである。この延長上に最勝講に勧請した「王城鎮守諸大明神」という神観はある。

勧請する神観は、12世紀前半には地方の神々へ適応されていた。それを示すのが、滋賀県の塩津港遺跡の神社遺構から出土した「起請文木札」である。そこに記された起請文は、冒頭の「再拜」の文字に続けて、勧請する天部と神々を列挙する「神文」を書く。最古の紀年銘「保延三年(1137)七月二十九日」の起請文木札では、まず上界として梵天・帝釈天・四天王といった仏教の天部をあげる。次に下界の神々として八幡大菩薩・上下賀茂社など十八大明神を「王城鎮守」として、さらに「当国鎮守山王七社」、「当所鎮守五所大明神・稲懸祝山・津明神・若宮三所」を列挙する。「鎮守の神」を勧請するという神観は、12世紀前半(保延3年)の時点で、平安京の王城鎮守だけでなく、すでに地方の神々へも適応されていたのである。この結果、12世紀には各国内の神々を国府の近くに勧請し祀る「総社」が成立し、あわせて神々を勧請するための「国内神名帳」が各国で作成されることとなった⁽⁵⁰⁾。

(8) 宗像三神の合祭

以上の変化は、古代の宗像の神々が中世へと移行する上で、大きな影響を与えたと考えられる。特に、10世紀頃に想定できる釣川河口での新たな浜堤の形成は潟湖の

環境を大きく変化させた。釣川河口の流れは大きく蛇行し洪水を頻発させ、土砂堆積による潟湖の陸化が進んだと考えられる(図4)。つまり、港湾に適した辺津宮の神の働きは急速に失われ、当時の人々は『仁王経』が説く「神の乱れ」と認識したのではないだろうか。

これと並行して、『仁王経』の「国土を守護する鬼神」は日本国内の神々に当てはめられ、12世紀前半には地方の神々まで仏教的な勧請の対象となっていた。この神観の変化と関連するのが、中世の宗像社辺津宮の境内景観である。中世の辺津宮境内では、第一宮・第二宮・第三宮の社殿が並び建ち三神を合祭する景観が明確となる(図5)。最古の記録『建治三年(1277)御鎮座次第』によると、第一宮・第二宮・第三宮の別称と祭神は、以下の通りとなる⁽⁵¹⁾。

第一宮：惣社三所、本殿に三神を合祭し、中ノ間内陣に第一大菩薩(田心姫)を祀る。

第二宮：中殿、本殿に三神を合祭し、中ノ間内陣に第二大菩薩(湍津姫)を祀る。

第三宮：地主、本殿内陣に第三大菩薩(市杵島姫命)を祀る。

宗像三神を、辺津宮で祀るようになった時期は、鎌倉時代の『宗像大菩薩縁起』では天応元年(781)に大宮司の宗像氏男の屋敷に「社壇を点じて茅草を以て之を葺き三所の神明を崇め奉る」とする⁽⁵²⁾。しかし、この伝承は、10世紀に始まる大宮司との関係で語られているため、そのまま歴史的な内容として評価するのは難しい。確実な資料としては「奉施入宗像宮第三御前賣前建仁元年(辛酉)藤原支房」の銘文を刻む第三宮の石造狛犬があり⁽⁵³⁾、建仁元年(1201)以前、12世紀代には第三宮は成立していたのは間違いない。さらに、文永9年(1272)9月3日付けの「宗像太神宮僧官御燈衆等起請文」には、大治年中(1126~30)に宗像社の根本神領、須恵村を第三宮の「長日不断香油燈明料所」と定めたことと記している⁽⁵⁴⁾。ここから第三宮は12世紀前半には成立していたことになり、したがって第一宮・二宮についても同様に成立していたと考えてよいだろう。先にみたとおり、10世紀には宗像神に菩薩位が奉られ仏教信仰の影響が明確になっているので、その後さほど時を経ない段階の11世紀頃には、辺津宮における三神合祭の動きは始まっていたのではないだろうか。

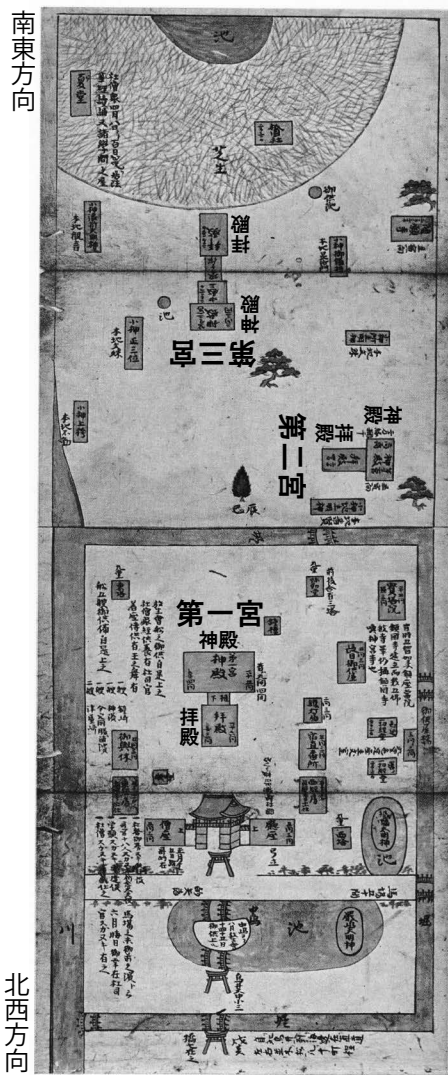


図5 田島宮(辺津宮)社頭古絵図
(宗像大社蔵)

第一宮を「惣社」とする名称は、当時、各国の国府に国内の神祇を勧請して造営され始めていた「総社」と通じ、やはり、これと近い年代、11世紀後半から12世紀初頭にかけて辺津宮境内に沖津宮・中津宮の神々を勧請し三神を合祭する辺津宮の境内景観は最終的に成立したのではないかと考えられる。自然環境の働きを基盤とする古代の神観は、10世紀の菩薩位奉授と自然環境の変化・災害を受けて仏教の勧請を適応させ、自然環境の働きから独立した祭祀の場、三神を合祭する中世の境内景観を生み出したといえるであろう。

(9) 中世神領の編成

中世へ連続する境内景観の成立と並行して進んだのが、大宮司を頂点とする祭祀組織と、宗像社を経済的に支える神領の編成であったと考えられる。特に中核となる根本神領とされたのが、土穴・稲本・須恵・朝町の村々である。土穴・稲本・須恵は、院政期の大宮司であった氏高と氏房の寄進により成立、12世紀中頃までには神領となっていたと考えられる⁽⁵⁵⁾。これらの村々は、釣川の中流域に集中し、この地域には5世紀代に滑石製祭具を製作していた富地原神屋崎遺跡、5世紀末期から8世紀に操業した須恵窯跡群を含む宗像窯跡群がある⁽⁵⁶⁾。特に、須恵窯跡群は、須恵の地名から根本神領である須恵と地域的には重なる(図4)。宗像社の根本神領は、古墳時代(5・6世紀)以来の伝統的なつながりを持つ地域を再編成して成立した可能性が高い。

類似した状況は、宗像郡と同じく神郡となった下総国香取郡内で確認できる。応保2年(1162)6月3日付け、香取社大禰宜の大中臣真房の譲り状は、私領田畑、大禰宜職と社領を嫡子に譲ったものである。そこには「大畠村」「吉原村」の村名が確認できる。この大畠・吉原を記した墨書土器が、千葉県香取市の吉原三王遺跡の古代集落跡から出土した。8世紀後半に「吉原大畠」、9世紀には「大畠」「吉原仲家」があり、同遺跡の場所、もしくは近隣に大畠・吉原の地名が存在したと考えられる。また、吉原三王遺跡からは「香取郡大坏郷中臣人成女之替承口」と書かれた9世紀前半の墨書土器が出土した。「大坏郷」は、「天平勝宝三年五月二十一日付け下総国司解 申貢上逃官賤事」(正倉院文書)に記された「香取郡神戸大槻郷」に相当し、吉原三王遺跡の古代集落は古代の香取神宮の神戸に含まれていたことがわかる。吉原三王遺跡の古代集落は古墳時代後期の6世紀後半に形成され、11世紀代まで堅穴建物を中心に維持されていた⁽⁵⁷⁾。この古代集落は11世紀後半から12世紀前半までに再編成され、中世の香取社領を構成する「大畠村」「吉原村」は成立していたと考えられる。

中世宗像社の神領のなかで、古墳時代以来の関係が認められる地域に立地し、根本神領とされた土穴・稲本・須恵・朝町の村々についても同様な流れを推定できるのではないだろうか。そこには大化前代からの伝統が色濃く残るといえる、神郡に共通する歴史的な背景が作用して

いたのである。

(10) 高田牧と日宋貿易

11世紀、中世の宗像社への動きが明確となるなか、宗像で新たな日宋貿易の拠点が登場する。それが高田牧である。高田牧は、藤原実資が永祚元年（989）に藤原頼忠から受け継いだもので、管理者の牧司には、宗像信遠・妙忠・武行といった、宗像社の大宮司をつとめる宗像氏出身者がなっていた⁽⁵⁸⁾。その一人、宗像妙忠は、藤原実資の『小右記』万寿2年（1025）8月7日条によると、高田牧の年貢とともに、唐物と考えられる「青瑠璃瓶二口・茶垵壺三口」を献じている⁽⁵⁹⁾。高田牧は唐物を入手できる日宋貿易の拠点となっていたことを示している。

この高田牧の中核となった場所について、服部英雄氏は福津市津屋崎の「在自唐坊」であり、隣接する在自西ノ後遺跡から出土した白磁皿の墨書を「高田」と読むべきとする。「唐坊」の地名と在自西ノ後遺跡の貿易陶磁器からわかるように、11世紀から13世紀にかけて、ここが貿易拠点となっていたことは間違いないだろう。服部氏は、高田牧の唐坊こそ玄界灘の小呂島・壱岐とつながった、博多を経由しない日宋貿易ルートの拠点と指摘した⁽⁶⁰⁾。「唐坊」と在自西ノ後遺跡は、津屋崎の汐入干潟（津屋崎干潟）の南西の入り口に接する微高地にある。津屋崎干潟は、釣川河口の地形と同様に、古代においては広い潟湖（ラグーン）であったと推測でき、ここも辺津宮が面する釣川河口の潟湖とともに良好な港湾機能を果たしていたと考えられる（図4）。

ところが先にみたとおり、10世紀以降、釣川の河口に新たに浜堤が形成され始め、これにより釣川河口の潟湖の土砂堆積が進み、港湾としての機能は低下したと推測できる。同時に津屋崎干潟の西で「渡」の島につながる砂洲も発達し、この結果、広大な津屋崎干潟の潟湖内は、より安定した港湾機能を果たすようになったと考えられる。これを受けて、水上交通の拠点的な港湾機能は、津屋崎干潟の潟湖へと移り、日宋貿易の拠点となった。宋商人の存在を示唆する「唐坊」の地名と在自西ノ後遺跡の立地は、それに対応するものであったといっていよう。

(11) 中世の宗像社と沖ノ島

これとは対照的に、釣川河口の辺津宮の境内は祭祀の場に特化していったと考えられる。大宮司の祭祀の拠点として、辺津宮に第一・二・三宮が並び建ち宗像三神を合祭する境内景観が成立した。宗像社の大宮司の宗像氏は、高田牧の牧司を務め日宋貿易に深く関与し中世へと連続する権益を確立させた。その過程のなかで中世の辺津宮の境内景観は形成されたのである。

この傾向は、沖ノ島においては、さらに顕著に表れた。日宋の貿易ルートが壱岐・小呂島・宗像（津屋崎）を結ぶ形となると、沖ノ島はそのルートから外れ、古代以来の神が坐す場としての機能のみが残されることとなった。さらに主要な祭祀は、「惣社」となった辺津宮へと統合された。この結果、沖ノ島（沖津宮）は、伝統的な神の存在を象徴する場であり、通常では足を踏み入れない「禁足地」とでもいべき聖域となり、中世以降へと信仰は受け継がれたと考えられる。

5. まとめ

以上、宗像・沖ノ島の古代祭祀と中世への変容について考察してきたが、この結果にもとづき、古墳時代の4世紀頃から中世への移行期である12世紀までの流れをⅠ～Ⅴ期に整理し、まとめたい。

Ⅰ期（4世紀後半～5世紀）：玄界灘の航海で海上の目標となる沖ノ島（特に最高峰の一ノ岳）の働きに神の存在を直観し、沖ノ島でヤマト王権による祭祀が始まる。これに対応するのがⅠ号巨岩周辺の17号遺跡、F号巨岩上の21号遺跡である。また、大島、九州本土の釣川河口でも古墳時代の祭祀関連の遺物が確認されているので、大島と釣川河口での祭祀の淵源も沖ノ島祭祀遺跡と同様に古墳時代まで遡る可能性は高い。この場合、大島は沖ノ島とともに海上目標としての働きに、釣川河口はそこに復元できる港湾に適した潟湖の働きに、それぞれ神を直観して祭祀の場が設けられたと考えられる。

沖ノ島で祭祀遺跡が明確となる4世紀後半から5世紀中頃は、ヤマト王権と朝鮮半島諸国・中国王朝との交通・交流が活発化しており、ヤマト王権による祭祀遺跡の成立には、これが大きな歴史的な要因となっていたと考え

られる。

Ⅱ期（6世紀後半～7世紀）：6世紀後半、D号巨岩々陰の7号・8号遺跡では、銅鏡、装飾性が高い倭系飾り大刀・胡籙・馬具、盾、鉾など神宮の神宝や幣帛と共通する品々が納められるようになり、7世紀代と考えられるM号巨岩々陰の22号遺跡でも神宮神宝と類似する金銅製紡織具が納められていた。この段階では神宮の神宝と共通する供献品が明確となり、ヤマト王権の中枢における祭祀との直接的なつながりが窺える。「記紀」に記された、皇祖神と関係する宗像神の神格が形成され始めていた可能性を指摘できる。この時期の祭祀と神格の形成には欽明朝から推古朝にかけての外交や海上交通の動向が影響していたのではないだろうか。

また、鹿島・香取神宮のように神郡が設定された神社では、それを支える神戸の原形は5世紀後半から6世紀後半までに成立する。宗像においても浜宮貝塚、須恵窯跡群（宗像窯跡群）、冨地原神崎遺跡の状況から、同様に神戸集落の萌芽を推定できる。

Ⅲ期（7世紀後半～9世紀）：7世紀後半を画期に、半岩陰・半露天の5号遺跡では土器（須恵器）を多用する祭祀形態となり、神宮と同じ祭祀の体制が整えられた。多量の土器が伴うことから、この段階から恒例の祭祀の執行を推定でき、並行して大島御嶽山遺跡、辺津宮周辺の祭祀の場が明確となる。この7世紀末期には「記紀」の編纂が始まり、宗像三女神の神格が確立し、神郡が設置された。

さらに8・9世紀代の露天の1号遺跡では、船形・人形・馬形の滑石製形代を多用しており、国家的な祭祀だけでなく、地域間の海上交通に伴う祭祀が加わったと考えられる。

Ⅳ期（10・11世紀）：10世紀前半、天慶の乱の鎮定を契機として宗像神に大菩薩位が授けられ、国土守護を目的として祭祀に仏教的な要素が導入される。加えて、大宮司が補任され、中世宗像社へと連続する祭祀組織が形成され始めた。そして、この段階までに沖ノ島で執行する古代祭祀は終焉する。また、9世紀後半から10世紀にかけての環境変化により釣川の河口に新たな浜堤が形成され

釣川河口の潟湖の堆積が進み、港湾に適した働きが減少したと考えられる。

10世紀、日本列島では災害と環境変化により、自然環境の働きに基礎を置く古代の神観は変化し、『仁王経』が説く国土を守護するという仏教的な解釈が加えられた。宗像三神への信仰・祭祀の変質は、これと連動するものであったと考えられる。

Ⅴ期（11・12世紀）：11世紀から12世紀にかけて、釣川河口の潟湖に替わり、宗像神社（宗像社）辺津宮の西側、津屋崎干潟の広い潟湖が日宋貿易の拠点的な港湾となり、その入り口付近に位置する在自唐坊が高田牧の中核として機能した。宗像社の大宮司、宗像氏は高田牧の牧司にも任じ、直接、宋と結ばれた日宋貿易に積極的に関与していたと考えられる。

大宮司の拠点である宗像社辺津宮の境内には、12世紀までに第一・第二・第三宮が並び建ち、宗像三女神を合祭する境内景観が成立する。特に第一宮は「惣社三所」と称され、沖津宮・中津宮をまとめた惣社（総社）としての性格が明確となった。おそらく、これと連動して沖津宮が鎮座する沖ノ島は、通常は足を踏み入れない禁足地的な特別な聖域へと変化したのではないだろうか。さらに同時期、古代以来の神戸を基礎として根本神領が成立し、これを核として中世宗像社の神領は形成された。

古代の宗像・沖ノ島の祭祀は、10世紀を画期に大きく変化し、11・12世紀には中世へとつながる要素が形成された。しかし、その信仰・祭祀の基礎には、沖ノ島・大島・釣川河口という、宗像三女神の信仰の基礎となった場所と環境への特別な意識は流れ続けていたのである。

注

(1) 宗像・沖ノ島の古代祭祀については、①岩上祭祀、②岩陰祭祀、③半岩陰・半露天、④露天祭祀の順で変遷したと理解されている。

小田富士雄 1979「報告編第4章 沖ノ島祭祀遺跡の時代と祭祀形態」『宗像沖ノ島』 宗像大社復興期成会

(2) 広瀬和雄 2010『カミ観念と古代国家』 角川学芸出版

(3) 近年の代表的な研究成果としては、上島享 2010『日本中世社会の形成と王権』 名古屋大学出版会がある。

(4) 岡田莊司 1995『平安時代の国家と祭祀』 続群書類従完成会

(5) E・フラー・トリー(寺町朋子訳) 2018『神は、脳がつくった』 ダイアモンド社

(6) ダニエル・C・デネット(阿部文彦訳) 2010『解明される宗教—進化論的アプローチ』 青土社

(7) ジェシー・ベリング(鈴木光太郎訳) 2012『ヒトはなぜ神を信じなのか 信仰する本能』 化学同人

(8) パスカル・ボイヤール(鈴木光太郎+中村潔訳) 2008『神はなぜいるのか?』 NTT出版

(9) スチュアート・E・ガスリー(藤井修平訳) 2016「神仏はなぜ人の形をしているのか—擬人観の認知科学」 國學院大學日本文化研究所編・井上順孝責任編集『〈日本文化〉はどこにあるか』 春秋社

(10)『古事記』、『日本書紀』の出典は、下記の文献による。
山口佳紀・神野志隆光 校注・訳 1997『古事記』(新編日本古典文学全集1) 小学館

小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守 校注・訳 1994『日本書紀①』(新編日本古典全集2) 小学館

(11) 虎尾俊哉編 2000『訳注日本史料 延喜式 上』 集英社

(12) 胡麻鶴醇之・西島一郎校注 1979『神道大系・神宮編—皇太神宮儀式帳・止由氣儀式帳・太神宮雜事記』 財団法人神道大系編纂会。『皇太神宮儀式帳』は、基本的にこの文献による。

(13) 秋道智彌氏が、本報告で指摘する「ヤマアテ・シマアテ」と通ずる航海方法が考えられる。

秋道智彌 2023「先史・古代の東アジア海域世界—航海と海域ネットワークから見た世界遺産モデル—」(本報告収録論文)。

(14) 宗像市教育委員会世界遺産課「近年の宗像市における調査・研究事業について」(2022年12月17・18日「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群特別研究事業 総括検討会資料)。

(15) 豊崎晃史・山田広幸・白木英敏・山崎純男・野木雄大編

著 2018『浜宮貝塚Ⅰ』 宗像市教育委員会

(16) 白木英敏 2018「御嶽山と下高宮の祭祀遺跡」春成秀爾編『世界のなかの沖ノ島』 雄山閣

(17) 大高広和氏は、「大島の御嶽山や本土の下高宮周辺の空間は、七世紀以前から海上交通との関りで祭祀が行われる下地があり、七世紀の後半までに沖ノ島を含む三か所で三女神を祀るという宗像独自の信仰形態が確立された」と指摘する。この見解は、人間の認知機能でみた宗像三神の神観と整合的である。
大高広和 2022「沖ノ島と宗像大社」吉村武彦・川尻秋生・松木武彦編『地域の古代日本 筑紫と南島』 KADOKAWA

(18) 宗像・沖ノ島祭祀遺跡の遺構・遺物については、基本的に下記の報告書による。

宗像大社復興期成会編 1958『沖ノ島 宗像大社沖津宮祭祀遺跡』 宗像大社復興期成会

宗像大社復興期成会編 1961『続沖ノ島』 宗像大社復興期成会

宗像大社復興期成会編 1979『宗像沖ノ島』 宗像大社復興期成会

(19) 井上光貞 1984「第二編 古代沖ノ島の祭祀」『日本古代の王権と祭祀』 東京大学出版会

(20) 山田広幸・福嶋真貴子・降幡順子編著 2012『大島御嶽山遺跡』 宗像市教育委員会

(21) 註15文献に同じ。

(22) 白木英敏・岡田裕之編著 2001『三郎丸堂ノ上C』 宗像市教育委員会

(23) 上村安生・竹田憲治編著 1995『北野遺跡(第2・3・4次)発掘調査報告書』 三重県埋蔵文化財センター

(24)『令集解』巻16(選叙令)には、「凡そ同司の主典以上には、三等以上の親を用ゐること得じ。(中略)釋に云はく。養老七年十一月十六日太政官處分。伊勢國渡相郡、竹郡、安房國安房郡、出雲國意宇郡、筑紫國宗形郡、常陸國鹿嶋郡、下総國香取郡、紀伊國名草郡、合はせて八神郡。三等以上の親を連任するを聴すなり」(新訂増補『国史大系』本を筆者が訓読)とあり、宗形(宗像)郡は、他の八神郡とともに養老17年には神郡となっていた。

(25) 皇学館大学神道研究所編 2012『訓読註釋 儀式 踐祚大嘗祭儀』 思文閣出版

笹生 衛 2019「古代大嘗宮の構造と起源—祭式と考古資料から考える祭祀の性格—」『神道宗教』第254・255号、特集大嘗祭、神道宗教学会

(26) 濱 隆造・下江健太・福島雅儀・八峠 興・原田克美・

坂本嘉和・梅村大輔編著 2018『鳥取県鳥取市青谷町 青谷横木遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』 鳥取県埋蔵文化財センター

(27) 坂本嘉和 2021「鳥取県鳥取市青谷町養郷遺跡群・善田傍示ヶ崎遺跡」『古代交通研究会 第21回大会資料集 古代・中世移行期の交通と祭祀—北陸道・山陽道の水上交通・陸上交通を中心に—』 古代交通研究会

(28)『肥前国風土記』佐嘉郡条〔此の川上に荒ぶる神有りき。来る人の半ばを生かし、半ば殺す。茲に、県主等が祖、大荒田占問ふ。時に土蜘蛛、大山田女・狭山田女といふ有り。二の女子云はく、「下田村の土を取りて、人形・馬形を作り、此の神を祭祀らば、必ず応和がむ」といふ。大荒田、即ち其の辞の随に此の神を祭るに、神、此の祭を散けて、遂に応和ぐ〕。

沖森卓也・佐藤 信・矢嶋 泉編著 2016『風土記』 山川出版

(29) 金子裕之 1985「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告第7集 共同研究「古代の祭祀と信仰」』 国立歴史民俗博物館

(30) 笹生 衛 2012「人形と祓物—土製人形の系譜と祓の性格を中心に—」『國學院雑誌』113巻11号 國學院大學

笹生 衛 2014「祓う人形・捧げる人形—人形の源流と信仰—」日本人形玩具学会誌『人形玩具研究 かたち・あそび』第24号 日本人形玩具学会

(31) 笹生 衛 2012『日本古代の祭祀考古学』 吉川弘文館

(32) 白木英敏編著 1996『富地原神屋埼 福岡県宗像市富地原所在遺跡の発掘調査報告書』 宗像市教育委員会

(33) 清喜裕二 2018「沖ノ島の滑石製品」春成秀爾編『世界のなかの沖ノ島』 雄山閣

(34) 新訂増補『国史大系』本を筆者が訓読。

(35) 宗像市史編纂委員会編 1999『宗像市史 通史編 第2巻 古代・中世・近世』 宗像市

(36) 中野智幸・牧野直樹編 2010『寺家遺跡 発掘調査報告書 総括編』 羽咋市教育委員会

(37) 敦賀市教育委員会編 1988『松原遺跡—昭和63年度櫛川・別宮神社周辺地区の分布および試掘調査—』 敦賀市教育委員会

(38) 他阿真教の「お砂持ち」については『遊行上人絵伝』による。遊行寺宝物館・神奈川県立歴史博物館編 2019『特別展 真教と時宗』 時宗・時宗総本山清浄光寺

(39) 横田洋三・濱修編 2019『塩津港遺跡1〔遺構編〕・〔遺物編〕』 滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会

(40) 河角龍典 2004「歴史時代における京都の洪水と氾濫原の地形変化—遺跡に記録された災害情報を用いた水害史の再構築—」『京都歴史災害研究』第1号 立命館大学歴史都市防災研究所

(41) 笹生 衛 2020「第二章 古代・中世の景観変化と気候変動—東京湾東岸における沖積平野の変遷を中心に—」中塚武監修、伊藤啓介・田村憲美・水野章二『気候変動から読みなおす日本史4 気候変動と中世社会』 臨川書店

(42) 中塚 武 2020「第一部、第一章 中世における気候変動の概要」中塚 武監修、伊藤啓介・田村憲美・水野章二『気候変動から読みなおす日本史4 気候変動と中世社会』 臨川書店

(43) 笹生 衛 2022「〔災い〕神を変える一九・十世紀における災害対応と神の勧請—」『神道宗教』第264・265号 神道宗教学会

(44) 註4文献に同じ。

(45) 西本昌弘 2020『空海と弘仁皇帝の時代』 塙書房

(46)『大正新脩大藏經』No. 246を筆者が訓読。

(47) 註43文献に同じ。

(48) 註3、上島文献に同じ。

(49) 中村 元監修 1962『新・佛教辞典 第三版』誠信書房

(50) 水谷 類 1985「総社の成立」『駿台史学』第63号 駿台史学会

(51) 宗像神社復興期成会編 1961『宗像神社史 上巻』 宗像神社復興期成会

(52) 註51文献に同じ。

(53) 註51文献に同じ。

(54) 宗像神社復興期成会編 1966『宗像神社史 下巻』 宗像神社復興期成会

(55) 註54文献に同じ。

(56) 花田勝弘 2010「宗像地域の古代史と遺跡概説」『むなかた電子博物館紀要』第2号 むなかた電子博物館運営委員会

(57) 笹生 衛 2012『日本古代の祭祀考古学』 吉川弘文館

(58) 註35文献に同じ。

(59) 国立歴史民俗博物館データベース「khirin」による。

(60) 服部英雄 2008「宗像大宮司と日宋貿易—筑紫国宗像唐坊・小呂島・高田牧—」九州史学研究会編『境界からみた内と外』 岩田書院

媽祖以前の航海信仰—泗洲大師を中心に—

王 海燕 浙江大学

要旨：中国の航海信仰は固有の海神信仰を基礎に、神異を崇拜しつつ、海竜王信仰や観音信仰など仏教の航海信仰を受容した。僧伽信仰は水上交通要地の泗州に出現した信仰であり、実在した唐代の高僧の僧伽和尚を神異僧ないし観音の化身として崇拜し、皇帝から庶民層まで、都から多くの地方まで広範に広がってゆくのである。僧伽信仰は登州など沿海部に浸透している場合は、在地社会に固有航海信仰が存在しているため、民間で必ずしも海神の立場として信仰されるわけではない。宋代の民間信仰においては、水上交通の繁栄とともに、内陸水運の守護神とみなされる僧伽和尚は、竜神信仰の要素を与えられて海神の立場に位置づけられており、泗洲大師という尊称で航海守護神として多くの海商に信仰されている。僧伽信仰あるいは泗洲大師信仰の展開は中国の固有信仰と仏教の信仰との融合を反映するものである。

キーワード：航海信仰 泗洲大師 僧伽和尚 神異僧 観音

はじめに

中国古代の信仰書と目される『山海経』には、海神は、黄帝の子孫とされ、海の中の島におり、人面鳥身で両耳に蛇をかけ、両足に蛇を踏んでおり、風神でもあると語られる⁽¹⁾。半人半鳥の姿は言うまでもなく、自然神から創作されたものである。秦漢時代に至って、近海の航行が発展してきた。『史記』『漢書』には、仙人のいる蓬萊・方丈・瀛洲の三神山は渤海の中にあり、海岸から遠くないが、船が近づくと、風をおこして船を寄せ付けないという物語が記されている⁽²⁾。中国の言語文字で「仙」と「神」の意味はほぼ同じであるため、「仙人」と「神人」も区別なく、後世に「神仙」と総称される⁽³⁾。三神山神話は、秦の始皇帝と漢の武帝が不老不死の薬を求めた伝説につながっているが、「仙人」は風を左右して船の航行に影響を及ぼすというシーンがあるから、航海神の性格を与えられるともいえよう。

一方、仏経に描かれている観音や竜王など海神あるいは航海守護神は仏教の伝来とともに、僧侶の講説と寺院の仏像・仏絵などで伝播し、中国の航海信仰を受容された。例を挙げると、東晋の僧侶である法顕は、隆安三年(始弘元年、399)に長安から出発し、陸路で六年をかけて天竺に着き、六年間天竺に滞在して巡礼求法した後、商人の船を利用して海路で帰国の途についた。そして、三年をかけてようやく青州に到着した。法顕の書いた『仏

国記』(『法顕伝』などとも呼ばれる)によれば、獅子国から耶婆提国までの航海は、船が大風で壊されて浸水したため、沈没防止のために人々が荷物を海に投棄する際に、法顕は自分の持っている仏経と仏像が商人に捨てられることを怖がって、ただ一心に観世音および漢地の衆僧に願い、無事を祈った(「唯一心念観世音および漢地衆僧、我遠行求法、願威神帰流、得到所止」)。また、法顕は他の商人の船で耶婆提国から広州へ向かう途中も黒い暴風雨に遭遇して、再び一心に観世音および漢地の衆僧に願った(「亦一心念観世音及漢地衆僧、蒙威神佑得至」)⁽⁴⁾。漢地の衆僧は航海を守護するような威神の力を持つ人として観世音とともに挙げられたことから、当時の中国仏教の航海信仰には神異が不可欠であったことと、衆僧という漠然とした表現によって東晋においては特定の神異僧が信仰されたわけでないことと、航海の守護神と見られる観音を神異僧と結合する萌芽が窺われる。

唐宋時代になると、聖僧あるいは神異僧信仰は徐々に盛んとなり、聖僧・神異僧が菩薩の化身とされ、菩薩信仰と結び付いて、さらに航海信仰にも投影されるようになる。本稿では、一例として日本・朝鮮半島にも知られた僧伽信仰を挙げよう。

1. 高僧の僧伽和尚から神異僧の泗洲大聖へ

僧伽和尚は何国（ソグディアナのクシャニカ）の人であり、竜朔年間（661-663）の初期に西域より唐に来て、姓は何という。僧伽和尚は各地を歩き回って、臨淮で寺を設け、普照王仏を本尊とした。寺名は普光王寺であるが、唐の中宗から賜った名という。臨淮は泗州の治所の所在地で、南を淮水に、西を汴河に臨む場所に位置し、淮水と汴河の合流する地点にあたり、運河の重要な交通要衝として、商人の集まる場所でもあった。

僧伽和尚と同時代の李邕（673-743）の書いた「大唐泗州臨淮郡普光王寺碑」によれば、泗州の遠近地の人々や往来する舟楫の商人が、和尚と普光王寺の名を慕って普照王仏像に拝して、和尚に謁し、祈祥や抜苦を望んだ。また、普光王寺から淮水の景観を俯瞰できるため、寺に遊びに行く人も多かった。

さらに、僧伽和尚の誉れ高さが皇帝の耳にも入り、唐の中宗による宮中への招請で和尚は長安に赴いた。その時期について、宋代に成書した『宋高僧伝』『太平広記』は景竜二年（708）と記している。景竜四年（710）三月、和尚は長安の薦福寺で入寂した。長安における和尚の事績に関しては、「大唐泗州臨淮郡普光王寺碑」に「徳水五瓶、霑濡紫極、甘露一斗、福潤蒼生」とあり、この文はもちろん著者李邕による美辞麗句であるが、景竜三年（709）関中地域に干ばつの異常気象によって干害が起こったことに鑑みれば、和尚が宮中で祈雨の修法を行って成功した描写と考えられる⁽⁵⁾。祈雨は後世に和尚が神異僧として認められる萌芽とも言えよう⁽⁶⁾。

僧伽和尚の円寂した際、中宗は弟子の礼をとって、大師の死を悼んで、さらに、その遺骸に漆布をまき、門人七人の得度や絹三百疋を賜い、有司に勅して靈輿をつくり、和尚の肉身を臨淮に送るために馱伝の馬車を提供したという。和尚の靈輿は長安を出るに際して、百官や仏教の関係者など多くの人が長安城の城門まで見送り、五日間をかけて普光王寺に還った。和尚の弟子らは崇塔院を建て、和尚を葬った。その塔は、和尚が黙々と座しているかのようで、その前で人が懺悔すれば諸災が滅し、求めれば諸福が生じると伝えられていたことから、帰依する人が大変多かった⁽⁷⁾。

このように、僧伽和尚は生前高僧として皇帝から百官

や庶民に至るまで、幅広く各階層に尊崇されており、入滅後も崇拜・信仰の対象として礼拝され、僧伽信仰まで展開してきた。そして、僧伽和尚の高名が遠くまで伝わり、泗州地方から生まれた僧伽信仰が各地で流行するようになった。唐代には既に多くの寺院が僧伽和尚を奉じており、廃仏政策を推し進めた李徳裕が創建した浙西の甘露寺でも僧伽和尚堂を配置していた⁽⁸⁾。また、唐代の段成式の随筆には、長安城の招福寺の西南隅に僧伽像が置かれており、従来から靈験があるという伝え話で、多くの人々に絶えず崇拜されると語られた⁽⁹⁾。

宋代に入ると、僧伽信仰はより一層社会に浸透してゆき、文献史料にも僧伽和尚の生涯や事蹟に関する詳細が増えたり、潤色されたりした。例えば、『宋高僧伝』では、僧伽和尚は唐に入ってから、まもなく彼の神異が現れ、五十三年間唐に滞在して泗州・長安のみならず、教化のために江南地方の嘉禾（浙江省嘉興地域）・晋陵（江蘇省常州地域）をも巡り歩き、俗齡八十三歳に寂滅に入った。除病や除災などに靈験を示したため、「観音菩薩化身」とみなされている。咸通年間（860）唐の懿宗は僧伽和尚に「証聖大師」という諡号を与えたが、後周世宗代（954-959）、「大聖僧伽和尚」とも称されるようになったという⁽¹⁰⁾。また、大中祥符六年（1013）に宋の真宗は僧伽和尚に「普照明覚大師」という諡号を与えた⁽¹¹⁾。

こうして、観音の応化身として、僧伽和尚のイメージは神異僧もしくは聖僧へと作られていた。それに呼応して、西域人であるためか、僧伽和尚の容貌も頭の頂上に一つの穴があり、常に綿を入れて塞いでおり、夜に綿を取ると香が穴から漂い、暁になると香りが穴に戻ってまた綿で塞ぐという異人のような姿が説話に描かれるようになった⁽¹²⁾。

僧伽信仰の伝播において僧伽像や僧伽絵が大きな役割を果たしており、中国の国内で発見された僧伽像の地域分布からみると、江南・中原・川渝・甘肅など地域に及んだ。しかし、今まで知られている僧伽像は殆ど五代以後のものである。僧伽像は、僧伽単身像と三聖龕像と変相類という三種類に大別でき⁽¹³⁾、頭部の表現からみれば、坊主頭の高僧様と、僧帽をかぶる聖僧様などがある⁽¹⁴⁾。1960年代、浙江省瑞安県仙岩の慧光塔（宋代の仙岩寺塔）の塔心から慶暦二年（1042）の舍利函が出土し、その中に、塗金木彫高僧像が1 軀みつかり、坊主頭で袈



第1図 金漆木彫泗洲大聖坐像（瑞安慧光塔、北宋）

裳を掛け、木の仏座の上で盤坐してある。仏座の四面と底面に銘文が刻まれており、前面に「泗洲大聖普照明覚大師」、後面に「泗洲大聖」、他の三面に陳懷玉夫妻が三男のために仏像を作るという縁起が書かれてある⁽¹⁵⁾。前述したように「普照明覚大師」は僧伽和尚に対する尊称であるが、「泗洲」二文字が冠されており、とくに後面の銘文は「普照明覚大師」を省略し、「泗洲大聖」（泗洲大聖）のみである。これは宋代の僧伽信仰において、本来の西域人である僧伽和尚を在地化するために、泗洲という表現が不可欠な要素であったことを反映している。

2. 航海神の泗州大師

前に述べたように、僧伽和尚の創建した普光王寺は淮水のほとりに立地した。白居易の「大唐泗州開元寺臨壇律德徐泗濠三州僧正明遠大師塔碑銘并序」に「淮泗間地卑多雨潦、歳有水害」とある文句によれば、水害が生じやすい地域に設けられたともいえる⁽¹⁶⁾。そこには水神の性格をも具える僧伽信仰の端緒がある⁽¹⁷⁾。唐・李肇『唐国史補』巻下には南方地域の内陸水運を担う舟人が必ず婆官を祭って僧伽に仕えたとある記事がみえる。婆官とは波官の訛伝で水神とされる神である。そこで婆官と並んでいる僧伽和尚の姿からは舟運の守護神として崇拝さ

れる様子が窺われる。

しかし、唐代における僧伽和尚が海神の性格を与えられたかどうかについてはあまりに手掛かりが少ないため、判断し難い。円仁の『入唐求法巡礼行記』によれば、開成五年（840）三月、赤山浦を出発し五台山に向かっていた円仁は、その途中の登州都督府城（蓬萊）西南にある開元寺に宿泊した。『入唐求法巡礼行記』開成五年三月七日条によれば、開元寺に僧伽和尚堂が設けられ、その堂内の北壁に描かれた西方浄土および補陀落浄土の絵はあり、日本の遣唐使の願いによるという。これは僧伽和尚が観音の応化身として認められたのを示すものとみなされている⁽¹⁸⁾。作画の縁起は文字が「日本国」三文字しか読めないため、遣唐使の具体の願いを知ることはできないが、航海の安全に関連していたかもしれない。

だが、留意すべきは円仁の記録によって登州城から北へ一里半行くと大海に至り、海岸に明王廟があり、海に臨んで孤標であったということである⁽¹⁹⁾。明王神が具体的に何の神を指すのか、不明であるが、『魏書』地形志に記された海州の神々に「東海明王神」がみえることと、元・于欽『齊乘』巻五に登州城の北の海浜に海神廟が存在したという記事に基づいて、明王廟は海神廟にあると推定されている⁽²⁰⁾。また、宋・洪適『隸釈』巻二に所収した熹平元年（172）の「東海廟碑」の頌文には

浩浩倉海、百川之宗。經落八極、潢□□洪。波潤[]物、雲雨出焉。天淵□□、禎祥所□。昔在前代、昭事百[]有司齊肅致力、四時奉祠、盖亦所以敬恭明神、報功[]（下略）

とあり、海州に立った東海廟で奉じられている「明神」は海神で雲雨を司るものと思われる⁽²¹⁾。これに鑑みれば、明王神は明神の擬人化したものと推察できるではなからうか。

また、唐代において開元寺は官寺で、仏教を国家的に統制する措置の一つとして、州ごとに設けられていた。円珍の『開元寺求法目録』によれば、福州の開元寺から円珍は僧伽和尚の影像を入手した。ここからは、僧伽信仰が登州の開元寺に限らず、官側より普遍信仰として開元寺を通して広がっていたことが窺われる。これに対して、明王神は沿海部の海神で地域信仰とも言える。僧伽和尚像を配置している開元寺と明王廟が近く並び立った景観からみれば、内陸にあたる泗州もしくは淮水流域か



第2図 大足北山磨岩造像177号泗洲大聖龕（北宋靖康元年（1126））

ら生じた僧伽信仰は朝廷にも認められながら沿海部に浸透しているものの、登州の在地社会では固有の海神が依然として民衆に信仰されていたと考えられる。ちなみに、『入唐求法巡礼行記』開成四年四月八月条には海州の湾岸に海龍王廟があったと記され、沿海部の地域によって海神信仰が異なる様相を呈することが分かる。

宋代になると、伝承や説話によって水神の立場として僧伽和尚の神異が誇張して描かれている。例えば、『宋高僧伝』には僧伽和尚は嘉禾に教化に行化した際、干害が起こったが、その原因は僧伽和尚の身に隠れる龍が働いていないからであると神の言葉があったとある⁽²²⁾。また、宋・蔡絛『鉄圀山叢談』巻五に宣和元年（1119）夏、開封とその周辺は大洪水に遭った際に、「泗州僧伽大士」は突然雲に乗って現れ、竜神の徒を鎮めて、洪水が引いたという物語が記されている。中国では、竜神は先秦時代から崇拝されてきたが、仏教の伝来とともに、海竜王信仰の影響を受け、海神と結びきつあった⁽²³⁾。したがって、僧伽和尚は水神のみならず、竜神に重なりあって海神の性格も備えるようになったともいえる。

さらに、宋代における内陸水運と航海貿易の活発化とともに、様々な水上交通の守護神が創出される傾向の中

で、僧伽和尚も航海の守護神として位置づけられていく。入宋僧の成尋の日記によれば、延久四年（1072）四月初、成尋らの乗っている船は舟山群島の岱山近海から明州を目指す途中で東茄山あるいは東茹山に着き、その島の山には井戸が二つあり、水は極めて清浄であり、とくに山頂には泗州大師堂があり、僧伽和尚像が数体奉じられ、行き還りの船人が常に参拝する処である⁽²⁴⁾。船主たちや成尋一行も相次いで上陸して拝んだ。その後、船主が成尋に泗州大師繡像を贈った。そこで、僧伽和尚は泗州大師と呼ばれ、航海の守護神として崇拝されていることが明らかである。また泗州大師繡像が携帯しやすく、お守りのようなもので、商人らは移動中の船で泗州大師像を奉じて航海の安全を祈る場合もあったと想像できるではなかろうか。

東茄山という地名は文献史料にみえず、推定地として東岱山説と西岱山説がある⁽²⁵⁾。岱山は明州から北への海路にあたって多くの海船が出入りする島であった⁽²⁶⁾。また『乾道四明図経』昌国県・山条には、大海に点在する島に泗洲堂という海島名が知られ、その所在が不明と記された⁽²⁷⁾。海島に泗洲堂を名づけたことも、泗洲堂に寺院に従属する性格が薄く、独立した泗州大師信仰とし



第3図 舟山博物館所蔵僧伽和尚像（宋元）

て民間に受容されているのを示唆する。

おわりに

中国の神祇体系には人格神が重要な構成であり、自然神の擬人化もしばしばみえる。唐代以降、朝廷によって山神や水神など自然神が王号を与えられており、国家祭祀における海神の場合は東海神が広徳王、南海神が広利王、西海神が広潤王、北海神が広沢王と称される⁽²⁸⁾。そこで、海神は人格神へ変容する傾向が窺われる⁽²⁹⁾。また民間信仰における明王神や海竜王も擬人化の表れとも言える。だが、これらの王の称号は抽象的なもので実在した人物に関連がないのである。

一方、中国の仏教においては、観音菩薩は衆生を救うために、示現として現れる多種多様な姿には比丘の身も含まれると語られている。また唐代になると、観音信仰の流行とともに、神人ないし異人を崇拜する従来の習慣にも絡んで、神異僧あるいは聖僧を観音の化身とみなすという変化が出現し始めた⁽³⁰⁾。すなわち実在した人物が神格化されることである。だが、観音信仰に結び付いた神異僧は必ずしも民間で海神あるいは航海守護神の立場として信仰されるとは限らない。

このような背景で、僧伽信仰は中国の仏教から誕生して皇帝や文人の支持を得ながら、庶民層の信仰をも集めたが、航海守護神としての泗州大師信仰への展開は、民間の海神信仰にも実在した人物にかかわる人格神が摂取される時代を待たなければならない。したがって、泗州

大師信仰は自然信仰に仏教の神異僧信仰が混じり合った中国独特の航海信仰とも言えよう。

注

- (1) 『山海経』大荒東経。袁珂校注『山海経校注』、上海古籍出版社、1980年、350頁。
- (2) 『史記』封禅書・第六。『漢書』郊祀志・第五上。
- (3) 袁珂「仙話及仏典中的神話」（『中国神話史』、上海文芸出版社、1988年）、123～146頁。
- (4) 法顕『仏国記』（明代の影印本）（『海上絲綢之路稀見文献叢刊行 仏国記兩種』、文物出版社、2020年）。
- (5) 『旧唐書』中宗本紀・景竜三年六月壬寅条。『冊府元龜』卷105・景竜三年十月条。
- (6) 宋代の物語書である『太平広記』卷九六・異僧十・僧伽大師に「一日、中宗於内殿語師曰、京畿無雨已是数月、願師慈悲解朕憂迫。師乃將瓶水泛洒、俄頃、陰雲驟起、甘雨大降」という伝承が記されている。
- (7) 李邕「大唐泗州臨淮郡普光王寺碑」（『文苑英華』卷858・釈9）。
- (8) 唐・張彦遠『歴代名画記』卷三・記兩京外州寺觀画壁。
- (9) 唐・段成式『酉陽雜俎統集』卷六・寺塔記下（『四部叢刊』初編・子部）。
- (10) 『宋高僧伝』感通篇・唐泗州普光王寺僧伽伝。
- (11) 宋・志盤『佛祖統紀』卷四四・法運通塞志第十七之十一。
- (12) 『太平広記』異僧十・僧伽大師。
- (13) 羅世平「敦煌泗州僧伽經像与泗州和尚信仰」（『美術研究』1993年第1期）、64～69頁。
- (14) 鄭弼「仏装与仏化—中古時期泗州僧伽信仰与図像的在地化」（『中国国家博物館館刊』2016年第12期）、71～97頁。
- (15) 浙江省博物館「浙江瑞安北宋慧光塔出土文物」（『文物』1973年第1期）、48～53頁。
- (16) 『白氏文集』卷60。
- (17) 牧田諦亮「中国における民俗仏教成立の過程」（『中国近世仏教史研究』、平楽寺書店1957年）、1～30頁。
- (18) 前掲註17牧田氏論文。
- (19) 『入唐求法巡礼行記』開成五年三月二日条。
- (20) 小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』第2巻・開成五年三月二日条の註（11）。
- (21) 魯西奇「漢唐時期濱海地域的社會与文化」（『歴史研究』

2019年第3期)、4～22頁。

(22) 『宋高僧伝』感通篇・唐泗州普光王寺僧伽伝。

(23) 何星亮「中国龍文化的発展段階」(『雲南社会科学』1999年第6期)、57～64頁。張培鋒「中国龍王信仰与仏教關係研究」(『文学与文化』2012年第3期)、4～11頁。喬英斐「中国龍王信仰的發生与定型」(『民俗研究』2022年第1期)、83～91頁。

(24) 『参天台五台山記』熙寧五年四月二日条、同三日条。

(25) 藤善真澄「日宋交通路の再検討—岱山より杭州へ」(『参天台五臺山記の研究』、関西大学出版部、2006年)、177～192頁。田中央生「南路(大洋路)の島嶼地域と古代の海路」(『国際交易と古代日本』、吉川弘文館、2012年)、190～213頁。

(26) 『宝慶四明志』卷三・官僚・制置司官・紹興二年七月呂頤浩上奏。

(27) 『宝慶四明志』卷二十・昌国県志全に載っている「昌国県境図」に、「泗洲堂」は昌国県の海域の内に描いている。しかし、『乾道四明図経』では昌国県の海域の外の島として「泗洲堂」は挙げられた。もちろん両史料の泗洲堂は同一の島でない可能性があるが、『宝慶四明志』の昌国県境図に間違ったところがしばしば見えるため、本稿は『乾道四明図経』の記事に従う。

(28) 『旧唐書』儀礼志四。『通典』卷46・吉礼五・山川。

(29) 姚崇新「観音与神僧—観音化身問題再考察」(『観音与神僧—中古宗教芸術与西域史論』、商務印書館、2019年。初出2013年)、347～373頁。

(30) 于君方「神異僧与観音の本土化」(『観音—菩薩中国化的演变』(陳懷宇・姚崇新・林佩瑩訳)、法鼓文化、2009年)、223～251頁。

第3章 総括

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群 古代東アジアの航海・交流・信仰—とくに航海・交流の観点から—

佐藤 信 東京大学名誉教授

はじめに

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群は、2017年にユネスコの世界文化遺産に登録された。登録に際しては、イコモスにより、日本からの推薦とは異なって、沖ノ島とそれに付属する岩礁のみに限定した登録が勧告されたが、ユネスコ世界遺産委員会では、大島の中津宮や本土（田島）の宗像大社辺津宮（以上宗像市）そして新原・奴山古墳群（福津市）も一体の資産と認められ、推薦書のとおりに登録が認められた。ただし、世界遺産委員会からは、「日本および周辺諸国における海上交流、航海およびそれに関連する文化的・祭祀的実践についての研究計画を継続・拡大させること」という課題が与えられた。

この課題について、世界文化遺産の保存管理・公開活用を担う主体となった福岡県・宗像市・福津市・宗像大社からなる「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会（保存活用協議会）が、「古代東アジアの航海・交流・信仰」についての特別研究事業を展開することとなった。

1. 特別研究事業の展開

「古代東アジアの航海・交流・信仰」をめぐる特別研究事業の研究課題は、世界遺産委員会からの指摘をふまえ、航海、交流、祭祀、そして信仰の継続性についての具体的解明となった。そして、こうした課題の各分野に詳しい日本・中国・韓国・イギリス・アメリカなどの適任の研究者を委託研究者に迎え、研究を進めていただいた。3回の国際検討会や、特別研究事業のシンポジウムでは、保存活用協議会の専門家会議のメンバーや委託研究者とともに、それ以外の日本やオランダなどの研究者の報告をも得て、多角的な研究を展開した。また、専門家会議メンバーや委託研究者による中国・韓国・日本（能登・対馬）などの視察・調査からも、有益な知見が得ら

れた。特別研究事業は、2018～20年にわたる3カ年計画であったが、コロナ禍によって2022年度末まで延長された。国際検討会・公開講座やシンポジウムなどでの発表・報告は、保存活用協議会のホームページで、概要や映像が公開された。今回2023年3月12日に開催する特別研究事業成果報告会では、「沖ノ島研究の新天地—5年間の研究を振り返って」のパネルディスカッションで特別研究事業を総括するとともに、さらにこれからの課題を提示したい。

世界文化遺産の登録をめざし、資産の「顕著で普遍的な価値」を明らかにするために宗像・沖ノ島と関連遺産群世界遺産推進会議（保存活用協議会の前身）が中心となって2010～12年度に行った国内外31名の研究者による委託研究でも、宗像・沖ノ島の歴史的価値を世界史的にかつ今日の学術レベルで再展望する研究が展開された。それまでは、1954年から行われた沖ノ島祭祀遺跡の発掘調査成果の大部な報告書『沖ノ島』『続 沖ノ島』『宗像 沖ノ島』宗像神社復興期成会（吉川弘文館、1958年・1961年・1979年）のあと、それに従うのみで沖ノ島研究の新たな展開は乏しかったといえる。

ただし、日本の考古学はこの半世紀の間に大きく進展し、多くの祭祀遺跡の発掘もあり、祭祀考古学の研究も新たに進んだ。また、古代史の神まつり・神祇祭祀に関する研究も多様に研究を進展させた。信仰・まつりをめぐる宗教学的な研究も展開した。こうした新しい学術段階をふまえ、世界的視野から改めて沖ノ島の歴史的意義を再展望したのが、今回の特別研究事業であり、多くの成果が挙げられたのであった。

2. 特別研究事業の研究成果

特別研究事業では、まず、海上交流や航海をめぐる、航海技術、船、航路、航法、海流、船人、港などの研究に大きな成果を得た。対馬海流とその反転流や風が航海・航路に与える影響や、海洋航法・沿岸航法と航海の目印

となる島・山・岬・岩礁などの問題が論じられた。また船の構造・規模や船員数などについても、検討した。アジアの沈没船など、水中遺跡から知られる船の構造と乗船者数なども、比較検討された。

次に、海上交流をめぐる祭祀と祭祀遺跡についての比較研究を、さらに深めることができた。祭祀遺跡・遺物の比較研究では、中国・韓国や東南アジアに広がる航海守護神の媽祖信仰との比較研究や、韓国西南海岸の竹幕洞祭祀遺跡とその祭祀遺物をめぐり、沖ノ島祭祀との共通・類似性や倭人との関係などが論じられた。

沖ノ島の祭祀遺物についても、奉獻品といわれる祭祀遺物の性格や出土のあり方について研究が深められた。祭祀遺物は、神を招くのか、神をまつのか、神に捧げるのか、また出土状況は、祭祀の実像を示すのか、祭祀のあとの撤下した姿か、収蔵した姿なのか、などの課題を論じることができた。

全体として、登録前の委託研究に増して、具体的に課題密着型の多角的な研究が深められて、多くの成果を得たといえよう。

3. その他の研究成果とその発信

特別研究事業と同時に、保存活用協議会を中心に進められてきた、資産の遺跡・遺物の調査・研究・保存・管理・整備・修復などの基礎的な事業も忘れられない。

沖ノ島の祭祀遺跡・祭祀遺物をめぐっては、世界遺産として求められることから、保存・管理のために毎年現地の現状を調べるモニタリング調査が行われている。遺跡・遺物や植生・動物・環境などの現状とその動向を調べる地道な調査であるが、それによって、オオミズナギドリで活動する祭祀遺跡・祭祀遺物にも一定の影響が及んでいることや、祭祀遺跡の地形環境についても新知見が増えることもあるという。

また、宗像大社神宝館に収められている8万点の国宝の出土遺物(神宝)についての、保存・修復のための現状調査も、大社の協力のもとに科学的な方法も採用しながら進められつつあるという。こうした基礎的な調査研究は、遺跡・遺物を深く理解するためにも、とても重要なことといえよう。また、構成資産である新原・奴山古墳群でも、地形崩落に対応した墳丘修復や墳丘確認・史跡

整備のための発掘調査が展開しており、新たな知見も得られた。沖ノ島沿岸の水中遺跡の探査・調査なども、今後は期待したい。また、構成資産やバッファゾーンにおける現状変更などに応じた景観調査も、資産の自然的・人文的な環境への理解に資するものといえる。福岡県の世界遺産室が主体となって、保存活用協議会に集まった各自治体の専門職員などによる研究論文が収録された『沖ノ島研究』という雑誌が毎年刊行されるようになったことも、特筆されることである。

こうした資産の保存をめざすための様々な調査の成果によって、さらに遺産群の歴史的な価値が明らかになることに、注目したい。

おわりに—これからの課題

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群をめぐり、登録以降に展開してきた特別研究事業は、多くの成果を挙げ、その成果によって遺産の「顕著で普遍的な価値」はさらに明らかになってきた。ただし、ユネスコ世界遺産委員会から求められた諸課題に関する研究の「継続・拡大」は、これでクリアしたというわけではない。今後、さらに継続的かつ拡大して遺産群の価値解明のための調査・研究を進める必要があると思う。

まだまだ世界文化遺産として、世界に向けて学術的な価値を高める方向での調査・研究が求められている。今後も、できれば組織的な体制を組んで、遺産の保存・管理・修復・整備・活用・発信などをめざした、多様な先端的・世界的・学術的な調査・研究の継続・拡大と、文化財の保全をめざす基礎的な調査・研究の進展を望みたい。そしてその成果を広く世界に向けて持続的に発信していくことを、お願いしたい。

沖ノ島祭祀の機能と変容：古代東アジアの航海・交流における 祭祀・信仰へのアプローチの観点から

溝口 孝司 九州大学大学院比較社会文化研究院

要旨：宗像・沖ノ島においておこなわれた祭祀の実態とそれを取り巻く歴史的・文化的・自然環境的背景・コンテキストの解明を目的とし、東アジアにおける航海に関わる観点、地域間交流と信仰・祭祀の観点、海洋信仰それぞれの観点から検討を加えた特別研究事業は重要な成果をあげた。本稿は本研究事業の具体的成果を参照しつつ、主に祭祀・信仰に関わる以下の二点について考察することを通じて本事業の総括を試みる。

●沖ノ島において4世紀後半から9世紀末にわたる長期間にわたり<中央政権>主導による大規模な祭祀行為が行われ続けたのはなぜか？

●沖ノ島における祭祀の具体的目的と機能はどのようなものであったのか？それはなぜ、どのように変容したのか？

これらに対して、本稿は祭祀的行為・宗教の<機能>として「社会の存続・再生産に関連するさまざまな活動・相互交渉／コミュニケーションの継続を困難にする可能性を有するさまざまな未規定性・不確定性・リスクを形式化・分節化して処理可能とすることにより、そのようなリスクの出来への対応可能性を社会的文化的再生産技術体系に組み込むと同時に、そのようなリスクが実際に出来した場合にも当該活動・相互交渉／コミュニケーションの継続を可能とすること」を措定し、沖ノ島を<特定のリスク群処理の場>として把握した。そのような認識に基づき、リスク群の具体的内容とその処理主体、それらそれぞれの変容と相互の関係性の変容について検討することを通じて上述二つの問いへの解答を試みた。

キーワード：リスク、祭祀、人格神 (personal gods)、ネットワーク・ホライズン、縁辺、倭、日本

1. 導入

2017年の世界遺産登録を受け、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会は、2019年度以来「特別研究事業」(以下「本事業」と呼称)を推進してきた。この間、新型コロナウイルス感染拡大に伴う様々な困難に見舞われつつも、本事業は、宗像・沖ノ島においておこなわれた祭祀の実態とそれを取り巻く歴史的・文化的・自然環境的コンテキストの解明を目的とし、東アジアにおける航海に関わる観点、地域間交流と信仰・祭祀の観点、海洋信仰の観点それぞれから検討を加え、重要な成果をあげてきた。本稿においては、中でも祭祀・信仰に主に関わる視点から、具体的成果を参照しつつ以下の二点について考察することを通じ本事業の総括を試みる。

- 沖ノ島において4世紀後半から9世紀末にわたる長期間にわたり<中央政権>⁽¹⁾主導による大規模な祭祀行為が行われ続けたのはなぜか？
- 沖ノ島における祭祀の具体的目的と機能はどのよ

うなものであったのか？それはなぜ、どのように変容したのか？

2. 考察の方針

上の二つの問いに関する考察が対象とすべき様々なファクターは相互に有機的に連関するため、本稿ではこれら二つの問いに別々に答えるのではなく、様々なファクター間の因果的相関性を時系列的に整理・分析することによりこれらの問いに多面的にアプローチし、答えを求めるとしたい。具体的には、A)航海技術を主軸とする対馬海峡渡海の困難性をめぐるファクター群、B)近畿中枢部(首長制)政体／中央政権と地方(首長制)政体／地域統治組織との関係をめぐるファクター群、C)これらと朝鮮半島諸政体(高句麗、百濟、崇山江流域、伽耶、新羅)、中華域との交渉をめぐるファクター群、D)神觀念の生成と変容の問題を含む祭祀・宗教をめぐるファクター群があげられ、これらそれぞれに本事業を通

じて様々な新知見が得られ、新たな視点が提示された。これらについては、上記のような時系列的整理・分析の過程において必要に応じて参照・整理することとしたい。

なお、本稿においては、祭祀的行為・宗教の〈機能〉として

- 社会の存続・再生産に関連するさまざまな活動・相互交渉／コミュニケーションの継続を困難にする可能性を有するさまざまな未規定性・不確定性・リスクを形式化・分節化して処理可能とすることにより、そのようなリスクの出来への対応可能性を社会的文化的の再生産技術体系に組み込むと同時に、そのようなリスクが実際に出来た場合にも当該活動・相互交渉／コミュニケーションの継続を可能とすること

を指定する。このような観点からすると、沖ノ島という〈場〉の選択、〈沖ノ島祭祀〉の目的と機能は

- どのようなリスクが
- どのような社会単位のどのような存続・再生産（の困難化）に伴い出来たか
- それらはどのように処理されたか
- そのような処理にはどのような条件が必要であったか

について検討することにより明らかにすることが可能であると考えられる。以上の枠組みに基づき以下の整理・分析をおこなうこととしよう。

また、以下の考察に関わる要点として、沖ノ島祭祀遺跡における祭祀行為と巨岩周辺の「祭祀遺跡（地点）」との関係について笹生衛氏（本事業メンバー）により重要な問題提起がなされた（笹生2012, pp. 50-55、2016, pp. 97-106, 2023b）。すなわち、祭祀行為そのものは、主に現在の沖津宮社殿から南に50メートルほどの第1地点周辺の平場で一定の人数の整列・拝礼を伴う儀礼として実施され、そこでの祭祀・宗教的コミュニケーションを物的に媒介したアイテム群は、そのような一連の中核的祭祀行為の終了後、巨岩周辺の様々な場所的特徴を有する各地点（岩上、岩陰、半岩陰・半露天、露天）に少人数により下げられた〔「撤下」（てつか：祭祀における役目を果たした祭具を祭祀の場から下げる）〕、もしくは奉進／収納されたという説である。この説は、巨岩に神を「降ろし」、それを祈願の対象として祭祀行為が行われ

た、という、沖ノ島祭祀をはじめとする磐座祭祀理解の前提としての神の「居場所」理解への問いかけから始まり（笹生氏は古代において神は空間に遍在するのではなく人間の生活に重大な影響を与える様々な事象が出来る場所に「坐す」と認識する：2012, pp. 55-59）、後の定式化された神道の祭儀の実修の場の構造と祭儀そのものとの時間的空間的關係性の再検討を経て提示された説であり、高い説得性を持つ。本稿ではその説得性と、今後のさらなる検討に向けての本説の重要性を認識しつつ、以下のように対応する。

- これまで定説とされてきた岩上祭祀→岩陰祭祀→半岩陰・半露天祭祀→露天祭祀の諸段階と推移は、それらの場が祭祀行為の中核的な場の進化的推移ではなかったとしても、祭祀行為系列の最後のエピソード（笹生説の撤下／奉進／収納）が展開した地点の時期的推移の認識としては揺らがない
- 岩上祭祀段階の21号遺跡における岩上の施設や、岩陰祭祀、半岩陰・半露天祭祀遺跡のいくつかにおける明確な「祭壇」的施設の構築は、それが祭祀行為系列の最後のエピソードの場であったとしても、そこにおいて行われる行為とその結果（奉進／収納）としての祭具の配置そのものに〔それらとカミとの観念的・空間的關係性の具体像はカッコ入れするとしても：笹生氏は、巨岩そのものにカミが「坐す」のであり（「形（みかた）、石に坐します」：2012, p. 58）、そこ／その近傍に設置された依代にカミが「降りる」のではないと考える（2012, p. 58）〕祭祀行為の目的性・機能性の充足に関わる重要な意味はあったことを示唆する以上より、本稿では、「祭祀遺跡」各地点の〈意味〉については、祭具の「撤下」、「奉進」、「収納」の場のいづれかとして、もしくは現存説における祭祀実修の場として絞り込むことはせず、その〈場〉と、その構造そのものにも中核的祭祀行為系列同様の祭祀の機能・目的充足のための意味が存在した可能性を念頭に置きつつ分析を進めることとする。

3. 考察

(1) 弥生時代後期から古墳時代開始期にかけての祭祀的コミュニケーション領野の変動・変容

上に措定した祭祀的行為・宗教の機能の観点から沖ノ島祭祀を検討するためには

- 沖ノ島という〈場 (locale) 〉を適地とする処理の対象となったリスクと、そのような処理を必要とした社会単位の特定
- そのようなリスクに対してどのような具体的な対処・処理がおこなわれたのかの解明
- そのような対処・処理の実施のためにはどのような条件が必要であったのかの解明

がおこなわれなければならない。これらを明らかにするためには、これらそれぞれに関する、沖ノ島祭祀が開始される以前の状況を確認し、沖ノ島祭祀開始段階 (= 4世紀後半) に何がどのように変わったのかが明らかにされねばならない。そのような作業は弥生時代後期から開始される必要がある。

弥生時代後期、広形銅矛 (北部九州地域～四国南部地域西半を主要分布域とする)・突線鈕式銅鐸 (近畿地方～東海地方を主要分布域とする) がその視覚的存在感を拡大させる方向で型式変化、また一回に使用される (= 埋置される) 数量が増加傾向を深めるとともに、後期後半以降、後の定型化した古墳につながるさまざまな形態・施設を備えた墳丘墓を舞台とする葬送儀礼の形式性の増大と盛大化 (を反映する型式変化) が急速に進行する。そして、銅矛と銅鐸は、その後続く「古墳祭祀」のテンプレート/原型としての〈定型化〉した古墳 (箸墓/箸中山古墳を代表的一例とする) の生成と広域分布ホライズン形成と共に短時間で姿を消す (岩永1997, p. 150)。広形銅矛・突線鈕式銅鐸の使用に特徴づけられたレイヤーを頂点として、(それを使用する祭祀に結集する境域のスケールとそれを主宰する主体者の社会的位置づけにおいて) 成層的に編成された祭祀的コミュニケーション領野ごとに分化していたさまざまな祭祀媒体 (銅鐸型土製品、分銅型土製品など) も、時間差を示しつつ古墳時代開始期には姿を消す。墳丘墓・関連諸施設・物質文化アイテムを媒体とする祭祀的コミュニケーションを〈葬送祭祀コミュニケーション領野〉と呼び、銅矛・銅鐸

を媒体とするそれを、定説に従って〈農耕祭祀コミュニケーション領野〉と呼ぶならば、両者は弥生時代後期を通じて競争的に相互刺激しつつ形式性と規模を増大させ、最終的に葬送祭祀コミュニケーション領野が選好されるに至ったと記述することが可能であろう。この場合の「競争」がある〈機能〉性をめぐって展開した淘汰的過程であり、そのような〈機能〉が、祭祀を遂行する (個人・集団) 主体に、その中で生きる世界が産み出すさまざまな未規定性、不確定性、リスクの処理を可能とすることであるとすれば⁽²⁾、そこには、そのようなリスクの生成源としての〈超自然的存在 (supernatural beings) 〉と祭祀執行主体 (= 発達しつつある首長制政体における各レベルの〈首長〉: 注2参照) との交渉が所与として認識され、前提されていたであろう。

農耕祭祀コミュニケーション領野の存在が時間的に先行し、その中に〔当初は地域限定的に (岡山地域・山陰地域が先行)〕葬送祭祀コミュニケーション領野が浮上・形式化し、(〈機能〉的選好競争過程をへて: 注2参照) 後者が全面的に選好されるに至ったということは、それらは基本的に同一の〈リスク群〉への対処のために分化していたことになる。農耕祭祀コミュニケーション領野の先行存在は、それが基本的に〈農耕社会〉の再生産過程に生成・介在するリスクであり、これが葬送祭祀コミュニケーション領野に「取って代わられた」ということは、〈農耕社会〉の再生産過程に生成するリスク (それは当然、農耕に基本的に支えられた社会全体の再生産を媒介するさまざまな物質的・非物質的存在の入手調達に関わるリスクを幅広く含んでいたわけであるが) への対処、それらの処理が、「共同的」行為・コミュニケーションとしての前者から、その (死せる) 主催者の身体を主要な媒体とするコミュニケーションへと技術的に移行したことを示す。このことは、葬送祭祀コミュニケーション領野の主催者の (生きた/死した) 身体のパフォーマンスにそのようなリスク処理の権能が付託されるようになったことをも示す。このことは

- 前期古墳の被葬者の存在様態の固定化・形式化が、埋葬施設・副葬品の被葬者身体の密閉性の増大という形で進行したこと
- 被葬者身体の周辺に配置される副葬品が、〈世界〉 (社会的・非社会的 (= 自然的未規定性・不

確定性とリスクの総体としての)) に生成するさまざまなリスクの抽象化した表象単位として多様に分化したこと(例えば雪野山古墳石槨内に置き分けられた副葬品単位群: 溝口2022, pp. 261-265参照)

に示される。

(2) <首長の身体>の機能と<人格神(Personal gods)>の分化

沖ノ島祭祀は、そのようなく首長の身体>を主要な媒体として分化・編成された多様、かつその処理するリスクの内容は高度に抽象化された様々な祭祀コミュニケーションのサブ領野クラスター(=海の祭祀、山の祭祀、里の祭祀、戦(いくさ)の祭祀、外部/他者との交渉祭祀など: 溝口2022, pp. 261-265参照)が、<首長の身体>との物理的近接による媒介を経由せずに機能するようになってゆく過程(その過程は古墳時代中期前葉≒5世紀前半に完成を見る)の中で開始される。すなわちI号巨岩上・周辺に配置されたアイテム群は、前期後半古墳への被葬者の埋葬時に展開された諸種の(おそらく時系列的に実施された)祭祀コミュニケーションを媒介したそれぞれのアイテム群とその内容を同じくする。このことは以下のことを確からしく推測させる。

- 古墳への被葬者の埋葬時に集約的な処理の対象となった(抽象化された)リスク群、すなわち海の労働、山の労働、里≒水田稲作農耕を基軸とする労働、集団単位が関与する政治/暴力、(中国王朝を究極的それとする)<外部>との接触・交渉などのリスク群の処理が、対応する様々な祭祀的コミュニケーション群を通じておこなわれた
- 古墳においては、これらのコミュニケーションの<機能>は<首長の身体>の物理的存在によって統合集約されたが、沖ノ島においては<首長の身体>の物理的近接存在は存在しない
- 笹生衛氏は、上述の通り、日本古代の祭祀の考古学的研究=神道考古学において前提とされてきた「来臨する/降りてくる神」の概念に対し、関連文献の検討、また古層を残存させることが確からしい神道祭祀儀礼の分析から再検討を行い、古代祭祀における祈願対象としての<神>が、特定の

<場>、本校の用語と対応させるならば<リスク>の出来る場ないしはその近傍に常駐常在すると観念されたと論じた。そして、沖ノ島祭祀の<場>は、沖ノ島一ノ岳を眺望し(見上げ)つつ形式化されたコミュニケーションを展開することのできる場所性(1号遺跡周辺の平場とそれに続く鞍部の巨石群)を持つことを指摘した。(先述の通り、以上の解明は、本事業の非常に重要な成果である。)このことから、不在の<首長の身体>に変わる、多様に分化した祭祀コミュニケーション=世界の再生産が随伴する多様なリスクの処理の統合媒体は、一ノ岳(とそれを鮮明に望む位置に存在する巨岩群)に存在する(「坐す」と観念され、<首長>と同様な機能性を持つと観念されるような存在('entity')であったと推測することができる。

ここに<首長の身体>の、<世界の再生産>のためのリスク処理の集約統合的媒体としての分化を経由して、<首長人格>とリスクの生成主体としての超自然的存在との変換可能性('transformability')=同一化が生起し(<人格神(personal gods)>の生成)、それに対する、いやむしろその参照にこそ、その機能性が担保された諸種の祭祀コミュニケーション領野の編成が可能となった、というモデルを提示することができる。すなわち、初期沖ノ島祭祀は、<人格神>の生成分化と不可分に相関していると考えられるのである。

笹生氏は、認知心理学的知見を参照しつつ、人間がその行為の遂行/生存に大きな影響を及ぼす自然的イベントが頻発する場所に<agent(行為主体)>の存在と活動を認識することに人格神の生成の契機を指定した(cf. 笹生2023a, pp. 8-10, 2023b)。その結果、沖ノ島祭祀の対象と、祭祀の内容・形式との関係性がより明確に把握可能となったと考える。そのような行為主体は狩猟採集社会においてはしばしば動物・植物〔の姿をとった超自然的存在(supernatural beings)〕などとして認識され、かつ存在としての人間との境界性が曖昧で相互に癒合している場合(人間の化身としての動物/動物の化身としての人間)もあり(cf., e.g. Ingold 2000, pp. 111-131)、そのような意味で、「行為主体的(agentive)」ではあっても人格神(personal gods)的存在ではない。そ

のような存在と人間社会／世界との関係の媒介はシャーマニズムのモードにより行われる場合が多いが、農耕社会の成熟とともにプリースト（司祭）的モードへと移行する（溝口2022, pp.177-221）。農耕社会の再生産に関わる成層化された多様なリスクへの対応の様態は、それが産み出す複雑性に対応して形式化、分化し、それは秘教的知識（esoteric knowledge）として司祭的存在の独占する所となる。このような司祭が超自然的存在界との関係の調停を独占することによりそれ自体=その<死せる身体>は<神化>してゆく過程が、超自然的諸存在の人格神化と相互媒介的に進行したのではないか。そのような仮説を、笹生氏の研究成果に導かれつつ、沖ノ島祭祀の起源の考察を通じて提示したい。上にも述べたとおり、このような人格神化以前の超自然的存在は「行為主体的（agentive）」な存在ではあるが、筆者はこれらを<人格神>とは分離する。そして、特定の「性格」、「感情」を有し、個々の状況に対して論理的、非論理的判断を下し、その帰結は未規定性の総体としての<世界>のあり方に作用する可能性がある、そのような存在としての<人格神（personal gods）>の生成のタイミングにつき、笹生氏は必ずしも問題にしておられないが（笹生2023b）、筆者は、これは弥生時代—古墳時代過渡期を上限とし、古墳時代前期後半を下限とする、と推定する。

（3）沖ノ島の<位置価（positional value）>と沖ノ島祭祀の<機能>

それでは、殊更にこのような、一見特異な「場」において実施された祭祀の特質とはどのようなものであったと考えられるだろうか？古墳時代開始期以来、近畿地方中枢部の首長制政体は魏・晋との交渉権の独占を通じて、前方後円墳分布ホライズンを形成する首長制政体ネットワークにおける中心性＝【<倭>としてのネットワーク・ホライズン】内相互交渉の「最上位媒介者」としての政治的コントロール力を調達・担保しつつ（溝口2000, 2022, pp.231-265；森2013, p.87）、朝鮮半島南部の政体との物的・人的相互交渉の独占傾向を強化していった。このような状況の中で、<首長の身体>の<人格神>化の傾向性が発動したとすれば、その神格には、当初から<倭>としてのネットワーク・ホライズンの維持・再生産に関連して生成するさまざまなリスクの根源とし

ての位置が付託されていたということとなろう。そして、その後の沖ノ島祭祀の展開を先取りするならば、<倭>としてのネットワーク・ホライズンの再生産は、主要生存財として重要性を増す鉄素材の入手、その他、威信財の更新などにも必要な高技術の入手に不可欠な朝鮮半島諸政体との交渉の成功的継続をその前提・必要条件とした。高句麗の南下により不安定化した朝鮮半島政体間関係と、政治的問題解決のための戦争の頻発は、<倭>としてのネットワーク・ホライズンの存続に関わる主要なリスクとして浮上し、集中的な処理が必要となった。そのような条件の出来のタイミングとして、4世紀後半に沖ノ島祭祀は開始されたのであろう。

そのように考えた時、当時、物的人的交渉の主要なパートナーであった伽耶政体のポートへの渡海は壱岐—対馬を経由するルートが主要なものであったことは重要である（田中2023）。対馬海峡海域の卓越海流パターンからも、沖ノ島から対馬への航海が海流から見て非常に困難であること、また、対馬から沖ノ島への航海は比較的に容易であることが広瀬らによって指摘された（広瀬らによるこのことの確認は本事業の重要な成果の一つである：広瀬ら2019, p.68）。にもかかわらず、壱岐でも対馬でもなく沖ノ島が、近畿中枢部の最高首長葬送祭祀に投入されそれを媒介した祭具／アイテム群と同等の祭具に媒介された祭祀コミュニケーションの場となったこと理由は注意深く検討されなければならない。現状で下記のような理由が想定される。

- 壱岐—対馬ルートの本土における主要な起点ポートとなる博多湾地域の、近畿中枢部首長政体連合体による橋頭堡の確保が困難であり、博多湾以東のポート（現在の宗像大島所在の宗像大社中津宮、近接する御嶽山、本土に位置する辺津宮周辺で5世紀に遡る祭祀遺跡の存在が確認される事実は、辺津宮近接地まで湾入していたラグーンがそのようなポートの一つであった可能性を示唆する。今後の調査の進展が期待される）を起点として、同宗像地域の首長政体の十分な協力を得つつ困難を克服して直接渡海、もしくは対馬に寄港、朝鮮半島南岸ポートに到達する必要があった。[このような可能性を想定するときに想起されるのは、筑紫国造家勢力の複雑首長制政体としての成

熟と領域拡大が進行過程にあった（糟屋屯倉という勢力拠点がある時点で持つことになることに注意）可能性である。] その場合、沖ノ島は、その島影を視野に入れつつ／ランドマークとして「海北道中」航海がたどられるような存在であり、それゆえその場所は、近畿中枢部首長制政体連合（を中心とする＜倭＞としてのネットワーク・ホライズン）の維持・再生産の困難化リスク（≒朝鮮半島南部地域政体からの／を經由しての物的人的資源の獲得の困難化）の根源でありかつその処理の対象であるような存在、すなわち葬送コミュニケーション領野における＜首長の身体＞と置換可能な種類の存在≒＜人格神＞的存在の場と観念されることとなった。その場合、筑紫国造家勢力の強い関与の及ばない独自首長制政体としての宗像勢力（cf., e.g. 重藤2011, pp. 79-81; 田中2023）との協力関係の強化〔あるいは近畿中枢部首長制政体との連携関係が独立性維持の一つの要因・根拠となったか？（重藤2011, p. 81）〕の必要性が重要なファクターとなったことも推測される。

- 弥生時代段階においてすでに、沖ノ島には瀬戸内海地域（東限は岡山地方に及ぶ可能性がある：武末2011, pp. 29-33）、山陰地域からの人々の寄港の痕跡が凹線紋を施す土器等の存在から確認される。沖ノ島海域が瀬戸内海地域、山陰地域コミュニティーの海民たちの直接の漁場であったとは想定し難いとすれば、その寄港は対馬、もしくは朝鮮半島南岸地域への渡海途上の寄港であったとの推測が確からしくなる。だとすると（古墳時代前期後半段階の壱岐―対馬ルート経営・維持に、近畿中枢部首長制政体連合体の関与・コントロールがどの程度及んでいたかは別として）近畿中枢部首長制政体連合体を中心とする＜倭＞としてのネットワーク・ホライズンを構成する九州地域以外の政体群にとって（も）、沖ノ島は、その渡海リスク体験・記憶において重要な意味を持ち、また重要な位置をしめるランドマークであったと考えられる。だとすると、渡海主要ルートは壱岐―対馬ルートであったとしても（実際、壱岐、対馬両地域において、渡海に関わるリスク処理のた

めの祭祀が、沖ノ島のそれとは性格・規模を大きく異にしつつも継続的に実施されていたであろうことは、両島における式内社の多数存在、並びに忌部系集団の活動痕跡からうかがえるところである）、その渡海リスクの縮減のための祭祀コミュニケーションが行われる場所としては、ネットワーク構成首長制政体群全体に経験的に共有されたリスク観念の焦点〔山陰・瀬戸内地域諸政体にとっての過去の（弥生時代の）困難な渡海の記憶に（も）基づくリスク観念の焦点〕としての沖ノ島が選好されることとなった。ゆえに、実際の主要渡海ルートは壱岐―対馬ルートであり、それが実際の「海北道中」であったとしても、観念的「海北道中」が生成するリスクの縮減の場所としては当該海域の中心部に位置する沖ノ島が選好されることとなった。

以上、またそれ以外にも提出可能であろうモデルの絞り込みのために、4世紀後半を下限とする西新町遺跡跡絶以降の＜倭＞としてのネットワーク・ホライズンのゲートウェイ的ポートの実態の確定は重要となる。可能性として、西新町的「入会地」（＝＜交易港（port of trade）＞）的な、さまざまな仲介者／他者たちが共存するポートを必要とするような相互交渉の様態から、より専門性と所属性を高めた単一仲介者（集団）によるポート経営〔近畿中枢部首長制政体と当該地域政体との個別の関係性の中での経営、もしくは地域主要／有力首長制政体（例えば筑紫国造家）と当該地域政体との個別の関係性の中での経営〕への移行により、西新町的な考古学的痕跡を遺すタイプのポートではなくなった可能性も想定されなければならない。〔上述のように、現在の宗像大社辺津宮近傍まで湾入していたラグーンがそのようなポートの一つであった可能性は存在する（笹生2023b）。今後の調査が期待される。〕いずれにせよ、沖ノ島は、航海の途中に立ち寄り祭祀を行うようなタイプの場ではなく、＜人格神＞化した＜神＞が坐す場として、＜倭＞としてのネットワーク・ホライズンとしての生存財の流通圏全体が一体的に処理せねばならない種類のリスクへの対処のための祭祀コミュニケーションが（この段階ではさほど頻度高くなく→重要エピソードごとの事前／事後祭祀か？）行われる場として、その＜場（locale）＞

としての性格を確立したと考える。言い方を変えれば、〈交易港〉的中立地に異なる権益と異なる戦略を持ったグループが集まることを通じてそれらグループ個々の再生産が担保されるタイプの社会編成・リアリティ（≒古墳時代前期前半的リアリティ）の中では、沖ノ島祭祀は生成・分化する機能的条件を持たなかったということである。このことの背景には、これまでも指摘されるとおり、高句麗の南下と、倭の主な交渉パートナーとしての伽耶への関与、それらに伴う百済・新羅との高度な戦略性を必要とされる交渉の開始があったと考えられる。

このこととの関連で想起されるのが、5世紀前半・中頃に日本列島各地に出現する、沖ノ島と類似する性格と内容を持つ大規模祭祀の場である。ここでも笹生衛氏の重要な研究を参照すると（笹生2016, pp. 25-46）、これらの場における祭祀の実施には、在地の首長政体と近畿中核部政体の合同的関与が指摘されている。このことは、顕著な交通難所や火山噴火、洪水等の潜在／顕在災害難所を含むこれらの場において、やはり、〈倭〉としてのネットワーク・ホライズンとしての生存財の流通圏が中心・周辺一体的な処理を求められる種類のリスクへの対処のための祭祀コミュニケーションがおこなわれたことを推測させる。すなわち、〈首長の（象徴的）身体〉（が表象する〈倭〉としてのネットワーク・ホライズン）が危機に晒される場所として、沖ノ島を顕著に含むこれらの場が、（首長の身体の健全な存続の祈願にもおそらくは媒介されて）そのようなリスクが処理される場所として分化し、内容的に等質性の高い（＝甲冑、刀剣類、鏃を含む鉄製武器、鉄製農具・工具、小型鉄製模造品、鉄素材、石製模造品などよりなる：笹生2016, pp. 31-46）祭祀の実施の場所となったと考えられるのである。笹生氏は、このような等質な大規模祭祀行為の広域化を

「(国) 家領域の「天下」を統治するヤマト王権の「大王」は、「天下」の自然環境の働きに由来する各地の「カミ」に先進的な鉄製品や布帛類などを捧げ物として供与する。それらを受け、各地の有力者は地元の「カミ」を祀り、災害を防ぎ地域の平安を祈る祭祀が成立した」

結果として位置づけた（笹生2023a, p. 40）。私は、礼記などの漢籍の影響を受けた「天下」概念の導入（笹生

2016, pp. 110-112）の必要条件並びに前提として、上述のような、それに、その個々の結節点（ノード(nodes))として埋め込まれた個々の首長制政体の再生産（＝鉄素材を含む生存財の流通ネットワークへのアクセスの継続維持）を保証する組織としての〈倭〉としてのネットワーク・ホライズンの存在と、その維持・再生産に関わるリスク群を処理する主体としての〈首長の身体〉の、その表象としての分化・一体化があったと考えたい。すなわち、〈倭〉としてのネットワーク・ホライズン＝〈天下〉＝（リスクを含む未規定性の総体が構成する）〈世界〉の存続がその存在とパフォーマンスに依存するような存在としての最高首長＝近畿中核部首長制政体の長の存在定位があつて、初めて、そのような存在が処理するリスク群の究極の所在・生成源としての〈天〉の概念の分化と、最高首長がその存続を保証する領域＝〈天下〉概念の分化があつたと推測するのである。（付言するならば、このような枠組みの端緒は古墳時代開始期に求められる：溝口2000, pp. 206-222, 261-267参照）

そうすると、これらの祭祀に、当該時期（＝古墳時代前期中頃～中期）の主要な処理対象リスクのひとつの主要な起源ファクターとしての朝鮮半島南部コミュニティとの交渉を象徴・表象する物財が、6世紀～7世紀へと祭祀コミュニケーション・テーマの物質的表象、コミュニケーション媒体として動員されることが多くなったことも納得できる。すなわち、上述のネットワーク・ホライズンの安定的再生産のためには、そのネットワークの朝鮮半島コミュニティ群との接続、その背後に存在する中華王朝域との接続の安定維持がその必要条件として存在したのである。

そのような観点から考察するとき、竹幕洞における祭祀がこのようなく倭〉としてのネットワーク・ホライズンの再生産に関与する重大リスクの処理として同ホライズン所属アイデンティティを持つ主体〔これが①近畿中核部首長制政体（に所属する人々／集団）であつたのか、②それと朝鮮半島諸政体との交渉を補助しつつ実際にそれを担った北部九州地域政体（に所属する人々／集団）であつたのか、③それらの両者を含む人々であつたのか、④それらいずれか、もしくは両者に属し、もしくは強い紐帯を維持しつつ、朝鮮半島南岸から西岸のポートに居住（高田貫太氏の用語を借りるならばそれらに「雑

居」した人々／集団：高田2023)であったのか、の問題もある：これに関わる近畿中枢部首長制政体と地方政体との関係性のミヤケ設置、氏、伴造一部ネットワーク等の介在媒介による複雑な様相については(田中2023)を参照)によって催行実修〔当然そこには地元(朝鮮半島西南部⇨榮山江流域)政体による許可と何らかの助力があったに違いないが(高田2023)]されたのか、それとも<倭>としてのネットワーク・ホライズンと接続された朝鮮半島南部諸コミュニティ(⇨加耶諸政体、榮山江流域諸政体や百濟政体)が形成するネットワーク・ホライズンに共有される種類の、中華圏中枢・倭の両者との接続に関するリスク認識が存在し、両者共同(この場合でも倭系集団+榮山江集団、伽耶系集団、百濟系集団のどのような組み合わせであったのかは、これら相互の時系列的変化の中で複雑に変化したことが推測される)での祭祀が挙行されたのかは非常に重要な問題となる。これについては本書所収高田論文が以上のような諸問題の具体的解答へと進む重要な観察結果・知見を提供している(高田2023)。

また、このような複数のステークホルダーが関与し、それらの間のパワーバランスが流動するようなリスク状況の元で、仲介者的役割・機能を要求されたであろう実際の交渉従事者たちについて、禹在柄氏は「商人」的性格を帯びていたというモデルを提出した(禹2023)。すなわち、近畿中枢首長制政体の意向を踏まえつつ、相互交渉においては複数ステークホルダーとの間に戦略的関係を取り結び(次第に百濟とのそれが主要なものとなってゆくが：禹2023)、鉄素材を中心とする様々な生存財・威信財の入手を確保する、そのような役目を宗像政体は果たしたと考えるのである(禹2023)。竹幕洞に残された祭祀行為の痕跡の複雑性(高田2023)を考え合わせるならば、交渉の直接従事者たちを<商人「的」>存在(merchant-like groups)として位置付ければ、それに関与した倭系集団の位置づけとその祭祀行為の機能・目的性についてイメージしやすくなることは確かである。

(これが、社会経済史的観点から真に<商人(merchants)>として定義可能な範疇に属する存在であったかと言えば、現筆者は否定的であるが。)と同時に、沖ノ島祭祀において、同様な複数ステークホルダー〔⇨伽耶諸政体、榮山江流域諸政体、百濟政体(+)可能性として新羅政体：

下述の「任那の調」に関する記述参照)の直接的関与が確認し難いことは、沖ノ島祭祀が<倭>としてのネットワーク・ホライズンとその外部との関係性のリスク生成の場における、当該ネットワーク・ホライズン独自の対応・対処であったという性格をより強く浮き彫りにするものであると言える。

そのような観点から、沖ノ島祭祀の機能・目的性とその時間的変遷のさらにマイクロかつ具体的復元のために、竹幕洞祭祀、ならびに朝鮮半島南部地域・西岸地域における祭祀の様相の具体的な研究の進展が、今後強く望まれる所である。

(4) 沖ノ島祭祀の<機能>的洗練

5世紀後半から7世紀にかけてのいわゆる「岩陰祭祀」の時代、すなわち主に岩陰に祭祀コミュニケーションを媒介したアイテム群が配置された時代は、これまでも指摘されてきた通り、祭祀行為が最も頻繁に実施された時期である。この時期、沖ノ島でその処理が図られた主要リスクとしての朝鮮半島諸政体との交渉においては、高句麗の南下に伴い／刺激されて生じた諸政体間の競争とそれに媒介・刺激されたそれぞれの政体の社会的複雑性の増大と成熟によって(上述、これらとの交渉・コミュニケーションにおける、<倭>としてのネットワーク・ホライズン再生産のための意向・意図の貫徹が困難化し、これによって、リスクの深刻化と内容的分化が進行した。時間幅としては5世紀後半から7世紀という150年あまりの時間幅は、4世紀後半から5世紀という150年間とほぼ同じであることからすると、祭祀が実施される頻度は確実に増大しており、それが<政治的>事態への対応としての性格を強めるとともに、その未規定性・不確定性(交渉パートナーの戦略的行為とその帰結)に対する対応としての祭祀は、様々な意味でその形式性を高め、内容的に分化していったものと考えられる。

具体的には、政治的問題の最高の解決手段としての戦争における勝利の祈願が祭祀コミュニケーションの主要なテーマとなり、その媒体として、戦争に関与する諸主体の存在の表象がより強力に動員されることとなるのは自然なことであった。その最も端的なものが量的に豊富な馬具類であり、桃崎祐輔氏の検討により、倭製、朝鮮半島製の両者が含まれていることが明らかにされた(桃

崎2022)。また、装身具等の様々な朝鮮半島製の高度工芸品も、「たまたまストックされていた」といった要因以上に、その背後に様々な具体的政治状況に関わる（戦略的）思考が介在していた可能性が指摘される〔例えば新羅によるいわゆる「任那調」の戦略的貢納（贈与）と受容側としての倭の立場に関する（森2013, p. 98）を参照。またその該当物（の可能性）の具体的指摘として（桃崎2022, p. 86）を参照〕。

また、岩陰への祭具の配置も、祭祀的諸行為の主要系列の終了後の所作の、機能ごとの分化・定式化の進展を想定させる。すなわち（岩陰近傍もしくは1号遺跡周辺の平場で実施された）祭祀行為系列の個々の単位において祈願された、それぞれ異なる種類のリスク克服（異なる人格神への異なる目的を持った祈願）が、祭壇的施設の設置によりその視覚的効果と場所的分節性を高めた岩陰への特定器物の規則性に則った配置という形で物象化された可能性を想定するのである。また、そのような配置の焦点として、4世紀後半からのいわゆる岩上祭祀段階には、一ノ岳と個々の巨岩の双方に漠然と「坐す」と観念されていた可能性のあるカミが、後の神社建築の正殿内のごとく、具体的に巨岩に「坐す」姿として観念され始めた可能性をも想定させる。

これは、祭祀内容の機能分化と形式性の上昇という点で、「沖ノ島祭祀の機能的洗練」として特徴付けることができるだろう。この点につき、やはり、上述した笹生氏による一連の指摘は重要である（笹生2012, 2016, 2023b）。岩陰に「配置」されたアイテム群の空間配置に何らかのパターンが読み取れるか？ 岩上祭祀としての21号遺跡について試みられた写真資料を基軸とする既存資料の、新たな技術を用いた再検討によって、〈場（locale）〉とそれを取り巻く様々な要素全体の構造分析への可能性を開いた岡寺未幾氏による研究（岡寺2021）と同様な空間分析の可能性が、岩陰遺跡についても今後試みられる必要がある。

（5）沖ノ島祭祀の変容、終焉とその後

以上のように、7世紀までの沖ノ島祭祀は

- 朝鮮半島情勢をめぐる〈倭〉としてのネットワーク・ホライズンの安定維持の困難化のリスク処理をその主要な機能とした。そのような祭祀が沖ノ島で継

続的に実施されたことの要因として

- 朝鮮半島との交渉における原基的リスクである渡海リスク処理の〈場〉として、リスクの産出者としての人格神（後の三女神）の存在が、その〈位置価（positional value）〉によって分化したこと

を想定した。そして、原基的リスクとしての渡海リスクは、〈倭〉としてのネットワーク・ホライズンの安定維持に関与する主要リスクとしての、朝鮮半島諸政体間の戦闘を伴う政治関係の転変と倭によるそれへの介入によってかわられ、その結果

- 祭祀的コミュニケーション媒体は、戦争に関わるリスク処理を媒介する馬具などの武具、また朝鮮半島諸政体の存在を表象する希少財を顕著に含むアセンブリッジとして定式化し
- 複雑に分化した当該リスクへの対応として、内容的複雑化と洗練化を遂げた

と考えた。

とすると、新羅による朝鮮半島統一が行われ、〈倭〉としてのネットワーク・ホライズンの存続・再生産に朝鮮半島からの生存財とその生産技術の搬入・移転が必要不可欠ではなくなると、沖ノ島祭祀の目的性・機能、ならびにその内容も変容したと考えられる。すなわち〈沖ノ島祭祀〉としての機能特化＝朝鮮半島政治情勢を起源とする（政治・軍事複合的）リスクが後景に退き、代わってネットワーク・ホライズンから〈国家〉的領域ホライズンへの移行に伴う、後者の境域全域に遍在するリスクに対する境域境界部における処理としての、〔古代国家の領域統治に関わる生活世界全域に遍在するリスク（とそれらを体現する神々）を対象とするという意味で〕「一般性」の高い祭祀行為、すなわち〈律令祭祀〉（井上1978→2000）への移行が生じたと考えられる。これは、新たに確立された〈日本〉としての内的に均質化された統治領域の縁辺＝バウンダリーに位置し、〈倭＝日本〉の存続のリスクの臨機的集約的処理の場として機能してきたという「歴史的記憶の場」でもある沖ノ島での、国家にとっての特別性を維持した祭祀（すでに指摘されるごとく唐三彩などの存在に体現される）であり、〈日本〉という古代国家統治領域として内的に均質であり、国家により等しくその「良きあり方（wellbeing）」、安寧

が確保されるべき<生活世界 (=lifeworld)>の再生産に介在する諸種のリスクの統治主体による恒常的かつシステムティック (=「神郡」設置による祭祀実修に必要な各種アイテム・資源の現地安定調達を可能とする)な対処・主体の場として、古代国家がそれを必要とする間は、沖ノ島はそのような場として機能し続けることとなった。

ここで重要なのは、すでに井上光貞氏による指摘段階から認識されていたように (井上1978→2000, pp. 295-308)、<律令祭祀>の祭式とその物質的メディアのセット (=assemblage) の起源は、前段階すなわち6~7世紀段階の沖ノ島祭祀にすでに認められるということである。このことは

- 近畿地方中枢部首長制政体とその最高首長を最高の統合調整媒介機構としつつ首長制政体の連合体のネットワークとして機能してきた<倭>としてのネットワーク・ホライズン (=内的に不均質性を含みこむシステム) ではあったが、その縁辺部 =<外部 (the Others)>との接触境界においては、内的に不均質性を含みこむシステムは<外部>がもたらす未規定性・不確定性リスクに対処し、それら进行处理するにおいてはその不均質性は捨象される (=内的均質性が仮構される) 必要があったこと
- そのため、沖ノ島祭祀が対応・処理する主要なリスクとしては朝鮮半島諸政体 (と中華諸王朝) との交渉が産み出す政治的諸リスク (政治的対立解決の最高手段としての戦争リスクを含む) が突出していたものの、当初より、<倭>としてのネットワーク・ホライズン全体の「一体的安寧」を祈願する祭式もその中に組み込まれていた

ということを示唆する。今後、8世紀以降、<律令祭祀>終焉までの<沖ノ島祭祀>の、前者との共通性と特異性について、より細かに再検討することが必要であろう。そのために、いわゆる岩陰祭祀段階から露天祭祀段階までの祭具assemblageにつき、そのセット内容と構造=セット内容の機能分化と<祝詞>との対応関係検討を含めた具体的祈願内容の復元を目標とする再検討が進められるべきであろう。殊に、本段階の祭具assemblageにおける滑石製船形模造品、馬形模造品、人形模造品の卓越につ

いては、今後さらなる検討が必要である。本段階における<沖ノ島祭祀>の性格、すなわちそれが、典型的<律令祭祀>の盛大化された表現形であったのか、それとも、前段階以来の<渡海リスク>に対する処理も引き続き含むものであったのか、の解明のために、さらなる多角分析が要求される。

以上からすると、先にも述べた通り、内的な均質性の維持を要件とする国家領域内生活世界の安寧護持をその機能的課題とする<古代国家>の変質が<沖ノ島祭祀>の終焉として結果した、という説明は、一般的説明としては一定の説得力を持つといえよう。すなわち、<中世国家>への推移が、<古代国家>祭祀≒<律令祭祀>として展開してきた<沖ノ島祭祀>の終焉を導いた、という理路である。これに対し、笹生氏は、10世紀段階における国土守護を目的とする祭祀への仏教的要素の導入と、その促進の契機としての災害頻発、環境変化を、<沖ノ島祭祀>終焉の直接的要因として指摘した (笹生2023b)。多様な人格神への祈願が構成する体系としての<律令祭祀>に対し、世界宗教として統一的世界観とそれを基盤とする生活世界に普遍的・一般的に遍在するリスクの克服を機能要件とする仏教が、内的均質性を理念的前提とされた境域の安定が危機に瀕したとき、その安寧祈願にとって、機能的により適合的となったことは推測される。しかし、そうであるならば、<古代国家>の内的均質性は常に一定のゆらぎ/危機に瀕していたのであり、だとすれば、もっと早い段階で仏教的要素の導入が行われたとしても不思議ではない。また、それに伴い、<沖ノ島祭祀>がもっと早く終焉しても不思議ではなかったであろう。だとすると、なぜ10世紀というタイミングで、「機能的適合性に適った」移行がおこったのか、についてはさらなる分析と説明モデルの提示・洗練が必要であろうということになる。一つのモデルとして、以下のようなものが提出可能であろう。

- 笹生氏の指摘の通り、10世紀段階における災害の頻発は、河川流域や海岸部の地形を改変するような気候・環境変動によるものであった (笹生2023b)。これは、特定の場所における災害、交通困難などのリスクとの相関性において現れた神々の「坐す」場その物の変容/消滅を時に結果する強度と同時多発性の広域性を持っており、その

ような新たな広域性を持ったリスクへの対応に、
〈律令祭祀〉として体系化された既存のカミ観念は、その効果の場所的限定性と個別性において不十分となった。これに対して、世界宗教としての仏教による対応は、新たなリスクの強度と、何よりもその同時多発的広域性に対して、その効果（領域）の普遍性によって対応が可能であった（／観念された）。

笹生氏によって指摘された、伝統的祭祀実修の仏教法会による置き換えと伝統的神格の仏教体系の中への位置づけ（例：宗像神への大菩薩位の授与）（笹生2023b）は、このような脈絡の中に位置付けられるのではないか。加えて、仏教体系の内的成層構造は、さまざまな神をそれぞれの（リスク）起源地への縛りから解放し、普遍的な体系の中での統一的超越者の多様かつ成層的に布置された「現れ」として位置付けることを可能とする。以上のような仮説の当否の検討は、今後の継続的探求の重要課題である。

また、「古代国家的」内的均質性が崩れ、〈中世的国家〉へと移行する11世紀以降、宗像社にその焦点を移す祭祀的行為が、〈沖ノ島祭祀〉から何を受け継ぎ、何を变化させたのか、についても、今後の具体的・多面的検討を必要とする。

4. 結論

本稿の結論として、冒頭に掲げた下記の二つの問いに関する見解をまとめよう。

- 沖ノ島において4世紀後半から9世紀末にわたる長期間にわたり〈中央政権〉主導による大規模な祭祀行為が行われ続けたのはなぜか？
- 沖ノ島における祭祀の具体的目的と機能はどのようなものであったのか？それはなぜ、どのように変容したのか？

→定式化した古墳の広域分布ホライズンの形成は、**【〈倭〉としてのネットワーク・ホライズン】**、すなわちその中に結節点（＝ノード（nodes））として位置することとなった首長制政体群が、近畿中枢部政体を最上位の調整・相互交渉媒介機関として相互依存しつつ、後者を中心とする威信財配布と生存財の流通・入手によって

個々を再生産してゆくシステム相の形成であった。そのような相の形成は同時に、それぞれの政体における首長の相互交渉権の独占と、それによる政体コミュニティの生存の条件の独占に媒介されての、〈首長の身体〉による生活世界再生産に生成する様々なリスクの独占的処理の技法の開発に結びついた。これはすなわち〈首長の身体〉の〈超越存在〉化であり、これが〈人格神（personal gods）〉の生成分化の端緒となったと、本稿では論じた。

→と同時に、〈倭〉としてのネットワーク・ホライズンの再生産は、主要生存財として重要性を増す鉄素材の入手、その他、威信財の更新などにも必要な高技術の入手に不可欠な朝鮮半島諸政体との交渉の成功的継続をその前提・必要条件とした。高句麗の南下により不安定化した朝鮮半島諸政体間関係と、政治的問題解決のための戦争の頻発は、〈倭〉としてのネットワーク・ホライズンの存続に関わる主要なリスクとして浮上し、集中的な処理が必要となった。また、その処理を目的とする祭祀的コミュニケーションには、そのようなリスクを構成する様々なファクターの表象（なかでも軍事に関わる表象）が媒体として動員される機能的必要があり、それが、〈倭〉としてのネットワーク・ホライズンの列島内各所で実施された大規模祭祀行為と沖ノ島における祭祀の内容を、類似しつつも異なるものとした（〈沖ノ島祭祀〉における馬具・武具等の祭具としての顕著な使用や、朝鮮半島製希少財（朝鮮半島諸政体からの贈与品の可能性を有するアイテムを含む）の使用に象徴される）。

→4世紀後半から7世紀、すなわち高句麗の南下による政体間関係の流動化、加耶、栄山江流域諸政体を巻き込む高句麗、百済、新羅の紛争の激化、そのなかでの倭の戦略的判断の帰結は、上述のようなリスクの高まりとして、そのつどの集約的な処理＝祭祀の挙行を必要とした。

→その起源としては「渡海リスクの人格神化とそれを対象とする祭祀」として生成した沖ノ島祭祀は、そのような歴史過程の中で〈倭〉としてのネットワーク・ホライズンの維持・再生産をその主要機能として継続するとともに、その形式性を高めていった。特に6世紀以降は、倭・朝鮮半島製双方を含む馬具の祭具としての使用に象徴される軍事リスクに対する処理・対処を顕著にしていった。

→白村江における敗戦とその後の唐・新羅間の朝鮮半島覇権をめぐる戦争と新羅による半島統一は、〈倭〉としてのネットワーク・ホライズンの朝鮮半島依存の終息とともに、〈日本〉としての、明確な領域性を持つ古代国家の内的に均質な統治単位への移行を導くこととなった。このような流れの中で、沖ノ島祭祀は、新たに確立された〈日本〉としての内的に均質化された統治領域の縁辺＝バウンダリーに位置し、〈倭＝日本〉の存続のリスクの臨機的集約的処理の場として機能してきたという「歴史的記憶の場」でもあることにより、〈日本〉という生活世界の再生産に介入する諸種のリスクの統治主体による恒常的な対処・主体の場として、古代国家がそれを必要とする間は機能し続けることとなった。

→このような歴史的記憶の場における国家領域＝生活世界存続のリスク処理が必要とされなくなった段階をもって、沖ノ島祭祀は終息した。

→このような事態を導いたファクターとして、10世紀に頻発した大規模災害や地形変化の広域同時多発性に対し、リスクの反復生成の〈場 (locale) 〉との結びつきにより生成した神々の祭りの場所的限定性と個別性は、これに対する対応を困難としたこと、このことの解決のために、世界宗教として、普遍的リスクに対する普遍的対応の体系・内的に成層化され、その内にさまざまな神々を成層的かつ構造的に布置すること、それら神々個々を普遍的な世界秩序の多様な「現れ」として表象することが可能な体系としての仏教を枠組みとする新たな対応テクノロジーが導入されたことがある可能性を指摘したい。

3章各節の末尾にそれぞれあげたように、本事業の成果は、それぞれにさらなる探求課題を生み出すこととなった。それらを解決することは、

- 〈沖ノ島祭祀〉のさらなる理解を導くのみならず
- 宗教の一形態・類型としての神道の起源とその形式的進化展開について
- それと相互的關係にある東アジアの歴史過程と〈沖ノ島祭祀〉の構造とその変化との具体的 (因果的) 關係性について
- 〈沖ノ島祭祀〉を必要とした古代国家から中世国家への変動と神道・仏教の変容との關係性について

理解を深めることであり、ひいては古代的世界、中世的世界、前者から後者への変動、その現代にまでつながる意味・意義についての理解を深めることにもつながるであろう。本事業の発展的展開を期待したい。

注

(1)本稿では、沖ノ島祭祀が開始された古墳時代前期後半から中期 (4世紀後半から5世紀末) にかけてを人類学的概念における複雑首長制段階、古墳時代後期から飛鳥時代にかけて (6世紀から7世紀) を複雑首長制—国家段階過渡期段階、奈良時代以降を国家段階として認識する立場から以下の記述を進める。そのため、ここでの〈中央政權〉は、古墳時代前期後半より飛鳥時代にかけては近畿中枢部首長制政体、奈良時代以降は古代国家の中央政治組織ということになる。複雑首長制段階においては、前方後円墳の分布ホライズンとその周辺に数多くの首長制政体が並存しており、それらは近畿中枢部首長制政体からの威信財の分配や、生存財の流通における近畿中枢部政体の調整・分配に依存しつつ、様々な程度の自律性を維持していたものと考えられる。古墳時代後期から飛鳥時代にかけて、近畿中枢部政体を構成する上位出自集団が、地方首長制政体の最高首長を「国造」として名付けすることによりその地位の保証とともに一定の影響力・支配力を行使したり、地方首長制政体を構成する下位の首長と所属出自集団を擬制的同族化によって従属關係においたり (中央伴造/地方伴造—部關係の形成)、それらの拠点近傍などに、ある種の出先機関 (ミヤケ) を設置することにより、首長制政体間の中心-周辺關係は成層化の度を深め、地域首長制政体の解体と住民の居住地による登録・支配、公的暴力装置や官僚制の確立に特徴付けられる古代国家の形成へといたる。沖ノ島祭祀には、このような過程を通じて一貫して〈中央〉の関与があるが、それを地元で補助・補佐した宗像の首長制政体は、地域のその他の様々な規模・勢力・影響力を持った首長制政体とも交渉しつつ、個々の歴史的場面が生成する条件に応じて、沖ノ島祭祀に関与したものと考えられる。

(2)〈農耕祭祀〉から〈葬送祭祀〉への轉換については

- 弥生後期に加速した地域政治的統合体＝首長制政体の形成・発達
- それらの上位層 (=首長とその所属する出自集団) による広域相互交渉ネットワーク・ホライズンの形成
- そこで流通する希少生存財 (主に鉄素材) への各政体の依存度の上昇

- 個々の相互交渉機会の成功の保証とネットワーク・ホライズンの再生産の保証のためのテクノロジー強化への機能的要求

があり、それに対して、〈農耕祭祀コミュニケーション〉は、超自然的存在に対する年サイクルの反復的贈与と祈願の機会であり、そこに参集する政体代表者たちの間に交渉継続を保証する属人的負債感を醸成する性質のものではない。これに対し、〈葬送祭祀コミュニケーション〉においては、死した先代首長との互酬的交換の記憶に媒介されて属人的負債感が祭祀参加者の間に醸成されやすい。よって、将来にわたる、相互信頼に基づく互酬的交換関係・相互交渉が保証されやすくなる。このことにより、祭祀という直接交渉の機会がネットワーク・ホライズンの広域化によりその頻度を低減させてもネットワーク・ホライズンが安定的に再生産されるためには〈葬送祭祀コミュニケーション〉の方が機能的に優位であり、そのため、試行錯誤的過程の末にこれが選好されることとなった。そのような説を現筆者（溝口）は提示している（e.g. 溝口2022, pp. 241-245）。

参考文献

(和文)

- 井上光貞 1978→2000「古代沖ノ島の祭祀」『天皇と古代王権』（吉村武彦 編）(271-318頁) 岩波書店
- 岩永省三 1997『歴史発掘7：金属器登場』講談社
- 禹在柄 2023「沖ノ島祭祀遺跡と竹幕洞祭祀遺跡からみた倭国と百済との交流」『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群特別研究事業研究報告
- 岡寺未幾 2021「沖ノ島二十一号遺跡についての再検討（予察）—記録写真の分析から—」『沖ノ島研究』第7号：(59)/66-(78)/47頁
- 小田富士雄 2011「沖ノ島祭祀遺跡の再検討—4～5世紀棟方地方との関連で—」『宗像・沖ノ島と関連遺産群 研究報告』I (39-70頁)「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議
- 小田富士雄 2012「沖ノ島祭祀遺跡の再検討2」『宗像・沖ノ島と関連遺産群 研究報告』II-1 (1-41頁)「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議
- 小田富士雄 2013「沖ノ島祭祀遺跡の再検討3」『宗像・沖ノ島と関連遺産群 研究報告』III (1-42頁)「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議
- 笹生衛 2012「日本における古代祭祀研究と沖ノ島祭祀—主に祭祀遺跡研究の流れと沖ノ島祭祀遺跡の関係から—」『宗像・沖ノ島と関連遺産群 研究報告』II-1 (43-61頁)「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議
- 笹生衛 2016『神と死者の考古学：古代のまつりと信仰』吉川弘文館
- 笹生衛 2023a『まつりと神々の古代』吉川弘文館
- 笹生衛 2023b「宗像・沖ノ島における古代祭祀の意味と中世への変容—人間の認知機能と環境変化の視点から—」『「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群特別研究事業研究報告』
- 重藤輝行 2011「宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀」『宗像・沖ノ島と関連遺産群 研究報告』I (71-104頁)「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議
- 高田貫太 2023「古墳時代の日朝交渉における海の道—朝鮮半島南・西海岸地域の倭系資料の分析を中心に—」『「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群特別研究事業研究報告』
- 武末純一 2011「沖ノ島祭祀の成立前史」『宗像・沖ノ島と関連遺産群 研究報告』I (1-37頁)「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議
- 田中史生 2023「秦氏と宗像の神—「秦氏本系帳」を手がかりとして—」『「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群特別研究事業研究報告』
- 広瀬直毅・尹宗煥・宮本真由美 2019「東シナ海～日本海の海流と航海環境」『「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群特別研究事業第1回国際検討会「古代東アジアの航海と宗像・沖ノ島」』(65-70頁)「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議
- 溝口孝司 2000「墓地と埋葬行為の変遷：古墳時代の開始の社会的背景の理解のために」『古墳時代像を見なおす：成立過程と社会変革』（北條芳隆、溝口孝司、村上恭通 編）、(201-273頁) 青木書店。
- 溝口孝司 2022『社会考古学講義：コミュニケーションを分析最小基本単位とする考古学の再編』同成社
- 溝口孝司 2023『社会考古学講義』同成社
- 桃崎祐輔 2022「沖ノ島出土馬具の復元的研究」『沖ノ島研究』第8号：67-95頁
- 森公章 2013「交流史から見た沖ノ島祭祀」『宗像・沖ノ島と関連遺産群 研究報告』III (85-111頁)「宗像・沖ノ島と

「関連遺産群」世界遺産推進会議

(英文)

Ingold, T. 2000. *The Perception of the Environment: Essays in Livelihood, Dwelling and Skill*. London & New York: Routledge.

第4章 資料

国際検討会概要

1. 第1回国際検討会報告要旨

「4世紀から9世紀の日本における造船・航海術」 森田 克行 高槻市立今城塚古代歴史館

4世紀から9世紀、いわば古代日本の造船・航海術を探る資料となると、『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』などの史料と列島各地で検出された考古資料がおもなものである。史料には倭王権あるいは律令政府が管轄する官船の簡便な記述や詩歌の情緒的な表現が中心で、けっして造船や航海術に意を尽くした体系的な記録になっていない。考古資料も、船材などの実物は廃船後の転用材などにほぼ限定され、あとは古墳祭祀にかかわる船の模型[船形埴輪]、さらには器物や古墳の石室に描かれたデッサン[船絵]の類である。

今回は『記紀』にある官船の断片的な記載と適宜な考古資料を押さえつつ、^{くりぶね}剗船に舷側板を備えた準構造船から船底部に^{おもき}面木と^{ちやういた}丁板を備えた初期の構造船、さらには120人乗りの遣唐使船建造までの道筋を見通す。すなわち倭王権から律令国家成立への経過のなかで、幾多の兵員移送にかかる大型輸送船の獲得状況を素描し、筆者が夢想する、いわゆる「磐井の乱」に対応する、古代史上、最大となる六万もの兵員派遣がはじめて現実味を帯びることになる。また乱後には、そうした大型輸送船を活用し、阿蘇溶結凝灰岩[馬門石]製の巨大な剗拔式冢形石棺(棺身で4 t以上)を、平成17(2005)年の『大王のひつぎ実験航海』が辿ったルート、具体的には熊本宇土の港津から島原半島を迂回し、長崎西岸、玄界灘、関門海峡、瀬戸内、淀川を經由し、畿内各地の大王陵(今城塚古墳など)に輸送する水運が実現する。

「南方世界の造船・航海術と信仰」

後藤 明 南山大学人文学部

本発表では南方世界、すなわち東南アジア島嶼部からオセアニアにかけての伝統的な造船技術と航海術を概観する。さらにそのような航海が行われる交易活動や宗教

活動、また聖地とされる島や遺跡について論じ、沖ノ島のあり方についての比較事例を提供したい。

オセアニアの島々へは東南アジア島嶼部からメラネシアを通して、ミクロネシアやポリネシアに移住が行われた。その移動はしだいに島が小さくなり、また島間の距離が長くなるという状況で、造船技術や航海術を進化させながら行われたはずである。

本発表ではまずオセアニアの多様な造船技術(筏、草船、樹皮船、等)を概観し、とくに交易に使われたアウトリガーカヌーとおそらく移住に使われたダブルカヌーの特徴について論ずる。

また今日まで航海術が残るミクロネシアのカロリン諸島については秋道智彌氏によってすでに日本でも紹介があるが、本発表では、近年研究が進むポリネシアの航海術について論じたい。直接、航海技術の継承として語られている内容だけではなく、神話として語られている内容にも航海術の知恵を伝えるものが少なくないことを明らかにしたい。また航海術を伝えた、航海を見守る女神についても言及する。

最後に航海のモチベーションの一つである交易活動や宗教活動(例 海の巡礼)についてポーンペイ島のナンマドール遺跡、ヤップ島の聖地(テリウ)、およびソシエテ諸島のライアテア島の神殿の事例を論じ、沖ノ島の位置づけについて南方世界から光をあてたい。

「沈没船から読み解く造船技術と航海」

佐々木 蘭貞 九州国立博物館

沈没船は「古代のタイムカプセル」と呼ばれることがある。これは水中が陸上に比べ有機物の保存に適しており、また、沈没船は、当時の様子をそのまま現在に伝えることができる考古学資料であることに由来する。ヨーロッパが水中考古学の先進地であったが、近年、韓国、中国、タイなど国立研究所が整備され、専用の調査船や保存処理施設、そして沈没船を展示する開示博物館を有する。わが国では、沈没船の調査事例が少なく、水中考古学が研究のフィールドとして育っていない環境にあ

る。ここでは沈没船など発掘調査により明らかになった海事文化、特に交易の形態や造船技術の変遷について紹介する。古代地中海世界の研究事例と比較となる考古学調査を紹介する。今後、日本近海でも同様の研究が進むことに期待したい。

「古代韓半島を取り巻く航路と交易様相の変遷過程」

権五榮 韓国・ソウル大学校

古代東アジアにおける海上交流の歴史は韓国と日本で多くの関心が持たれ、研究が進められてきたテーマである。しかしながら、最近では研究の方法論に限界が見えている。もっとも大きな理由は、航路と船舶に対するこれまでの成果を補完する新たな発見や研究方法論が開発されずにいるからである。このような点から、最近、世界文化遺産に登録された沖ノ島を通じて、新たな研究が活性化することを期待してみたい。

本発表は韓国の考古学と古代史の時代区分での初期鉄器時代から南北朝時代までを対象としており、東北アジアと東南アジアの世界がつながる過程を追跡しようとするものであり、ガラス玉を主な分析対象とした。その結果、東北アジアと東南アジア国家の主要な変化に伴った、広域の海外交流と流通の様相が変化する様子を描くことができた。

初期鉄器時代には中国—満州—韓半島—九州がつながる青いガラス玉の流通網が確認できる。南越の故地に嶺南九郡が設置され、衛氏朝鮮の故地に四郡が設置されてベトナム北部と東北アジアをつなぐ流通網が登場することとなる。3世紀以降には東呉が扶南と交渉して、本格的に東南アジアと東北アジアの世界がつながる様子を確認することができる。新羅と渤海が並存していた南北朝時代には世界帝国の唐を媒介としてイスラム勢力との交渉が加わる様相が見られる。

「古墳時代の日朝交渉における海の道—朝鮮半島南・西海岸地域の倭系資料の分析から—」

高田 貫太 国立歴史民俗博物館

古墳時代の「倭」の社会は、朝鮮半島から多様な文化をさかんに受け入れて、みずからの文化として定着をはかる。当時の倭人たちはさかんに海を渡り、朝鮮半島の百済や新羅、加耶、そして栄山江流域の人びとと交渉を重ねる。

倭から栄山江流域や百済に赴く航路との関連で注目できる考古資料は、5世紀前半頃に朝鮮半島の南・西海岸地域に築かれた「倭系古墳」である。海を望む立地で、北部九州地域における中小古墳の墓制を総体的に採用している。よって、その被葬者はあまり在地化はせず異質な存在として葬られたと考えられ、倭の対百済、栄山江流域の交渉を担った倭系渡来人として評価できる。また、寄港地と関連する集落遺跡も、南・西海岸地域に点在しているので、その寄港地をつたうような航路を復元することが可能である。

当時の南・西海岸地域には、物資、技術、情報、祭祀方式などをやりとりする「地域ネットワーク」とでも呼ぶべき関係網が広がっていた。栄山江流域や百済をめざす倭系集団は、そのネットワークを活用し、寄港地に居を構える地域集団と交流を重ね、時には短期的に「雑居」しながら、円滑な航行を企図したものと考えられる。その中で、航海の途中で死をむかえた人物を「倭系古墳」を造営して葬ったり、航海安全の祭祀を執り行ったり、あるいは一部の人びとが現地に定着するような状況が生じていたようである。

「東シナ海～日本海の流れと航海環境」

広瀬 直毅 九州大学応用力学研究所

太平洋の中緯度西岸を流れる黒潮は与那国海峡から東シナ海に入り、大陸棚に沿って北東に流れる。その間、台湾海峡から続く台湾暖流や揚子江などの河川からの淡水等の影響を受けながら、一部が対馬海峡に流入する。その後、日本沿岸に沿って北東に流れ、その大部分は津軽海峡から太平洋に出て行く。この対馬暖流は大量の水

と熱を日本海に運び、日本列島に多湿で温暖な気候をもたらすのに大きく貢献している。この芳醇な地を求めて、有史以前より大陸の人々はユーラシア大陸から朝鮮半島を経て対馬海峡を渡り日本列島にやってきたはずである。

ところが、氷河期には海水面が低下し簡単に横切ることができた対馬海峡も、間氷期には勢いよく流れる対馬暖流が一定の障壁となる。実際、九州大学が韓国海洋大学と共同で長期観測している対馬海峡の流動構造からみても、(おそらく)温暖化の影響で対馬暖流の勢いは強まる傾向にある。本報告では、東シナ海から日本海のいわゆる東アジア縁辺海の海流特性を概観した後、対馬海峡の渡航ルートを検討する。現代では大型計算機を用いて精緻な海流変化をシミュレーションすることができるが、昔の人々が海流の乱流的变化を予測するのは難しかっただろう。おそらく潮汐・潮流の周期的変化を経験則として利用して、最も困難とみられる対馬海峡の渡海を達成していたとみられる。

2. 第2回国際検討会報告要旨

『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群の調査研究上の課題—世界遺産の視点から—

ケース・ファン・ローイエン

オランダ・オランダ文化遺産庁

初期の沖ノ島は興味深い。沖ノ島の出土品は、アジア大陸や日本列島との交流において沖ノ島が果たした重要な役割を物語っている。その役割の重要性はイコモスの世界遺産パネル(※編注：推薦国との対話の機会)でも評価され、世界遺産への推薦において要になるポイントとされた。

その一方で問われるのは、我々はその役割を十分に理解しているだろうかということである。考古学的発見をそれだけで解釈しようとするのは、往々にして難しい。考古学者である我々も、考古学的発見を現代のこの世界の視点で解釈してしまう。沖ノ島の場合、祭祀や航海が重要な役割を持つことは明白であり、中央集権権力の成長をもたらした影響というのも主要なテーマではある。とはいえ、他に何か見落とししている点はないのだろうか

か。以上の3つの顕著なポイントが他の要素を覆い隠してしまっているということはないだろうか。世界遺産にとって非常に興味深いのは、世界の交流の実態および人間集団による相互の影響である。

イコモスの世界遺産パネルでは、そうした影響について、沖ノ島だけではなく、より広域を視野に入れて考古学的遺産から再発見できないか研究できれば興味深いとみなされた。そういった研究は、既存の遺物や知見に関する理解を深めるだけでなく、それらを違う視点から見ることによって行うことができる。例えば、広くはアジア本土を研究することも一つのアプローチだ。

また、他の場所における事例が、新たな考え方や研究の視点を切り開くかもしれない。今回の特別研究事業は、本検討会もその一環であるわけだが、沖ノ島について、またアジアのこの地域の中世初期に沖ノ島が果たした役割についてより理解を深めるという課題に対する大変すばらしい取り組みである。

「九州における渡来人と信仰—ヒメコソ・玉女・薩摩塔—」

田中 史生 早稲田大学

本報告では、文献史学の立場から、古代から中世前期の九州における渡来人の信仰を具体的にとりあげて、その特徴を考える。なお本報告の「渡来人」は、定住を必要条件としない移住者の意味で用いる。

まず、宗像地域とも関連する8世紀以前の渡来人の信仰として、ヒメコソ信仰に注目したい。この信仰は、6世紀後半以降、中央の王権が地方支配のために各地に置いたミヤケの展開とも深くかかわっている。ミヤケの経営にヒメコソ信仰を持つ渡来系氏族が関与していたからである。さらに、在地の有力層もミヤケの経営に関わったことから、ヒメコソ信仰は渡来系にとどまらない広がりを見せることとなった。

次いで9世紀の資料として注目されるのが、女性神格「玉女」が登場する佐賀県唐津市中原遺跡出土の第2号木簡である。本木簡の内容は、中国の道教の影響を受け10世紀半ば以降に日本の陰陽道で開始される反閏と共通する部分がある。しかし本木簡は陰陽道のそれを1世紀も遡らせる地方木簡で、ここに九州北部の国際環境が示

されている。

さらに、中世前期の九州に特徴的な渡来系の信仰として、薩摩塔にも注目したい。薩摩塔は、九州西部に偏在し、中国の直接的な影響が指摘される石塔である。この石塔は、『平家物語』に登場する「唐船」とも関連するものとみられ、鹿児島県硫黄島の硫黄交易などにかかわった宋商人がもたらしたものと考えられる。ただし、薩摩塔と完全に一致する石塔は中国では未確認で、信仰のあり方が九州において変容していた可能性も考えなければならない。

このように九州には、他地域と比べ中国や朝鮮半島の信仰が直接入りやすい環境があったが、その展開に九州の地域性と結びついた変容も認められる。このことは、渡来人のもたらした信仰が、九州の人々に主体的に受容され共有されていたことを示している。

「宗像地域における対外交流の様相と胸形氏の動向」

花田 勝広 野洲市教育委員会

宗像における地域研究は、縄文～弥生時代に生産基盤の少ない玄界灘沿岸の小平野の集団が、古墳時代に有力氏族として成長するプロセスを解明する上で恰好の地域と云える。それは、地理的に入海・潟など、農耕生産の低い地域が海民的特性を活かし、海上交通・交易の側面を特化させた。ヤマト政権の朝鮮半島への覇権や利権をめぐって、4世紀後半より海上航路の確保と掌握を願い沖ノ島祭祀が開始される。在地の勢力は、これらの政治的動向に対応するかのようになり、前方後円墳が数多く造墓される。古市・百舌鳥古墳群の被葬者によって、倭の五王の時代に在地勢力の胸形氏が奉斎者となるようである。

注目されるのは、沖ノ島祭祀に伴うヤマト政権の祭祀品、朝鮮半島からの舶載品など、ヤマト政権による海上交通路の掌握に関与から極めて畿内色が著しい。出土遺物も渡来系、在地系、畿内系などの遺物と背後の集団の移動を予想せしめる。このことが、海人集団を有力地域首長に成長させた。その動向は、ヤマト政権の形成と地域支配に深く一致しており、手工業生産の技術獲得や集団配置など、多くの共通点が認められる。『日本書紀』

の天武2年(673)条に記載される尼子娘の後宮入りは、朝鮮半島の百濟救援に伴い、宗像—大島—沖ノ島—朝鮮の海上ルートの航海を掌握する胸形氏がヤマト政権と婚姻関係を結付くほどの勢力を持っていたことを示している。宮地嶽古墳の被葬者は、胸形君徳善の墓と推定されている。特に宗像の地理は、交通・軍事上の要衝地であり、宗像大神が「道主貴」と称された海上交通の特殊祭祀を行っていたことにも起因する。

「古代日本における祭祀の実態と神観

—日本列島の自然環境と東アジアとの関係から—

笹生 衛 國學院大学

日本列島の各地域(東北地方から九州)では、A.D. 4世紀後半から5世紀、共通する儀礼用の遺物が出土する祭祀遺跡が明らかとなる。その出土遺物と遺構からは、そこでは神へ供える食膳、捧げ物の準備、土器や祭祀用具の集積が行われていたと考えられ、最近の調査例では、祭祀の場を周囲から区画・遮蔽する垣や、貴重な品々を収納できる高床倉が存在した例も確認されている。

ここからは①供献品の準備、②祭祀、③祭祀後の供献品の撤下・収納という祭祀の構成が復元でき、これは延暦23年(804)の『皇太神宮儀式帳』が記録する神宮祭祀の「祭式」と一致する。これは祭祀を日常と区別し、清浄性を保つ上で必要であった。また、食膳を供え、貴重品を捧げる形は、3世紀に成立した古墳における儀礼と共通し、祭祀の成立と関係していたと考えられる。

祭祀対象のカミの考え方「神観」は、恵が多い反面、災害も多い日本列島の自然環境と深く関係していた。自然資源の確保、農業生産、水陸交通などで特別な働きのある場所に、古代の祭祀遺跡は立地し、古い神社は鎮座する。人々は、自然環境の特別な働きに、それを起こし司る「行為者(Agents)」を直観し、そこに「カミ(deity)」が居ると考え、祭祀を行った。これが、『記紀』『延喜式』などにある、特定の場所に「坐(ま)(reside)神」の神観である。

このような祭祀と神観は、4・5世紀の朝鮮半島と日本列島(倭国)との交流の活発化と、7世紀の中国の統一帝国との関係の中で整えられ、律令時代の神祇祭祀へとつながっていった。

「中国における道教の成立と民間信仰の日本への影響」

二階堂 善弘 関西大学

一般に、道教の起源は後漢の時代の張陵^{ちやうりやう}が創始した天師道^{てんしどう}とされる。それ以前にも、『老子』『莊子』などに示される道家思想、それに神仙道は存在しており、いずれも道教の源流となっている。のちに天師道が発展し、六朝^{りくちやう}時代には教団と制度が整い、道教として発展していった。また陸修静^{りくしゅうせい}、陶弘景^{とうこうけい}といった著名な道士が出現し、教義を深め、經典を整理していった。葛洪^{かつこう}が『抱朴子』^{ほうぼくし}を著すのもこの時代である。南北統一後、隋は道教・仏教をともに重んじたが、仏教が優位とされた。しかし唐の時代においては、皇室の祖先を老子だとすることで、道教は国教に認定され発展していく。玄宗^{しほしやうてい}の時代には道士司馬承禎^{しはしょうてい}などが活躍する。五代の時期にとくとう^{とこうてい}杜光庭がそれまでの儀礼などを集大成する。宋代になると、また道教は性格をやや変えていく。金代には全真教という新しい道教が発展する。唐までの道教については、『雲笈七籤』^{うんきゅうしちせん}という書物によって概略を見ることができる。

これとは別に、民間信仰は古代よりずっと続いている。民間信仰はシャーマニズムに基づくもので、民間で行われるために激しく変化する。たとえば、漢代に非常に流行した城陽景王^{じやうやうけいおう}の信仰は、唐代にはほとんど行われなくなる。道教とは対立する場面も多く、『抱朴子』には民間信仰を批判する記事が多数見られる。

道教はまとまった形では日本には伝来しなかったため、日本には道観はなく、道士もいない。道教で最も重視される三清^{さんせい}の信仰はほとんど存在しない。しかし、道教文化はバラバラな形で渡来し、様々な影響を与えている。また、民間信仰もそれぞれ個別の形で渡来しており、日本の神道や仏教の信仰と習合していることが多い。

「韓半島における民間信仰の歴史的展開と対外交流」

宋 華燮 韓国・中央大学校

韓半島は東亜地中海の地形であり海洋文化が発達した。百済は韓半島西南側に位置しており、北には対立的

関係にある高句麗が位置し、南は友好的関係の倭と中国南朝国家が位置していた。百済は高句麗の脅威に対応するために、伽倻や倭および中国南朝国家との外交交流を大変重視した。百済の中国や倭に対する外交関係は海上交通によって行われ、百済の熊津遷都以降である東城王・武寧王の在位期間に本格化した。

外交関係は国家主導型と民間主導型がある。国家主導は使臣船と朝貢船が中心であるが、民間主導は商船と貿易船が中心である。海上交流は航海守護神、中間寄港地、航海安全祈禱所を発達させた。百済の対中・対倭交流は熊津百済の時期に盛んであった。このような事実は扶安竹幕洞海洋祭祀遺跡と遺物に反映されている。竹幕洞海洋祭祀遺跡の遺物は主に5世紀中頃から6世紀の中頃までに集中している。

竹幕洞祭祀遺跡の対外交流に関する遺物は日本の沖ノ島系統の石製模造品と中国の青磁片である。沖ノ島系統の石製模造品は一定の時期だけの国家的奉獻物であったために民間信仰としての伝承力を持ちえなかった。一方で中国南朝国家との文化交流は国家主導と民間主導が並行したため、海洋信仰の伝承力が維持された。統一新羅時代に民間貿易が盛んとなり、竹幕洞祭祀遺跡でも中国舟山群島普陀洛迦山系統の水聖堂と海浜洞窟信仰、南海観音信仰などの海洋民俗信仰が発達した。海浜洞窟には航海の守護神が常住し、南海観音は「開洋(ケヤン)ばあさん」という化身として水聖堂に安置された。

このように茁浦湾と辺山半島には中国系の海洋仏教および海洋民俗信仰が統一新羅以降の高麗時代、朝鮮時代、現在までも持続的に維持されている。

3. 第3回国際検討会報告要旨

「日本の神々と海」

ファビオ・ランベッリ

米国・カリフォルニア大学サンタバーバラ校

多くの日本人は、山には神々や先祖、様々な霊が宿っていると考えているが、海もまた聖なるものに対する日本人の考え方に重要な役割を果たしている。

古事記(712年)と日本書紀(720年)に記録されている最も古い聖地の中には、実際、宗像や志賀海、住之江/

住吉といった九州の北部沿岸に位置しているものがある。それぞれ宗像、綿津見と住吉の神々は、古い文献にも詳細な記事がある。古代の日本人が考える海の神は、別個の要素を持つ三神から成り、それぞれの構造と宇宙観に基づいて構成されていることがわかる。たとえば、宗像は水平的コスモロジーで構成されており、沿岸（辺津宮）、岸から少し離れた場所（大島の中津宮）と沖（沖ノ島の沖津宮）というように区別されている。そしてもうひとつのコスモロジーを示す志賀海と住吉は、海の深さに基づいて構成されており、三神は海の表（住吉の表筒男命、志賀海の表津綿津見神）、海の中（住吉の中筒男命、志賀海の中津綿津見神）と海底（住吉の底筒男命、志賀海の底津綿津見神）にそれぞれ位置している。宗像、志賀海と住吉の神々は徐々に日本全国に広がり（そのうち宗像は仏教の弁財天と結合）、航海と漁業に関するあらゆる面で重要な役割を果たした。船もまた神々の宿る場所（船玉様）となり、魚は聖なる存在であると考えられたり、神の使いであると考えられたりした。

今回の報告では、海の神聖さと海の神々の様々な側面について述べたい。

「古代中国における航海と信仰」

姜 波 中国・山東大学

四海に対する祭祀は、中国歴代国家の祀典において重要なものであった。唐宋時代以降、広州・泉州を東南沿海部の代表的な港として繁栄期に入り、広州の南海神廟と泉州の天后宮は海神を祭る重要な場所となったが、なかでも泉州の天后宮の影響力が最も顕著であった。泉州の天后宮は中国古代（前近代）の海神である媽祖をまつるものである。泉州の港の隆盛と福建の海商勢力の増大に従って、媽祖は海神としての地位を次々と上げていき、その地位は王朝による冊封により媽祖、天妃、天后と変遷した。福建・浙江の地方神から、中央に冊封された海神に昇格したのである。泉州の天后宮は、世界遺産の地、泉州の港の地理的座標となっており、航海者の心理的な座標でもあり、東南アジア・東北アジア地域の媽祖廟の多くは、泉州の天后宮から「分霊」されたものである。毎年、媽祖の誕生日には、今なお盛大な儀式が行われている。各地の媽祖神像と信徒は泉州天后

宮を訪れ、海外の華人の血縁を結びつける一条の紐帯の役割を果たしている。

「日本近世の航海信仰からみた古代の持衰」

山内 晋次 神戸女子大学

日本近世（江戸時代）には数多くの漂流記録が残されている。それらの記録を通覧していくと、嵐などによる難船の際に、船乗りたちが髪（髻）^{もどり}を切って神仏に助命を祈願するという信仰習俗がしばしば記録されている。本報告では、この信仰習俗を「断髮祈願習俗」と名づけ、その習俗の意味や歴史的淵源を古代中国にまでさかのぼって探っていく。そして、そこからさらに反転して、3世紀の『三国志』魏書・東夷伝・倭条にみえる、中国との航海において特殊な役割を演じた「持衰」について、「髪を梳（くしけず）らない」という習俗が記録されている意味を考えてみたい。

「壹岐・対馬の海洋信仰と大和政権」

堀江 潔 佐世保工業高等専門学校

大陸・朝鮮半島と日本列島をつなぐ位置にある壹岐・対馬は、大和政権が朝鮮半島や中国王朝から政治制度や様々な最新の文物を入手する上で、古来、重要な役割を果たしてきた。大和政権側からみれば、半島諸国との戦争や外交、文化摂取を円滑に進めるためには、この両島を根拠地とする豪族や、航海を担う両島の海人との協力関係を結ぶことが不可欠であった。しかし文献史学の立場から言えば、5世紀から7世紀にかけては特に史料が少なく、壹岐・対馬の豪族・海人が当該期に持つ海洋信仰の実像と、その信仰と大和政権との関係を明確にすることは難しい。本報告ではその解明の方法として、壹岐の月神、対馬の日神を主人公とする『日本書紀』顕宗天皇紀の伝承記事を中心に取り上げる。それらの記事から、大和政権が壹岐・対馬の豪族と海人を服属させ、壹岐の月神には新興開発地である山背の葛野の地を与えて壹岐の豪族に祀らせ、対馬の豪族には王宮に隣接する大和の磐余の地で皇祖神の高皇産霊を祀らせた。これらは継体朝のことと考えられる。継体は最新の中国文化を取り入れるため、百済と連携して朝鮮半島南部への軍事介

入を進めており、その円滑な遂行のため壱岐・対馬の豪族と海人を強力に取り込んでいった。特に新羅との関係が深い対馬の豪族に対しては、大王家と強い結びつきが求められた。

「古代瀬戸内海の島々と祭祀遺跡」

妹尾 周三 廿日市市教育委員会

瀬戸内海の島々に点在する祭祀遺跡を概観すると、出土している遺物の組み合わせなどから5～6・7世紀の遺跡と8～9・10世紀の遺跡に大別することができる。このうち、前者は鉄製品や滑石製品、また土器などの有無から類型の細別が可能であるが、いずれも共通した背景による祭祀と推定される。ところが後者については、厳島でのあり方とその他の島々では異なっていた可能性が高い。それは厳島神社とこの島の主峰、弥山（みせん）を中心とした山岳信仰と密教の修行思想が関係していると思われ、このことについて考えてみたい。

「古代能登の境界性から見た寺家遺跡と気多神社」

中野 知幸 羽咋市教育委員会

史跡寺家遺跡は、8・9世紀を中心とする古代祭祀遺跡で、神社とその祭祀に関する施設群と豊富な祭祀遺物が出土したことで知られる。「神」「宮」「司」「司館」「宮厨」などの墨書土器とともに、8世紀前半の神戸集落、9世紀代の宮厨、御井、宮司館、生産域と見られる施設群が一体的に検出され、古代神社を支えた組織・集団のようすを具体的に知る貴重な発見となっている。さらに、これに隣接して大規模な火を焚いた痕跡の大型焼土遺構、土器と祭具の集積遺構などが累積・集中して検出されており、祭祀場の可能性がある。

これらの調査成果は、六国史等に見られる古代気多神社に関する記載と時期的・内容的に整合性が高く、近接する能登国一宮気多大社の古代のようすの一端を知らせるものと位置づけられ、古代の地方有力神社の成立と中世一宮への展開について考古学的成果と文献史料を往来しながら検討可能であることが重要である。

羽咋地域は、その立地から日本海交流を介して新来の文化や技術をいち早く受け入れる環境に恵まれていた。

古代の都城地域から見た能登半島は、加島津から東北・北方世界、福良津から渤海国へと接続する「異世界との境界地域」であり、これに伴う宗教装置として能登を筆頭する官社であった気多神社が重視されたと考えられる。本報告では、寺家遺跡と気多神社の調査研究成果を踏まえ、日本海交流と関わる能登の地域性を概説する。

註

以上は、下記報告書からの抜粋である。なお所属については、開催当時のものである。

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会 2019
『特別研究事業第1回国際検討会「古代東アジアの航海と宗像・沖ノ島」報告書』

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会 2020
『特別研究事業第2回国際検討会「古代東アジアにおける地域間交流と信仰・祭祀」報告書』

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会 2022
『特別研究事業 第3回国際検討会「古代東アジアの海洋信仰と宗像・沖ノ島」報告書』

執筆者プロフィール



秋道 智彌

山梨県立富士山世界遺産センター所長、総合地球環境学研究所名誉教授。

専門は生態人類学、海洋民族学、民族生物学。

主要著作に『交錯する世界 自然と文化の脱構築—フィリップ・デスコラとの対話』(編著・京都大学学術出版会、2018)、『明治～昭和前期 漁業権の研究と資料』(全2巻・臨川書店、2021)、『霊峰の文化誌』(勉誠社、2023)。



禹 在柄

韓国・忠南大学校人文大学考古学科教授。

専門は考古学、古墳時代政治史、日韓交流史。

主要著作に「韓国金海大成洞古墳群と日本古墳時代開始期の墓制」『待兼山考古論論集』(大阪大学、2005)、『日本書紀韓国関係記事研究Ⅰ～Ⅲ』(共著、一志社、2002～2004)、Early Korea—Japan Interactions (2018, Harvard University, Korea Institute, 共著)。



高田 貫太

国立歴史民俗博物館研究部准教授・総合研究大学院大学准教授。

専門は考古学、先史・古代日朝関係史。

主要著作に『古墳時代の日朝関係—新羅・百済・大加耶と倭の関係史—』(吉川弘文館、2014年)、『海の向こうから見た倭国』(講談社現代新書、2017年)、『「異形」の古墳 朝鮮半島の前方後円墳』(角川選書、2019年)。



田中 史生

早稲田大学文学学術院教授。

専門は日本古代史。

主要著作に『日本古代国家の民族支配と渡来人』(校倉書房、1997)、『国際交易の古代列島』(角川選書、2016)、『渡来人と帰化人』(角川選書、2019)。



笹生 衛

國學院大学神道文化学部教授・國學院大学博物館長。

専門は日本考古学・日本宗教史。

主要著作に『神仏と村景観の考古学』（弘文堂、2005）、『日本古代の祭祀考古学』（吉川弘文館、2012）、『神と死者の考古学』（吉川弘文館、2016）。

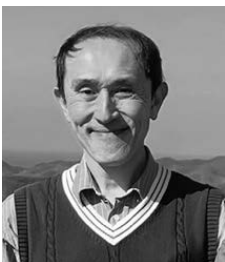


佐藤 信

東京大学名誉教授。「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群専門家会議委員長。

専門は日本古代史。

主要著作に『日本古代の宮都と木簡』（吉川弘文館、1997）、『古代の遺跡と文字資料』（名著刊行会、1999）、『出土史料の古代史』（東京大学出版会、2002）、『古代の地方官衙と社会』（山川出版社 日本史リブレット、2007）他。



溝口 孝司

九州大学院比較社会文化研究院・教授。「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群専門家会議委員。

専門は理論考古学・社会考古学。

主要著作にArchaeology, Society and Identity in Modern Japan (2006, Cambridge University Press), The Archaeology of Japan: From the Earliest Rice Farming Villages to the Rise of the State (2013, Cambridge University Press), Global Social Archaeologies: Making a Difference in a World of Strangers (2019, Routledge, 共著)。

本誌のデータは、本遺産群のデジタル・アーカイブ
「MUNAKATA ARCHIVES」の「宗像研究文献」より
閲覧・ダウンロードできます。

<https://www.munakata-archives.asia/>

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群

特別研究事業 成果報告書

令和5(2023)年3月31日発行

発行：「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
(事務局：福岡県人づくり・県民生活部文化振興課九州国立博物館・世界遺産室)
〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園7番7号

ISBN 978-4-944005-37-6

Sacred Island of Okinoshima and Associated Sites in the Munakata Region
Special Research Project Report

Contents

Chapter 1 Introduction

- Background and overview to the Special Research Project1
OKADERA Miki
- Survey of related heritage sites in East Asia (Summary of inspection tours) 15
OHTAKA Hirokazu

Chapter 2 Special Research Project

- Maritime World Heritage from the perspective of navigation and interisland networks 47
AKIMICHI Tomoya
- Exchanges between ‘Wakoku’ (Japan) and ‘Baekche’ (Korea) as seen from the ritual sites of Okinoshima and Jungmak-dong 81
WOO Jae Pyoung
- Sea routes in Japan-Korea negotiations during the Kofun period: Focusing on analysis of ancient Japanese materials from the south and west coast regions of the Korean Peninsula 103
TAKATA Kanta
- The Hata clan and the deities of Munakata: Seeking clues from the Hata-shi Honkei-cho .. 119
TANAKA Fumio
- The significance of ancient rituals in Munakata and Okinoshima and their transformation through to the medieval period: From the perspective of human cognitive functions and environmental change 139
SASO Mamoru
- Religious beliefs prior to Mazu: With a focus on the Sizhou Dashi 157
WANG Haiyan

Chapter 3 Conclusion

- Maritime navigation, exchange and religion in ancient East Asia: Particularly from the perspective of navigation and exchange 163
SATO Makoto
- The Historical Trajectory of the Functions of the Okinoshima Ritual: An Examination of Maritime Navigation, Exchange, and Religion in Ancient East Asia Through the Lens of Rituals and Religious Beliefs 165
MIZOGUCHI Koji

Chapter 4 Related Materials

- Overview of the International Study Review Meeting 175
- Author profiles 186

2023

Preservation and Utilization Council of
 “Sacred Island of Okinoshima and Associated Sites in the Munakata Region”